

高岡市埋蔵文化財調査報告第 12 冊

間尽遺跡調査報告Ⅲ

—平成 14 年度、能越自動車道土砂採取関連事業に伴う調査（B・C 地区）—

2004年3月

高岡市教育委員会

高岡市埋蔵文化財調査報告第12冊

間尽遺跡調査報告Ⅲ

—平成14年度、能越自動車道土砂採取関連事業に伴う調査（B・C地区）—

2004年3月

高岡市教育委員会

序

問込遺跡は、高岡市西部を流れる小矢部川左岸に広がる西山丘陵の一角に位置しております。また、今回調査が実施されました地点は、谷間にあり平野部からは奥まった立地条件にあります。しかし、調査結果はこのような土地柄に関わらず倉庫群や溝などをはじめとする連続とした生活の証が確認されるにいたりました。ここでは、年代測定・花粉分析・土壌分析など様々な自然科学的な方法を採用することにより地面に刻まれた往時の周辺環境の痕跡を追求し、人々はなぜこのような場所に着目し生活を営んだのであろうかとの疑問に少なからず検討材料を示すことができたのではないかと考えられます。

最期になりましたが、調査成果が多くの方々に活用され、さらには地域の歴史及び文化理解の礎となれば幸いです。また、現地調査ならびに報告書作成に際しまして格別のご配慮を賜りました皆様方に厚く御礼申し上げます。

平成16年3月10日

高岡市教育委員会
教育長 細呂木 六良

例 書

1. 本書は、平成14年度、能越自動車道土砂採取関連事業に伴う、間尺遺跡（B・C地区）発掘調査の報告書である。
2. 当調査は、「能越自動車道土砂採取（手洗野地区）に伴う間尺遺跡発掘調査業務」の委託契約に基づき、大成エンジニアリング株式会社埋蔵文化財調査部が実施した。
3. 当調査は、高岡市教育委員会が調査主体となり実施した。
4. 調査地区は、高岡市手洗野字平田である。
5. 発掘調査（現地調査）は、平成14年7月14日～同年12月26日までである。
6. 報告書作成作業は平成15年度業務として実施した。
7. 調査関係者は次の通りである。

[高岡市教育委員会文化財課]

平成14年度（B・C地区本発掘調査）

文化財課課長：大石茂

課長補佐：大谷隆夫

主任：根津明義

文化財保護主事：荒井隆

太田浩司

平成15年度（報告書作成）

文化財課課長：大石茂

副主幹：本林弘吉

主任：根津明義

荒井隆

文化財保護主事：太田浩司

8. 当調査及び当報告書作成は太田浩司文化財保護主事が監理を担当した。
9. 調査及び報告書作成にあたっては、大成エンジニアリング株式会社埋蔵文化財調査部が業務を受託した。担当者等は以下の通りである。

[大成エンジニアリング株式会社埋蔵文化財調査部]

総括：早川泉（調査部部長）

調査担当：板野伸彦（課長）、伊藤俊治（主任調査員）、吉田寿（主任調査員）

現地調査補佐：渡辺宏司（課長代理）

報告書作成：板野伸彦（課長）、富田静香、橋澤道博

10. 本書は、太田による総合的な監理の下、大成エンジニアリング株式会社埋蔵文化財調査部が執筆・編集を担当した。なお、第1章第2節は太田が担当した。
11. 本書における独立柱建物跡の組み立ては、全て案件であるため、文中においては「(案)」を付記している。
12. 自然化学分析の項は、一部遺物番号等を変更した他、監理者の指導の下、加筆した部分もあるが、基本的には、各機関より提出された報告文をそのまま掲載している。
13. 墨書の解説は四立歴史民俗博物館、平川南氏の研究室に依頼した。このとき浜松フोटニクス社製赤外線テレビカメラを使用され、また、撮影にはSONY社製サイバショットF

707が使用された。

14. 現地調査及び報告書作成において、以下の各機関・各氏より、ご教示・ご協力を得た。

この場を借りて厚く御礼申し上げます。(順不同・敬称略)

高岡市建設部能越自動車道対策課 (社)高岡市シルバー人材センター

四樽嘉章(漆器文化財科学研究所) 服部敬史(東京家政大学講師) 平川南(四立歴史

民俗博物館教授) 松本浩一(株)エイ・テック (株)笹島工業 (株)新港土木

朝日航洋(株) ディーン・グッドマン(マイアミ大学地球物理学応用考古学探査研究所

中島研究室) 中村亮二((財)富山県埋蔵文化財調査事務所)

パリオ・サーヴェイ(株) (株)ニッテツ・ファイン・プロダクツ

(株)加速器分析研究所 (有)山武考古学研究所 丸三開発工機(株)

15. 現地での発掘調査参加者および整理作業参加者は以下の通りである。(順不同・敬称略)

発掘調査参加者

林平一郎 吉田敏夫 堀清勝 金森栄治 木江富雄 西田繁 越田辰男 新谷松男 烏崎

本間敬 一宮勉治 山田次郎 山崎勝二 福本繁 高岡信一 南弘吉 中沢忠晴 早川清

新保勝正 渡辺清三 越前時男 船木聡夫 石田哲雄 磯部良 三池春美 中野智子

沙小織 河合洋人 山本猛夫 福村留美子 森真由美 黒田総一郎 堂口陽子 谷口勝美

整理作業参加者

新谷晴紀子 村田智志子 中野智子 沙小織

凡 例

1. 遺構・遺物図等における方位は、座標北を示している。
2. 本書では、世界測地系で記載してある。
3. 本書における遺構記号は、次の通りである。
SB-掘立柱建物、SA-構址、SK-土坑、SD-溝、SX-性格不明遺構
4. 本書における遺物番号は通番とし、括弧内にR番号(現場での遺物取上げ番号)を付した。
5. 別表・遺物観察表で表記している計測値は、小括弧=()内の数値が復元値、山括弧=>内の数値が残存値を示し、単位はcmである。

目 次

序	
例言	
凡例	
第1章 序 説	1
第1節 遺跡概観	1
1. 環境	1
2. 従来の知見	1
3. 遺跡の分布状態	5
第2節 調査に至る経緯	8
第3節 調査概説	9
1. 調査の方法	9
2. 調査の経過	10
3. 調査の概要	11
4. 基本層序	12
第2章 B地区第1面	13
第1節 概観	13
第2節 遺構	13
1. 溝	13
第3節 遺物	16
第3章 B地区第2面	17
第1節 概観	17
第2節 遺構	18
1. 掘立柱建物	18
2. 欄址	21
3. 土坑	22
4. 小ピット	24
5. 溝	24
6. 性格不明遺構	28

第3節 遺物	28
1. 遺構出土遺物	28
2. 遺構外出土遺物	30
第4章 C地区	33
第1節 概観	33
第2節 遺構	33
1. 掘立柱建物	33
2. 土坑	35
3. 小ピット	36
4. 溝	36
第3節 遺物	39
1. 遺構出土遺物	39
2. 遺構外出土遺物	39
第5章 結 語	41

別表遺物観察表

図面

図版

自然科学分析

報告書抄録

目 次

図面01	遺構実測図	B地区第1面遺構配置図 (1/300)
図面02	遺構実測図	B地区第2面遺構配置図 (1/300)
図面03	遺構実測図	掘立柱建物S B01 (案) (1/60)
図面04	遺構実測図	掘立柱建物S B02 (案)・掘立柱建物S B03 (案) (1/60)
図面05	遺構実測図	掘立柱建物S B04 (案) (1/60)
図面06	遺構実測図	掘立柱建物S B04 (案) (1/60)
図面07	遺構実測図	掘立柱建物S B05 (案)・掘立柱建物S B06 (案)・掘立柱建物S B11 (案) (1/60)
図面08	遺構実測図	掘立柱建物S B07 (案) (1/60)
図面09	遺構実測図	掘立柱建物S B08 (案)・掘立柱建物S B09 (案) (1/60)
図面10	遺構実測図	掘立柱建物S B10 (案)・掘立柱建物S B12 (案)・掘立柱建物S B13 (案) (1/60)
図面11	遺構実測図	掘立柱建物S B14 (案)・掘立柱建物S B15 (案) (1/60)
図面12	遺構実測図	掘立柱建物S B16 (案) (1/60)
図面13	遺構実測図	1. 掘立柱建物S B17 (案)・掘立柱建物S B18 (案) (1/60) 2. 橋址S A01・橋址S A02 (1/120)
図面14	遺構実測図	土坑S K01~土坑S K04 (1/40)
図面15	遺構実測図	土坑S K05・土坑S K06 (1/40)
図面16	遺構実測図	土坑S K07~土坑S K10 (1/40)
図面17	遺構実測図	土坑S K11~土坑S K13 (1/40)
図面18	遺構実測図	溝S D59 (1/120)
図面19	遺構実測図	性格不明遺構S X01・性格不明遺構S X02 (1/40)
図面20	遺構実測図	掘立柱建物S B405 (案) (1/60)
図面21	遺構実測図	C地区遺構配置図 (1/300)
図面22	遺構実測図	掘立柱建物S B01 (案)・掘立柱建物S B02 (案) (1/60)
図面23	遺構実測図	掘立柱建物S B03 (案) (1/60)
図面24	遺構実測図	掘立柱建物S B04 (案)・掘立柱建物S B05 (案) (1/60)
図面25	遺構実測図	掘立柱建物S B06 (案) (1/60)
図面26	遺構実測図	掘立柱建物S B07 (案) (1/60)
図面27	遺構実測図	掘立柱建物S B08 (案) (1/60)
図面28	遺構実測図	掘立柱建物S B09 (案) (1/60)
図面29	遺構実測図	掘立柱建物S B10 (案)・掘立柱建物S B11 (案) (1/60)
図面30	遺構実測図	掘立柱建物S B12 (案)・掘立柱建物S B13 (案) (1/60)
図面31	遺構実測図	土坑S K01~土坑S K10 (1/40)
図面32	遺構実測図	土坑S K11~土坑S K14・小ピットS P30 (1/40)
図面33	遺物実測図	B地区遺構内出土遺物 土器類・鉄製品 (1/2、1/3、1/6)
図面34	遺物実測図	掘立柱建物S B02 (案) 出土遺物 木柱 (1/8)
図面35	遺物実測図	掘立柱建物S B02 (案)・掘立柱建物S B03 (案) 出土遺物 木柱 (1/8)
図面36	遺物実測図	掘立柱建物S B04 (案) 出土遺物 木柱 (1/8)

- 图面37 遗物实测图 土坑S K01出土遗物 木製品 (1/3、1/4)
 图面38 遗物实测图 土坑S K06·土坑S K08出土遗物 木製品 (1/3、1/8)
 图面39 遗物实测图 土坑S K08出土遗物 木製品 (1/3)
 图面40 遗物实测图 土坑S K08出土遗物 木製品 (1/4)
 图面41 遗物实测图 土坑S K08出土遗物 木製品 (1/3)
 图面42 遗物实测图 溝S D59出土遗物 木製品 (1/2、1/3)
 图面43 遗物实测图 溝S D59出土遗物 木製品 (1/3、1/4)
 图面44 遗物实测图 溝S D59出土遗物 木製品 (1/3、1/4)
 图面45 遗物实测图 溝S D59出土遗物 木製品 (1/3)
 图面46 遗物实测图 溝S D59出土遗物 木製品 (1/3、1/4)
 图面47 遗物实测图 溝S D59出土遗物 木製品 (1/3)
 图面48 遗物实测图 溝S D59出土遗物 木製品 (1/3、1/4)
 图面49 遗物实测图 溝S D59出土遗物 木製品 (1/3、1/4)
 图面50 遗物实测图 溝S D59出土遗物 木製品 (1/3)
 图面51 遗物实测图 溝S D59出土遗物 木製品 (1/3)
 图面52 遗物实测图 B地区第2面遺構外出土遺物 土器類 (1/3、1/6)
 图面53 遗物实测图 B地区第2面遺構外出土遺物 土器類 (1/3)
 图面54 遗物实测图 B地区第2面遺構外出土遺物 土器類 (1/3)
 图面55 遗物实测图 B地区第2面遺構外出土遺物 土器類 (1/3)
 图面56 遗物实测图 B地区第2面遺構外出土遺物 土器類 (1/3)
 图面57 遗物实测图 B地区第2面遺構外出土遺物 土器類 (1/3、1/6)
 图面58 遗物实测图 B地区第2面遺構外出土遺物 土器類·木製品·古銭 (1/1、1/3、1/6)
 图面59 遗物实测图 B地区第2面遺構外出土遺物 木製品 (1/3、1/4)
 图面60 遗物实测图 B地区第2面遺構外出土遺物 石器類·石製品 (1/1、1/2、1/3)
 图面61 遗物实测图 C地区出土遺物 (1/3、2/3)

目 次

- 図版01 遺跡写真 1. 遺跡遠景（西から）
2. B地区第1面全景
- 図版02 遺跡写真 1. B地区第2面全景
2. C地区第1面全景
- 図版03 遺跡写真 1. B地区第2面北東部地域
2. B地区第2面西部地域
3. B地区第2面南東部地域
- 図版04 遺跡写真 1. 仮設事務所等設置状況
2. 安全大会
3. B地区調査前全景（東から）
- 図版05 遺構写真 1. B地区第1面表土除去作業状況
2. B地区第1面遺構検出状況
3. B地区第1面遺構覆土除去作業状況
- 図版06 遺構写真 1. B地区第1面遺構覆土除去完了状況（南から）
2. B地区第2面掘立柱建物S B01（案）完掘全景（南から）
3. B地区第2面掘立柱建物S B02（案）完掘全景（東から）
- 図版07 遺構写真 1. B地区第2面掘立柱建物S B02（案）-P1半載状況（南から）
2. B地区第2面掘立柱建物S B02（案）-P1完掘
3. B地区第2面掘立柱建物S B02（案）-P6半載状況（南から）
- 図版08 遺構写真 1. B地区第2面掘立柱建物S B02（案）-P7完掘（北から）
2. B地区第2面掘立柱建物S B02（案）-P10半載状況（北から）
3. B地区第2面掘立柱建物S B03（案）完掘全景（東から）
- 図版09 遺構写真 1. B地区第2面掘立柱建物S B03（案）-P1半載状況（東から）
2. B地区第2面掘立柱建物S B04（案）完掘全景（南から）
3. B地区第2面掘立柱建物S B04（案）-P11半載状況（北から）
- 図版10 遺構写真 1. B地区第2面掘立柱建物S B04（案）-P11完掘（東から）
2. B地区第2面掘立柱建物S B01（案）・02（案）・03（案）・04（案）完掘（北東から）
3. B地区第2面掘立柱建物S B02（案）・03（案）・04（案）完掘（北から）
- 図版11 遺構写真 1. B地区第2面土坑S K01遺物出土状況（西から）
2. B地区第2面土坑S K03完掘（西から）
3. B地区第2面土坑S K04完掘（西から）
- 図版12 遺構写真 1. B地区第2面土坑S K05完掘（南から）
2. B地区第2面土坑S K08曲物等出土状況（南から）
3. B地区第2面土坑S K08曲物等出土状況近景（南から）
- 図版13 遺構写真 1. B地区第2面掘立柱建物S B10（案）及び溝S D59（南から）
2. B地区第2面溝S D59遺物出土状況①（北から）
3. B地区第2面溝S D59遺物出土状況②（東から）

- 図版14 遺構写真 1. B地区第2面溝SD59遺物出土状況③(北から)
2. B地区第2面溝SD59漆器碗[56(R680)]出土状況近景(西から)
3. B地区第2面溝SD59脚[58(R613)]出土状況近景(北から)
- 図版15 遺構写真 1. B地区第2面溝SD59北側セクション(南から)
2. B地区第2面発掘調査作業状況(西から)
3. B地区第2面実機ヘリ空撮状況(西から)
- 図版16 遺跡写真 1. C地区北西部地域①
2. C地区北西部地域②
- 図版17 遺跡写真 1. C地区北部地域
2. C地区北東部地域
- 図版18 遺跡写真 1. C地区調査前全景(東から)
2. C地区重機搬入状況(東から)
3. C地区表土除去作業状況(北から)
- 図版19 遺構写真 1. C地区遺構検出状況(西から)
2. C地区北東部地域遺構検出状況(西から)
3. C地区掘立柱建物SB01(案)完掘(南から)
- 図版20 遺構写真 1. C地区掘立柱建物SB02(案)完掘(南から)
2. C地区溝SD01・03・04、掘立柱建物SB10(案)完掘(南東から)
3. C地区小ピットSP30遺物出土状況(北から)
- 図版21 遺構写真 1. C地区土坑SK01完掘(南から)
2. C地区土坑SK02・03完掘(東から)
3. C地区土坑SK04完掘(南から)
- 図版22 遺構写真 1. C地区土坑SK05完掘(南から)
2. C地区土坑SK06完掘(南東から)
3. C地区土坑SK07完掘(南東から)
- 図版23 遺構写真 1. C地区土坑SK08・09完掘(南西から)
2. C地区土坑SK10完掘(北西から)
3. C地区土坑SK11完掘(南から)
- 図版24 遺構写真 1. C地区土坑SK12完掘(南東から)
2. C地区土坑SK13完掘(南東から)
3. C地区土坑SK14完掘(南から)
- 図版25 屋内作業写真 1. 遺物注記作業状況
2. 遺物接合作業状況
3. 四面整理作業状況
- 図版26 遺物写真 B地区遺構内出土遺物① 土器類・鉄製品(遺物番号1~14)
- 図版27 遺物写真 B地区遺構内出土遺物② 土器類・木製品(遺物番号15~21)
- 図版28 遺物写真 B地区遺構内出土遺物③ 木製品(遺物番号22~25)
- 図版29 遺物写真 B地区遺構内出土遺物④ 木製品(遺物番号26~28)
- 図版30 遺物写真 B地区遺構内出土遺物⑤ 木製品(遺物番号29~31)

- 図版31 遺物写真 B地区遺構内出土遺物⑥ 木製品 (遺物番号32~34)
- 図版32 遺物写真 B地区遺構内出土遺物⑦ 木製品 (遺物番号35~39)
- 図版33 遺物写真 B地区遺構内出土遺物⑧ 木製品 (遺物番号40~45)
- 図版34 遺物写真 B地区遺構内出土遺物⑨ 木製品 (遺物番号46~50)
- 図版35 遺物写真 B地区遺構内出土遺物⑩ 木製品 (遺物番号51~56)
- 図版36 遺物写真 B地区遺構内出土遺物⑪ 木製品 (遺物番号57~60)
- 図版37 遺物写真 B地区遺構内出土遺物⑫ 木製品 (遺物番号61~67)
- 図版38 遺物写真 B地区遺構内出土遺物⑬ 木製品 (遺物番号68~75)
- 図版39 遺物写真 B地区遺構内出土遺物⑭ 木製品 (遺物番号76~84)
- 図版40 遺物写真 B地区遺構内出土遺物⑮ 木製品 (遺物番号85~94)
- 図版41 遺物写真 B地区遺構内出土遺物⑯ 木製品 (遺物番号95~102)
- 図版42 遺物写真 B地区遺構内出土遺物⑰ 木製品 (遺物番号103~108)
- 図版43 遺物写真 B地区遺構内出土遺物⑱ 木製品 (遺物番号109~115)
- 図版44 遺物写真 B地区遺構内出土遺物⑲ 木製品 (遺物番号116~123)
- 図版45 遺物写真 B地区遺構内出土遺物⑳ 木製品 (遺物番号124~132)
- 図版46 遺物写真 B地区遺構内出土遺物㉑ 木製品 (遺物番号133~140)
- 図版47 遺物写真 B地区遺構内出土遺物㉒ 木製品 (遺物番号141~143)
- 図版48 遺物写真 B地区第2面遺構外出土遺物① 土器類 (遺物番号144~160)
- 図版49 遺物写真 B地区第2面遺構外出土遺物② 土器類 (遺物番号161~174)
- 図版50 遺物写真 B地区第2面遺構外出土遺物③ 土器類 (遺物番号175~193)
- 図版51 遺物写真 B地区第2面遺構外出土遺物④ 土器類 (遺物番号194~210)
- 図版52 遺物写真 B地区第2面遺構外出土遺物⑤ 土器類 (遺物番号211~225)
- 図版53 遺物写真 B地区第2面遺構外出土遺物⑥ 土器類 (遺物番号226~241)
- 図版54 遺物写真 B地区第2面遺構外出土遺物⑦ 土器類 (遺物番号242~257)
- 図版55 遺物写真 B地区第2面遺構外出土遺物⑧ 木製品 (遺物番号258~261)
- 図版56 遺物写真 B地区第2面遺構外出土遺物⑨ 木製品・石製品 (遺物番号262~270)
- 図版57 遺物写真 C地区遺構内および遺構外出土遺物 土器類 (遺物番号271~284)
- 図版58 遺物写真 C地区遺構外出土遺物 土器類・石器 (遺物番号285~289)
- 図版59 遺物写真 漆紙および墨書土器亦外線写真

挿 図 目 次

- 第1図 遺跡位置図〔1〕 (1/15万)
- 第2図 遺跡位置図〔2〕 (1/5万)
- 第3図 遺跡位置図〔3〕 (1/2万5千)
- 第4図 遺跡地図〔1〕 (1/1万5千)
- 第5図 遺跡地図〔2〕 (1/1万5千)

第6圖 調査対象地区位置図 (1/3千)

第7圖 B・C地区基本層序

第8圖 A～C地区時期別遺構分布図〔1〕9世紀 (1/600)

第9圖 A～C地区時期別遺構分布図〔2〕11世紀～13世紀前半 (1/600)

第10圖 A～C地区時期別遺構分布図〔3〕13世紀後半～14世紀中頃 (1/600)

第11圖 A～C地区時期別遺構分布図〔4〕近世 (1/600)

挿 表 目 次

第1表 掘立柱建物 (案)一覽表

別 表 目 次

別表 遺物觀察表

第1章 序 説

第1節 遺跡概観

1. 環境

地理的概観

高岡市の地形を概観すると、庄川及び小矢部川により形成された沖積地と、石川県宝達山より派生する丘陵地や二上山周辺の丘陵地、金山丘陵西縁に発達した坪谷段丘に分けられ、大部分は庄川扇状地の先鋒部及び飛騨山中に源を発する庄川・小矢部川の形成した三角州と氾濫源が占める。これらの河川は幾度も氾濫を繰り返してきたものの、古来より穀物を生産するうえで大きな恵みをもたらし、現在においても平野部に広がる水田地帯に潤いを与えている。

丘陵地は、高岡市の北西部に広がるもので通称西山丘陵と呼ばれ、富山県と石川県の県境をなしている。西山丘陵は、新生代第三紀層の中新世、鮮新世の地層を主体とし、北東側は海老坂の断層崖を経て二上丘陵へと続き、南西側は福岡町や小矢部市内の丘陵、さらには西砺波丘陵（石動丘陵）へと連なる。この丘陵には幾重にも開析谷が入り込み、谷内には集落が点在する。一方で小河川の水流を利用した棚状の水田が営まれている。

手洗野

西山丘陵より発して開析谷をなし、小矢部川へ注ぎ込む河川に頭川と広谷川がある。この2つの川が形成する開析谷に挟まれた尾根の裾部に間尽遺跡が所在する手洗野集落が位置する。古代砺波郡と射水郡との境界は、この付近に推定されている。古代の北陸道は小矢部市桜町付近から西山丘陵沿いに北上し、手洗野付近を通過して、二上山南麓へ至る。そして、二上地区で小矢部川を渡るか、あるいは越中国府に達するとされている。近世に入ると山根道と水見往来が通り、古くから交通の要衝として位置してきた。さらに越中最古の曹洞宗寺院である国上山信光寺が手洗野に建立されていることからみても、この地域が長く交通の要衝であったことが窺われる。

手洗野地区は、江戸時代から明治22年までは手洗野村であり、その後は、西砺波郡岡吉村に所属した。昭和26年に岡吉村が高岡市と合併することに伴い、高岡市の大字となり現在に至っている。この地区北側の頭川川の開析谷は頭川（旧頭川村）、東側の平野部は岩坪（旧岩坪村）、南側の広谷川の開析谷は月野谷（旧月野谷村）である。

2. 従来を知る

間尽遺跡

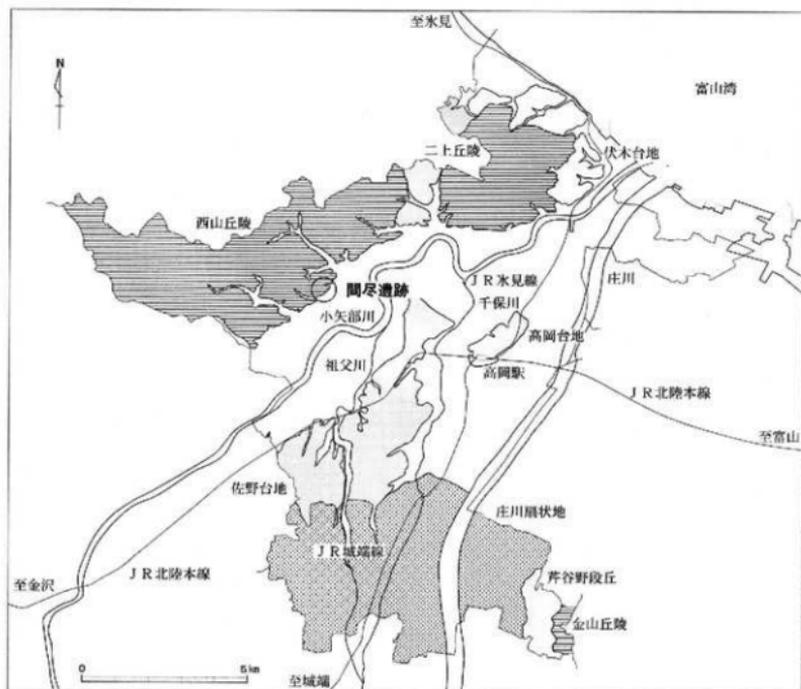
間尽遺跡は、JR高岡駅の西方約5.2kmの手洗野地区に位置し、西山丘陵の一角に立地する。昭和45年から昭和47年にかけて実施された国場整備事業にて多数の土器が出土したことによって明確に認識された。し

たがって、昭和47年刊行の「富山県遺跡地図」には記載されていない。出土した土器は、弥生土器、土師器須恵器、珠洲焼等で、時代も弥生時代から中世に至るまで幅広く出土している。また、7世紀末の布目瓦や「梗令分」と判読できる墨書土器もこのときに出土している。これらの出土遺物は、高岡市立国古公民館に保管してある。

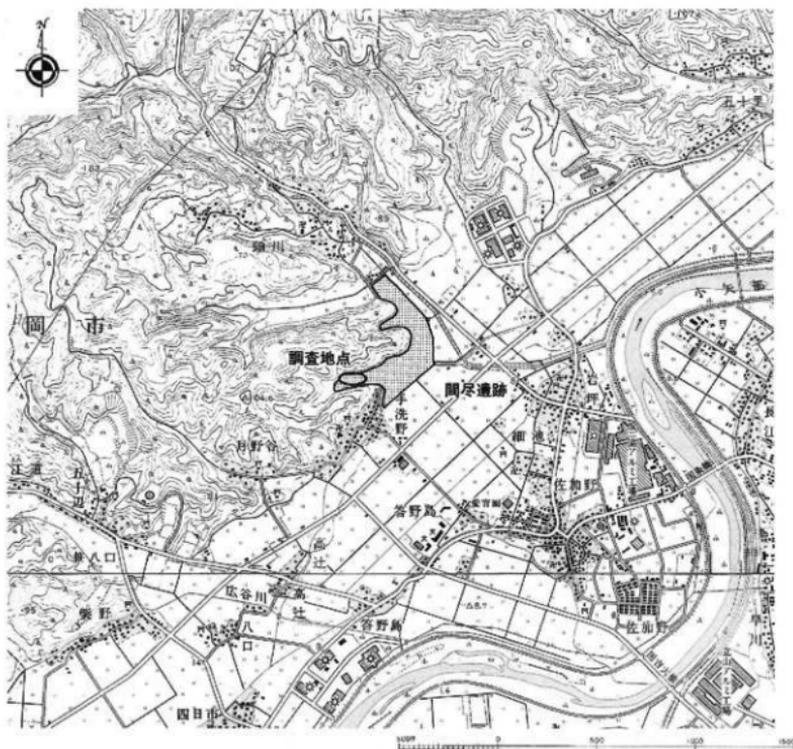
これまで、当遺跡の名称は、「頭川遺跡」「頭川間尽遺跡」「間尽遺跡」として報告されてきた。平成5年に、分布調査や過去の工事中の出土遺物などが旧地名の大字手洗野小字間尽と大字頭川小字間尽を中心に広がっていることから、名称は「間尽遺跡」とされた。

頭川遺跡

昭和49年に上野章氏が「大鏡」にて、当遺跡を「頭川遺跡」として紹介した。この報告は、当遺跡にて表採できた遺物を取り上げている。重要な点として、東日本を中心とする、弥生土器型式である「天王山式土器」を主体として出土し、さらに西日本を中心とする弥生土器型式である「御描文土器」が伴出することである。遺構において、「天王山式土器」と「御描文土器」との共存関係の解明が当遺跡における今後の課題とされている。



第1図 遺跡位置図 [1] (1/15万)



第2図 遺跡位置図〔2〕(1/2万5千)
 ※国土地理院発行 2万5千分の1地形図「飯久保」「戸出」に加工

分布調査

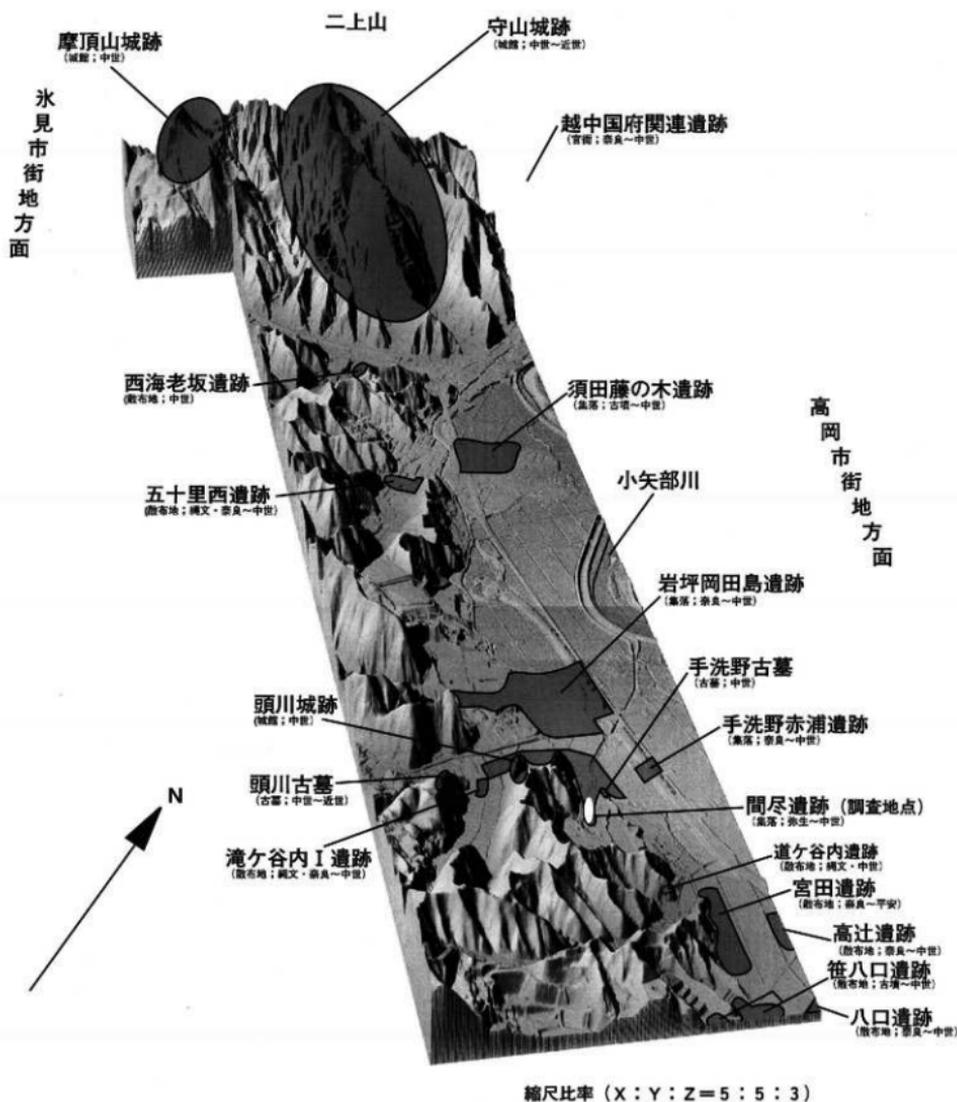
昭和59年に当遺跡を含む国吉地区において、分布調査を高岡市教育委員会が実施し、遺跡の範囲と内容を提示した。このときの成果は『西山丘陵埋蔵文化財分布調査概報』Ⅱとして報告書を刊行している。報告書に記載した出土遺物は、圃場整備事業にて出土した遺物である。

頭川間尽遺跡

昭和62年に『北陸の古代寺院』（桂書房）が発行され、その中で西井龍儀氏が「頭川間尽遺跡」として当遺跡出土の古瓦を紹介し、この古瓦が出土した地点より内面返りの須恵器の坏蓋が出土している点から、古瓦をこの須恵器と同時期のものとし、7世紀末のものと推定した。さらに、当遺跡付近に瓦の供給先、あるいは瓦窯の存在を想定した。

平成5年度本調査

平成5年度に当遺跡で個人住宅の建設に伴い本調査を実施し『市内遺跡調査概報』Ⅱで報告した。この時は、溝を1条検出したが、遺物の出土は多くなく、この地区が遺跡の北端部と推定された。



第3図 間尽遺跡周辺地形鳥瞰図及び遺跡位置図 (古代～中世)

3. 遺跡の分布状態

頭川谷をめぐる遺跡

間尺遺跡は、頭川川が南東方向に流れている開析谷の入口の右岸平野部一帯に位置している。間尺遺跡の背後の丘陵尾根上には、安屋山古墳群と四十九古墳群が所在している。安屋山古墳群は3基の長方墳からなり、もっとも大きい規模である東側の墳丘は、東西14m、南北22m、高さ2.8mを計る。河原石が葺かれているが、古墳群の西側に空堀状の大溝があり、砦などの基壇状遺構の可能性もある。四十九古墳群は5基の円墳からなり、2基の大形円墳を基幹としている。大きさは、第1号墳が直径44m、高さ6mを計り、円墳では県内3番目の大きさである。

間尺遺跡の対岸の位置に、頭川城ヶ平横穴墓群が所在している。頭川城ヶ平横穴墓群は、頭川谷左岸の丘陵崖面にあり、20基の横穴墓を確認している。頭川城ヶ平横穴墓の北側には、頭川オスキノ原遺跡と頭川宮中遺跡があり、いずれも縄文時代中期の遺跡である。間尺遺跡の北端で、西に延びる支谷がある。この支谷の入口左岸には滝ヶ谷内Ⅰ遺跡がある。この遺跡からは、縄文晩期中葉の口縁に裝飾突起を持つ縄文土器をはじめ、土師器、須恵器、珠洲等が出土している。滝ヶ谷内Ⅰ遺跡の北方丘陵上には頭川古墓が所在しているが、実態は不明である。支谷の奥には滝ヶ谷内Ⅱ遺跡が所在している。支谷対岸の尾根上には明田Ⅰ遺跡が所在し、弥生土器が出土している。

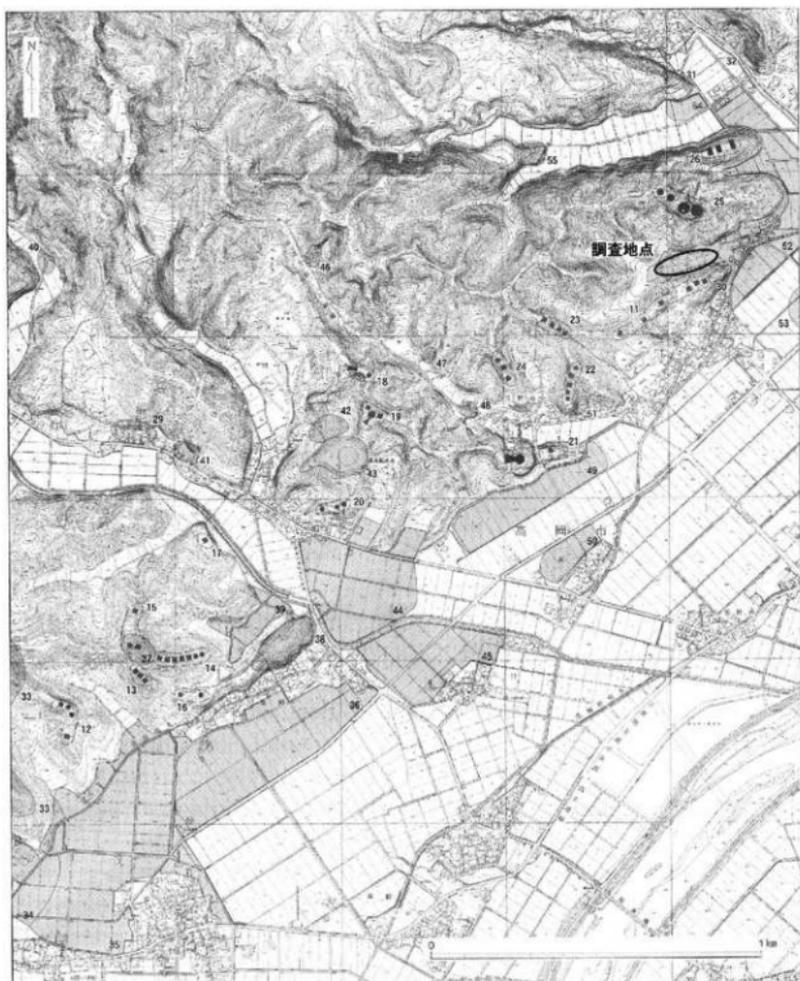
月野谷周辺の遺跡

間尺遺跡に南接する丘陵尾根上には倉谷古墳群がある。平成9年からの発掘調査で弥生終末期の方形台状墓と判明した。この尾根つたいに南へ行くと、遺ヶ谷内Ⅰ～Ⅲ古墳群が所在している。遺ヶ谷内Ⅰ～Ⅲ古墳群の麓に月野谷集落がある。集落の西側には遺ヶ谷内遺跡がある。集落の南側の小丘陵上には立山古墳群があり、第1号墳は全長67mを計る前方後円墳になる可能性がある。月野谷の中心に月野谷千草遺跡があり、谷奥には月野谷大谷内遺跡がある。さらに、谷を遡ったところに月野谷石飛遺跡がある。月野谷の右岸尾根上には、男狭古墳群、釈迦堂古墳群がある。男狭古墳群は、平成11年に富山考古学会により測量調査が行われ、全長58mの前方後円墳を基幹として、方墳1基と円墳1基の計3基からなる古墳群と確認された。この前方後円墳は前方部と後円部との比高差が6mと大きく、また古墳裾の高さが一定ではないことなどから、出現期の前方後円墳と推測される。釈迦堂古墳群は、前方後円墳1基と円墳1基からなる古墳群である。立山古墳群の南側平野部には宮田遺跡、高辻遺跡が広がる。

男狭古墳群の西側の谷は広谷川によって造られた開析谷で、この谷の左岸に江道横穴墓群、笹八口谷内古墳群、円通庵遺跡、笹八口遺跡、笹八口砦跡、釈迦堂遺跡が所在する。江道横穴墓群は、平成8年に高岡市教育委員会が発掘調査を行い、新たに9基の横穴墓を加え、20基からなる横穴墓群であることを確認している。

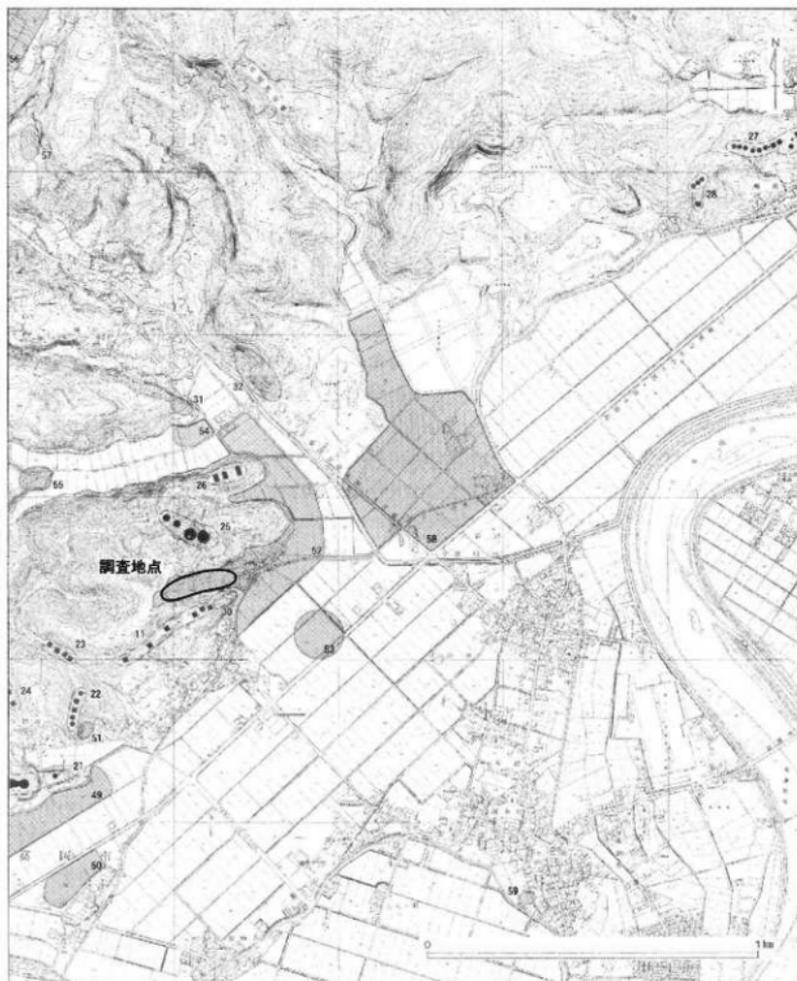
岩坪周辺の遺跡

富山県西部と能登地域を結ぶ能越自動車道が因吉地区を通ることになり、そのため平成10年に財団法人富山県文化振興財団によって遺跡の分布調査および試掘調査が行われ、2つの新しい遺跡が確認された。間尺遺跡の南方約300mの位置に千洗野赤浦遺跡がある。この遺跡は平成11年に財団法人富山県文化振興財団が発掘調査を行い、中・近世の遺構を検出した。また、間尺遺跡から北東約600mの位置に岩坪岡山鳥遺跡があり、平成11年に高岡市教育委員会が試掘調査をした結果、中世の井戸址や溝等を検出した。とりわけ、珠洲Ⅰ・Ⅱ期を中心とした中世前期の遺物が多数出土した。



第4図 遺跡地図〔1〕(1/1万5千)

11. 倉谷古墳群、12. 麻生谷殿谷内古墳群、13. 柴野口部I古墳群、14. 柴野口部II古墳群、15. 柴野口部Ⅲ古墳群、16. 柴野口部Ⅳ古墳群
 17. 柴野春日古墳、18. 泉蓮堂古墳群、19. 男渡古墳群、20. 笹八口谷内古墳群、21. 立山古墳群、22. 道ヶ谷内I古墳群
 23. 道ヶ谷内II古墳群、24. 道ヶ谷内Ⅲ古墳群、25. 西十九古墳群、26. 安原山古墳群、29. 江道橋穴墓群、30. 手洗野古墓群
 31. 須川古墓群、32. 須川城ヶ平地穴墓群、33. 麻生谷殿谷内城跡、34. 麻生谷新生園遺跡、35. 麻生谷遺跡、36. 柴野遺跡
 37. 柴野城ヶ平城跡、38. 柴野高の宮城跡、39. 柴野守善寺遺跡、40. 境久寺遺跡、41. 円通庵遺跡、42. 釈迦堂遺跡、43. 笹八口部跡
 44. 笹八口遺跡、45. 八口遺跡、46. 月野谷石梁遺跡、47. 月野谷干草遺跡、48. 月野谷大谷氣遺跡、49. 宮田遺跡、50. 高辻遺跡
 51. 道ヶ谷内遺跡、52. 間尺遺跡、53. 手洗野赤碓遺跡、54. 道ヶ谷内I遺跡、55. 道ヶ谷内II遺跡



第5図 遺跡地図〔2〕(1/1万5千)

11. 倉谷古墳群、21. 立山古墳群、22. 道ヶ谷内I古墳群、23. 道ヶ谷内II古墳群、24. 道ヶ谷内III古墳群、25. 四十九古墳群
 26. 安徳山古墳群、27. 夜尿谷内B古墳群、28. 板屋谷内C古墳群、30. 手洗野古墳群、31. 須川古墳群、32. 須川城ヶ平横穴墓群
 49. 宮田遺跡、50. 高辻遺跡、51. 道ヶ谷内遺跡、52. 網尽遺跡、53. 手洗野赤湯遺跡、54. 滝ヶ谷内I遺跡、55. 滝ヶ谷内II遺跡
 56. 須川オスキノ坂遺跡、57. 須川宮中遺跡、58. 岩坪岡田島遺跡、59. 松加野ラントウ遺跡

第2節 調査に至る経緯

遺跡概観

当調査区は、砺波平野西部を流れる小矢部川左岸に形成された西山丘陵の一角にある開析谷に位置している。また、土壌の性質は砂質土を主体としており木製品が遺存するなど調査時においても軟弱で湿気がちであることがみてとれ、建物を建築する上で不利な条件であったことが窺われる。

古代には、交通の動脈である北陸道が通り、礪波郡及び射水郡の境界が近傍にあったとされている。また、平成11年度には北東に2km程度離れた五十里地区において樹立柱建物などをはじめとして木簡や墨書土器が確認され、東大寺領荘園である須加荘ではないかと判断されている。

中世には、越中国最古とされる曹洞宗寺院国上山信光寺が造営されるなど信仰の拠点が各所に営まれた。さらには、能越自動車道本線工事に係る調査においては集落跡などの居住域の存在が確認されており、着実に往時の地域像が明らかになりつつある。また、周辺には頭川古墓や安厩山城など様々な種類の生活痕跡が認められる。

当調査区は、このような環境下においてあえて倉庫群や溝などを整備された意義を考えさせ、地勢的に比較的閉鎖環境にある地域において古代から中世にかけての人々がどのような生活を営んでいたのであろうか探るうえで少なからず判断材料を与えたものといえる。

調査にいたる経緯

当調査は、能越自動車道1号採取関連遺跡の調査である。

平成9年度

調査は、北陸地方建設局富山工事事務所長から高岡市建設部長を経て依頼があり、試掘調査を実施するにいたった。現地調査は、民間調査機関（(有)山武考古学研究所）により実施された。現地調査期間は、平成9年11月19日から同年12月26日である。調査成果は、古代及び中世の遺構面などが確認され、土木工事等の実施に際しては事前調査が必要であることが判断された。

平成13年度

本発掘調査（A地区）ならびに試掘調査（B・C地区）が実施された。調査に先立ち国土交通省の工事計画変更に伴い開発区域の変更が生じた旨、建設部能越自動車道対策課を経由して申し入れがあった。この計画変更により試掘調査が実施されていない箇所が認められたことから試掘調査が実施された。試掘調査の結果は、新たに本発掘調査が必要とされることが判明し翌年度において本発掘調査を実施することが決まった。現地調査期間は、平成13年8月27日から同年12月26日である。現地調査は、(有)山武考古学研究所が受託し実施された。

平成14年度

本発掘調査（B・C地区）が実施された。調査は大成エンジニアリング㈱が受託して実施された。現地調査期間は、平成14年7月31日から同年12月26日である。

第3節 調査概観

1. 調査の方法

調査地区の設定

今回の調査においては調査対象地域北側にある工事用車両進入路より南側の地域を発掘調査の対象とした。また、C地区の工事用車両進入路北側に位置する狭小部分については、進入路南側における遺構確認面までの掘削深度を根拠として発掘調査不可能と判断されたため、今回の発掘調査においては工事用進入路の直下と併せて未調査となっている。なお、C地区においては攪乱による客土が深く大量に調査対象地域を覆っていたため、掘削法面に犬走りを設定するなど、安全に配慮した対策を講じたことから、調査面積は減少している。未調査となっているB地区道路下、堤体下も調査可能と判断している。これらの箇所は地中レーダー探査によって遺構の有無などを確認し、現地に保護措置をはかっている。

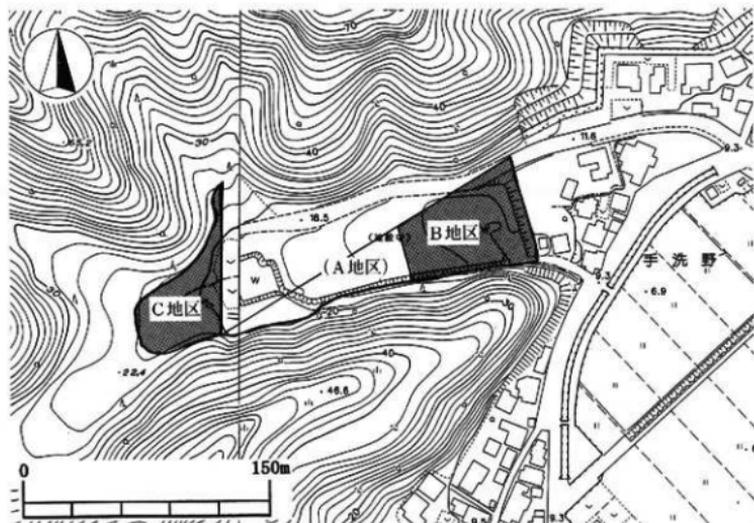
調査対象面積および発掘調査面積は以下の通りである。

B地区：調査対象面積＝4,000㎡

発掘調査面積＝3,160㎡ × 2面

C地区：調査対象面積＝2,050㎡

発掘調査面積＝1,720㎡



第6図 調査対象地区 位置図 (1/3000) 高岡市発行「高岡市都市計画基本図」に加筆

遺構調査

B地区、C地区ともに遺構確認面までの表土除去作業にはバックホーを用いた。その後の遺構確認、遺構覆土除去等、精査にあたっては鋤鍬、移植ゴテ等を用いた。また、B地区第1面から第2面への包含層の除去にあたっては同様の手法を用いた。

重機による表土除去作業終了後、公共座標（世界測地系）を基準とした一辺10mの正方形グリッド杭を設定した。座標杭には、北から南へA・B…、東から西へ1、2…、その交点をA-1・B-1…と称号を付し、北東隅にあたる杭の称号をもってグリッドの呼称とした。なお、Aのラインより北側に張出した調査区についてはZを呼称とした。包含層等の遺構外出土遺物の取上げにあたっては、各グリッドの名称を使用した。

遺構覆土等の排出について、B地区西側においてはベルトコンベアーを導入して調査区外（A地区北側地域）へ搬出し、B地区東側及びC地区においては調査区内で大きく攪乱を受けている地域に置くことで解決した。

写真撮影

写真撮影は、35mm白黒・35mmカラーリバーサル・35mmカラーネガフィルムを用いて発掘調査における各段階を記録した。撮影にあたっては、地形の状態、遺物の出土層位が明示できるように留意して、調査工程の記録を行った。なお、遺跡の全景写真については、地上での撮影のほか、ラジコンヘリ及び実機ヘリによる航空写真も加えた。

遺構実測

各遺構図面（平面図、土層断面図、遺物分布図等）の縮尺は1/20を基本としたが、遺構の検出状況によっては臨機応変に他の縮尺を採用した場合もある。遺構全体図の作成にあたってはラジコンヘリ及び実機ヘリを利用した空中写真測量で対応し、等高線は25cm間隔とした。

2. 調査の経過

B地区とC地区はA地区により分断されているため、B地区から開始してC地区へと移行した。調査経過の概略は以下の通りである。

平成14年7月31日	B地区：重機による表土掘削を開始
8月 5日	B地区：人力による遺構検出作業を開始
9日	B地区：ベルトコンベアー24台を搬入
19日	B地区：重機による表土掘削および排土の搬出を完了
22日	安全大会を実施
29日	B地区：ラジコンヘリによる第1面の遺構検出状況の空撮を実施
30日	B地区：第1面の各検出遺構の調査開始
9月10日	B地区：実機ヘリによる第1面遺構実測状況の空撮を実施
11日	B地区：遺構の個別写真撮影および実測
12日	B地区：人力による第2面までの包含層の除去を開始
30日	B地区：第2面の遺構プラン検出を開始
10月 4日	B地区：ラジコンヘリによる第2面の遺構検出状況の空撮を実施
7日	B地区：第2面の各検出遺構の調査開始

19日	B地区：実機ヘリによる第2面遺構完掘状況の空撮を実施
22日	B地区・C地区：発掘調査不可能とした部分の地ドレーダー探査を実施
11月11日	B地区：ラジコンヘリによる第2面の空撮を再度実施
20日	B地区：実機ヘリによる第2面の遺構完掘状況の空撮を再度実施 C地区：重機による表土掘削を開始
28日	C地区：重機による表土除去作業終了 グリッド杭設置
30日	C地区：調査区壁面をブルーシートにより養生
12月3日	B地区：実機ヘリによる第2面の遺構完掘状況の空撮を再度実施
8日	B地区：発掘調査終了
9日	C地区：ラジコンヘリによる遺構検出状況の空撮を実施 グリッド杭設置 各検出遺構の調査開始
12月20日	C地区：ラジコンヘリによる遺構完掘状況の空撮を実施
26日	C地区：発掘調査終了

3. 調査の概要

B地区の遺構確認面は、試掘調査の結果等から、当初第3面まで設定されていた。しかしながら、第3面とされる遺構確認面は第2面との変化に乏しく、調査の時点では遺構・遺物に明確な差異は認められなかったため、第3面を「第2面下部遺構確認面」として第2面と同一の位置づけとし、同時に調査を進めることとした。

B地区第1面からは調査区中央付近から南西部にかけて溝跡を32条検出した。主軸方位を見ると約10度程度西偏して南北方向に走る。他はこれにはほぼ直行する状態で東西方向に走る。第1面を鳥瞰すれば、いわゆる畝状になっており、近世の耕作によるものと考えられる。A地区においても同様の畝状の溝が検出されているが、おそらくは同じ時期のものであることが予想される。

B地区第2面からは掘立柱建物跡18棟、土坑13基、柵列2基、溝跡27条、性格不明遺構2基を検出した。遺構分布は調査区西側に偏りを見せるが、A地区に見られる大型の総柱建物跡は見えず、当該遺構確認面における遺跡の主要部がA地区にあることを示すものと判断される。出土遺物から判断すれば大きく2時期に分けられ、遺構の重複関係から少なくとも4時期に細分されることが判明した。溝跡は、第1面とは異なり、掘立柱建物跡との相関性に鑑みて区画溝と思われる。なお、掘立柱建物跡は立替等による重複関係にあるものは同じ遺構番号としたため、実質的には18棟に5棟を加えた23棟が想定される。遺物は清SD59から多量の木製品が出土し、Z-3グリッドを中心として須恵器等の土器類が比較的多く分布していた。

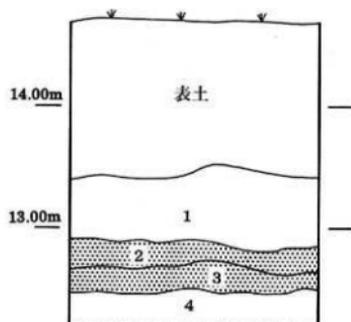
C地区は大きな攪乱により南北に2分され、北側から掘立柱建物跡13棟、土坑14基、溝跡24条が検出された。南側については遺構が検出されなかったわけだが、遺構確認面の直上まで攪乱層の地層が確認されていることから、本来の遺構確認面が大きく破壊されている可能性が高いと思われる。掘立柱建物跡や溝跡の重複関係から、少なくとも4時期に細分されることが判明している。この点からC地区の遺構確認面はB地区第2面の遺構確認面と同じ時期であると考えられるが、B地区第1面に相当する遺構確認面は検出できなかった。調査区南側と同様、攪乱によって破壊されている可能性が高い。また、遺物の出土量もB地区に比較して少なく、この点にも攪乱による破壊の影響が見て取れる。

4. 基本層序

B地区は調査区南壁中央部付近、C地区は調査区南側部分の土層観察によるが、いずれも覆土の残りが悪い
ため、試掘調査時の観察結果も参照して基本層序を図示すると以下（第7図）の通りとなる。

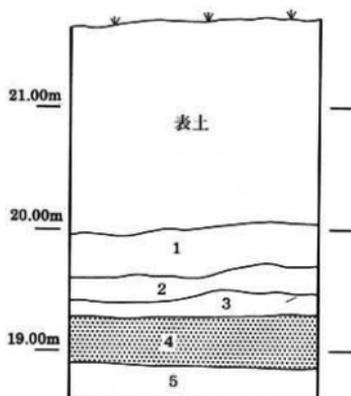
B地区は2層が第1面の包含層、3層が第2面の包含層である。C地区は第4層が包含層である。

B地区



- 1、黄褐色砂質土
- 2、黒褐色砂質土（包含層）
（第1遺構確認面（近世））
- 3、暗褐色砂質土（包含層）
（第2遺構確認面（古代～中世））
- 4、灰褐色砂質土（地山層）

C地区



- 1、黒色砂質土
- 2、暗褐色砂質土
- 3、黒褐色砂質土
- 4、黒色砂質土（包含層）
（遺構確認面（古代～中世））
- 5、灰色砂質土（地山層）

第7図 B・C地区基本層序

第2章 B地区第1面

第1節 概観

概観

検出された遺構は全て溝跡である。第1章第3節でも述べた通り、検出された溝は畝状を呈しており、近世の耕作跡と判断される。試掘調査のトレンチが東西方向に3条存在している。(第11図、図面01、図版01・2・05・06-1)

第2節 遺構

1. 溝

32条を検出した。主軸方向を見ると約10度程度西偏して南北方向に走る。他はこれに直行する状態で東西方向に走る。これに則さないものが2条あるが意図的とは思われない。まとめると次のようになる。

南北方向(約10度西偏)：27条=溝S D01~20、溝S D24~30

東西方向(約10度北偏)：8条=溝S D02、溝S D05、溝S D08、溝S D21~23、溝S D31・32

南北方向(約50度西偏)：1条=溝S D11(北部約10m分)

南北方向(約20度西偏)：1条=溝S D19

遺構覆土は一律で、茶褐色土粒子を少量含む灰褐色砂質土である。重複関係にあるものについては覆土の差異が顕著ではないことから時期差はほとんどないものと判断される。

溝S D01(図面01)

B6からC5区に存在する。全長南北約13.5m、幅0.25m、深さ0.05m、主軸方向は約10度西偏する。土師器小破片が出土している。

溝S D02(図面01)

A6からC5区に存在する。全長南北約20m、さらに南端から約4.2m東へと屈折して延びている。幅1.2~0.8m、深さ0.22m、主軸方向は約10度西偏する。土師器および須恵器小破片が出土している。

溝S D03(図面01)

C5区に存在する。全長南北約5m、幅0.5m、深さ0.1m、主軸方向は約10度西偏する。土師器小破片が出土している。

溝S D04(図面01)

B5・C5区に存在する。全長南北約16.2m、幅0.3~0.6m、深さ0.12m、主軸方向は約10度西偏する。溝S D21と重複関係にある。

溝S D05(図面01)

B5・C5区に存在する。全長南北約16m、さらに南端から約3.8m東へと屈折して延びている。幅0.4～0.6m、深さ0.1m、主軸方向は約10度西偏する。溝SD08および溝SD21と重複関係にある。土師器および須恵器小破片が出土している。

溝SD06 (図面01)

B5・C5区に存在する。全長南北約6.2m、さらに南端から約1m東へと曲がって延びている。幅0.35m、深さ0.1m。主軸方向は約10度西偏する。溝SD07および溝SD21と重複関係にある。土師器および須恵器小破片が出土している。

溝SD07 (図面01)

C5区に存在する。全長南北約5.5m、幅0.3m、深さ0.07m、主軸方向は約10度西偏する。溝SD06と重複関係にある。

溝SD08 (図面01)

B5からC4区に存在する。全長は南北約16.5m、さらに南端から約4.7m東へと屈折して延びている。幅0.4～0.6m、深さ0.08～0.1m、主軸方向は約10度西偏する。溝SD05・溝SD09・溝SD21～23と重複関係にある。4世紀前半のものと思われる漆町縄文5・6群の土師器〔遺物番号8 (R081)] (図面33、図版26) が出土している。また、土師器・須恵器および陶器小破片が出土している。

溝SD09 (図面01)

B4・C4区に存在する。全長南北約17m、幅0.35m、深さ0.08m、主軸方向は約10度西偏する。溝SD08・溝SD21・溝SD23と重複関係にある。土師器および須恵器小破片が出土している。

溝SD10 (図面01)

C4区に存在する。全長南北約5m、幅0.3m、深さ0.04m、主軸方向は約10度西偏する。鉄製品〔遺物番号9 (R010)] (図面33、図版26) が出土している。須恵器小破片が出土している。

溝SD11 (図面01)

Z5からC4区に存在する。全長南北約30.5m、さらに北端から約10m北西へと曲がって延びている。幅0.4m、深さ0.1～0.15m、主軸方向は約10度西偏する。溝SD21と重複関係にある。土師器および陶器小破片が出土している。

溝SD12 (図面01)

A4からC3区に存在する。全長南北約18.8m、幅0.45～0.9m、深さ0.18m、主軸方向は約10度西偏する。土師器・須恵器および陶器小破片が出土している。

溝SD13 (図面01)

B3・C3区に存在する。全長南北約3.7m、幅0.25m、深さ0.05m、主軸方向は約10度西偏する。

溝SD14 (図面01)

B3・C3区に存在する。全長南北約14.8m、幅0.3～0.5m、深さ0.05m、主軸方向は約10度西偏する。土師器小破片が出土している。

溝SD15 (図面01)

B3・C3区に存在する。全長南北約12.8m、幅0.35m、深さ0.1m、主軸方向は約10度西偏する。土師器小破片が出土している。

溝SD16 (図面01)

B3・C3区に存在する。全長南北約9m、幅0.3m、深さ0.04m、主軸方向は約10度西偏する。

溝SD17 (図面01)

A3・B3区に存在する。全長南北約8.1m、幅0.22~0.5m、深さ0.06m、主軸方向は約10度西偏する。土師器小破片が出土している。

溝SD18 (図面01)

A6からC5区に存在する。全長南北約7.8m、幅1.2~0.8m、深さ0.22m、主軸方向は約10度西偏。土師器・須恵器および陶器の小破片が出土している。

溝SD19 (図面01)

B3・C3区に存在する。全長南北約5.4m、幅0.3m、深さ0.04m、主軸方向は約20度西偏する。

溝SD20 (図面01)

B3・C3区に存在する。全長南北約3.6m、幅0.3m、深さ0.1m、主軸方向は約10度西偏する。

溝SD21 (図面01)

B4からC5区に存在する。全長東西約16m、幅0.38~0.62m、深さ0.1~0.17m、主軸方向は約10度北偏する。溝SD04~06・溝SD08・溝SD09・溝SD11と重複関係にある。土師器小破片が出土している。

溝SD22 (図面01)

B4区に存在する。全長東西約2.1m、幅0.2m、深さ0.04m、主軸方向は約10度北偏する。溝SD08・溝SD09・溝SD23と重複関係にある。須恵器小破片が出土している。

溝SD23 (図面01)

B4区に存在する。全長東西約3.25m、幅0.36m、深さ0.04m、主軸方向は約10度北偏する。溝SD08・溝SD09・溝SD22と重複関係にある。

溝SD24 (図面01)

B5区に存在する。全長南北約1.75m、幅0.25m、深さ0.03m、主軸方向は約10度西偏する。

溝SD25 (図面01)

B4区に存在する。全長南北約1.25m、幅0.25m、深さ0.1m、主軸方向は約10度西偏する。

溝SD26 (図面01)

A4・B4区に存在する。全長南北約3.3m、幅0.3m、深さ0.03m、主軸方向は約10度西偏する。

溝SD27 (図面01)

A4・B4区に存在する。全長南北約4m、幅0.3~0.5m、深さ0.03m、主軸方向は約10度西偏する。

溝SD28 (図面01)

B5区に存在する。全長南北約1.2m、幅0.25m、深さ0.05m、主軸方向は約10度西偏する。

溝SD29 (図面01)

Z6・A6区に存在する。全長南北約2.8m、幅0.6m、深さ0.1m、主軸方向は約10度西偏する。

溝SD30 (図面01)

C5区に存在する。全長南北約1m、幅0.12m、深さ0.13m、主軸方向は約10度西偏する。

溝SD31 (図面01)

C5からD6区に存在する。全長東西約3m、幅0.8~1.1m、深さ0.05m、主軸方向は約10度北偏する。溝SD02と重複関係にある。

溝SD32 (図面01)

B1区に存在する。全長東西約7m、幅0.3~0.4m、深さ0.1m、主軸方向は約10度北偏する。

第3節 遺物

第1面から出土した遺物は、器種、時代ともに様々である。出土遺物の傾向は第2面と同様であるため、本来は第2面のものであった遺物が、遺跡の地理的条件や近世の耕作等の事由によって第1面において検出された可能性が非常に高い。〔遺物番号146・175～178・231～233・254～257・265・271（全てR001もしくはR002）〕（図面52・53・56・58・60、図版48・50・52～54・56）

遺構より出土した遺物は4世紀前半のものと思われる漆町編年5・6群の土師器〔遺物番号8（R081）〕（図面33、図版26）と、時期は不明の鉄製品〔遺物番号9（R010）〕（図面33、図版26）で、それぞれ壺の口縁部破片と刀了と思われる。土師器は溝SD08から、鉄製品は溝SD10から検出された。

遺構外出土遺物は、4世紀前半のものと思われる漆町編年5・6群の土師器高坏脚部片〔遺物番号146〕、9世紀前半から中頃のものと思われる出嶋編年IV2（新）からV2期の須恵器壺〔遺物番号175～178〕・同坏〔遺物番号231～233〕、中世のものと思われる土鍾〔遺物番号254～257〕、古墳時代のものと思われる碧玉製勾玉〔遺物番号265〕、閃緑岩製打製石斧〔遺物番号267〕、石灰質砂岩製砥石〔遺物番号271〕である。上記の埋山により、第2面出土遺物とまとめて述べることにした。

第3章 B地区第2面

第1節 概観

概観

検出された遺構は掘立柱建物、横列、土坑、小ピット、溝跡、性格不明遺構である。遺構の重複関係、出土遺物の時期、検出遺構の傾向から9世紀と、11世紀末から13世紀前半の2時期に大別される。それらをさらに2分し、計4期に細分した。(第8・9図、図面02、図版02-1・03) A地区においては、13世紀後半から14世紀中(頃)までの遺構が確認されているが、B・C地区の調査において該期の遺構の存在を明確にできなかった。

掘立柱建物には柱根が良好に残っているものもあり、土坑や溝からも木製品が出土するなど、砂質土を主体とした湿った土地ならではの調査成果が得られている。その他の出土遺物を概観すると、古墳時代の碧玉製勾玉や土師器、8世紀後半から9世紀の須恵器、中世の珠洲焼や土師質土器、漆器等の木製品などが検出されている。

掘立柱建物の時期については、自然科学分析結果、構造的条件、平面プラン軸線の傾き、区画溝との関連性、出土遺物、重複関係などを総合的に判断し、下記の通りI期からIV期を設定した。

I期：9世紀前半＝南北方向に長軸が設定される。柱穴は比較的しっかりと大きな堀方を持つ。2連の束柱がある。中世(本項Ⅲ期以降)の区画溝である溝S D38、溝S D40、溝S D59に切られる。軸線は西へ15°～20°傾く。

Ⅱ期：9世紀後半＝I期の建て替え。東西方向にも長軸が設定されるものが出てくる。柱穴は比較的しっかりと大きな堀方を持つ。中世(本項Ⅲ期以降)の区画溝である溝S D38、溝S D40、溝S D59に破壊される。軸線は東西に15°～20°傾く。

Ⅲ期：11世紀から12世紀中頃＝A地区より狭く区画溝である溝S D41に伴う。確認された柱穴は比較的小さい。平面プランは細長く、長軸と短軸の比率が1：2の前後もしくはそれ以上である。軸線は約20°～25°程度東西に傾き、比較的大きい。軸線を揃えることよりも区画溝を意識しているものと思われる。

Ⅳ期：12世紀後半から13世紀前半＝珠洲焼(吉岡編年I期)に伴う[遺物番号5(R268・525)](図面33、図版26)。平面プランは多様化する。軸線は15°～20°程度東西に傾くものを基本として、区画溝である溝S D42に従って30°～40°程度傾くものがある。柱穴はしっかりと大きな堀方を持つものが含まれる。

また、上記に伴い、横列、土坑、区画溝などの各遺構についても同様のI～IV期を当てはめることとした。なお、例言にも付記した通り、掘立柱建物は全て「案」である。よって、重複関係と出土遺物の傾向から想定された4期区分を採用するのが最も妥当と考えられるが、勿論4期以上に細分できる可能性もある。出土遺物などから、敢えて積極的にIV期以降の時期を当てはめることをしなかったが、A地区においてはさら

に2時期(13世紀後半から14世紀前半とそれに続く14世紀中頃の二期)が続くことが報告されている。

概観すれば、B地区第2向においては9世紀の遺構と11世紀から13世紀前半の遺構が同一面で確認されていることになる。A地区における第3向を同時に検出したものと思われるが、これには開所谷であることの地理的条件と、これに伴う覆土堆積状況の複雑さが影響しているものと思われる。

第2節 遺構

1. 掘立柱建物

詳細については一覧表(第1表)を附した。各々の掘立柱建物を前述の細分に当てはめると次のようになる。(図面02-13、図版02・03・06-10)

I期: 6棟→掘立柱建物S B02(案)、掘立柱建物S B03-1(案)、掘立柱建物S B04-1(案)、
掘立柱建物S B05(案)、掘立柱建物S B06(案)、掘立柱建物S B10(案)

II期: 5棟→掘立柱建物S B03-2(案)、掘立柱建物S B04-2(案)、掘立柱建物S B08(案)、
掘立柱建物S B11(案)、掘立柱建物S B12(案)

I期ないしII期: 2棟→掘立柱建物S B14-1・2(案)

III期: 3棟→掘立柱建物S B01(案)、掘立柱建物S B16(案)、掘立柱建物S B18(案)

IV期: 6棟→掘立柱建物S B04-3(案)、掘立柱建物S B07(案)、掘立柱建物S B09(案)、
掘立柱建物S B13(案)、掘立柱建物S B15(案)、掘立柱建物S B17(案)

掘立柱建物S B14-1・2(案)については、どちらかが建替えであると思われるが、残念ながら新旧関係は不明である。当該地域における同一位置での建替えについては、他の掘立柱建物が全て9世紀であることなどから、掘立柱建物S B14-1・2(案)も9世紀である可能性が高いと考えられる。また、掘立柱建物S B07(案)については角取りされた長方形断面の角柱が使用されていることが確認されたが、非常に脆く、慎重に取上げたがその後すぐに崩壊してしまった。

なお、A地区で検出された掘立柱建物S B405(案)については、B地区においてそれに続く柱穴を2基のみ確認している。(図面20、図版03)

掘立柱建物S B01(案) (図面03、図版06)

C5・C6区に存在する。東西2間(4m)、南北4間(8.2m)が想定された。溝S D41に規制されるものと判断される。柱穴は遺構検出面での直径が約0.28~0.7m、深さは約0.18~0.74mである。柱間は1.9~2.2mで、主軸の傾きは15度西偏する。掘立柱建物S B13(案)と重複関係にある。相伴遺物なし。

掘立柱建物S B02(案) (図面04、図版06-08)

A4からB5区にかけて存在する。東西2間(3.45m)、南北2間(3.65m)の総柱建物である。東柱は東西方向に2本配置され、構造上中央に仕切りのある倉庫類の建物が予想される。柱穴は遺構検出面での直径が約0.45~0.77m、深さは約0.21~0.52mである。柱穴4基から柱根が検出された[遺物番号20~23(R643~646)](図面34・35、図版27・28)。樹種同定の結果クリ材であることが判明しているが、その報告書の中でクリ材の選択的な利用が指摘されている。主軸の傾きは20度北偏する。溝S D40と重複関係にある。また、性格不明遺構S X01は本遺構に関する遺構、例えば倉庫1の音請施設等、であった可能性を指摘できるだろう。

掘立柱建物S B03-1(案)(図面04、図版08)

A4・A5区に存在する。東西2間(3.1m)、南北2間(3.35m)の総柱建物である。束柱はほぼ中央に2本配置され、掘立柱建物S B02(案)と同様に構造上中央に仕切りのある倉庫類の建物が予想される。柱穴は遺構検出面での直径が約0.4~0.6m、深さは約0.08~0.4mである。主軸の傾きは20度西偏する。溝S D40と重複関係にある。建替えが認められる。共存遺物なし。

掘立柱建物S B03-2(案)(図面04、図版08)

A4・A5区に存在する。東西2間(2.9m)、南北2間(3.4m)の側柱建物である。柱穴は遺構検出面での直径が約0.23~0.5m、深さは約0.08~0.4mである。柱穴1基から柱根が検出された〔遺物番号24(R647)](図面35、図版28)。樹種同定の結果クリ材であることが判明している。主軸の傾きは15度西偏し、建替えられたものと判断される。溝S B40と重複関係にある。

掘立柱建物S B04-1(案)(図面05、図版09)

B4区に存在する。東西2間(2.95m)、南北2間(3.2m)の総柱建物で、倉庫類の建物が予想される。柱穴は遺構検出面での直径が約0.37~0.95m、深さは約0.18~0.47mである。主軸の傾きは26度西偏し、建替えが認められる。また、掘立柱建物S B02(案)の場合と同様に、性格不明遺構S X02は本遺構に関係する遺構であった可能性を指摘できる。土坑S K02、溝S D40と重複関係にある。また、本遺構の柱穴から採取された木炭について放射性炭素による年代測定を実施し、B P1380±50年・1σ615AD(62.8%)690AD、B P1310±50年・1σ660AD(47.0%)730ADという測定結果が得られている。土師器小破片が出土している。

掘立柱建物S B04-2(案)(図面05、図版09)

B4区に存在する。東西2間(2.8m)、南北2間(3.4m)の側柱建物である。柱穴は遺構検出面での直径が約0.37~0.95m、深さは約0.18~0.56mである。主軸の傾きは33度西偏し、建替えられたものと判断される。また、掘立柱建物S B02(案)の場合と同様に、性格不明遺構S X02は本遺構に関係する遺構であった可能性を指摘できる。土坑S K02、溝S D40と重複関係にある。土師器小破片が出土している。

掘立柱建物S B04-3(案)(図面06、図版09)

B4区に存在する。東西2間(4.4m)、南北3間(4.7m)の側柱建物である。柱穴は遺構検出面での直径が約0.45~0.75m、深さは約0.35~0.7mである。北側に並ぶ柱穴3基から柱根が検出され〔遺物番号25-27(R641・642・686)](図面36、図版28・29)、樹種同定の結果クリ材であることが判明している。主軸の傾きは21度西偏する。土坑S K02、土坑S K11、溝S D40、性格不明遺構S X02と重複関係にある。

なお、本遺構は規模や主軸の傾き、他の遺構との重複関係等から、前出の掘立柱建物S B04-1(案)ないし掘立柱建物S B04-2(案)の建替えではないと判断される。土師器小破片が出土している。

掘立柱建物S B05(案)(図面07、図版03)

Z2・A2区に存在する。東西1間(3.4m)、南北3間(4m)が想定された。柱穴は遺構検出面での直径が約0.52~0.7m、深さは約0.16~0.54mである。柱間は1.5~3.4mで、主軸の傾きは15度西偏する。掘立柱建物S B08(案)、構址S A01、溝S D44、溝S D45と重複関係にある。出土遺物は9世紀前半と思われる田嶋編年N2(新)期の須恵器蓋〔遺物番号1(R526)](図面33、図版26)である。また、本遺構の柱穴から採取された木炭について放射性炭素による年代測定を実施し、B P1720±50年・1σ250AD(68.2%)400ADという測定結果が得られている。

掘立柱建物S B06(案)(図面07、図版03)

Z1・Z2区に存在する。遺構北側は調査区外へ続くものと思われ、全体像は不明であるが、東西3間(8.3m)分が検出されている。柱穴は遺構検出面での直径が約0.48~0.76m、深さは約0.52mである。柱間は2.5~3mで、主軸の傾きは15度西偏するものと思われる。掘立柱建物S B11(案)、上坑S K06、溝S D38と重複関係にある。共伴遺物なし。

掘立柱建物S B07(案)(図面08、図版03)

Z4・A4区に存在する。東西2間(4.6m)、南北2間(4.45m)が想定された。柱穴は遺構検出面での直径が約0.27~0.63m、深さは約0.07~0.3mである。柱間は2.1~2.45mで、主軸の傾きは20度北偏する。柱穴4基に柱根がわずかながら残されており、柱の横断面は面取りされた長方形の材が使用されていた。樹種同定の結果クリ材であることが判明しており、材としては他の掘立柱建物の柱材と同じではあるが、角材が使用されている点に注目すれば、倉庫というよりは居住施設であった可能性が高いといえるだろう。

出土遺物は9世紀前半と思われる田嶋編年IV2(新)期の須恵器釜〔遺物番号2(R651)〕(図面33、図版26)と8世紀後半と思われる田嶋編年IV2(古)期杯〔遺物番号3(R651)〕(図面33、図版26)でいずれも古代の遺物であるが、溝S D40と溝S D59に規制され、またすぐ近くに上坑S K08(井戸)も存在することを考えれば、本遺構が中世の遺構である可能性が高いと推察される。土師器小破片が出土している。

掘立柱建物S B08(案)(図面09、図版03)

A2・A3区に存在する。遺構南西側は擾乱によって消失しているが、東西2間(7.1m)、南北1間(3.2m)分を検出した。柱間は3.1~4mである。柱穴は遺構検出面での直径が約0.64~1.4m、深さは約0.4~0.68mである。主軸の傾きは15度西偏する。掘立柱建物S B05(案)、柵址S A01と重複関係にある。共伴遺物なし。

掘立柱建物S B09(案)(図面09、図版03)

Z1・A1区に存在する。東西1間(3.45m)、南北2間(5.1m)が想定された。柱間は2.45~3.45mである。柱穴は遺構検出面での直径が約0.28~0.98m、深さは約0.38~0.76mである。主軸の傾きは17度西偏する。共伴遺物なし。

掘立柱建物S B10(案)(図面10、図版13)

Z3区に存在する。遺構西側が溝S D59によって消失しているが、南北2間(3.9m)の建物が想定された。柱間は1.8~2.1mである。柱穴は遺構検出面での直径が約0.53~0.74m、深さは約0.6~0.8mである。主軸の傾きは20度西偏するものと思われる。柱穴の調査状況から、建替えが行われている可能性もある。共伴遺物なし。

掘立柱建物S B11(案)(図面07、図版03)

Z1・Z2区に存在する。遺構北側は調査区外へ続くものと思われ、全体像は不明であるが、東西1間(3.8m)分が検出された。柱穴は遺構検出面での直径が約0.67~1.1m、深さは約0.4~0.56mである。主軸の傾きは15度西偏する。掘立柱建物S B06(案)、溝S D38と重複関係にある。共伴遺物なし。

掘立柱建物S B12(案)(図面10、図版03)

Z5区に存在する。遺構北側は調査区外へ続くものと思われ、全体像は不明であるが、東西2間(2.55m)分が検出された。柱間は1.25~1.3mである。柱穴は遺構検出面での直径が約0.25~0.58m、深さは約0.2~0.52mである。主軸の傾きは27度西偏するものと推察される。共伴遺物なし。

掘立柱建物S B13(案)(図面10、図版03)

B6・C5・C6区に存在する。東西1間(5.1m)、南北3間(6.15m)分が検出された。柱間は1.1~

5.1mである。柱穴は遺構検出面での直径が約0.18～0.32m、深さは約0.07～0.45mである。主軸の傾きは40度西偏することから、溝SD42の西部に規制されて存在するものと思われ、掘立柱建物SB01(案)と重複関係にある。共存遺物なし。

掘立柱建物SB14-1(案)(図面11、図版03)

C5区に存在する。遺構東側は溝SD55によって消失しているため全体像は不明であるが、南北2間(3.05m)分が検出された。柱間は1.35～1.7mである。柱穴は遺構検出面での直径が約0.32～0.37m、深さは約0.16～0.28mである。主軸の傾きは15度西偏する。3基の柱穴は全て2つの柱穴が連結しており(掘立柱建物SB14-2(案)とした)、建替えが行われたことを示していると推察される。新旧関係は不明である。共存遺物なし。

掘立柱建物SB14-2(案)(図面11、図版03)

C5区に存在する。掘立柱建物SB14-1(案)と同様に、遺構東側は溝SD55によって消失しているため全体像は不明であるが、南北2間(3.30m)分が検出された。柱間は1.6～1.7mである。柱穴は遺構検出面での直径が約0.32～0.37m、深さは約0.15～0.35mである。主軸の傾きは15度西偏する。前述の通り建替えを指摘できる。新旧関係は不明である。共存遺物なし。

掘立柱建物SB15(案)(図面11、図版03)

C3・C4区に存在する。東西2間(3.6m)、南北1間(3.25m)の建物が想定された。柱間は1.7～3.25mである。柱穴は遺構検出面での直径が約0.24～0.46m、深さは約0.1～0.52mである。主軸の傾きは15度北偏する。溝SD40、溝SD43、溝SD47と重複関係にある。共存遺物なし。

掘立柱建物SB16(案)(図面12、図版03)

C2からC3区にかけて存在する。遺構中央部は溝SD59によって消失しているものと思われるが、東西推定5間(10m)、南北1間(3.95m)が想定された。柱間は1.5～3.95mである。柱穴は遺構検出面での直径が約0.32～0.6m、深さは約0.1～0.27mである。主軸の傾きは23度北偏する。共存遺物なし。

掘立柱建物SB17(案)(図面13、図版03)

C0・C1区に存在する。遺構南側は調査区外へ続くものと思われ、全体像は不明であるが、東西3間(5.35m)分が検出された。柱間は1.7～1.95mである。柱穴は遺構検出面での直径が約0.25～0.46m、深さは約0.08～0.14mである。主軸の傾きは15度北偏するものと推察される。共存遺物なし。

掘立柱建物SB18(案)(図面13、図版03)

Z0からA1区にかけて存在する。東西2間(4.25m)、南北1間(2.25m)分が検出された。柱間は2～2.25mである。柱穴は遺構検出面での直径が約0.3～0.52m、深さは約0.23～0.7mである。主軸の傾きは23度北偏する。共存遺物なし。

2. 構址

南北方向に走る2列が明らかとなった。

構址SA01(図面13)

Z2・A2区に存在する。全長は10mで6基の柱穴が直列する。柱間は1.6～2.4m、柱穴は直径0.42～0.68m、深さ0.68～0.94m。溝SD44ないし溝SD45に平行し、土坑SK06までをその線上に規制している。溝SD59ともほぼ平行関係にある点も含め、前述のIV期に属していると想定される。主軸は約20度西偏する。掘立柱建物SB05(案)および掘立柱建物SB08(案)と重複関係にある。共存遺物なし。

構址 SA02 (図面13)

B2・C2区に存在する。全長は7.2mで4基の柱穴が直列する。本来は5基並んでいたものと思われるが、掘削により消失しているものと考えられる。柱間は1.8m、柱穴は直径0.45m、深さ0.26~0.4m。溝SD35に平行し、溝SD59ともほぼ平行関係にある。主軸は約10度西偏する。共存遺物なし。

3. 土坑

13基検出された。土坑SK08は井戸であり、曲物を井戸枠に使用している(図面16、図版11)。また、検出状況から下記IVは井戸である可能性も否めないが土坑SK08のように、井戸枠の検出等の判断材料に乏しく、遺構確認面から30cm程度掘ると湧水してしまうことなどから井戸と確定するには至らなかった。

土坑SK06から出土した珠洲焼の甕の破片が溝SD59から出土したものと接合している[遺物番号5(R268・525)](図面33、図版26)。また、土坑SK01の覆土中から包丁傷のついた曲物の底板が出土している[遺物番号28~30(R274・278・279)](図面37、図版29・30)。これらの遺構は前述の、期に該当する可能性が高いと考えられる。

土坑SK11についてはⅢ・Ⅳ期の遺構と重複関係にあり、9世紀の遺構とは重複関係にないことから、9世紀の遺構であると判断される。他の遺構については時期、性格ともに不明と言わざるをえない。

土坑SK01 (図面14、図版11)

B5区に存在する。遺構プランは隅丸方形で東西1.26m、南北1.14m、深さ0.94m、断面形状は逆台形である。覆土は黒色土で、木製品[遺物番号28~31(R274・278・279・280)](図面37、図版29・30)が4点出土している。組板に転用されたと思われる曲物の底板が3点含まれるが、樹種同定の結果スギ材が1点、ヒノキ属のものが2点であることが判明している。土師器小破片が出土している。

土坑SK02 (図面14、図版09)

B4区に存在する。遺構プランは円形で直径約1.08m、深さ0.62m、断面形状は逆台形である。掘立柱建物SB04(案)と重複関係にある。覆土は黒色土である。共存遺物なし。

土坑SK03 (図面14、図版11)

B6区に存在する。遺構プランは長方形で長辺約2.96m、短辺約1.08m、深さ約0.37m、断面形状は逆台形である。土師器および須恵器小破片が出土している。

土坑SK04 (図面14、図版11)

Z4・Z5区に存在する。遺構プランは円形で直径約2~2.15m、深さ0.6m、断面形状は弧形である。覆土は褐色砂質土の下層に黒色土と黒褐色砂質土がレンズ状に堆積する。土師器小破片が出土している。

土坑SK05 (図面15、図版12)

C4区に存在する。遺構プランはT字状を呈しており、長方形の土坑2基が重複していたものである可能性が指摘できる。東西約3.33m、南北約2.3m、深さ0.68m、断面形状は逆台形といえる。覆土は上層から黒褐色土、褐色砂質土、灰黄褐色砂質土、黒色土の順で堆積している。土師器および須恵器小破片が出土している。

土坑SK06 (図面15)

Z2区に存在する。遺構プランは不整形で長軸約3.74m、短軸約2.74m、深さ0.85m、断面形状は弧形である。覆土は上層から黄灰色砂質土、黒褐色土、灰褐色砂質土の順で堆積している。掘立柱建物SB06(案)と重複関係にある。特筆すべき出土遺物には、漆紙が付着した9世紀前半と思われる田嶋福年IV2

(新)期の須恵器環の底部破片〔遺物番号4 (R267)〕(図面33、図版26)、溝S D59出土の破片と接合した11世紀後半から12世紀前半と思われる吉岡福年1期の珠洲焼の口縁部〔遺物番号5 (R268・525)〕(図面33、図版26)、甕了模様の漆絵が描かれている漆器椀〔遺物番号32 (R266)〕(図面38、図版31)が挙げられる。なお、この漆器椀の樹種はブナ属で、漆塗膜について放射性炭素による年代測定を実施し、B P 880±60年・1σ1110A D (41.3%) 1220A D という測定結果が得られている。

須恵器は9世紀、珠洲焼は11世紀後半から12世紀前半と判断され、漆器椀は自然科学分析の項で四柳氏の所見によると15~16世紀と考察されているが、3点の取り上げ番号(R番号)が連続していることから、これらの遺物が本遺構の年代を決定し得るとは明言できない。なお、第1層より検出された木炭について放射性炭素による年代測定を実施し、B P 410±50年・1σ1430A D (58.1%) 1520A D という測定結果が得られている。

土坑S K07 (図面16)

B5・C5区に存在する。遺構プランは円形で直径約1.12m、深さ0.66m、断面形状は逆台形である。覆土は黒色土で、溝S D42と重複関係にある。共伴遺物なし。

土坑S K08 (図面16、図版12)

Z4区に存在する。遺構プランは円形で直径約1.9m、深さ0.44m以上、調査実施深度までの断面形状は弧形である。覆土は黒褐色土の下層に黒色土が堆積しており、黒色土中から、井戸杵を含め、多くの木製品が出土している〔遺物番号33~52〕(図面38~41、図版31~35)。井戸杵〔遺物番号33・34 (R702-2・1)〕(図面38、図版31)は曲物を使用したもので、他の土坑とは異なり、本遺構が井戸であることを示す資料である。樹種同定の結果スギであることが判明している。

また、漆器椀が1点、井戸杵内から出土している〔遺物番号37 (R705)〕(図面39、図版32)。樹種同定の結果トチノキで作られていることが判明し、四柳氏の所見によると14世紀に類似の例を見ることができると指摘されている。覆土堆積状況と出土遺物などから判断して、本遺構の築造年代および使用年代は不明といわざるを得ないが、少なくとも14世紀において開削していたことを指摘できる。

土坑S K09 (図面16)

Z4区に存在する。遺構プランは楕円形で長軸約2.65m、短軸約2.42m、深さ0.9m、断面形状は逆台形といえる。覆土は上層から黒色土、黒褐色土、黒色土の順でレンズ状に堆積している。出土遺物は8世紀中頃と思われる田嶋福年IV1期の須恵器甕〔遺物番号7 (R001・104・161・165・381・382)〕(図面33、図版26)と中世のものと思われる土鏝〔遺物番号6 (R381)〕(図面33、図版26)が出土している。土脚器および須恵器小破片が出土している。

土坑S K10 (図面16)

Z5区に存在する。遺構プランは隅丸方形で東西約0.8m、南北約0.92m、深さ0.1m、断面形状は弧形である。覆土は黒褐色土の下層に黄褐色砂質土がレンズ状に堆積している。共伴遺物なし。

土坑S K11 (図面17、図版09)

B4区に存在する。遺構プランは不定形で長軸は約2.2m、短軸約1.7m、深さ0.66m、断面形状は逆台形といえる。覆土は上層から暗褐色土、黒褐色土、灰褐色土の順でレンズ状に堆積している。掘立柱建物S B 04-3 (案)、溝S D40、溝S D42と重複関係にある。須恵器小破片が出土している。

土坑S K12 (図面17)

C1区に存在する。遺構プランは円形で直径約1.5m、深さ0.46m、断面形状は弧形といえる。覆土は黒

褐色砂質土の下層に灰褐色砂質土が堆積している。共存遺物なし。

土坑SK13 (図面17)

B4・C3区に存在する。遺構プランは長方形と推察され、南北約1m、短軸約0.55m、深さ0.2m、断面形状は弧形といえる。覆土は灰褐色砂質土の下層に黒褐色砂質土がレンズ状に堆積している。共存遺物なし。

4. 小ピット

調査区全体に数多く検出された。直径も様々で、20cmを超えるものから数cmのものまで存在する。柱穴、溝址等が考えられたが、確定的な要素を欠いたため小ピットとした。著しい偏在傾向は見られなかった。

5. 溝

区画溝と思われる27条を検出した。主軸方向を見ると約10度程度傾くものと約20°程度傾くものとに大別される。ただし、溝SD52は溝SD42に伴うと思われる、溝SD53・54は溝SD56の延長部分にあたるのではないと思われるが、敢えて下記に当てはめることをしなかった。

なお、溝SD33についてはこれらに合致しないが、近世以降の溝であることが判明している。本来は第1面乃至それ以前に調査されているべきものではあるが、覆土除去作業が第2面において実施され、平面向が作成された経緯もあり、やむを得ず第2面において掲載している。

南北方向(約10°西偏)：3条＝溝SD34、47、51

東西南方向(約10°北偏)：3条＝溝SD37、48、49

南北方向(約20°西偏)：10条＝溝SD35、36、39、40、44、45、46、55、57、59

東西南方向(約20°北偏)：6条＝溝SD38、41、42(約10m分が40°西偏)、43、50、54、56、58

主要な溝跡について他の遺構との相関性を中心に見てゆくと、溝SD40は溝SD41・43・50と直交し、掘立柱建物SB02(案)・03(案)・04-1-3(案)・15(案)と重複している。さらには溝SD43から直交して延びる溝SD55は掘立柱建物SB01(案)を規制し、掘立柱建物SB14(案)と重複する。溝SD59は溝SD35・44と平行、溝SD38・42と直交して存在し、掘立柱建物SB10(案)・16(案)と重複、掘立柱建物SB07(案)を規制する。溝SD42は掘立柱建物SB04-3(案)・13(案)・15(案)を規制し、溝SD35は掘立柱建物SB17(案)、溝SD38・44は掘立柱建物SB09(案)をそれぞれ規制している。溝SD43は掘立柱建物SB16(案)に到達する直前で止まっており、溝SD49は掘立柱建物SB16(案)の南西角を意識するかのようにわずかながら屈曲を見せる。

上記の理由によって、下記の通り各期に当てはめることが妥当と考える。

I期：溝SD34、37、47

II期：溝SD48、51

III期：溝SD40、41、43、45、46、49、50、55、57

IV期：溝SD35、36、38、39、42、44、53、54、56、59

不明：溝SD33、52、58

溝SD33 (図面02)

C0からD6区、調査区南端に横たわるように存在する。検出された長さは58.6mだが、東西南方向とも調査区外へと延びる。南側も調査区外になるため、幅は不明といわざるをえない。深さは0.44～0.68m、

主軸方向は約10度北偏するものと推察される。溝S D59と重複する。出土遺物には4世紀前半と思われる漆町編年5・6群の上師器、中世のものと思われる土師質土器や珠洲焼など、種類や時代もばらばらであるため流れ込みによるものと思われる〔遺物番号10~13 (R001・R224)〕 (図面33、図版26)。共存遺物には土師器、須恵器、陶器の小破片がある。

溝S D34 (図面02)

B5・C5区に存在する。全長南北約13.8m、幅0.84~1.18m、深さ0.21m、主軸方向は約10度西偏する。覆土は黒褐色土である。溝S D42および溝S D56と重複関係にある。出土遺物には4世紀前半と思われる漆町編年5・6群の土師器類〔遺物番号14 (R272・352・409)〕 (図面33、図版26) の口縁部が出土している。共存遺物には土師器および須恵器小破片が出土している。

溝S D35 (図面02)

B1・C1区に存在する。全長南北約10.6m、幅0.58~0.74m、深さ0.14~0.32m、主軸方向は約20度西偏する。覆土は灰褐色砂質土と黒褐色砂質土である。共存遺物なし。

溝S D36 (図面02)

B3・C3区に存在する。全長南北約4.6m、幅0.88~1.26m、深さ0.14~0.32m、主軸方向は約20度西偏する。覆土は黒褐色砂質土である。溝S D43と重複関係にある。共存遺物には土師器および須恵器小破片が出土している。

溝S D37 (図面02)

C3区に存在する。全長東西約3.54m、幅0.44m、深さ0.1m、主軸方向は約10度北偏する。覆土は暗褐色砂質土である。共存遺物なし。

溝S D38 (図面02)

Z1・Z2区に存在する。全長東西約10.2m、幅0.2~0.64m、深さ0.08~0.16m。主軸方向は約20度北偏する。覆土は灰褐色砂質土である。掘立柱建物S B06 (案) 及び掘立柱建物S B11 (案) と重複関係にある。共存遺物には須恵器小破片が出土している。

溝S D39 (図面02)

B3区に存在する。全長南北約5.06m、幅0.9m、深さ0.2~0.3m、主軸方向は約20度西偏する。覆土は黒褐色土の下層に暗褐色砂質土が堆積している。共存遺物なし。

溝S D40 (図面02)

Z5からC4区にかけて存在する。2箇所途切れるが、連続性が認められることから一連の遺構とした。北から10.2m、2.75m、16.46mで、それぞれ1mと1.7mの間隔で途切れている。幅0.3~0.5m、深さ0.8~0.16m、主軸方向は約20度西偏する。覆土は黒褐色砂質土。掘立柱建物S B02 (案)、掘立柱建物S B03 (案)、掘立柱建物S B04 (案)、掘立柱建物S B15 (案)、溝S D42、溝S D43と重複関係にある。共存遺物には須恵器小破片が出土している。

溝S D41 (図面02)

C4からD6区にかけて存在する。全長東西約8.69m、幅0.34m、深さ0.1m、主軸方向は約20度北偏する。覆土は灰褐色砂質土である。共存遺物なし。

溝S D42 (図面02)

B3からB5区にかけて存在する。全長は約30.3mで、釣針型に屈曲するプランを呈している。幅0.2~1.04m、深さ0.2m、主軸方向は約20度北偏するが、西端10m分は途中で西40度方向に傾きを変え、東端2.8

m分は逆S字を呈する。覆土は灰褐色砂質土である。上坑SK07、土坑SK11、溝SD34、溝SD40、溝SD56と重複関係にある。土師器および須恵器小破片が出土している。

溝SD43 (図面02)

C3からC5区にかけて存在する。全長東西約12.95m、幅0.3~0.6m、深さ0.18m、主軸方向は約20度北偏する。覆土は灰褐色砂質土である。掘立柱建物SB15(案)、溝SD36、溝SD40、溝SD47、溝SD55と重複関係にある。共存遺物なし。

溝SD44 (図面02)

Z2・A2区に存在する。全長南北約6.1m、幅0.36m、深さ0.1m、主軸方向は約20度西偏する。掘立柱建物SB05(案)と重複関係にある。出土遺物はいずれも9世紀前半から中頃と思われる出嶋編年IV2(新)・V1の須恵器坪[遺物番号15~17(R001・385・387・388・389)](図面33、図版27)である。

溝SD45 (図面02)

Z2・A2区に存在する。全長南北約5.3m、幅0.34m、深さ0.08m、主軸方向は約20度西偏する。掘立柱建物SB05(案)と重複関係にある。共存遺物なし。

溝SD46 (図面02)

B4・C4区に存在する。全長南北約2.1m、幅0.28m、深さ0.3m、主軸方向は約20度西偏する。覆土は黒褐色砂質土の下層に灰褐色砂質土が堆積する。溝SD42と重複関係にある。共存遺物なし。

溝SD47 (図面02)

B4からC3区にかけて存在する。全長南北約8.8m、幅0.3m、深さ0.14~0.32m、主軸方向は約10度西偏する。覆土は黒褐色砂質土である。掘立柱建物SB15(案)、土坑SK13、溝SD42、溝SD43と重複関係にある。共存遺物なし。

溝SD48 (図面02)

C3区に存在する。全長東西約2.7m、幅0.6m、深さ0.14m、主軸方向は約10度北偏する。覆土は暗褐色砂質土と灰褐色砂質土である。土師器小破片が出土している。

溝SD49 (図面02)

C2・C3に存在する。全長東西約3.75m、幅0.25~0.35m、深さ0.08m、主軸方向は約10度北偏する。覆土は灰褐色砂質土である。西端に北への屈曲がわずかに認められる。共存遺物なし。

溝SD50 (図面02)

B4・B5区に存在する。全長東西約8.12m、幅0.3m、深さ0.08m、主軸方向は約20度北偏する。覆土は黒色土の下層に暗褐色土が堆積している。共存遺物なし。

溝SD51 (図面02)

B5区に存在する。全長南北約1.48m、幅0.26m、深さ0.12m、主軸方向は約10度西偏する。覆土は灰褐色砂質土である。共存遺物なし。

溝SD52 (図面02)

B4区に存在する。全長南北約1.6m、幅0.26m、深さ0.1m、主軸方向は約40度西偏する。覆土は灰褐色砂質土である。共存遺物なし。

溝SD53 (図面02)

B4・C4区に存在する。全長南北約1.54m、幅0.4m、深さ0.06m、主軸方向は約20度東偏する。覆土は灰褐色砂質土である。溝SD42と重複関係にある。土師器小破片が出土している。

溝S D54 (図面02)

B4区に存在する。全長南北約1.25m、幅0.36m、深さ0.12m、主軸方向は約10度西偏する。覆土は灰褐色砂質土の下層に暗褐色砂質土が堆積している。共存遺物なし。

溝S D55 (図面02)

C5区に存在する。全長南北約6.84m、幅0.48m、深さ0.12m、主軸方向は約20度西偏する。覆土は灰褐色砂質土の下層に暗褐色砂質土が堆積している。掘立柱建物S B14 (案)、溝S D43、溝S D56と重複関係にある。共存遺物なし。

溝S D56 (図面02)

C4・C5区に存在する。全長東西約5.3mで、S字プランを呈することが予想される。幅0.2m、深さ0.05m、主軸方向は約20度北偏する。覆土は暗褐色砂質土の下層に灰褐色砂質土が堆積している。溝S D34、溝S D42、溝S D55と重複関係にある。共存遺物なし。

溝S D57 (図面02)

B5・C5区に存在する。全長南北約1m、幅0.42m、深さ0.08m、主軸方向は約20度西偏する。覆土は暗褐色砂質土である。共存遺物なし。

溝S D58 (図面02)

B4区に存在する。全長東西約2.45m、幅0.26m、深さ0.08m、主軸方向は約20度北偏する。覆土は暗褐色砂質土である。掘立柱建物S B04-3 (案)と重複関係にある。共存遺物なし。

溝S D59 (図面02・18、図版13~15)

Z3からC2区にかけて存在する。全長東西約36.6mで、途中攪乱により分断されている。幅2~4.22m、深さ0.12~0.7m、主軸方向は約20度西偏する。覆土は灰褐色砂質土と暗褐色砂質土に黒褐色土の堆積も認められる。攪乱により分断された北側部分において、遺物が集中して出土しており、昆虫遺体や種子遺体、曲物や漆器碗などの木製品が良好な状態で検出された。詳細は自然科学分析の項に報告文をそのまま掲載しているのご参照いただきたいが、鑑賞用ないし食用に供される種類の有用植物が認められている。また、木製品については、イスノキ製の櫛【遺物番号58 (R613)】(図面42、図版36)やケヤキ製の漆器碗【遺物番号56 (R680)】(図面42、図版35)などを除き、ほとんどの木製品にスギ材が使用されていたことが樹種同定の結果として報告されている。また、出土した木製品の中で4点について放射性炭素による年代測定を実施しているが、出土遺物の項でそれぞれについて言及することにする。

種子遺体ならびに昆虫遺体についても分析、同定されており、クリの果実、カナムグラの種子、ナス科の種子、メロン類の種子、水棲昆虫のヒメガムシ、草本の葉を食べるマメコガネ・ヒメコガネ・ヨモギハムシ、動物の糞や腐敗物に集まるクロマルエンマコガネやコブマルエンマコガネ、花粉などを食べるハナムグリやコアオハナムグリ、朽木などに集まるキマワリなどの各種遺体が検出されている。詳細については自然科学分析の項において分析結果を報告文のまま掲載している。なお、メロン類の種子については放射性炭素による年代測定を実施し、B P960±50年・1σ1080A D (39.8%) 1160A Dという測定結果が得られている。

本遺構は北側調査区外へと続くと考えられるが、調査区周辺の地中レーダー探査を実施した結果において考古学的な遺構の可能性を有する反射を長さ約5m分確認している。

6. 性格不明遺構

性格不明遺構 S X01 (図面19、図版08)

掘立柱建物 S B02 (案) の西側直近から検出された。平面プランは不整形で細長く、長軸約2.7m、短軸約0.84m、深さ約0.18m。底面の凹凸が他の遺構に比べて顕著である。土師器小破片が出土している。

性格不明遺構 S X02 (図面19、図版09)

掘立柱建物 S B04-1・2 (案) の西側直近から検出された。平面プランは不整形で細長く、長軸約2.96m、短軸約0.65m、深さ約0.12m。底面の凹凸は顕著ではない。掘立柱建物 S B04-3 (案) と重複関係にあり、柱穴に切られている。覆土上面から4世紀前半と思われる漆町編年5・6群の土師器高坏〔遺物番号18 (R392)〕(図面33、図版27)の脚部が、底面直上からは9世紀前半と思われる田嶋編年IV2 (新)の須恵器坏〔遺物番号19 (R398)〕(図面33、図版27)がそれぞれ出土している。共存遺物には土師器および須恵器小破片が出土している。

第3節 遺物

1. 遺構出土遺物

土師器

溝 S D33から2点、溝 S D34から1点、性格不明遺構 S X02から1点出土している〔遺物番号10 (R224)・11 (R224)・14 (R272・352・409)・18 (R392)〕(図面33、図版26・27)。いずれも高坏脚部破片であり、4世紀前半と思われる漆町編年5・6群の遺物と考えられるが、遺構に伴うものではなく流れ込みによるものと判断される。

須恵器

蓋、坏、甕が出土している。詳細は別表の遺物観察表によるが、9世紀前半、田嶋編年IV2期を中心とした時期であると判断される。検出遺構は掘立柱建物 S B05 (案)・07 (案)、土坑 S K06・09、溝 S D44、性格不明遺構 S X02であるが、これらの須恵器が各遺構に本来伴うものであるかは、床面直上から出土した性格不明遺構 S X02以外は疑問と言わざるを得ない。

特筆されるのは2点で、ひとつは土坑 S K06から出土した漆紙の付着した9世紀前半と思われる田嶋編年IV2 (新)期の高台坏の底部破片〔遺物番号4 (R267)〕(図面33、図版26)である。漆紙には赤外線映像により墨痕が確認されたが、判読は不可能であった(図版59)。当該遺物の漆膜については放射性炭素による年代測定を実施し、B P1150±40年・1σ860 A D (57.6%) 980 A Dという測定結果が得られている。もうひとつは、溝 S D44から出土した9世紀中頃と思われる田嶋編年V1期の高台坏の底部破片〔遺物番号16 (R385)〕(図面33、図版27)である。この遺物には底部外面に矢印に似た、いわゆる鳥足型の漆記号が描かれている。遺構外からの出土遺物の中にも数点同様の漆記号を持つ須恵器が確認されている。

珠洲

甕の破片が出土している。土坑 S K06から出土したものと溝 S D59から出土したものが接合した〔遺物番

号5 (R268・525)] (図面33、図版26)。口縁部から頸部にかけての形状から11世紀後半から12世紀中頃と思われる吉岡編年I～II期の遺物と推察される。また、溝S D33からも甕(もしくは甗)の胴部破片が出土しているが時期は不明である[遺物番号13 (R001・224)] (図面33、図版26)。

土師質土器

溝S D33から出土している。中世の灯明皿と推察される。[遺物番号12 (R224)] (図面33、図版26)

土製品

土錘[遺物番号6 (R381)] (図面33、図版26)で、土坑S D09から出土した。時期は中世と思われる。

木製品

便宜上、掘立柱建物から検出された柱根も含めている。掘立柱建物S B02 (案)から4本[遺物番号20～23 (R643～647)] (図面34・35、図版27・28)、掘立柱建物S B03 (案)から1本[遺物番号24 (R647)] (図面35、図版28)、掘立柱建物S B04-3 (案)から3本[遺物番号25～27 (R641・642・686)] (図面36、図版28・29)が検出された。いずれもクリ材であることが判っている。なお、前述した通り、掘立柱建物S B07 (案)から検出された4本については、実測不可能なほど崩壊したため掲載できなかった。また、土坑S K08は曲物を杵に使用した井戸である[遺物番号33・34 (R702-2・1)] (図面38、図版31)。溝S D59から多量に木製品が出土しているが、ほとんどが用途不明なものばかりである。

生活雑器の類では、漆器碗、曲物、柳などが出土している。特筆される遺物としては、土坑S K01から出土した曲物の板部分3点[遺物番号28～30 (R274・278・279)] (図面37、図版29・30)と溝S D59から出土した曲物の板部分3点[遺物番号67・78・100 (R559・577・606)] (図面44・45・47、図版37・39・41)がある。いずれにも包丁傷があり、粗根に転用されたと推察される遺物である。また、漆器碗は土坑S K06から1点[遺物番号32 (R266)] (図面38、図版31)、土坑S K08から1点[遺物番号37 (R705)] (図面39、図版32)、溝S D59から2点[遺物番号56・57 (R680・561)] (図面42、図版35・36)出土した。中でも土坑S K06から出土したものは扇子模様の塗絵が描かれている。柳は溝S D59から1点出土している[遺物番号58 (R613)] (図面42、図版36)が、時期は不明である。

このほか、鋸鉾板[遺物番号75 (R572)] (図面45、図版38)や下駄の差歯[遺物番号108 (R664)] (図面48、図面42)と見られる遺物も出土している。また、漆かきとり痕跡を残す2点[遺物番号54・55 (R531-2・1)] (図面42、図版35)、良好な状態で出土しており、漆の付着した木片も2点[遺物番号40・59 (R696・59)] (図面40・43、図版33・36)出土している。

板材のほか、木釘のついたままであったり、釘穴の開いた木製品が数点見られる[遺物番号62～64・96・97・127 (R570・571・602・600・601・557-1)] (図面43・47・50、図版37・41・45)。これは井戸や板棚の横桱である可能性が高い。また、先端が焼けている材[遺物番号86・115・131～136・140 (R589・545・11・612-1～3・612-5・612-6、653-4)] (図面46・49・50・51、図版40・43・46)も見られるが用途は不明である。

溝S D59から出土した木製品4点について放射性炭素による年代測定を実施した。資料としたのは、漆かきとり痕跡を残す2点[遺物番号54・55 (R531-2・1)] (図面42、図版35)から採取された漆樹液、漆器碗2点[遺物番号56・57 (R680・561)] (図面42、図版35・36)から採取された漆塗膜である。測定結果

は遺物番号54がB P 160±50年・1σ1720 A D (33.0%) 1820 A D、遺物番号55がB P 60±50年・1σ1870 A D (28.4%) 1920 A D、遺物番号56がB P 570±50年・1σ1300 A D (41.4%) 1360 A D、遺物番号57がB P 880±50年・1σ1150 A D (36.6%) 1220 A Dというものであった。

2. 遺構外出土遺物

土師器

4世紀前半と思われる透明編年5・6群の高坏、壺、甕の破片が出土している〔遺物番号144～151 (R 227・113・001・039・527・335・359)〕 (図面52、図版48)。小型甕〔遺物番号150 (R 335)〕 (図面52、図版48) は、丁寧な作りではないものの、底部に粘土をうすく輪状に貼って高台を作り出している。

須恵器

壺、坏、椀、長頸瓶、壺、鉢、甕が出土している。詳細は別表の遺物観察表によるが、遺構出土の須恵器と同様に9世紀 (出嶋編年第V 1・V 2期乃至その前後) の範疇に納まるものと判断される。

これらのうち、特筆されるべき事例が数点ある。はじめに、墨書土器が3点確認されている。1点は9世紀後半と思われる出嶋編年VI 1期の壺〔遺物番号172 (R 631)〕 (図面53、図版49、55) で、外面に「万呂」、内面に「未」が書かれている。残り2点は坏である。9世紀前半と思われる出嶋編年IV 2 (新) の坏で、底部破片で外面に墨書が僅かに認められるものが1点〔遺物番号190 (R 112)〕 (図面53、図版50) と、9世紀中頃と思われる出嶋編年V 1期の坏で底部外面に「成」と書かれたものが1点〔遺物番号207 (R 346)〕 (図面54、図版51・55) である。特に「万呂」の文字は肉眼観察では見逃してしまうほどの痕跡であり、岡上歴史民俗博物館平川南教授の研究室のご指導、ご協力による赤外線写真によってはっきりと確認されたものであった。

次に漆紙が付着またはその痕跡のある遺物が2点出土している。1点は9世紀中頃と思われる出嶋編年V 2期の坏〔遺物番号224 (R 513)〕 (図面56、図版52) で明らかな紙質を有している。当該遺物の漆膜について放射性炭素による年代測定を実施しており、B P 1230±50年・1σ760 A D (54.0%) 890 A Dという測定結果が得られている。もう1点は9世紀中頃と思われる出嶋編年V 2期の椀〔遺物番号237 (R 347・410・627・632)〕 (図面56、図版53) で、紙質は残っていないもののその痕跡が認められた。当該遺物については3点の漆膜について放射性炭素による年代測定を実施しているが、これは整理作業において接合を実施する前に年代測定を依頼したからであり、のちに同一個体と判明したからである。3点についての測定結果は、それぞれB P 1240±50年・1σ690 A D (68.2%) 870 A D、B P 1280±50年・1σ670 A D (68.2%) 780 A D、B P 1260±50年・1σ680 A D (64.7%) 810 A Dというものであった。なお、双方とも赤外線撮影において墨痕などは見つからなかった。

次に、漆記号を有するものである。前述した「鳥足」が5点〔遺物番号165・184・189・203・232 (R 416・442・456・504・097・196・089・339・329・001)〕 (図面52～54・56、図版49～51・53) で、そのうち9世紀中頃と思われる出嶋編年V 2期の坏〔遺物番号232〕以外は全て9世紀前半と思われる出嶋編年IV 2 (新) 期の坏となる。「立」と書かれた9世紀前半と思われる出嶋編年IV 2 (新) 期の坏が1点〔遺物番号216 (R 468)〕 (図面55、図版52)、「人」と書かれた9世紀前半と思われる出嶋編年IV 2 (新) 期の坏が1点〔遺物番号217 (R 469)〕 (図面55、図版52) 出土した。また、判読不明のものも4点〔遺物番号186・201・204・222 (R 354・329・329・506)〕 (図面53・54・56、図版50～52) 出土しており、8世紀後半と思われる

田嶋編年Ⅳ2（古）期の坏が1点、9世紀前半と思われる田嶋編年Ⅳ2（新）期の坏が2点、9世紀後半と思われる田嶋編年Ⅵ1期の坏が1点となる。他に漆の付着が認められるものは5点〔遺物番号160・180・185・198・233（R374・240・099・103・001）〕（図面52～54・56、図版48・50・51・53）で、9世紀前半と思われる田嶋編年Ⅳ2（新）期のものが3点〔遺物番号160・180・198（R374・240・103）〕、9世紀後半と思われる田嶋編年Ⅵ1期のものが2点〔遺物番号185・233（R099・001）〕である。なお、遺物番号185の漆膜については放射性炭素による年代測定を実施しており、B P 1210±50年・1σ770AD（62.5%）890ADという測定結果が得られている。器種としては、蓋が遺物番号160と165の2点のみで、あとは全て坏であった。

次に、ヘラ記号を有するものである。内訳をみると「#」（それと想定されるものも含める）が2点〔遺物番号166・167（R440・347）〕（図面52、図版49）、「+」（それと想定されるものも含める）が4点〔遺物番号170・181・193・219（R363・286・329・300・480）〕（図面53～55、図版49～52）、「大」が1点〔遺物番号199（R329）〕（図面54、図版51）、「-」（それと想定されるものも含める）が6点〔遺物番号186・190・202・210・218・227（R354・112・329・441・469・396）〕（図面53～56、図版50～53）、「=」が1点〔遺物番号240（R049・105・166・354・355・377）〕（図面57、図版53）となっている。8世紀後半と思われる田嶋編年Ⅳ2（古）期の坏が2点〔遺物番号199・210（R329・441）〕（図面54、図版51・52）、9世紀前半と思われる田嶋編年Ⅳ2（新）期の蓋が1点〔遺物番号166（R440）〕（図面52、図版49）と坏が5点〔遺物番号186・190・193・202・227（R354・112・300・329・396）〕（図面53・54・56、図版50・51・53）、9世紀中頃と思われる田嶋編年Ⅴ1期の蓋が2点〔遺物番号167・170（R347・363）〕（図面52・53、図版49）と坏が2点〔遺物番号181・218（R286・329・477）〕（図面53・55、図版50・52）と板が1点〔遺物番号240（R049・105・166・354・355・377）〕（図面57、図版53）である。

次に、覆として転川されたもの（それと想定されるものも含める）は、蓋が7点〔遺物番号158・160・161・165・166・171・177（R378・376・001・346・416・442・456・504）〕（図面52・53、図版48～50）、坏が2点〔遺物番号216・231（R468・001）〕（図面55・56、図版52・53）出土しており、9世紀前半と思われる田嶋編年Ⅳ2（新）期のものが7点〔遺物番号160・161・165・166・171・177・216（R378・376・001・346・416・442・456・504・468）〕（図面52・53・55、図版48～50・52）、9世紀中頃と思われる田嶋編年Ⅴ1期のものが1点〔遺物番号231（R001）〕、Ⅴ2期のものが1点〔遺物番号158（R378）〕（図面52、図版48）である。

最後に灯明皿として使用されたと思われるものは7点〔遺物番号196・209・211・219・220・221・228（R310・410・416・475・476・451・453・503・480・484・515・492・619）〕（図面54～56、図版51～53）出土しており、内訳は9世紀中頃と思われる田嶋編年Ⅴ1期のものが5点〔遺物番号209・211・219・220・228（R410・416・475・476・451・453・503・480・484・515・619）〕（図面54～56、図版51～53）、Ⅴ2期のものが1点〔遺物番号221（R492）〕（図面55、図版52）、9世紀後半と思われる田嶋編年Ⅵ1期のものが1点〔遺物番号196（R310）〕（図面54、図版51）で、器種は全て坏である。

土師質土器

1点出土している〔遺物番号257（R001）〕（図面58、図版54）。中世の灯明皿と推察されるが詳しい時期は不明である。

土製品

10点すべて土錘である〔遺物番号247～256（R106・106・111・056・305・045・039・001・001・001）〕（図面58、図版54）。時期はいずれも中世と思われる。

古銭

「元祐通寶」が1点出土している〔遺物番号258（R109）〕（図面58、図版54）。初鑄年は西暦1086年である。次代に鑄造される「紹聖元寶」の初鑄年は西暦1094年であるから、およそ11世紀の終り頃までには当地において開鑄を開始していたことが想定できる。

木製品

6点掲載した内、1点について先端部が焼けているものがある〔遺物番号260（R553-1）〕（図面59、図版55）。用途、時期とも不明である。

石製品

岩玉製勾玉が1点〔遺物番号265（R002）〕（図面60、図版56）、打製石斧が2点〔遺物番号266・267（R527・001）〕（図面60、図版56）、硯が1点〔遺物番号268（R090）〕（図面60、図版56）、砥石が3点〔遺物番号269～271（R030・074・329・001）〕（図面60、図版56）出土している。勾玉は古墳時代のものであると思われるが他の遺物については時期不明と言わざるを得ない。

第4章 C地区

第1節 概観

概観

本調査区はB地区の西方、標高18.5～21.1mを測る開析谷の奥に位置し、東方に向かい緩傾斜を成している。当初は試掘の結果から遺構の存在は希薄と思われていたが、調査区北側において多数の遺構が検出された。検出された遺構は掘立柱建物、土坑、溝、小ピットである。出土遺物や遺構検出状況から判断し、B地区第2向に相当するものと思われる。C地区の遺構確認前までは、空土が厚く堆積しており、A・B地区の第1面に相当する近世の遺構確認面についてはすでに破壊されているものと判断された。

なお、想定される時期についてもB地区第2面と同様である。

第2節 遺構

1. 掘立柱建物

合計13棟検出された。詳細については一覧表（第1表）を附した。遺構に共存する出土遺物は無かったものの、他の検出遺構との関係や重複関係等から、B地区第2向で述べたI期からIV期の細分に下記の通り当てはめることができる。なお、建替えは確認されていない。（図面22～30、図版02・16・17・19・20）

I期：4棟＝掘立柱建物S B03（案）、掘立柱建物S B06（案）、掘立柱建物S B07（案）、

掘立柱建物S B12（案）

II期：3棟＝掘立柱建物S B05（案）、掘立柱建物S B09（案）、掘立柱建物S B11（案）

III期：3棟＝掘立柱建物S B04（案）、掘立柱建物S B08（案）、掘立柱建物S B13（案）

IV期：3棟＝掘立柱建物S B01（案）、掘立柱建物S B02（案）、掘立柱建物S B10（案）

掘立柱建物S B01（案）（図面22、図版19）

A1・B1区に存在する。遺構東側は調査区外へ続くものと思われ、東西1間（2.3m）、南北1間（2.15m）だけが想定された。溝SD10に規制されるものと判断される。柱穴は遺構検出面での直径が約0.32～0.5m、深さは約0.05～0.4mである。主軸の傾きは34度西偏する。柱根、共存遺物なし。

掘立柱建物S B02（案）（図面22、図版20）

C2区に存在する。東西2間（4.1m）、南北2間（4.2m）の側柱建物が想定された。溝SD08に規制されるものと判断される。柱穴は遺構検出面での直径が約0.24～0.5m、深さは約0.06～0.3mである。主軸の傾きは34度西偏する。掘立柱建物S B11（案）と重複関係にある。柱根、共存遺物なし。

掘立柱建物S B03（案）（図面23、図版17）

A1・B1・B2区に存在する。遺構南側は調査区外へ続くものと思われ、東西4間（7.4m）、南北2間

(3.5m) が検出された。柱穴は遺構検出面での直径が約0.2~0.36m、深さは約0.08~0.4mである。主軸の傾きは48度東偏する。掘立柱建物S B05(案)と重複関係にある。柱根、共存遺物なし。

掘立柱建物S B04(案) (図面24、図版17)

B 2区に存在する。遺構北側は調査区外へ続くものと思われ、東西2間(3.75m)分が検出されている。が想定された。柱穴は遺構検出面での直径が約0.28~0.36m、深さは約0.1~0.44mである。主軸の傾きは20度西偏する。柱根、共存遺物なし。

掘立柱建物S B05(案) (図面24、図版17)

B 1・B 2区に存在する。南東隅の柱穴は板瓦で破壊されていると考えられるが、東西2間(5.9m)、南北2間(4m)の掘立柱建物が想定された。柱穴は遺構検出面での直径が約0.16~0.28m、深さは約0.06~0.28mである。主軸の傾きは60度東偏する。掘立柱建物S B03(案)と重複関係にある。柱根、共存遺物なし。

掘立柱建物S B06(案) (図面25、図版17)

B 2区に存在する。遺構北側は調査区外へ続くものと思われ、全体像は不明であるが、東西2間(4m)、南北2間(5m)分が検出されている。柱穴は遺構検出面での直径が約0.2~0.4m、深さは約0.04~0.22mである。主軸の傾きは40度東偏する。柱根、共存遺物なし。

掘立柱建物S B07(案) (図面26、図版16)

B 3・B 4・C 3区に存在する。遺構北側は調査区外へ続くものと思われ、全体像は不明であるが、東西2間(4m)、南北3間(5.5m)分が検出されている。柱穴は遺構検出面での直径が約0.24~0.42m、深さは約0.06~0.36mである。主軸の傾きは50度西偏する。掘立柱建物S B08(案)、掘立柱建物S B09(案)と重複関係にある。柱根、共存遺物なし。

掘立柱建物S B08(案) (図面27、図版16)

B 3・C 3区に存在する。東西2間(3.2m)、南北4間(8.2m)の掘立柱建物が想定された。柱間は1.5~2.3mである。柱穴は遺構検出面での直径が約0.24~0.42m、深さは約0.06~0.36mである。主軸の傾きは67度西偏する。掘立柱建物S B07(案)、掘立柱建物S B09(案)と重複関係にある。柱根、共存遺物なし。

掘立柱建物S B09(案) (図面28、図版16)

B 3・C 3・C 4区に存在する。東西2間(4.7m)、南北2間(4.4m)の掘立柱建物が想定された。柱間は2.1~2.4mである。柱穴は遺構検出面での直径が約0.2~0.52m、深さは約0.05~0.3mである。主軸の傾きは57度東偏する。掘立柱建物S B07(案)、掘立柱建物S B08(案)、掘立柱建物S B10(案)と重複関係にある。柱根、共存遺物なし。

掘立柱建物S B10(案) (図面29、図版16)

C 3区に存在する。東西1間(2.25m)、南北2間(4.4m)の建物が想定された。柱間は1.9~2.5mである。柱穴は遺構検出面での直径が約0.22~0.4m、深さは約0.06~0.28mである。主軸の傾きは31度西偏する。掘立柱建物S B09(案)と重複関係にある。柱根、共存遺物なし。

掘立柱建物S B11(案) (図面29、図版17)

C 2・C 3区に存在する。遺構南側は調査区外へ続くものと思われ、全体像は不明であるが、東西2間(3.2m)、南北1間(2.95m)分が検出された。柱間は2.3~2.9mである。柱穴は遺構検出面での直径が約0.28~0.52m、深さは約0.1~0.58mである。主軸の傾きは57度東偏する。掘立柱建物S B02(案)と重複

関係にある。柱根、共伴遺物なし。

掘立柱建物S B12 (案) (図面30、図版16)

C4区に存在する。東西3間(4.8m)、南北2間(2.35m)の掘立柱建物が想定された。柱間は0.95~2.4mである。柱穴は遺構検出面での直径が約0.2~0.4m、深さは約0.06~0.14mである。主軸の傾きは45度東偏する。柱根、共伴遺物なし。

掘立柱建物S B13 (案) (図面30、図版16)

C4・C5区に存在する。遺構西側は調査区外へ続くものと思われ、全体像は不明であるが、東西1間(1.45m)、南北2間(3.6m)分が検出された。柱間は1.3~1.8mである。柱穴は遺構検出面での直径が約0.2~0.45m、深さは約0.08~0.15mである。主軸の傾きは72度東偏するものと推察される。柱根、共伴遺物なし。

2. 土坑

14基検出された。遺構の性格や時代等は不明である。

土坑S K01 (図面31、図版21)

C3区に存在する。遺構プランは円形で直径約0.9m、深さ0.36m、断面形状は逆台形である。9世紀中頃と思われる田嶋編年V2期に属する須恵器蓋【遺物番号272(R1028)】(図面61、図版53)が出土している。

土坑S K02 (図面31、図版21)

B3区に存在する。遺構プランは円形で直径約0.66m、深さ0.14m、断面形状は弧形である。土坑S K03を切る。共伴遺物なし。

土坑S K03 (図面31、図版21)

B3区に存在する。遺構プランは方形で一辺約0.5m、深さ0.1m、断面形状は逆台形である。土坑S K02に切られる。共伴遺物なし。

土坑S K04 (図面31、図版21)

B1区に存在する。遺構プランは円形で直径約0.68m、深さ0.17m、断面形状は逆台形である。共伴遺物なし。

土坑S K05 (図面31、図版22)

B3・B4区に存在する。遺構プランは円形で直径約0.8m、深さ0.2m、断面形状は逆台形である。共伴遺物なし。

土坑S K06 (図面31、図版22)

C4区に存在する。遺構プランは不定形で長軸約0.78m、短軸約0.52m、深さ0.24m、断面形状は逆台形である。共伴遺物なし。

土坑S K07 (図面31、図版22)

B3区に存在する。遺構プランは不整形で長軸約1.05m、短軸約0.66m、深さ0.16m、断面形状は逆台形である。共伴遺物なし。

土坑S K08 (図面31、図版23)

B3区に存在する。遺構プランは円形で直径約0.8m、深さ0.2m、断面形状は弧形である。土坑S K09を切る。共伴遺物なし。

土坑SK09 (図面31、図版23)

B3区に存在する。遺構プランは不定形で長軸は約0.66mが残存、短軸約0.7m、深さ0.08m、断面形状は不整形である。土坑SK08に切られる。共伴遺物なし。

土坑SK10 (図面31、図版23)

B2区に存在する。遺構プランは不整形で長軸約0.54m、短軸約0.38m、深さ0.2m、断面形状は逆台形である。共伴遺物なし。

土坑SK11 (図面32、図版23)

B2区に存在する。遺構プランは円形で直径約1.18m、深さ0.2m、断面形状は逆台形である。共伴遺物なし。

土坑SK12 (図面32、図版24)

B2区に存在する。遺構プランは円形で直径約0.7m、深さ0.1m、断面形状は逆台形である。共伴遺物なし。

土坑SK13 (図面32、図版24)

B3区に存在する。遺構プランは不定形で長軸は約0.84m、短軸約0.66m、深さ0.34m、断面形状は不整形である。共伴遺物なし。

土坑SK14 (図面32、図版24)

B2区に存在する。遺構プランは円形で直径約0.74m、深さ0.14m、断面形状は逆台形である。9世紀のものと思われる須恵器甕〔遺物番号273 (R1034)〕(図面61、図版53)が出土している。

3. 小ピット

調査区北側においてのみ数多く検出された。傾向はB区第2面と同様である。柱穴、掘址等が考えられたが、確定的な要素を欠いたため小ピットとした。

小ピットSP30 (図面32、図版20)

B3区に存在する。遺構プランは円形で直径約0.26m、深さ0.12m。覆土は暗褐色砂質土である。11世紀前半のものと思われる漆町彌年11群の土師質土器〔遺物番号276 (R1021)〕(図面61、図版53)が出土している。

4. 溝

区画溝と思われる24条を検出した。主軸方向を見ると、約20度程度傾くものと約30°程度傾くもの、さらに約40°程度傾くもの3通りに大別される。南北方向に走るものが主体となる。なお、溝SD15および溝SD17については主軸不明とした。

南北方向 (約20° 西偏) : 条=溝SD02、03、04、09、11、13、14、19、21

南北方向 (約30° 西偏) : 条=溝SD05、06、07、16、20、22、

東西方向 (約30° 北偏) : 条=溝SD12、

南北方向 (約30° 西偏し鉤状に折れる) : 条=溝SD08、10、24

南北方向 (約40° 西偏) : 条=溝SD01、18

東西方向 (約40° 北偏) : 条=溝SD23

主要な溝跡について他の遺構との相関性を中心に見てゆくと、

溝S D01は掘立柱建物S B12(案)を規制し、主軸方向は掘立柱建物S B03(案)と同一である。溝S D02は掘立柱建物S B12(案)と重複し、掘立柱建物S B13(案)を規制する。溝S D04は溝S D02と平行し、掘立柱建物S B08(案)を規制して、掘立柱建物S B09(案)と掘立柱建物S B10(案)と重複関係にある。溝S D08は掘立柱建物S B02(案)を規制し、掘立柱建物S B11(案)と重複する。溝S D10は掘立柱建物S B01(案)を規制。溝S D22は掘立柱建物S B06(案)と、溝S D24は掘立柱建物S B04(案)とそれぞれ重複する。

上記の理由によって、下記の通り各期に当てはめることが妥当と考える。

I期：溝S D01、16、18

II期：溝S D09、11、19、20

III期：溝S D02、03、04、05、06、13、14、21、22

IV期：溝S D07、08、10、24

不明：溝S D12、15、17、23

溝S D01(図面21)

C4からD3区に存在する。全長南北約12.8m、幅0.6~0.8m、深さ0.3~0.5m、主軸方向は約40度西偏する。覆土は黒褐色砂質土である。溝S D03と重複する。共存遺物なし。

溝S D02(図面21)

C4・D4区に存在する。全長南北約10.4m、幅0.35m、深さ0.08m、主軸方向は約20度西偏する。覆土は黒褐色砂質土である。共存遺物なし。

溝S D03(図面21)

C5区に存在する。全長南北約10.4m、幅0.25m、深さ0.07m、主軸方向は約20度西偏する。覆土は暗褐色砂質土である。溝S D01と重複する。共存遺物なし。

溝S D04(図面21)

B3・C3区に存在する。全長南北約11m、幅0.3m、深さ0.16m、主軸方向は約20度西偏する。覆土は暗褐色砂質土である。共存遺物なし。

溝S D05(図面21)

B5・C5区に存在する。全長南北約1.5m、幅0.28m、深さ0.08m、主軸方向は約30度西偏する。覆土は暗褐色砂質土である。共存遺物なし。

溝S D06(図面21)

C3区に存在する。全長南北約2.85m、幅0.32m、深さ0.1m、主軸方向は約30度西偏する。覆土は暗褐色砂質土である。共存遺物なし。

溝S D07(図面21)

C3区に存在する。全長南北約1.8m、幅0.32m、深さ0.07m、主軸方向は約30度西偏する。覆土は暗褐色砂質土である。共存遺物なし。

溝S D08(図面21)

B2からC2区に存在する。全長は約12.7mで、S字形に屈曲するプランを呈している。幅0.7~1.1m、深さ0.32m、主軸方向は約30度西偏するが、途中で東へ90度方向を変える。覆土は暗褐色砂質土の下層に黒褐色土が堆積している。4世紀前半のものと思われる漆町編年5・6群の蓋【遺物番号274(R1009・1023)】(図面61、図版53)と小型台付甕【遺物番号275(R1009・1039)】(図面61、図版53)が出土している。

る。

溝SD09 (図面21)

C3区に存在する。全長南北約1.1m、幅0.4m、深さ0.06m、主軸方向は約20度西偏する。覆土は暗褐色砂質土である。共伴遺物なし。

溝SD10 (図面21)

A1・B1区に存在する。全長は約6.8mで、釣型に屈曲するプランを呈している。幅0.4～0.6m、深さ0.08m、主軸方向は約30度西偏するが、途中で東へ90度方向を変える。覆土は暗褐色砂質土である。共伴遺物なし。

溝SD11 (図面21)

B3・C3区に存在する。全長南北約1.3m、幅0.28m、深さ0.08m、主軸方向は約20度西偏する。覆土は暗褐色砂質土である。共伴遺物なし。

溝SD12 (図面21)

C5区に存在する。全長東西約1m、幅0.3～0.4m、深さ0.1m、主軸方向は約30度北偏する。覆土は暗褐色砂質土である。共伴遺物なし。

溝SD13 (図面21)

C4区に存在する。全長南北約1.3m、幅0.23m、深さ0.1m、主軸方向は約20度西偏する。覆土は暗褐色砂質土である。共伴遺物なし。

溝SD14 (図面21)

C4区に存在する。全長南北約1.3m、幅0.2～0.38m、深さ0.08m、主軸方向は約20度西偏する。覆土は暗褐色砂質土である。共伴遺物なし。

溝SD15 (図面21)

B3に存在する。北側調査区外へ続くため全長、幅、主軸方向は不明である。深さ0.1m、覆土は暗褐色砂質土である。共伴遺物なし。

溝SD16 (図面21)

C3区に存在する。全長南北約4m、幅0.4m、深さ0.12m、主軸方向は約30度西偏する。覆土は暗褐色砂質土である。溝SD04と重複関係にある。共伴遺物なし。

溝SD17 (図面21)

B3に存在する。北側調査区外へ続くため主軸方向は不明といわざるをえない。検出された長さ0.7m、幅0.22m、深さ0.04m。覆土は暗褐色砂質土である。共伴遺物なし。

溝SD18 (図面21)

B3区に存在する。全長南北約1.6m、幅0.26m、深さ0.08m、主軸方向は約40度西偏。覆土は暗褐色砂質土である。共伴遺物なし。

溝SD19 (図面21)

C2区に存在する。全長南北約1.3m、幅0.3m、深さ0.04m、主軸方向は約20度西偏する。覆土は暗褐色砂質土である。共伴遺物なし。

溝SD20 (図面21)

C2区に存在する。全長南北約0.42m、幅0.2m、深さ0.05m、主軸方向は約30度西偏する。覆土は暗褐色砂質土である。共伴遺物なし。

溝SD21 (図面21)

C2区に存在する。全長南北約3.1m、幅0.4~0.55m、深さ0.1m、主軸方向は約20度西偏する。覆土は暗褐色砂質土である。共存遺物なし。

溝SD22 (図面21)

B2・B3区に存在する。全長南北約5.2m、幅0.26~0.38m、深さ0.1m、主軸方向は約30度西偏する。覆土は暗褐色砂質土である。共存遺物なし。

溝SD23 (図面21)

A1区に存在する。全長東西約1.1m、幅0.22m、深さ0.06m、主軸方向は約40度北偏する。覆土は暗褐色砂質土である。共存遺物なし。

溝SD24 (図面21)

B2区に存在する。北側調査区外へ続くため主軸方向は不明といわざるをえない。検出された長さ3.6m、幅1.1m、深さ0.06m。覆土は暗褐色砂質土である。共存遺物なし。

第3節 遺物

1. 遺構出土遺物

土師器

溝SD08からは、甕〔遺物番号274 (R1009・1023)〕(図面61、図版53)と小型台付甕〔遺物番号275 (R1009・1039)〕(図面61、図版53)が出土している。前者は断面に輪積み痕を残し、器表面は摩滅が顕著ではあるが僅かにハケメが認められる。後者は内面にミガキが認められる。いずれも4世紀前半と思われる漆町編年5・6群の遺物と考えられ、本来は遺構に伴うものではなく、流れ込みによるものと判断される。

須恵器

蓋、坏、甕の破片が出土している。詳細は別表の遺物観察表によるが、9世紀中頃と思われる田嶋編年V1・V2期のもものと判断される。土坑SK01から蓋〔遺物番号272 (R1028)〕(図面61、図版53)が、土坑SK14から甕〔遺物番号273 (R1034)〕(図面61、図版53)が、小ピットSP31からは坏〔遺物番号277 (R1022)〕(図面61、図版53)がそれぞれ出土した。

土師質土器

小ピットSP30から1点出土している〔遺物番号276 (R1021)〕(図面61、図版53)。完形で11世紀前半と思われる漆町編年11群のものであろう。

2. 遺構外出土遺物

土師器

高坏、器台、甕の破片が出土している〔遺物番号278~284 (R1009・1006・1003・1009・1006・1009・1009・1020)〕(図面61、図版53)。高坏の坏部破片〔遺物番号278 (R1009)〕(図面61、図版53)には内外面に朱が認められる。器台は2個体〔遺物番号281・282 (R1006・1009)〕(図面61、図版53)出土しており、い

ずれも脚部上方に門形のスカシを3ヶ所設けている。いずれも4世紀前半のものと思われる漆町編年5・6群の遺物と判断された。

須恵器

坏、瓶、桶鉢が出土している〔遺物番号285～288（R1004・1013・1006・1003）〕（図面61、図版53）。詳細は別表の遺物観察表によるが、遺構出土の須恵器と同様に9世紀中頃と思われる出嶋編年V1・V2期のものと判断される。墨書土器等の特筆されるべき遺物は出土していない。

石製品

打製石斧が2点〔遺物番号289・290（R1001・1002）〕（図面61、図版53）出土している。前者は安山岩製、後者は砂岩製である。

第5章 結語

調査成果から予想される岡尻遺跡の性格について

岡尻遺跡B・C地区は、小矢部川左岸に形成されている西山丘陵の一角に位置する開析谷のうちに古代～中世にかけての掘立柱建物群（総柱構造・側柱構造）や大規模な区画溝などが確認された。このような在り方は、B地区に隣接し、前年度に調査されたA地区における調査結果と調和的なものと考えられる。当調査では、開析谷といった地形の特殊性から各時代の生活面の残り具合は地点ごとに一貫していない調査結果とならざるを得なかった。

当地における生活は、古墳時代に帰属すると考えられる土器や碧玉製勾玉といった遺物が散見されることから、周囲には該期の生活遺構の存在が想定されたものの、B・C地区においては該期の遺構は確認できなかった。このことは、掘立柱建物の柱穴から検出された木炭を年代測定した結果からも傍証できよう（自然科学分析参照）。

ついで、古代においては出土遺物の検証結果から9世紀代を通じて集落が営まれていたことが明らかとなった。また、建物には区画溝に囲まれた高床式の倉庫と考えられる掘立柱建物群が並ぶことから、一般的な集落に関わるものではなく官衙関連遺跡であることを端的に示している。

当調査区の地理的な在り方は、澳を背後地にかかえる越中国府から南西に約9km小矢部川を遡った左岸段丘面に立地しており、その西側に連なる丘陵の一部にある開析谷に営まれたものである。これらの諸条件をみれば、政治経済の地方拠点である国府に向かう重要交通網である古代北陸道（小矢部川の左岸段丘面上に位置したとみられる）及び水利交通としての小矢部川が存在することから物資の流通などに有利であったと考えられる。また、2km下流には東大寺領荘園のうち須加荘にあたと考えられている須山藤ノ木遺跡が存在していることも、遺跡の要遷を考える上で興味深い。

岡尻遺跡における古代集落の性格は、出土した文字資料ならびに関連資料、さらに漆痕跡を有する資料によって類推することができよう。まず文字資料は、墨書土器と漆紙文書に大別される。前者は、須恵器杯蓋〔遺物番号172（R631）〕「方呂」（外面）・「木」（内面）、須恵器〔遺物番号207（R346）〕「成」、須恵器〔遺物番号190（R112）〕「□」がみとれる。一方後者は、赤外線撮影及び漆膜分析といった自然科学的手法により、反古紙と考えられる紙質の存在や依存状態が悪く文字が未解読な文書が確認された（図版59参照）。また、文字関連資料は須恵器杯蓋などを2次利用した転用硯が出土しているが、製品としての硯は確認されていない。このように文字資料の存在は、当地に識字層があり、彼らが貴重品であった紙を反古紙といった形で入手できた集団であったことがわかる。漆痕跡を有する資料としては須恵器杯内面に漆が付着するものが多数出土している。このことは、漆容器としての須恵器杯に固化防止のための蓋紙として使用した反古紙という関係が成り立ち、当地は漆製品を製造する工房及び付属する倉庫が設けられていた生業拠点のうちであったと考えられる。

越中国においては、国守大伴家持の積極的な関与も影響して、8世紀後半から東大寺領荘園の開発が盛んとなるが、岡尻遺跡の集落を営んだ集団もこの影響下に活動したものと想定される。しかし、検出された建物はそれほど大規模とはいえない事や、緑釉陶器などの所謂「貴重品」が出土していない事などから、それ

ほど地位の高い役人の関与はなかったと考えられる。

また、10世紀に帰属する遺物が出土していないことは、企画的な動向として開墾や税等の徴収に関する国郡の役人が行なう不正に対する引き締めがなされた9世紀末～10世紀初頭と期を同じくして当地が放棄された可能性があるのではなからうか。

次いで当地に拠点を置いた集団は、11世紀に入ってから造成を行なったと考えられる。その根拠となるのはC地区小ピットSP30出土の1師質土器〔遺物番号276 (R1021)〕(図面61、図版53)である。また、「元祐通寶」〔遺物番号258 (R109)〕(図面58、図版54)の出土は11世紀における当集落の活動の時期を推する上で、上限を窺える補充資料となろう。

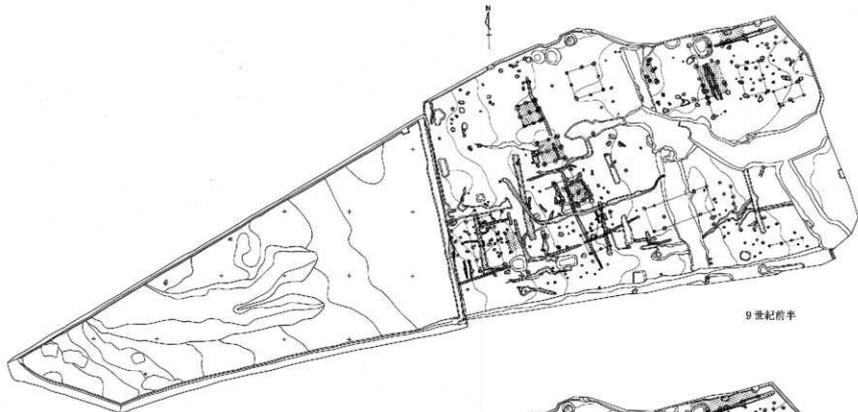
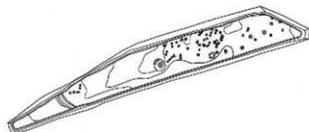
次に、11世紀以降の土地利用形態についてみていくと、A地区とは様相が多少異なりしっかりとした柱穴を持つ大型の総柱建物は検出されていない。区画溝は、古代におけるそれと違って、幅の広い溝で大きな区画を設定し、さらにその区画内において比較的幅の狭い溝で掘立柱建物を取り囲むような構成となっている。溝SD59は、比較的規模の大きい区画溝であるが、11世紀後半から12世紀前半のもと考えられる珠洲(古岡編年Ⅰ～Ⅱ期)を相伴しており、ウリ類の種子を年代測定した結果からは960±50BP (1σ1080AD (39.8%) 1160AD) [AMS MAZ14-14] というデータが得られている。また、B地区の調査区域外には地中レーダー探査の結果溝SD59と併行する溝の存在を予見させている。(この所見は、調査管理者が探査結果のアニメーションをみて感じたことであり探査技術者の考えは反映させていない。)したがって、11世紀後半以降(当遺跡での第Ⅳ期)は溝SD59などの区画溝に区切られた土地利用がなされていたことがみととれる。出土遺物は、非常に溼潤であることから木製品の残りが良く、大半は溝SD59からの出土である〔遺物番号53～143〕(図面42～51、図版35～47)。種別は、漆器輪〔遺物番号56 (R680) ケヤキ・57 (R561) スギ〕(図面42、図版35・36)や櫛〔遺物番号58 (R613) イスノキ〕(図面42、図版36)、曲物を転用した須板〔遺物番号67 (R559) スギ・78 (R577) スギ・100 (R606) スギ〕(図面44・45・47、図版37・39・41)や蒲鉾板〔遺物番号75 (R572) スギ〕(図面45、図版38)、下駄の空筒〔遺物番号108 (R664) スギ〕(図面48、図版42)など、消費生活を感じさせる遺物が多い。また、杉材に木釘を打ちつけたものは、残存寸法などからみると、木箱などの部材ではないかと思われる。建物は、比較的大型の棚柱構造をもつ掘立柱建物の存在や幅広い区画溝などを巡らせるなど、一般的な生産集落とは異なる印象が持たれる。

中世の集落形態の一類型としては、生産地に続く開析谷の中段平場に櫛や溝で縄張りをして居敷地とし、その上方に山城や牧を築く例として神奈川県海老名市上浜田遺跡があるが、中世の開析遺跡はこれに合致するものと思われる。関東と北陸との地域的な差異はあるだろうが、居敷地周辺の空間構成要素を考えると貴重な事例といえるだろう。木製品に対して土器類の出土量が少なく、青磁や白磁の出土が少量でも認められるのは、当該地が居敷地の範囲内である可能性を示唆している。

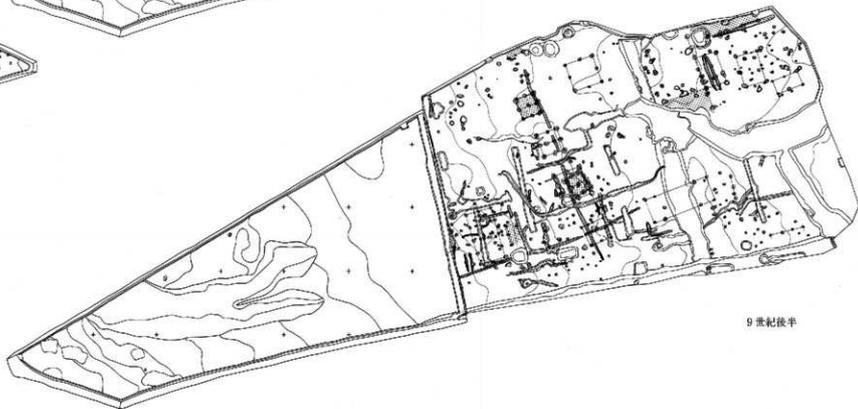
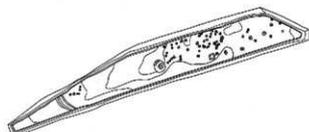
B地区に営まれた集落は、14世紀中頃に廃絶した後、近世に入ってから生産地(水船耕作など)として利用され、現在に至ったものと思われる。また、漆かき痕跡のある木製品が出土しており、自然科学分析による年代測定の結果近世以降のものであることが報告された〔遺物番号54 (R531-2)〕(図面42、図版35) 160±50BP (1σ1720AD (33.0%) 1820AD) [AMS MAZ14-13]、〔遺物番号55 (R531-1)〕(図面42、図版35) 60±50BP (1σ1870AD (28.4%) 1920AD) [AMS MAZ14-12] が、開析遺跡に集落を営んだ各集団において漆生塗が脈々と続けられたことを表している。また、遺跡周辺の植生を考えると貴重な遺物であるといえるだろう。

引用・参考文献

- 石川県立埋蔵文化財センター 1986 『珠町遺跡Ⅰ』
- 池野正男 1996 「越中における9世紀代の土器様相」『北陸の9世紀代の土器様相』第77回北陸古代土器研究会例会 北陸古代土器研究会
- 宇野隆夫 1982 「井戸考」『史料』第65巻5号 史学研究会
- 越前慎子 1996 『梅原胡摩堂遺跡出土中世土器器皿の編年』『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告書(遺物編)』富山県文化振興財団
- 神奈川考古同人会 1986 『シンポジウム古代末期～中世における在地系土器の諸問題』神奈川考古第21号
- 加賀真樹 1997 『珠洲窯』『中・近世の北陸—考古学が語る社会史—』桂書房
- 九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念—』
- 佐々木幹雄 1981 「三輪山及びその周辺出土の子持勾玉」『古代』第71号 早稲田大学考古学会
- 静岡県菊川町教育委員会 1999 『横地城跡—総合調査報告書—』
- 鈴木公雄 1999 『出土銭貨の研究』東京大学出版社
- 高岡市教育委員会 1988 『越中国府関連遺跡調査概報Ⅲ』
- 高岡市教育委員会 1991 『越中国府関連遺跡調査概報Ⅴ』
- 高岡市教育委員会 1994 『越中国府関連遺跡調査概報Ⅵ』
- 高岡市教育委員会 1996 『越中国府関連遺跡調査概報Ⅶ』
- 高岡市教育委員会 2000 『閑尽遺跡調査報告』高岡市埋蔵文化財調査報告第5冊
- 高岡市教育委員会 2002 『倉谷古墳群調査報告』高岡市埋蔵文化財調査報告第9冊
- 富山考古学会 1999 『富山平野の出現期古墳』富山考古学会創立50周年記念シンポジウム
- 永井久美男編 1994 『中世の出土銭—出土銭の調査と分類—』兵庫埋蔵銭調査会
- 中屋彦彦 1994 『加賀における近江系土器について』『庄内式土器研究』Ⅵ 庄内式土器研究会
- 永井久美男編 1996 『日本出土銭総覧』1996年版 兵庫埋蔵銭調査会
- 福光町教育委員会 2001 『富山県福光町在房遺跡Ⅰ』
- 北陸中世土器研究会 1988 『北陸における中世土器器・陶磁器・漆器』
- 北陸中世土器研究会 1991 『城館遺跡出土の土器・陶磁器・漆器』
- 北陸中世土器研究会 1993 『中世北陸の家・屋敷・暮らしぶり』
- 北陸中世土器研究会 1994 『中世北陸の寺院と墓地』
- 北陸古代土器研究会 1997 『北陸の10・11世紀代の土器様相』第83回北陸古代土器研究会例会
- 北陸古代土器研究会 1999 『須恵器貯蔵具を考えるⅠ つぼとかめ』北陸古代土器研究第8号
- 北陸古代土器研究会 2001 『須恵器貯蔵具を考えるⅡ つぼとかめのつくり方』北陸古代土器研究第9号
- 宮田達一 1992 「越中における中世土器器の編年」『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』北陸中世土器研究会
- 宮田達一 1997 「越中における土器器の編年」『中・近世の北陸—考古学が語る社会史—』桂書房
- 奈良文化財研究所編 2003 『古代の官衙遺跡Ⅰ遺構編』奈良文化財研究所
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館
- 横田賢次郎・森田 勉 1978 「大宰府出土の輸入陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館普及会



9世紀前半

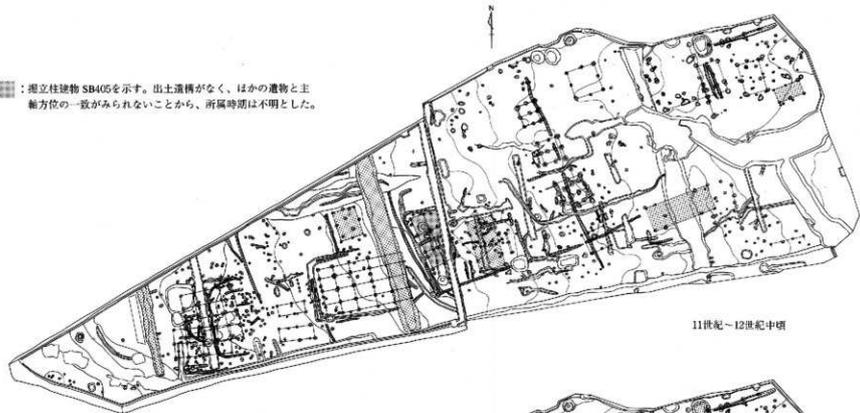


9世紀後半

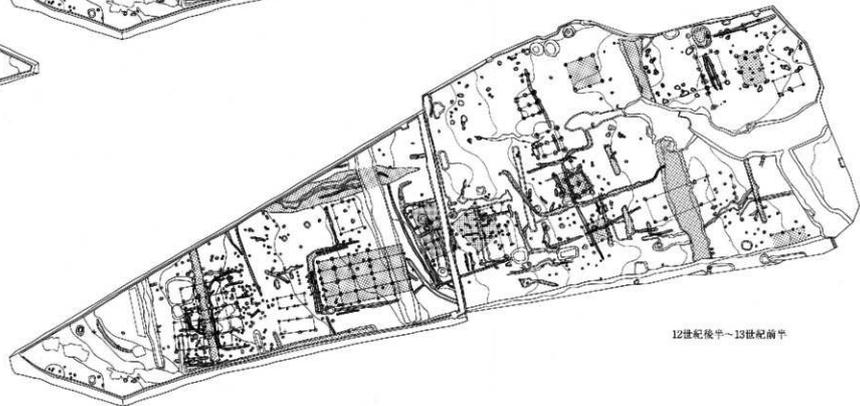
0 1 : 600 20m

第8図 A~C地区時期別遺構分布図(1)
9世紀(1/600)

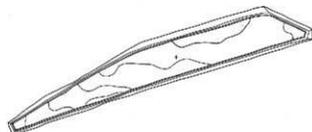
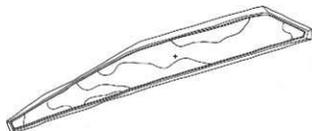
 : 据立柱建物 SB405を示す。出土遺構がなく、ほかの遺物と主軸方位の一致がみられないことから、所属時期は不明とした。



11世紀～12世紀中頃

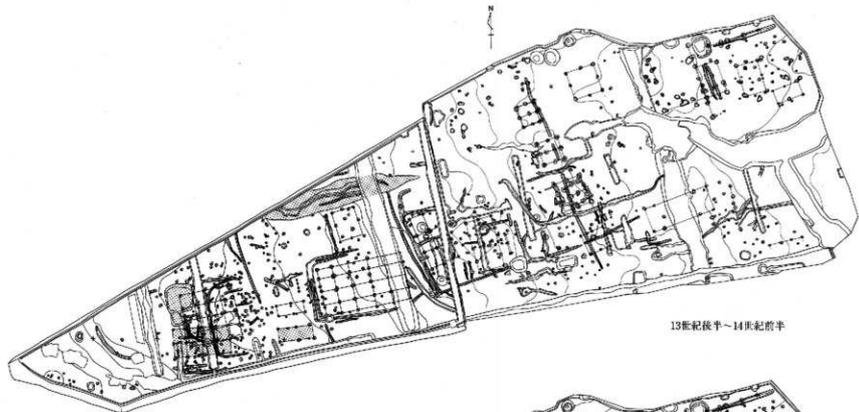
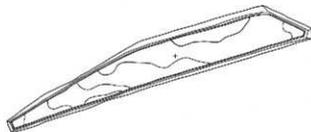
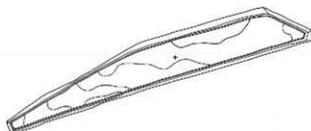


12世紀後半～13世紀前半

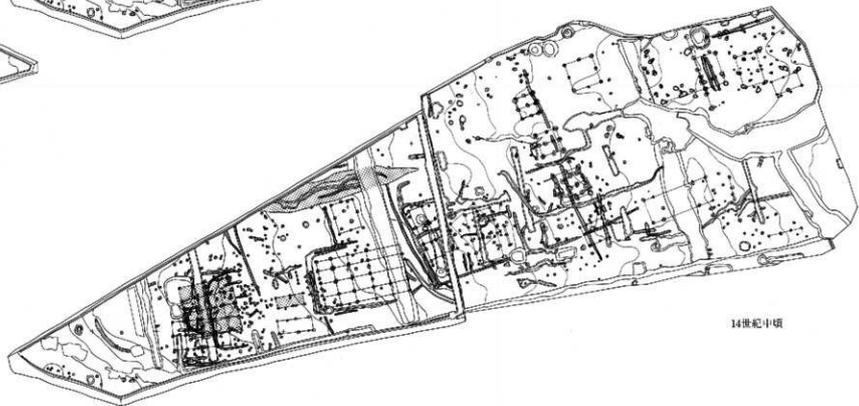


0 1 : 600 20m

第9図 A～C地区時期別遺構分布図〔2〕
 11世紀～13世紀前半 (1/600)



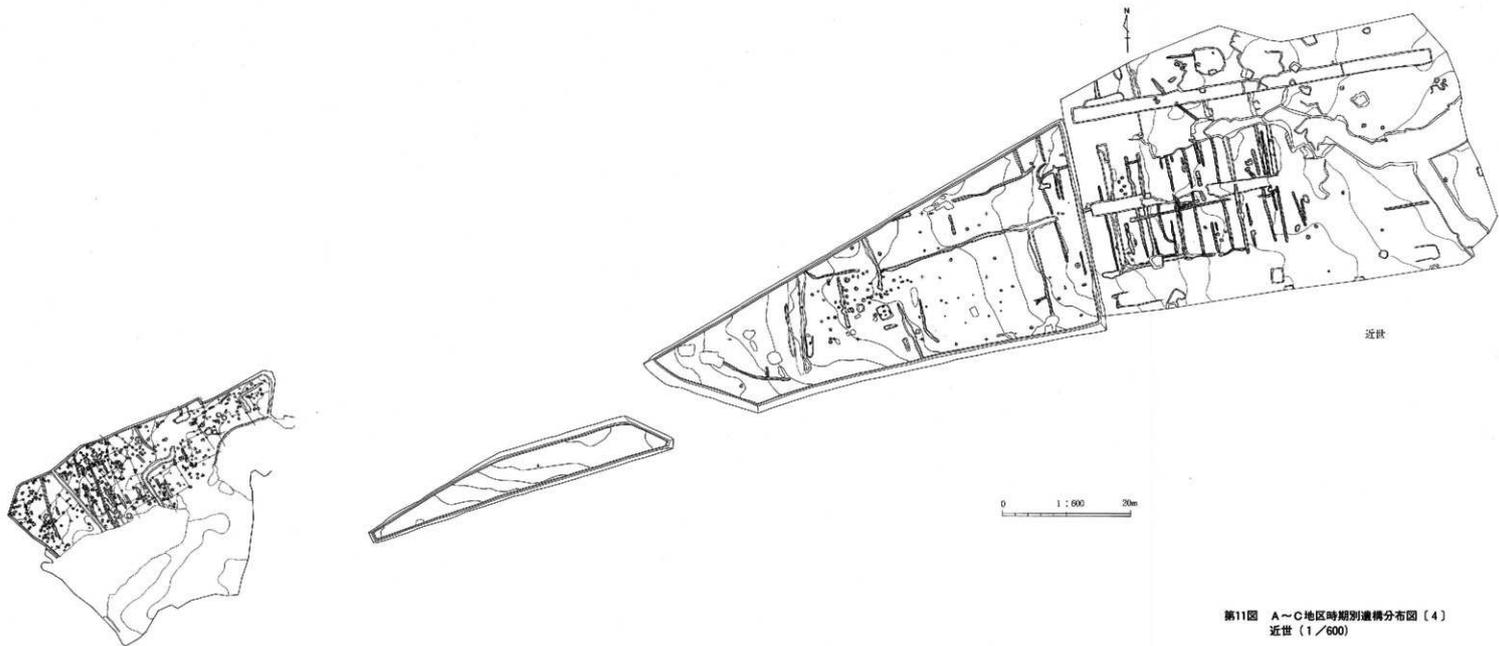
13世紀後半～14世紀前半



14世紀中頃

0 1 : 600 20m

第10図 A～C地区時期別遺構分布図〔3〕
13世紀後半～14世紀中頃 (1/600)



第11図 A～C地区時期別遺構分布図〔4〕
近世（1/600）

※C地区については近世の遺構を検出
していないが、位置関係を示すため
に掲載した。

富山県高岡市間尽遺跡出土漆器の科学分析

漆器文化財科学研究所 四柳嘉章

I. はじめに

平成14年度の富山県高岡市手洗野所在、間尽遺跡の発掘調査（B・C地区）において出土した、漆器及び須恵器転用の漆液容器の分析結果を報告する。

II. 分析の方法

漆器は階層や価格に応じた各種の製品が生産され、その品質が考古学的には所有階層復元の手がかりとなる。この品質差を材料や技術的側面から評価する場合、肉眼による表面観察では使用や廃棄後の劣化を含めた表面の塗りと加飾部分でしか判断できず、それも専門的な経験に左右される。しかし漆器本来の耐久・堅牢性は塗装工程にあり、この塗膜の下に隠された情報は、塗膜分析によって引き出される。

塗膜分析は漆器の内外面数箇所から数mmの塗膜片を採取し実体顕微鏡で観察した後、ポリエステル樹脂に包埋後その断面を研磨のうえプレパラートに接着し、さらに研磨を加えて（#100～3000）金属・偏光顕微鏡で観察する方法である。サンプルである手板試料と比較検討しながら塗装工程や下地材料の同定を行うが、これによって表面観察ではわからない時代的地域的な特色、製品の品質が把握できるので、遺跡における所有階層の推定やデータが集積されれば製品の流通問題にも迫ることができる¹⁾。また塗料の直接的な分析は、赤外線を固有の振動をしている分子に波長を連続的に変化させて照射して、分子構造を解析するフーリエ変換赤外分光法（FT-IR）を、赤色顔料の分析にはエネルギー分散型蛍光X線分析法を用いた（後述）¹⁾。なお、本稿で用いる用語については基本的には漆工用語に従うこととし、意味が曖昧で誤解をまねくものについては、以下のように規定して使用する。

①赤色漆

赤色の主な顔料である朱(HgS)やベンガラ(Fe₂O₃)が未同定の場合には「赤色漆(未同定)」と最初に断って使用し、同定済みは「赤色(朱)漆」「朱漆」「ベンガラ漆」などと表記する。よく使われる「赤漆(あかうり)」は「赤漆(せきしつ)」(木地を蘇芳で染め透漆を施したもの)との混同をさけるために用いない。内外面とも赤色漆の場合は、未同定は「総赤色(未同定)漆」、同定済みの場合は「総赤色(朱)漆」、あるいは慣例による「総(惣)朱」「皆朱」「朱漆器」などを用いる。

②黒色漆と黒色系漆

黒色の顔料である炭素粒子や鉄系化合物粒子などを含むものを「黒色漆」、まぎらわしいが黒色顔料を含まないものを「黒色系漆」として区別する。なぜならば「黒色系漆」においては、黒色顔料を含まずとも漆自体の表層が茶黒色に変質し、さらに下地色を反射して肉眼では黒色に見えるからである。近年の筆者の調査では古代以来こうした方法が一般的と考えられるので、技術や材料科学の上からも両者の区別が必要となっている。未同定の場合は、はじめに「黒色漆(未同定)」とことわる。内外面とも黒色漆の場合は「総黒色漆」、同じく黒色系は「総黒色系漆」(いわゆる「総黒」は両者

を含んだもの)、内面赤色外面黒色は「内赤外黒色漆」、同じく「内赤外黒色系漆」とする。赤色顔料が同定されている場合は「内朱外黒色漆」あるいは「内赤（ベンガラ）外黒色漆」などと呼称する。

③下地の分類—漆下地と渋下地

一般の粗い鉱物粒子を用いたものは「地の粉漆下地」、珪藻土使用は「珪藻土漆下地」、より細かい砥の粉類似は「サビ漆下地」、膠使用は「地の粉またはサビ膠下地」、炭粉は漆を用いたものは「炭粉漆下地」、柿渋を用いたものは「炭粉渋下地」とする。

Ⅲ. 分析結果

塗膜分析を行った漆製品は13点で、1点につき内外面各3点の試料を作成し平均値を算出した。したがって必ずしも図版のスケールとは一致しない。以下、木胎（木地）から順に番号（①～）を付して説明する。赤色漆の色調表現はマンセル値によるもので、「4R 4/11」とあるものは、4Rは色相で、4/11は明度/彩度である。下地の炭粉粒子は下記のように3分類する。なお、No.は分析番号である。

細粒…破砕工程が中粒炭粉より細かく炭粉粒子は均一で、針葉樹などの木口組織を全くとどめないもの。

中粒…炭粉粒子は1～2 μ m×5～10 μ m程度の針状粒子と長径5 μ m前後の多角形粒子などからなり、針葉樹などの木口組織はごく一部にしか認められないもの。

粗粒…破砕工程が粗く針葉樹などの木口組織を各所にとどめるもの。炭粉粒子は不均一で各種形状のものを含み、長径30 μ m前後の針状ないし棒状粒子を含むことが多い。

塗膜分析

◇No.1（資料番号R561） 椀（総黒色系）

器形・表面観察

ゆるやかに立ち上がる身の浅い総黒色系椀（口径15.7cm、器厚4.4cm）。高台裏は畳付の周囲に凹溝を巡らしただけのもので、露胎となっている。ヨコ木（柾目）取り。

塗膜分析

内外面①炭粉渋下地層。層厚150 μ m前後。炭粉は中粒。②渋層。層厚20 μ m。地固めとしての渋層。③漆層。層厚14 μ m前後。④漆層。層厚30 μ m前後。

◇No.2（資料番号R705） 椀

器形・表面観察

全体に木地だけの露胎状態であるが、部分的に茶黒色部分が見られる。内面はカンナ筋が顕著で、茶黒色がかっている。外面はよく調整されている。底部裏は端部の周囲に凹溝を巡らしただけの、いわゆる萁筍底である。口径15cm、器厚6.5cm、ヨコ木（柾目）取り。

塗膜分析

内面①渋層。層厚10 μ m前後。②渋層。層厚10 μ m前後。木地の上に2層の塗膜が観察されるが、柿渋あるいはほかの附着物から形成されたと考えられ、漆液の可能性は少ない。

外面①炭粉渋下地層。層厚120 μ m前後。表層10 μ mが分離。②漆層。層厚17 μ m前後。

◇No.3（資料番号R266、SK06） 椀（総黒色系）

器形・表面観察

半球状に立ち上がるやや大ぶりの総黒色系椀。内面のみこみ全体に赤色漆絵による大きな扇文が描かれている。外面の4箇所にも扇文が配されている。全体に塗りは薄く、特に外面塗膜の剥離が著しい。赤色（朱）漆絵のマンセル値は9R 3.5/8.5（赤錆色）。ヨコ木（柾目）取り。

塗膜分析

内外面①炭粉塗下地層。層厚は薄く10~24 μ m。炭粉粒子は中粒。②漆層。剥離が著しいが、層厚30 μ m前後であろう。

◇No.4 (資料番号R680) 皿 (総黒色系)

器形・表面観察

水平に張り出した腰から斜上方に立ち上がる総黒色系皿(口径15cm、器厚3cm)。身が浅く薄手である。高台裏は露胎で、4箇所に穿孔が施されている。杓子など何らかに転用されたものだろう。ヨコ木(柾目)取り。

塗膜分析

内外面①炭粉塗下地層。層厚25 μ m前後。炭粉粒子は中粒。表層2 μ mが分離。②漆層。層厚は薄く10 μ m前後。

◇No.5 (資料番号R513) 坏 (須恵器、漆液容器)

器形・表面観察

斜上方に立ち上がる無台の坏。焼成は普通だが、青灰色を呈し、胎土は精良。内面全体に漆紙が覆っている。底部から紙表面までの厚さは最大約3mm。

塗膜分析

内面Aサンプル①漆層。層厚200 μ m前後。②漆層。層厚392 μ m前後。中層以上が褐色に変質。③漆層。層厚200 μ m前後。全体が褐色に変質。

内面Bサンプル①漆層。層厚392 μ m前後。一部針葉樹の炭化片、鉱物粒子が混在。②漆層。層厚200 μ m前後。③漆層。層厚540 μ m前後。全体が褐色に変質。

赤外分光分析

分光学(Spectroscopy)は「光と物質との相互作用によって生じる光の強度やエネルギー変化を調べる学問」²⁾と定義され、固有の振動をしている分子に波長を連続的に変化させて赤外線照射してゆくと、分子の固有振動と同じ周波数の赤外線が吸収され、分子構造に応じたスペクトルが得られる。このスペクトルから分子構造を解析する方法を赤外線吸収スペクトル法(Infrared Absorption Spectroscopy)という³⁾。

漆塗膜の分析にはフーリエ変換赤外分光法(Fourier Transform Infrared Spectroscopy, FT-IR)を用いる。赤外光は近赤外(波数14000~4000 cm^{-1} 、波長700nm~2.5 μ m)、普通赤外(波数4000~400 cm^{-1} 、波長2.5~25 μ m)、遠赤外(波数400~10 cm^{-1} 、波長25 μ m~1mm)に分けられるが、ここでは通赤外光を用いる。波数は1cm当たりの波の数で、振動数を光速で割ったものであり、波長の逆数である。FT-IRは普通赤外の場合は波数4000~400 cm^{-1} の光を2つの光束に分割し、1つは固定し(固定鏡)、他方の光路長は可動ミラー(可動鏡)を用いて変化させる。つまり干渉計から位相の異なる光が出るわけで、2つの光束間の距離が変化すると干渉の結果、加え合わさった部分と差し引かれた部分の系列が生ずることによって強度の変化が起こる。すなわち干渉図形が得られる。フーリエ変換という数学的操作を行うと、干渉図形は時間領域から振動数領域のスペクトル点の1つに変換される。ピストンの長さを連続的に変化させ、ミラーBの位置を調節して光束Bの光路を変化させる。この変化させた各点において、つぎつぎとフーリエ変換を行うと完全な赤外スペクトルが得られる⁴⁾。

このようにして得られたスペクトルをあらかじめ得られている基準のスペクトルと比較することによって、塗装液の同定ができる。分析試料は2mgを採取しKBr(臭化カリウム)100mgをメノウ鉢で磨り潰して、これを錠剤成形器で加圧成形したものを用いた(錠剤法)。測定条件は分解能4 cm^{-1} 、

図1 赤外線吸収スペクトル

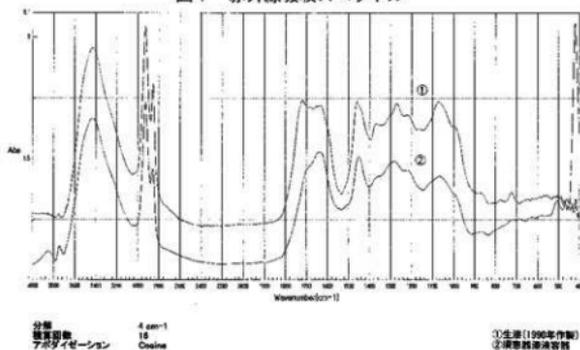


図2 赤外線吸収スペクトル

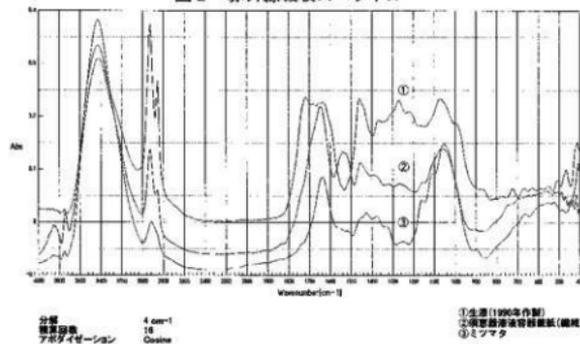


図3 赤外線吸収スペクトル(下地)

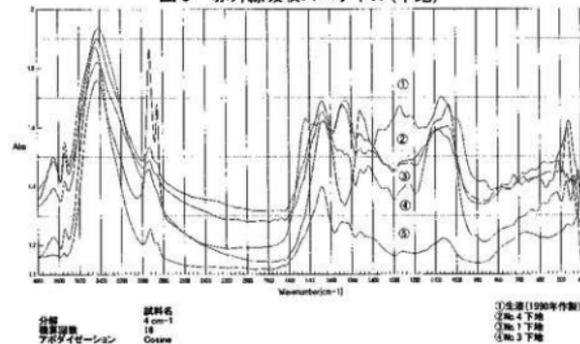


図4 蛍光X線定性分析チャート(No.3 赤色漆絵)

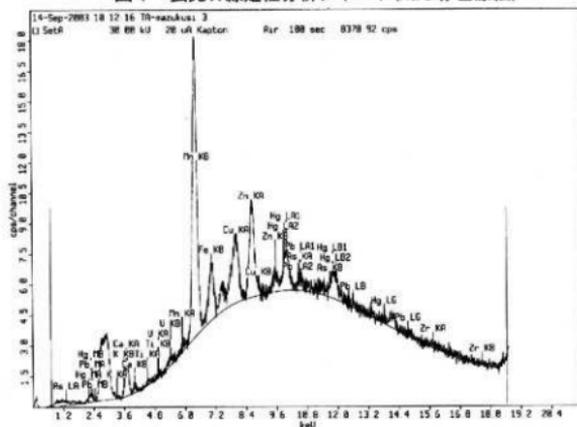
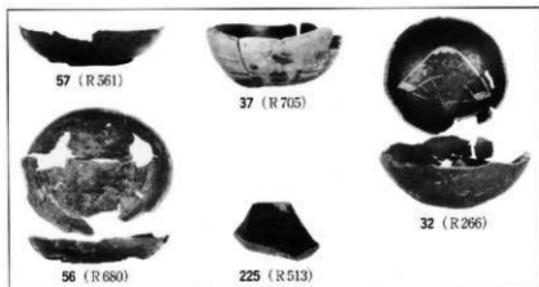
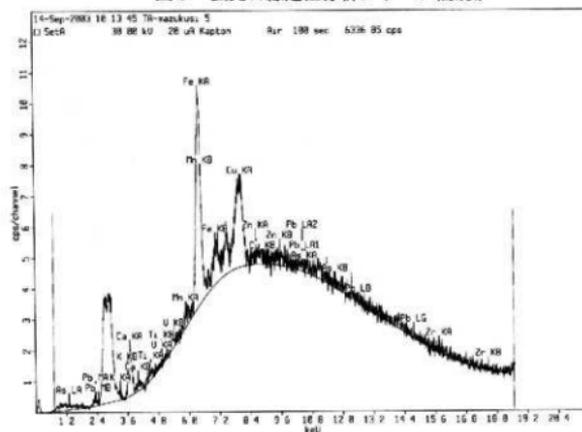


図5 蛍光X線定性分析チャート(漆液)



積算回数16、アボダイゼーション関数Cosine。縦軸は吸光度(Abs)、横軸は波数(cm^{-1})である。測定機器は日本分光製FT-IR420。

図1はNo.5 (①須恵器坏、漆液容器)の内面塗膜と生漆(②岩手県浄法寺産生漆塗膜、1990年作製)塗膜の赤外線吸収スペクトル(ノーマライズ、以下同)である。No.5は 3400cm^{-1} (水酸基、OH伸縮)、 2925cm^{-1} 、 2850cm^{-1} 、 $1720\sim 1710\text{cm}^{-1}$ (カルボニル基)、 $1650\sim 1630\text{cm}^{-1}$ (糖タンパク)、 1465cm^{-1} (活性メチレン基) 1280cm^{-1} (フェノール)を中心とした左右のショルダー(1216cm^{-1} 、 1375cm^{-1})、 $1075\sim 1030\text{cm}^{-1}$ (ゴム質)の吸収が確認できる。ほとんど劣化もなく、経過した時間を考えると極めて良好な漆塗膜といえる。

図2はNo.5 (②須恵器坏、漆液容器)の蓋紙部分と和紙(③ミツマタ)、生漆(①岩手県浄法寺産生漆塗膜、1990年作製)塗膜の赤外線吸収スペクトルである。①の漆成分のほかの吸収があり、ミツマタの吸収を重ねると天然繊維のセルロース(多糖類)の吸収が $1070\sim 1010\text{cm}^{-1}$ 付近に強く現れていることがわかる(蓋紙がミツマタというわけではない)。

図3はNo.1・3・4の下地と現代の炭粉渋下地(⑤、1991年作製、朴炭)、生漆(②岩手県浄法寺産生漆塗膜、1990年作製)塗膜の赤外線吸収スペクトルである。柿渋は単体では特徴的な吸収を示すが、炭粉と混ぜた場合紋紋領域($1500\sim 650\text{cm}^{-1}$)においては炭粉成分の吸収が強く現れ判別がしにくい。炭粉漆下地の場合は 1465cm^{-1} (活性メチレン基)や 1280cm^{-1} (フェノール)の吸収がより強い。また 2850cm^{-1} 付近の CH_2 の吸収が微量であること(側鎖があまりない)、膠など他の膠着材成分の吸収がみられない点や顕微鏡による観察所見等から総合して渋下地と判断した。

なおカキの渋味はカキ果のタンニンの中に含まれている可溶性タンニンに起因する。柿渋の主成分(渋味成分)はカキタンニンで、それは基本骨格が加水分解されない縮合型タンニンとよばれるものである。化学構造については未解決な部分も多いが松尾友明・伊藤三郎氏の研究によって、エピカテキン、カテキン-3-ガレート、エピガロテキン、ガロテキン-3-ガレートの4種類のフェノール化合物から成ることが判明した。その比は1:1:2:2で、フラバノール分子間C₄位とC₆位、もしくはC₆位で順位結合し、繰り返し構造を持っている(分子量1万5千前後の高分子プロアントシアニジンのポリマー)⁵⁾。

蛍光X線分析

蛍光X線分析は試料にX線を当てると、元素特有のX線(特性X線ないし固有X線)が発生(放出)する。この波長と強度を測定することによって元素の定性や定量分析を行う方法である。

分析対象: 漆絵に用いられた赤色漆塗膜の顔料。

使用機器: PHILIPS/PW4025、エネルギー分散型蛍光X線分析装置。

使用管球: Rhターゲット9W。

検出器: 高分解能電子冷却Si半導体検出器。

測定条件: 30kV、20 μ A、フィルター Kapton、100sec。

測定室雰囲気: 大気。測定径は2mm。サンプルカップに入れて測定。

分析結果: No.3(碗、総黒色系)の赤色漆絵(扇文)の顔料はHgS(朱・硫化水銀)。重鉍物Feのピークが強く出ているが、漆塗膜からのものも含まれている。

IV. おわりに

以上分析結果を報告してきたが、漆器考古学的所見を若干補足して結びにかきたい。

No.1・4は壘付け内面を挟って高台を作り出した身の浅い碗で、器形的には古い様相を呈している。

№2はいわゆる碁笥底であるが、類似した例は石川県穴水町西川島遺跡群美麻奈比古神社前遺跡5号土坑(14世紀)から出土している。これも部分的に炭粉粒子が付着した木地碗である⁹⁾。

№3は半球状に立ち上がるやや大ぶりの総黒色系碗で、渋下地であるが内面のみこみ全体と外面の4箇所の扇文はベンガラではなく朱漆によるもので、当初は見栄えのよい製品であったろう。№3が検出されたSK06は井戸の可能性が高いと推測されており、時期的には15~16世紀と考えられる。

№5の須恵器坏は漆液容器に転用されたもので、内面全体を覆った蓋紙が遺存している。墨書土器はじめ各種遺物から検討しなければならないが、遺構としては総柱の倉庫群やこれらを囲む溝などが検出されており、官衙や在地領主クラスに帰属する可能性がある。

漆液容器の存在は漆作業がおこなわれたことを示証拠品であり、遺跡の性格を探る上においても重要な遺物である。古代においては生産量に限りある貴重な漆は、寺院建立や調度品製作などの需要を満たすために支配者層に独占されていた。国家は漆樹の植栽を奨励し、中男作物・交易雑物・諸国年料として貢納させ、地方の官衙でも単に漆の集荷だけでなく漆器の生産を行っていた⁷⁾、また寺院、富豪層の自家工房においても同様のことが行われていた⁸⁾。たとえば「沼垂城」「郡司符」木簡などが出土した新潟県三島郡和島村八幡林遺跡(8~9世紀)⁹⁾では、壺・蓋・漆塗円形容器(大型合子蓋)などとともに漆刷毛も出土している。八幡林遺跡の漆器にはローカル色が見られるので、ここで製作されたとみて大過ないであろう¹⁰⁾。富山県入善町じょうべのま遺跡¹⁾でも漆篋や漆刷毛が出土しているし、何らかの漆作業を示す須恵器・土師器を転用したパレット類の出土は石川県松任市横江荘家遺跡¹²⁾、同・輪島市釜屋谷B遺跡¹³⁾、同・金沢市畝田ナベタ遺跡¹⁴⁾をはじめとして類例が増えつつある。また加賀では弘仁13年(823)の木簡が出土し加賀立国直前の官衙関連遺跡として注目された金沢市戸水大西遺跡¹⁵⁾からも、高杯・稜碗・皿・合子、そして漆革箱と思われる漆器が出土している。これも地方ではまれにみる多種の出土例であり、在地産の可能性が高いとみている。

近年注目されるのは能登半島先端部の石川県珠洲市北方E遺跡(7世紀後半)からは「宮」と漆書きされた須恵器(4点)の坏とともに、漆液の運搬容器や漆パレットなどが多数出土した。宮は官家の略で官倉を意味し、大宝令(701年)以前に畿内以外においても漆が収公されていた可能性が浮上ってきている¹⁶⁾。また馬越遺跡では8世紀段階の蓋紙付きの漆液容器(須恵器坏)や9世紀末~10世紀前半段階ではかなりのパレットと地の粉漆下地漆器、曲物漆液容器が確認されている。いま一つ注目されるのは、掻き目があるウルシノキ(枝漆)が出土して注目を集めた石川県宇ノ気町指江B遺跡¹⁷⁾である。小枝の先まで掻き取られたもので(セシメ漆)、たまたま杭に使用するために集落に持ち込まれたことによって、今日に伝えられることになった貴重な例である。以上簡単に関連する動向を紹介した。他の遺物・遺構と総合的に比較検討することによって、遺跡の性格にせまることが可能になろう。

註

- 1) 西柳嘉章「考古資料の修復と文化財科学—福井県東久遺跡・礪礪墓出土漆器の事例から」『國學院大學博物館学紀要』第27号 國學院大學博物館学研究室
- 2) 尾崎幸洋『分光学への招待』産業図書、1997
- 3) 山田富貴子「赤外線吸収スペクトル法」『機器分析のてびき』化学同人、1988
- 4) SILVERSTEIN・WEBSTER、荒木峻・益子洋一郎ほか訳『有機化合物のスペクトルによる同定法—MS、IR、NMRの併用 第6版』東京化学同人、1999
- 5) 伊藤三郎『脱渋の基礎』『果樹全書 カキ・キウイ』農産漁村文化協会、1985

西岡五夫「タンニンの化学—最新の研究」『化学と生物』第24巻7号、日本農芸化学会、1986

- 6) 四柳嘉章編『西川島—能登における中世村落の調査』石川県六水町教育委員会、1987
- 7) 玉田芳英「漆付着土器の研究」『文化財論叢Ⅱ』同朋舎出版、1995
四柳嘉章「備後国府関連遺跡出土漆の科学的分析」『府中市内遺跡4』広島県府中市教育委員会、1999
四柳嘉章「府中市金龍寺東遺跡出土の須恵器壺内面付着物について」『金龍寺東遺跡』広島県府中市教育委員会、1997
四柳嘉章「輪島市釜屋谷B遺跡出土の古代漆器—古代漆器生産と出土遺跡の性格をめぐって」『輪島市釜屋谷B遺跡』石川県輪島市教育委員会、1997
真保昌弘「上宿遺跡」『樹木県埋蔵文化財保護行政年報平成4年度』樹木県教育委員会、1994
上宿遺跡からは漆工房と考えられる竪穴住居跡（8世紀中）が検出されている。それは約4m四方程度のもので北側にカマドが設置され、南側が1mほど拡張されている。後述する遺物が南側テラスから出土しているので製品や漆工具の置き場と考えられ、漆塗りにおいては埃を防ぐための仕切りなど空間処理の工夫もなされたであろう。遺物は漆紙文書、漆液容器（甕）、漆が付着した麻布（漉布）、漆器、漆膜断片、その他土師器、須恵器類がある。漆液容器の蓋紙であった漆紙文書には「高一尺長口 廣一尺四寸五分 九横杖口」の記載が見られた。この寸法は調度類と考えられており、官衙や寺院の付属工房を示す貴重な事例といえよう。
- 8) 四柳嘉章「古代～近世漆器の変遷と塗装技術」『石川考古学研究会々誌』第34号、1991
四柳嘉章「北陸・東北における古代・中世漆器の、漆技術と画期」『石川考古学研究会々誌』第35号、1992
- 9) 坂井秀弥・田中 靖「新潟県八幡林遺跡と出土木簡」『日本歴史』第521号、1991
「八幡林遺跡現地説明会資料」新潟県教育委員会、和島村教育委員会、1992
和島村教育委員会『八幡林遺跡』1992～1994年
- 10) 四柳嘉章「北陸出土の古代～中世漆器の塗膜分析報告」『北陸の漆器考古学—中世とその前後』北陸中世土器研究会、1997
- 11) 阿部義平・高島忠平ほか『井波町高瀬遺跡・入善町じょうべのま遺跡発掘調査報告書』富山県教育委員会、1974
- 12) 吉岡康暢・浅香年木ほか『東大寺額横江庄遺跡』石川県松任市教育委員会・石川考古学研究会、1983
木田 清・前田清彦ほか『東大寺額横江庄遺跡Ⅱ』石川県松任市教育委員会、1996
- 13) 四柳嘉章「輪島市釜屋谷B遺跡出土の古代漆器—古代漆器生産と出土遺跡の性格をめぐって」『輪島市釜屋谷B遺跡』石川県輪島市教育委員会、1997
- 14) 布尾幸恵「畷田ナベタ遺跡」『石川県埋蔵文化財情報』第6号、石川県埋蔵文化財センター、2001
- 15) 出越茂和『戸水大西遺跡Ⅰ』石川県金沢市教育委員会、2003
出越茂和編『戸水大西遺跡Ⅲ』石川県金沢市教育委員会、2003
四柳嘉章「金沢市戸水大西遺跡出土漆革箱の科学的分析」『戸水大西遺跡Ⅲ』金沢市教育委員会、2003
- 16) 四柳嘉章「漆の技術と文化—出土漆器の世界」『いくつもの日本 第Ⅱ巻—あらたな歴史へ』岩波書店、2002
- 17) 久田正弘・大西 顯ほか『指江遺跡・指江B遺跡』石川県教育委員会・石川県埋蔵文化財センター、2002
四柳嘉章・四柳嘉之「宇ノ気町指江B遺跡出土漆器の科学的分析」『指江遺跡・指江B遺跡』石川県教育委員会・石川県埋蔵文化財センター、2002

はじめに

間尺遺跡(富山県高岡市手洗野所在)は、高岡市西部、小矢部川と丘陵地に挟まれて立地する。遺跡が位置するのは、丘陵を開析する小谷が射水平野に注ぐ地点付近である。今回は、古代から中世のSD59ならびに古代・中世～現代の基本層序について珪藻分析、花粉分析、花粉イネ属同定、植物珪酸体分析を実施し、当時の古環境に関する情報を得る。

1. 試料

分析試料は12点である。基本層序では試料番号1～7の7点の試料が採取されている。試料番号1は表土、試料番号2, 3は近・現代、試料番号4は近世、試料番号5-1, 5-2, 6は古代～中世に相当する。また、SD59は古代～中世に相当し、試料番号1～5の5点が採取されている(なお、層序によるものではなく、最下層の木製品出土地点周辺からのランダムサンプリングである)。

2. 分析方法

(1) 珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリウラックスで封入して、永久プレパラートを作成する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する(化石の少ない試料はこの限りではない)。種の同定は、原口ほか(1998)、Krammer(1992)、Krammer and Lange-Bertalot(1986, 1988, 1991a, 1991b)、Witkowski et al(2000)などを参照する。

同定結果は、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類をアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度(pH)・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数100個体以上の試料については、産出率3.0%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析は、海水～汽水生種については小杉(1988)、淡水生種については伊藤(1990)、陸生珪藻については伊藤・堀内(1991)、汚濁耐性については、Asai and Watanabe(1995)の環境指標種を参考とする。

(2) 花粉分析・イネ属同定

試料約10gについて、水酸化カリウムによる肥化、篩別、重液(臭化亜鉛:比重2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトシンス(無水酢酸9:濃硫酸1の混合液)処理の順に物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類(Taxa)について同定・計数する。結果は、木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いたものをそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。図表中で複数の種類をハイフオンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

なおイネ属同定は、検出されるイネ科花粉の表面微細構造・発芽孔の肥厚の状況・粒径などを考慮して、中村(1974)を参考にしてイネ属と他のイネ科に分類する。

(3) 植物珪酸体分析

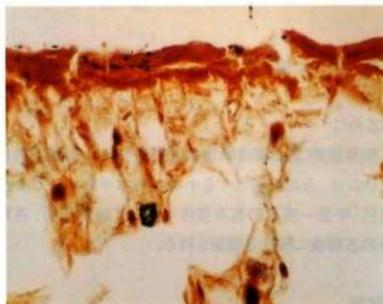
湿重5g前後の試料について過酸化水素水、塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、

漆器塗膜断面の顕微鏡写真



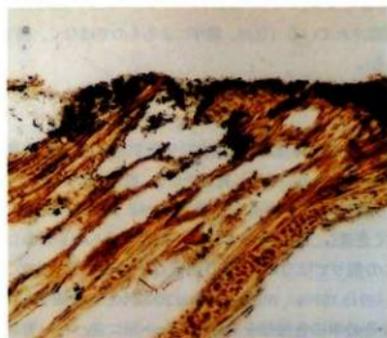
No 1 外面

×260



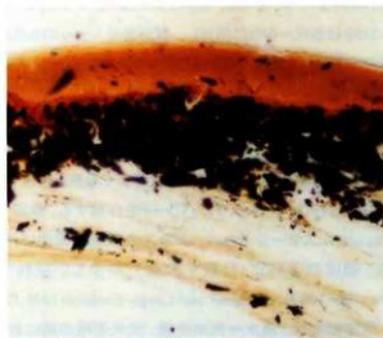
No 2 内面

×260



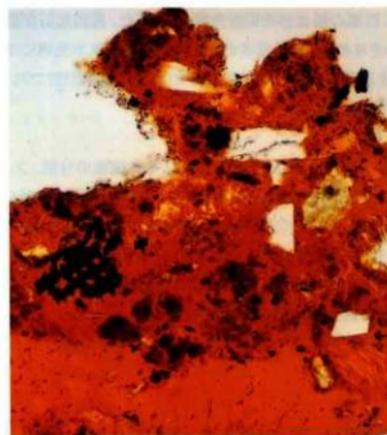
No 3 外面

×260



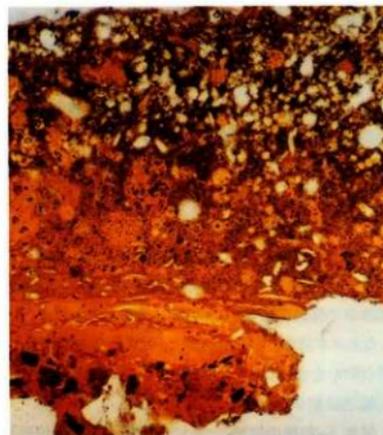
No 4 外面

×520



No 5 須恵器内面の漆液

×130



同左

×130

比重 2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離、濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下、乾燥させる。乾燥後、プリユラックスで封入してプレパラートを作製する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)、およびこれらを含む珪化組織片を近藤・佐瀬(1986)の分類に基づいて同定し、計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から古植生や稲作について検討するために、植物珪酸体群集と珪化組織片の産状を図化する。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求める。

3.結果

(1)珪藻分析

結果を図 1、表 1 に示す。珪藻化石は、SD59 と基本層序試料番号 1~3 から産出するが、試料番号 4~6 は少ないか無化石である。化石が産出した試料の完形殻の出現率は、50%以下と化石の保存状態は良くない。産出分類群数は、合計で 22 属 85 種類である。以下に珪藻化石群集の特徴を述べる。

・基本層序

試料番号 3 は、淡水域に生育する水生珪藻が優占する。産出種の特徴は、流水にも止水にも普通に見られる流水不定性種の *Amphora affinis*、*Cymbella silesiaca*、*C. tumida* が約 20%産出し、同じ生態性の *Gomphonema angustatum*、*Pinnularia mesolepta*等を伴う。試料番号 2・1 は、陸上のコケや土壌表面など好氣的環境に耐性のある陸生珪藻が優占することを特徴とする。主要種は、陸生珪藻の中でも耐乾性の高い陸生珪藻 A 群(伊藤・堀内, 1991)の *Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica* が 15~30%産出し、未区分陸生珪藻(伊藤・堀内, 1991)の *Pinnularia schoenfelderi*、陸域にも水域にも生育する陸生珪藻 B 群(伊藤・堀内, 1991)の *Stauroneis obtuse*等を伴う。珪藻の化石の少なかった試料番号 4 は、試料番号 3 とほぼ同様な種類が産出する。なお、試料番号 5-1 と 5-2、試料番号 6 は珪藻化石が殆ど産出しない。

・SD59

試料番号 1~5 と珪藻化石が近似する。流水不定性種の *Amphora affinis* が約 30%産出し、同じ生態性の *Gomphonema parvulum*、*Cymbella silesiaca*、*C. tumida*等を伴う。また、陸生珪藻 A 群の *Hantzschia amphioxys*を伴う。

(2)花粉分析・イネ属同定

結果を図 2、表 2 に示す。基本層序で花粉化石が検出されたのは、試料番号 1 のみである。試料番号 1 は木本花粉が多い組成を示し、その中でもスギ属の割合が高い。その他の木本花粉として、マツ属などが検出されるが、種類数は少ない。草本花粉はイネ属を含むイネ科やや多く検出されるものの、他は少ない。

SD59 の組成は、5 点ともほぼ同様な組成を示す。全体的にみると、草本花粉が主体の組成を示している。木本花粉は、スギ属の割合が高く、マツ属、ブナ属、ウルシ属などが検出される。草本花粉はイネ科の割合が高く、その中にはイネ属も多く含まれる。クワ科(クワ科には木本・草本両方があるが、便宜上草本に含めている)も比較的多いが、特に試料番号 1 で多くなっている。その他アカザ科、ヨモギ属、オナモミ属、ソバ属などが含まれている。

(3)植物珪酸体分析

結果を図 3、表 3 に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。基本層序では、試料番号 6、5-2、5-1 で検出個数が少なく、クマザサ属やネザ

サ節を含むタケ亜科などがわずかに認められる程度である。また、試料番号 5-1 では栽培植物であるイネ属の短細胞珪酸体が検出される。試料番号 4 から 1 ではイネ属、キビ属、タケ亜科(クマザサ属やネザサ節を含む)、ヨシ属、ウシクサ族(コブナグサ属やススキ属を含む)、イチゴツナギ亜科(オオムギ族を含む)などが認められる。また、イネ属に由来する珪化組織片も数多く認められる。なお、キビ属とオオムギ族は栽培種を含む種類であるが、検出された植物珪酸体の形態からは栽培種か否かの判別が困難である。

SD59 試料番号 1~5 では産状が類似しており、イネ属の機動細胞珪酸体の産出が目立ち、珪化組織片も多い。イネ属の産出を除けば、基本層序の古代~中世とされる試料番号 6、5-2、5-1 と産状が類似している。

4. 考察

(1) 基本層序

古代~中世の堆積物からは、珪藻、花粉、植物珪酸体ともにほとんどみられない。植物珪酸体は、土壌中で植物珪酸体量が生産量に比べて大幅に少ないことから、植物に再び吸収されたり粘土の形成に関与したりして、比較的早い段階で消失する可能性が指摘されている(近藤, 1988)。また、土壌中の珪酸分の溶脱と沈殿や再結晶化(千木良, 1995)などによって珪酸分がしだいに風化する状況も推測される。一方、花粉化石は、好氣的状況下による酸化により分解・消失しやすいことが指摘されている(中村, 1967)。遺跡の立地や土質から考えて、基本層序は谷や河川からの氾濫堆積物に由来すると思われるが、長期にわたって離水・地表面化するなどして、微化石が風化分解を受けやすい環境になっていたものと思われる。

近世以降の堆積物をみると、植物珪酸体ではイネ属の割合が高く、表層に向かって増加している。また、稲藁や稲鞘に由来する珪化組織片もみられることから、これらは近世以降の稲作に由来すると思われる。現在遺跡周辺の土地利用はほとんど水田であることから、矛盾しない結果である。また、珪藻化石をみると、表層に向けて陸生珪藻の割合が高くなっている。本遺跡は小矢部川や丘陵を開析する谷などによって、水の影響を受けやすい場所であると思われるが、陸生珪藻の増加は、近年の治水事業の効果によって、氾濫の影響を受けにくくなってきたことに起因すると思われる。花粉化石ではスギ属の割合が高く、マツ属も検出される。後背の現存植生をみると、広葉樹の雑木林に混じってスギやマツの植林地がみられることから(宮脇編著, 1985)、周辺植生に由来すると思われる。ただし、スギやマツは風媒花で花粉生産量も非常に多いことから(塚田, 1974)、実際に被覆している植生の割合よりも花粉化石群集が高くなっていると思われる(Faegri&Iversen, 1989 etc.)。

(2) SD59

分析を行った 5 点は、珪藻化石、花粉化石、植物珪酸体ともに、その組成が類似している。珪藻化石群集は、流水にも止水にも生育する流水不定性種が優占し、中~下流性河川指標種群(安藤, 1990)の *Achnanthes lanceolata*, *Meridion circulae* var. *constrictum* 等を伴う。なお、中~下流性河川指標種群は、河川中~下流部や河川沿いの河岸段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地などに集中して出現する種群である。このことから、SD59 には流れがあった可能性がある。

花粉化石群集をみると、イネ科の割合が高く、イネ属も多産している。また、植物珪酸体でもイネ属の割合が高く、稲藁や稲鞘に由来する珪化組織片もみられる。このことから、遺跡周辺では古代~中世当時稲作が行われていたと考えられ、イネ属の割合が非常に高いことから SD59 には稲鞘や稲藁などの植物体が混入あるいは廃棄されたことが考えられる。なお、SD59 内からは、回虫や鞭虫に由来する寄生虫卵が検出される。寄生虫卵は、トイレ遺構の場合は堆積物 1g あたり数千個以上と多産する(金原正明・金原正子, 1992)。今回は、寄生虫卵に着目した分析方法を行っていないが、1g あたりおよそ 100 個程度含まれるのではないと思われる。これまでの分析例ではトイレ遺構以外から少量ではあるが寄生虫卵が検出される事例はいくつか知られ

ている(辻本・田中,1997,パリオ・サーヴェイ株式会社,1996 など)。したがって、検出された寄生虫卵は、周辺の居住域などからSD59内に流れ込んだ可能性もある。ただし、ヒトと動物の寄生虫卵を現段階では明確に区別できないことから、詳細は不明である。金原正明・金原正子(1992)でも、寄生虫卵の全体的な組成からヒト由来であると推測しており、形態的にヒトと他の動物のものを分類しているわけではない。トイレ以外から出土する寄生虫卵の解釈については、寄生虫卵の詳細な形態分類等を含めて今後の課題である。また、ソバ属の花粉末も検出されており、周辺での栽培が示唆される。一方、植物珪酸体でみられるキビ属やオオムギ属は、二毛作や救荒作物としての雑穀類栽培に由来する可能性もあるが、雑穀類の植物珪酸体は、栽培種と近縁の野生種との区別が付かないため、断定はできない。栽培種以外の草本花粉をみると、イネ科、クワ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属などがみられる。これらは人里など開けた場所に草地を作ることから、水田開発などによって低地が開かれ、草地化した場所に生育していたと考えられる。

また、古墳時代以前の射水平野は、ハンノキなどの湿地林が優勢であったと考えられている(安田,1982a;1982b;パリオ・サーヴェイ株式会社,1991)。したがって、古代～中世になると低地の開発が進んで湿地林が減少し、耕作地や草地在拡大するという植生変化が付近で起こったことが推定される。今回検出された木本花粉をみると、スギ属が多い。先述した文献では、縄文時代にはスギ属も多く検出されているが、これに伴って落葉広葉樹も多く検出されており、その種類構成は豊富である。古代～中世以降におけるスギ属の増加はおそらく有用材としてのスギの植林や保護に由来すると推定され、マツ属の増加は丘陵地の植生変更に伴う植林や二次林に由来すると考えられる。当社で行った射水平野や富山平野の花粉分析結果でも、中近世においてスギ属やマツ属の割合が増加する傾向にあり(未公表試料等)、地域的な変化であるといえる。

引用文献

- 安藤 一男,1990,淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用,東北地理,42,73-88.
- Asai,K. and Watanabe,T.,1995,Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2)Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*,10,35-47.
- 千木良 雅弘,1995,風化と崩壊,近未来社,204p.
- 原口 和夫・三友 清・小林 弘,1998,埼玉の藻類 珪藻類,埼玉県植物誌,埼玉県教育委員会,527-600.
- 伊藤 良永・堀内 誠示,1991,陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用,珪藻学会誌,6,23-45.
- 金原 正明・金原 正子,1994,堆積物中の情報の可視化,可視化情報,14,9-14.
- Knut Faegri&Johs.Iversen,1989,Textbook of Pollen Analysis.The Blackburn Press.
- 近藤 隼,1988,植物珪酸体(Opal Phytolith)からみた土壌と年代,ベトロジスト,32,189-202.
- 近藤 隼・佐瀬 陸,1986,植物珪酸体分析,その特性と応用,第四紀研究,25,31-64.
- 小杉 正人,1988,珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用,第四紀研究,27,1-20.
- Krammer, K.,1992,*PINNULARIA,eine Monographie der europaischen Taxa*.BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA, BAND 26,J Cramer,353p.
- Krammer,K. and Lange-Bertalot,H.,1986,*Bacillariophyceae,Teil 1,Naviculaceae*.Band 2/1 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, Gustav Fischer Verlag, 876p.
- Krammer,K. and Lange-Bertalot,H.,1988,*Bacillariophyceae,Teil 2,Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae*. Band 2/2 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, Gustav Fischer Verlag, 536p.
- Krammer,K. and Lange-Bertalot,H.,1991a,*Bacillariophyceae,Teil 3,Centrales,Fragilariaceae,Eunotiaceae*.Band 2/3 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, Gustav Fischer Verlag, 230p.

Krammer, K. and Lange-Bertalot, H., 1991b, *Bacillariophyceae, Teil 4, Achnantheaceae*, Kritische Ergänzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. Band 2/4 von: Die Süßwasserflora von Mitteleuropa, Gustav Fischer Verlag, 248p.

宮脇 昭編著, 1985, 日本植生誌 中部, 至文堂, 604p.

中村 純, 1967, 花粉分析, 古今書院, 232p.

中村 純, 1974, イネ科花粉について, とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として, 第四紀研究, 13, 187-193.

バリノ・サーヴェイ株式会社, 1991, 布目沢東遺跡自然科学分析報告, 大門町埋蔵文化財調査報告第7集 大門町企業団地内遺跡発掘調査報告(1) - 布目沢東遺跡・布目沢西遺跡 -, 富山県埋蔵文化財センター・大門町教育委員会, p.81-118.

バリノ・サーヴェイ株式会社, 1996, 自然科学分析, 葛飾区遺跡調査会調査報告第35集 上千葉遺跡 葛飾区西亀有1丁目12番地点発掘調査報告書, 葛飾区遺跡調査会, 242-275.

辻本 裕也・田中 義文, 1997, 田井中遺跡 95-2 区・志紀遺跡 95-2 区における古環境復元, 大阪文化財調査研究センター調査報告書第23集 田井中遺跡(1~3次)・志紀遺跡(防1次) 陸上自衛隊八尾駐屯地内施設建設事業に伴う発掘調査報告書, 大阪文化財調査研究センター, 242-277.

塚田 松雄, 1972, 花粉は語る, 岩波書店, 231p.

Witkowski, A., Lange-Bertalot, H., and Metzeltin, D., 2000, *Diatom flora of Marine coast I* Iconographia Diatomologica, 7, Koeltz Scientific Books, 881p.

安田 喜憲, 1982a, 花粉分析, 大門町埋蔵文化財報告第5集 小泉遺跡 - 県道改修工事に伴う調査 -, 大門町教育委員会, 48-62.

安田 喜憲, 1982b, 花粉分析からみた富山湾沿岸の縄文前期の遺跡 - ナラ林文化と環日本海文化圏 -, 大門町埋蔵文化財報告第5集 小泉遺跡 - 県道改修工事に伴う調査 -, 大門町教育委員会, 99-108.

表1. 建群分析結果(1)

種 類	生態性		環境	基本順序								SD59				
	水分	pH		1	2	3	4	5-1	5-2	6	1	2	3	4	5	
Anomoneles sphaerophora (Kuetz.)Pflzer	Ogh-Meh	al-II	ind								1	2	3	4	5	
Fragaria breviflora Grunow	Ogh-Meh	al-II	l-ph	U								1				
Navicula geospartiana (Blainv.)H.L.Smith	Ogh-Meh	al-II	ind	S	1											
Navicula veneta Kuetzing	Ogh-Meh	al-II	ind	S	1											
Nitzschia palea (Kuetz.)W.Smith	Ogh-Meh	al-II	ind	S										1		
Phopodia gibberula (Ehr.)Müller	Ogh-Meh	al-II	ind	U	1	1									1	
Achnanthes hungarica Grunow	Ogh-ind	al-II	ind	K.T		2		1			2	1	2	3	1	
Achnanthes lanceolata (Blainv.)Grunow	Ogh-ind	al-II	ind	U	1											
Achnanthes minutissima Kuetzing	Ogh-ind	al-II	ind	U	1	1	23	5			38	27	42	46	34	
Amphora affinis Kuetzing	Ogh-ind	al-II	ind	RAU	1	1										
Amphora montana Krasske	Ogh-ind	al-II	ind	RA	7											
Caloneis aerophila Bock	Ogh-ind	al-II	ind	RB							2	2	1		2	
Caloneis leptostoma Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-II	ind	RA							3	1	1	3	1	
Caloneis siliicola (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-II	ind	U				2								
Cocconeis discicola (Schumann)Cleve	Ogh-ind	al-II	l-bi										1			
Craticula cuspidata (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-II	ind	S						1			1			
Cymbella aspera (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-II	ind	O.T									1			
Cymbella heteropleura var. minor Cleve	Ogh-hob	ac-II	l-ph	O							1					
Cymbella mesaria Oboedkov	Ogh-ind	al-bi	l-bi	O			1									
Cymbella silesiaca Blainch	Ogh-ind	al-II	ind	T	1	1	18				3	1	6	5	4	
Cymbella tumida (Breb. ex Kuetz.)V.Heurck	Ogh-ind	al-II	ind	T			23	1			2	4	6	7	3	
Cymbella spp.	Ogh-unik	unk	unk					1								
Diploneis ovalis (Hilse)Cleve	Ogh-ind	al-II	ind	T			4	1			2	2	1		2	
Diploneis parva Cleve	Ogh-ind	al-II	ind	U												
Diploneis spp.	Ogh-unik	unk	unk					1								
Eunotia pectinifera var. minor (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-II	ind	O.T							1		1			
Eunotia praenupta Ehrenberg	Ogh-hob	ac-II	l-ph	RB,O.T											1	
Eunotia praenupta var. bidens Grunow	Ogh-hob	ac-II	l-ph	RB,O											1	
Fragilaria opacina var. gracilis (Oestr.)Hustedt	Ogh-ind	al-II	l-ph	T									1			
Fragilaria compta var. venter (Ehr.)Hustedt	Ogh-ind	al-II	l-ph	S												
Fragilaria sinuata Ehrenberg	Ogh-ind	al-II	l-ph	S							3	4	2	1		
Fragilaria sinuata var. lanceolata (Schum.)Hustedt	Ogh-ind	al-II	l-ph	S											2	
Fragilaria ultra (Nitzsch)Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-II	ind								1	1			2	
Frustulia vulgaris (Thwait.)De Toni	Ogh-ind	al-II	ind	U							1					
Gomphonema angustatum (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	al-II	ind	U		2	13	1			1	5	1	5	3	
Gomphonema gracile Ehrenberg	Ogh-ind	al-II	l-ph	O.U							1	1			1	
Gomphonema parvum Kuetzing	Ogh-ind	al-II	ind	U		3	3	1			15	14	5	6	6	
Gomphonema spp.	Ogh-unik	unk	unk								2				1	
Hantzschia ambioyos (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-II	ind	RAU	22	30	1	1			3	14	5	1	7	
Meridion circulare var. constrictum (Ralfs.)V.Heurck	Ogh-ind	al-bi	ind	K.T							2	1	3	2	2	
Navicula confusivosa (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	RAU	1						3					
Navicula contenta var. symmetrica Hustedt	Ogh-unik	unk	unk	RB.S									1		1	
Navicula contenta Grunow	Ogh-ind	al-II	ind	RAU	2	4	1				2	1	1		1	
Navicula contenta fo. bicaps (Arnot)Hustedt	Ogh-ind	al-II	ind	RAT	7		1									
Navicula elginensis (Grog.)Ralfs	Ogh-ind	al-II	ind	O.U	3	1										
Navicula elginensis var. neglecta (Kras.)Patrick	Ogh-ind	al-II	l-ph	U										1		
Navicula murica Kuetzing	Ogh-ind	al-II	ind	RA.S	60	23	5	4			2	4	2	1	4	
Navicula murica var. verrucosa (Kuetz.)Cleve	Ogh-ind	al-II	ind	RI	1											
Navicula parvicaulis Bock	Ogh-ind	al-II	ind	RB	2	1										
Neidium alpinum Hustedt	Ogh-unik	unk	ind	RA	10	2										
Neidium amplatum (Ehr.)Krammer	Ogh-ind	al-II	l-ph				1									
Nitzschia amphibia Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	U		1									1	
Nitzschia brevisima Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	REU	1											
Nitzschia debilis (Arnot)Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	REU	1	1										
Nitzschia foveolata Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	T	1											
Nitzschia hantzschiana Rabenhorst	Ogh-ind	al-bi	ind	U	1											
Nitzschia cf. permutata (Grun.)Pergallo	Ogh-ind	al-bi	ind	RE		1									1	
Nitzschia sinuata var. delognei (Grun.)Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-bi	l-ph	U												
Nitzschia tubicola Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	S	1											
Pinnularia acroparva W.Smith	Ogh-ind	al-bi	l-ph	O										1		
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	al-bi	ind	RA	4	8					1			1	1	
Pinnularia brevicostata Cleve	Ogh-ind	ac-II	ind								2	2	1	1	1	
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	ac-II	ind	O.U			2								1	
Pinnularia gibba var. linearis Hustedt	Ogh-hob	ac-II	ind													
Pinnularia lentiginosa Mikoyan	Ogh-ind	al-bi	ind		1											
Pinnularia mesolepta (Ehr.)W.Smith	Ogh-ind	al-bi	ind	S	1		7									
Pinnularia obscura Krasske	Ogh-ind	al-bi	ind	RA	3											
Pinnularia schoenfelderi Krammer	Ogh-ind	al-bi	ind	RE	12	9					1	1				
Pinnularia schoenfelderi var. minor Krammer	Ogh-ind	al-bi	ind	RE	3	1					2	2	1			
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-ind	ac-II	ind	RB.S												
Pinnularia subtomatodora Hustedt	Ogh-hob	ac-II	l-ph		1											
Pinnularia usata Svartzow	Ogh-hob	ac-II	l-ph		1											
Pinnularia viridis (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	al-bi	ind	O	2		1	2			2			2	1	
Pinnularia spp.	Ogh-unik	unk	unk		2		1	1			4	1	1		4	
Rhopodia gibba (Ehr.)Müller	Ogh-ind	al-bi	ind		2										2	
Solenopora levissima (Kuetz.)Mann	Ogh-ind	al-bi	ind		2											
Solenopora pseudolepta (Krasske)Lange-B.	Ogh-ind	al-bi	ind		2											
Stauroneis acuta W.Smith	Ogh-ind	al-bi	l-ph				1	3			1	4	2	1	4	
Stauroneis anopea Ehrenberg	Ogh-ind	al-bi	ind	T			1									
Stauroneis borrichii (Pat.)Lund	Ogh-ind	al-bi	ind	RE	5	4		1								
Stauroneis kriegeri Patrick	Ogh-ind	al-bi	ind	RE	1											
Stauroneis obsoleta Loretzsch	Ogh-ind	al-bi	ind	RE	22	6										
Stauroneis phenicenteron (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	al-bi	l-ph	O							1					
Stauroneis phenicenteron var. signata Meister	Ogh-ind	al-bi	ind								1				1	

表2. 花粉分析-イネ属同定結果

種 類	試料番号	基本層序						SD59					
		1	2	3	4	5-1	5-2	6	1	2	3	4	5
木本花粉													
モミ属	-	-	-	-	-	-	-	4	1	4	-	1	2
ツガ属	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1	3	2	
トウヒ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	
マツ属単維管束亜属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	
マツ属複維管束亜属	8	-	-	-	-	-	-	1	3	5	1	2	
マツ属(不明)	41	-	-	-	-	-	-	8	15	17	3	20	
コウヤマキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	
スギ属	224	-	-	-	-	-	-	41	47	43	63	54	
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	2	3	
ノグミ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	
サウグミ属	-	-	-	-	-	-	-	1	3	-	3	1	
クミ属	2	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	
クマシテ属-アサダ属	2	-	-	-	-	-	-	2	2	-	2	2	
カバノキ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	
ハンノキ属	1	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1	2	
ブナ属	-	-	-	-	-	-	-	13	12	6	4	1	
コナラ属コナラ亜属	3	-	-	-	-	-	-	2	4	2	1	4	
コナラ属アカガシ変属	-	-	-	-	-	-	-	-	2	3	-	1	
クリ属	-	-	-	-	-	-	-	10	2	3	3	1	
シノキ属	-	-	-	-	-	-	-	6	1	-	2	1	
ニレ属-ケヤキ属	2	-	-	-	-	-	-	1	4	3	4	2	
キハダ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	
ウルシ属	-	-	-	-	-	-	-	4	9	8	5	5	
トチノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	
ブドウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	
ツバキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	
ウコギ科	-	-	-	-	-	-	-	2	1	1	-	-	
トネリコ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	
ガマズミ属	-	-	-	-	-	-	-	2	1	3	1	-	
草本花粉													
イネ属	17	-	-	-	-	-	-	43	73	83	57	42	
他のイネ科	17	-	-	-	-	-	-	83	111	115	113	86	
カヤツリグサ科	1	-	-	-	-	-	-	14	22	21	21	19	
ミズアオイ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1	-	
ユリ科	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	
クワ科	-	-	-	-	-	-	-	252	78	44	54	53	
サナエタデ属-ウナギツカミ属	-	-	-	-	-	-	-	32	14	12	-	9	
タデ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2	1	-	
ソバ属	-	-	-	-	-	-	-	1	3	2	2	-	
アカザ科	-	-	-	-	-	-	-	10	9	13	11	12	
ナデシコ科	-	-	-	-	-	-	-	-	5	8	7	10	
キンポウゲ科	-	-	-	-	-	-	-	1	-	3	-	1	
アブラナ科	-	-	-	-	-	-	-	6	4	10	4	6	
バラ科	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	1	2	
マメ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
セリ科	-	-	-	-	-	-	-	2	1	3	1	3	
オオバコ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	1	1	
オミナエシ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	
ゴキツル属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	
ヨモギ属	1	-	-	-	-	-	-	19	14	33	29	10	
オナモミ属	-	-	-	-	-	-	-	11	12	1	1	6	
キク亜科	-	-	-	-	-	-	-	-	5	5	1	1	
タンポポ科	-	1	-	-	-	-	-	1	1	1	1	-	
不明花粉	2	-	-	-	-	-	-	11	7	8	7	4	
シダ類胞子													
ヒカゲノカズラ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
ゼンマイ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	
イノモトソウ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	
他のシダ類胞子	110	9	23	6	-	1	1	45	73	63	53	51	
合 計													
木本花粉	283	0	0	0	0	0	0	100	113	102	102	105	
草本花粉	36	1	0	0	0	0	0	477	358	358	306	263	
不明花粉	2	0	0	0	0	0	0	11	7	8	7	4	
シダ類胞子	110	9	23	6	0	1	2	45	73	64	54	52	
総計(不明を除く)	429	10	23	6	0	1	2	622	544	524	482	420	
その他													
回虫卵	-	-	-	-	-	-	1	79	29	7	8	17	
糞虫卵	-	-	-	-	-	-	-	17	2	2	2	10	
積川吸虫卵	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	

表3. 植物珪酸体分析結果

種 類	試料番号	基本層序						SD59				
		1	2	3	4	5-1	5-2	6	1	2	3	4
イネ科葉部短細胞珪酸体												
イネ族イネ属	79	58	21	26	1	-	-	2	4	3	8	8
キビ族キビ属	3	2	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タケ亜科クマザサ属	27	15	6	21	7	1	1	2	-	5	2	5
タケ亜科ネザサ節	12	6	8	15	2	1	-	1	-	3	1	1
タケ亜科	14	60	48	102	29	-	18	5	9	18	9	15
ヨシ属	4	6	-	4	-	-	-	2	-	1	-	-
ウシクサ族コブナグサ属	-	2	5	2	-	-	-	2	-	-	-	-
ウシクサ族ススキ属	7	4	3	3	-	-	-	2	-	-	2	3
イチゴツナギ亜科オオムギ族	2	5	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-
イチゴツナギ亜科	8	12	4	5	1	-	-	-	-	2	-	-
不明キビ型	9	29	18	29	-	-	-	4	7	3	5	4
不明ヒゲシバ型	3	4	2	2	-	-	-	-	1	1	1	1
不明ダンチク型	7	8	7	6	-	-	-	-	2	2	3	4
イネ科葉身運動細胞珪酸体												
イネ族イネ属	67	50	38	33	-	-	-	42	99	71	108	119
キビ族	2	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タケ亜科クマザサ属	13	19	11	14	10	1	-	2	-	3	3	3
タケ亜科ネザサ節	4	3	5	8	-	-	-	4	-	4	2	3
タケ亜科	14	29	38	36	30	6	17	14	20	15	15	21
ヨシ属	4	6	-	3	-	-	-	4	5	-	6	-
ウシクサ族	8	7	8	5	-	-	-	2	11	5	8	11
不明	12	16	23	19	2	-	-	13	10	13	17	9
合 計												
イネ科葉部短細胞珪酸体	175	211	124	217	40	2	19	20	23	38	31	41
イネ科葉身運動細胞珪酸体	124	132	124	118	42	7	17	81	145	111	159	166
総 計	299	343	248	335	82	9	36	101	168	149	190	207
珪化組織片												
イネ属珪酸体	59	21	13	11	-	-	-	10	28	25	20	16
イネ属短細胞列	41	28	4	6	1	-	-	-	3	1	4	4
イネ族葉部組織片	34	8	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-

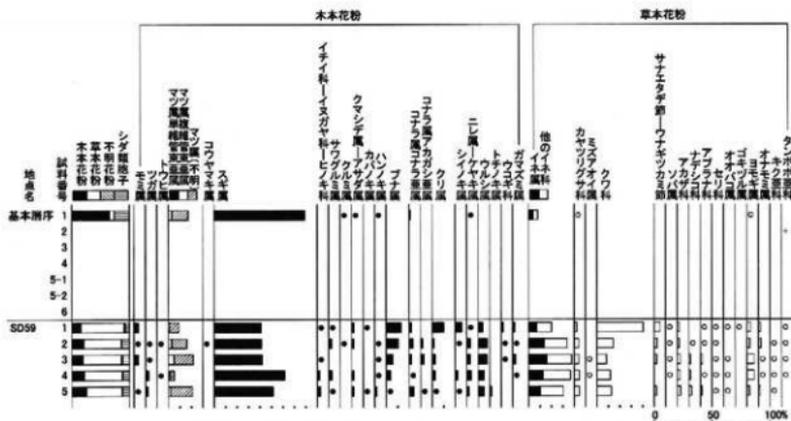


図2. 主要花粉化石群集の層位分布

出現率は、本木花粉は本木花粉化石総数、草本花粉はシダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●は1%未満、+は本木花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

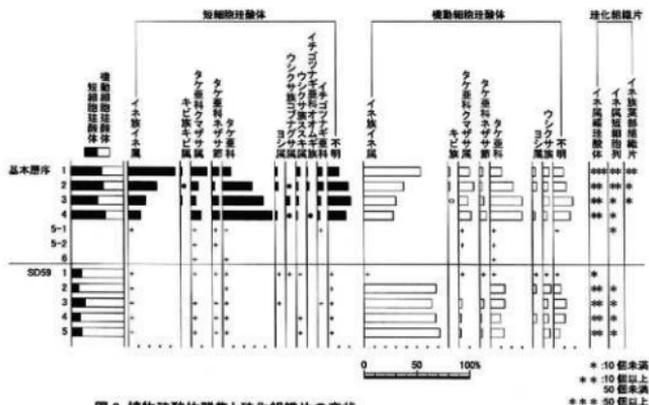
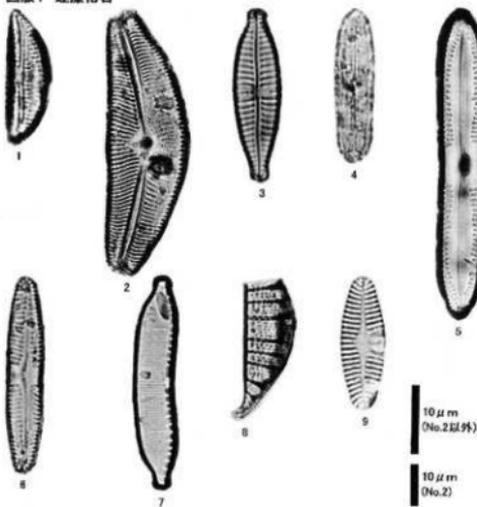


図3. 植物珪酸鹽群集と珪化石の産状

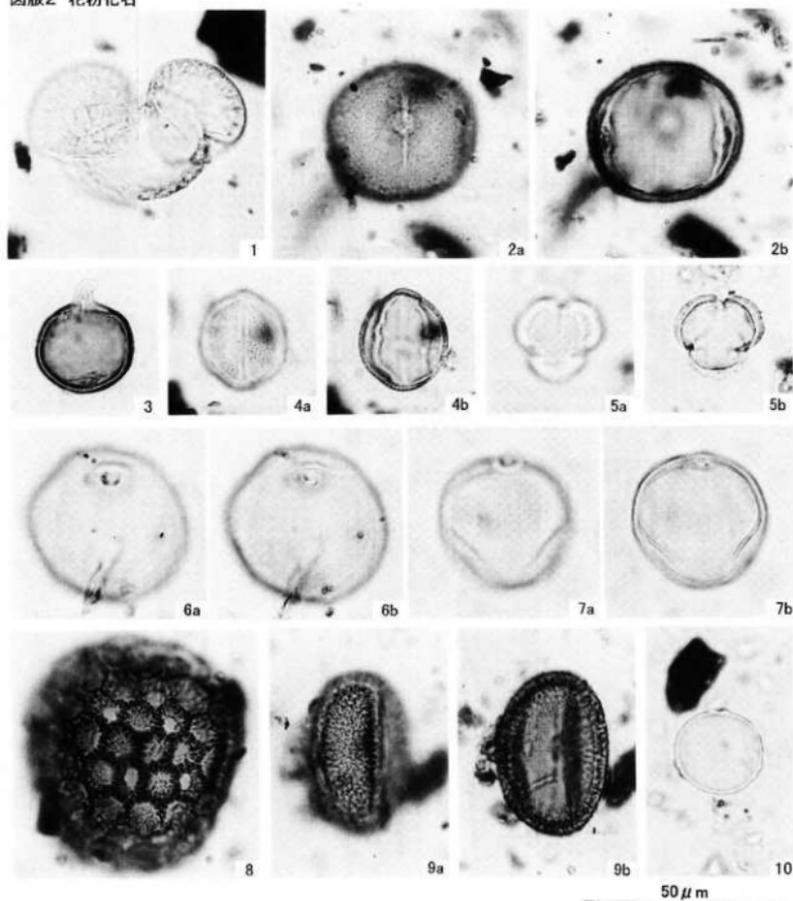
出現率は、イネ科葉部短期矽酸鹽體、イネ科葉部長期矽酸鹽體の総数を基数として百分率で算出した。
なお、●○は1%未満の産状を示す。また、珪化石の産状を+で示す。

図版1 珪化石



1. *Aphora affinis* Kuetzing(基本層序:3)
2. *Cymbella tumida* (Breb. Ex Kuetz.)V. Heurck(基本層序:3)
3. *Gomphonema parvulum* Kuetzing(SD59:1)
4. *Neidium alpinum* Husted(基本層序:1)
5. *Pinnularia schroederii* (Hust.)Kramert(SD50:3)
6. *Pinnularia schoenfelderii* Kramert(基本層序:2)
7. *Hantzschia amphioxys* (Her.)Grunow(基本層序:1)
8. *Rhopalodia gibberula* (Her.)G. Müller(SD59:5)
9. *Actinonethes lanceolata* (Breb.)Grunow(SD59:3)

図版2 花粉化石



1. マツ属(基本層序;1)

3. スギ属(基本層序;1)

5. ヨモギ属(SD59;1)

7. イネ科(SD59;1)

9. ソバ属(SD59;2)

2. ブナ属(SD59;2)

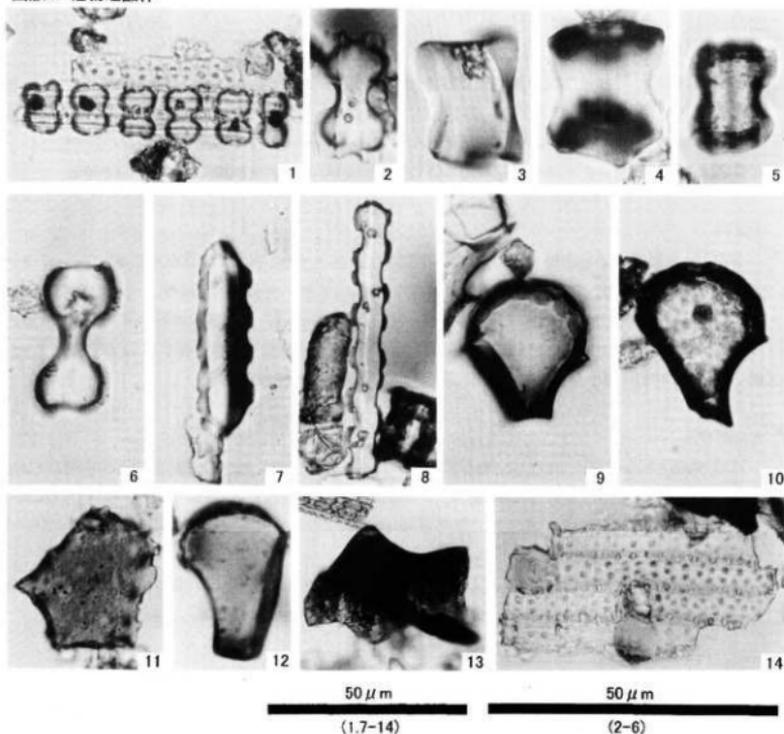
4. ウルシ属(SD59;2)

6. イネ属(SD59;2)

8. サナエタデ属-ウナギツカミ属(SD59;2)

10. クワ科(SD59;1)

図版3 植物珪酸体



- | | |
|--------------------------|---------------------------|
| 1. イネ属短細胞列(基本層序:1) | 2. キビ属短細胞珪酸体(基本層序:2) |
| 3. クマザサ属短細胞珪酸体(基本層序:1) | 4. ネザサ節短細胞珪酸体(基本層序:1) |
| 5. コバナグサ属短細胞珪酸体(基本層序:3) | 6. ススキ属短細胞珪酸体(基本層序:4) |
| 7. オオムギ族短細胞珪酸体(基本層序:1) | 8. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(基本層序:1) |
| 9. イネ属機動細胞珪酸体(基本層序:1) | 10. イネ属機動細胞珪酸体(SD59:5) |
| 11. クマザサ属機動細胞珪酸体(基本層序:1) | 12. ウシクサ族機動細胞珪酸体(基本層序:1) |
| 13. イネ属穎珪酸体(基本層序:1) | 14. イネ族葉部組織片(基本層序:1) |

はじめに

間近遺跡では、古代～中世の溝や掘立柱建物跡等の遺構が検出されている。これらの遺構からは、柱材等の構築材の一部や木製品および埋実遺体等が出土している。これまでに木製品の一部については樹種同定が実施されており、全体的にスギ材の利用が多いが、柱材にはクリが多い傾向が認められている。

本報告では、漆碗等の木製品や柱材について樹種同定を行い、木材利用に関する資料を得る。

1. 試料

試料は、木製品 4 点と柱根 2 点である。このうち、木製品 4 点は、PEG による保存処理と接合・修復が終了した状態であったため、破損部等を利用して目立たないように数mm角の木片を採取した。なお、木製品のうち、R575 は肉眼で木材ではなくヒョウタン類の果皮と推定されたことから、試料採取は行わず、試料の外観観察による同定を行う。柱根は、それぞれ多数の破片に割れており、接合関係等を把握することが困難であったため、明らかに柱根と分かる部位(底面が認識できる破片)から試料を採取した。

2. 分析方法

PEG 処理された試料については、ぬるま湯につけて PEG を溶脱した。その後、剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の 3 断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール(抱水クロラール)、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

遺物番号 R575 については、肉眼および双眼実体顕微鏡下で観察し、形態的特徴を現生標本および原色日本植物種子写真図鑑(石川,1994)、日本植物種子図鑑(中山ほか,2000)等と比較し、種類を同定した。

3. 結果

同定結果を表 1 に示す。遺物番号 R575 を除く木製品と柱根は、針葉樹 1 種類(スギ)と広葉樹 2 種類(クリ・トチノキ)に同定された。また、遺物番号 R575 はヒョウタン類の果皮と同定された。木材各種類の解剖学的特徴とヒョウタン類の外観的特徴を記す。

表1 樹種同定結果

番号	遺構	器種	性状	樹種	備考
R557		木製品(板状)	木材	スギ	板目板
R575		菓皮?	種実	ヒョウタン(果皮)	
R600		木製品(板状)	木材	スギ	板目板
R705	S K08	漆碗	木材	トチノキ	種木取
R659	SB07 No.1	柱根	木材	クリ	
R658	SB07 No.2	柱根	木材	クリ	

・スギ(*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成され、仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔はスギ型で、1 分野に 2-4 個。放射組織は単列、1-15 細胞高。

・クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔部は 2-4 列、孔部外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15 細胞高。

・トチノキ(*Aesculus turbinata* Blume) トチノキ科トチノキ属

散孔材で、管壁は厚く、横断面では角張った楕円形、単独または 2-3 個が複合して散在する。道管は単穿

孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、単列、1-15 細胞高。トチノキの特徴である放射組織での階層状配列は明瞭ではない。

・ヒョウタン類(*Lagenaria siceraria* Standl) ウリ科ヒョウタン属

果実の破片に同定された。頂部破片で浅い碗形、大きさ 7.5-8cm 程度。頂部中央には径 9mm 程度の果柄の着点がある。果皮外面は茶褐色でやや平滑、内面は淡褐色、スポンジ状で果柄着点から放射状に走る維管束の筋が目立つ。断面は楕状で厚さ 6-7mm 程度。

4.考察

木製品のうち、R557 と R600 は共に板目板である。R557 は一方が尖り、3ヶ所に穿孔が認められる。また、R600 は、2ヶ所に木釘が認められる。樹種は、いずれも針葉樹のスギであった。スギは木理が通直で割裂性が高く、加工は容易である。本遺跡では、これまでに行われた木製品の樹種同定でもスギが多く確認されている。とくに板状の木製品では、そのほとんどがスギであり、今回の結果とも調和的である。スギの利用は、割裂性が高く板の製作が容易である材質を利用したことが推定される。また、周辺地域で行われた花粉分析の結果(パリオ・サーヴェイ株式会社,1991)から、低地にスギが広く生育していた可能性があり、入手が容易なことも多く利用された背景の一つとして考えられる。

井戸枠内から出土した漆碗は、樹木の軸方向が碗の横軸方向になる横木取りで、碗の底が柱目となる木取りと考えられるが、碗底の木目は漆塗りのために確認できなかった。漆は内面・外面とも黒色で榎核は認められない。碗底には同心円状の加工痕が認められ、ろくろを使用して成形が行われたことが推定される。樹種は、広葉樹のトチノキであった。トチノキの木材は、気乾比重 0.52 で広葉樹材としては中程度、乾燥による収縮は大きい、加工は容易である。本遺跡では、これまで漆器碗にスギ、ブナ属、ケヤキの3種類が確認されているが、トチノキは確認されていない。ただし、各地で行われた調査では、トチノキはブナ属やケヤキと共に漆器碗によく利用される樹種の一つである。

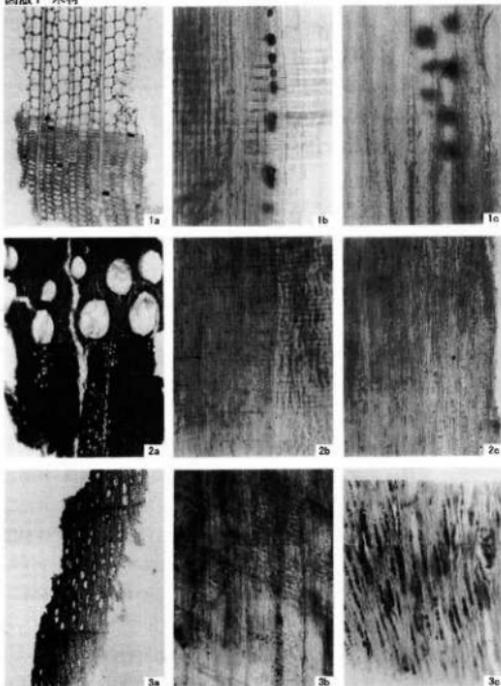
SB07 の柱根は、2点ともクリであった。クリは重硬で強度や耐朽性に優れているが、加工は困難な部類に入る。本遺跡では、古代の掘立柱建物跡から出土した柱材の調査においても全点がクリであり、今回の結果とも調和的である。さらに、本遺跡におけるこれまでの調査では、柱材以外の用途ではクリは全く確認されていないことから、クリが柱材として選択的に利用されていた可能性がある。

R575 はヒョウタン類の果実の破片であった。ヒョウタン類は、栽培植物として大陸より持ち込まれた種類と考えられている。果実は容器などに利用可能であり、本遺跡でも利用されていたと考えられる。本試料は、周辺で栽培されていたものが加工された、または容器などの加工品が搬入されたなどが考えられるが、本遺跡周辺における栽培の有無については今後の検討課題として残される。

引用文献

- 藤下 典之,1984,出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法,古文化財の自然科学的研究,古文化財編集委員会編,同朋舎,638-654.
- 石川 茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑,石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.
- 中山 至大・井之口 希秀・南谷 忠志,2000,日本植物種子図鑑,東北大学出版会,642p.
- パリオ・サーヴェイ株式会社,1991,布目沢東遺跡 自然科学分析報告,「大門町埋蔵文化財調査報告第7集 大門町企業団地内遺跡発掘調査報告(1) 布目沢東遺跡・布目沢北遺跡」,81-118,富山県埋蔵文化財センター・大門町教育委員会.

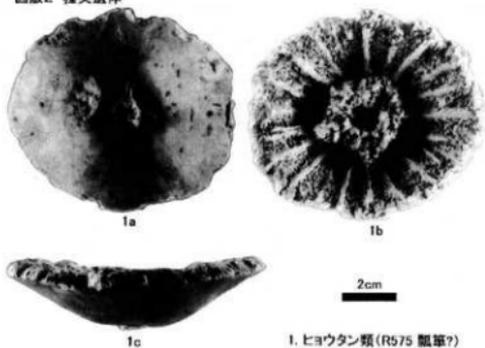
図版1 木材



1. スギ (R557 木製品)
 2. クワ (R654 SD07 No.1)
 3. トチノキ (井戸持内 産物)
 a: 木口, b: 縦目, c: 横目

200 μ m 2.3a
 200 μ m 1a, 2.3b, c
 100 μ m 1b, c

図版2 挿突遺体



1. ヒョウタン類 (R575 瓢箪?)

はじめに

間尺遺跡では、古代～中世の溝や掘立柱建物跡等の遺構が検出されている。これらの遺構からは、柱材等の構築材の一部や木製品等の木質遺物や種実遺体等の植物遺体が出土している。

本報告では、各遺構から出土した木製品の樹種同定を行い、木材利用に関する資料を得る。

1. 試料

試料は、各遺構から出土した木製品 52 点である。このうち、R602 は木釘の付いた板状の製品であるため、本体と木釘の 2 点について樹種同定を行う。したがって、合計点数は 53 点である。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表 1 に記した。

2. 分析方法

剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柃目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作製し、ガム・ウロラル(抱水ウロラル、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入し、プレバートを作製する。作製したプレバートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

3. 結果

樹種同定結果を表 1 に示す。木製品は、針葉樹 3 種類(スギ・ヒノキ・ヒノキ属)と、広葉樹 8 種類(アサダ・ブナ属・ケヤキ・クリ・イヌノキ・サクラ属・ウルシ・アワブキ属)に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・スギ(*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は、仮道管と樹脂細胞で構成され、仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は広い。樹脂細胞は晩材部にのみ認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔はスギ型で、1 分野に 2-4 個。放射組織は単列、1-15 細胞高。

・ヒノキ(*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は、仮道管と樹脂細胞で構成され、仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められるが、顕著ではない。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1 分野に 1-3 個。放射組織は単列、1-15 細胞高。

・ヒノキ属(*Chamaecyparis*) ヒノキ科

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成され、仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はヒノキ型～スギ型と考えられるが、保存が悪い。放射組織は単列、1-15 細胞高。

上記のヒノキまたは同属のサワラと考えられるが、分野壁孔の観察が十分ではないため、種の同定には至らず、ヒノキ属とした。

・アサダ(*Ostrya japonica* Sarg.) カバノキ科アサダ属

散孔材で、管孔は単独または放射方向に 2-4 個が複合して散在し、年輪界付近で径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1-3 細胞幅、1-3 0 細胞高。

表1. 樹種同定結果

R番号	種別	器種	時期	樹種	備考
266	木製品	漆器楕(漆絵描画)		ブナ属	
274	木製品	曲物		スギ	
278	木製品	曲物		ヒノキ属	
279	木製品	曲物		ヒノキ	
280	木製品			ケヤキ	
397	木製品	椀状		アサダ	
531	木製品	漆の木		ウルシ	漆掻き跡
545	木製品			スギ	
545-2	木製品			スギ	
555	木製品	井戸栓		スギ	
558	木製品	板状(細)		スギ	
559	木製品			スギ	
561	木製品	漆器楕		スギ	
570	木製品	木釘付板状(細)		スギ	
571	木製品	木釘付板状(細)		スギ	
572	木製品			スギ	
577	木製品			スギ	
588	木製品	板状(細)		スギ	
591	木製品	板状(細)		スギ	
592	木製品	曲物		スギ	
599	木製品	下駄(差遣?)		スギ	
601	木製品	木釘付板状(細)		スギ	
602	木製品	木釘付板状(細)		スギ	
		木釘		スギ	
605	木製品	曲物(蓋or底)		スギ	
606	木製品	板状		スギ	
608	木製品	板状(細)		スギ	
609	木製品	曲物(蓋or底)		スギ	
613	木製品	楕		イスノキ	
615	木製品			アワブキ属	
616	木製品	杖状?		サクラ属	
641	木製品	柱根	古代	クリ	
642	木製品	柱根	古代	クリ	
643	木製品	柱根	古代	クリ	
644	木製品	柱根	古代	クリ	
645	木製品	柱根	古代	クリ	
646	木製品	柱根	古代	クリ	
647	木製品	柱根	古代	クリ	
653	木製品	板状		スギ	
654	木製品	漆器楕		ケヤキ	
657	木製品	柱根	古代	クリ	
664	木製品			スギ	
668	木製品	柱材		スギ	
669	木製品			スギ	
677	木製品	板状(細)		スギ	
679	木製品	板状(細)		スギ	
680	木製品	漆器楕		ケヤキ	
686	木製品	柱根	古代	クリ	
687	木製品			スギ	
688	木製品	板状		スギ	
691	木製品	板状		スギ	
693	木製品	板状		スギ	
697	木製品	板状		スギ	

・ブナ属(*Fagus*) ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2-3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は対列状~階段状に配列する。放射組織は同性~異性、単列、数細胞高のものから複合放射組織までである。

・クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圈部は1-3列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

・ケヤキ(*Zalkova serrata* (Thunb.) Makino) ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圈部は1-2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-6細胞幅、1-50細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

・イスノキ(*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.) マンサク科イスノキ属

散孔材で、道管はほとんど単独で散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は階段穿孔を有するが、段数は5前後で少ない。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-20細胞高。柔組織は、独立帯状または短接線状で、放射方向にほぼ等間隔に配列する。

・サクラ属(*Prunus*)バラ科

散孔材で、管壁厚は中庸、横断面では角張った楕円形、単独または2-8個が複合して、晩材部へ向かって管径を漸減させながら散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-30細胞高。

道管配列がやや環孔材的で、放射組織が比較的大型となることから、サクラ属の中でも栽培種のウメ等の可能性がある。しかし、現生標本と完全には一致しないため、本報告ではサクラ属とする。

・ウルシ(*Rhus verniciflua* Stokes) ウルシ科ウルシ属

環孔材で、孔圈部は1-5列、孔圏外への移行は緩やかで、小道管は年輪界に向かって漸減しながら単独または2-4個が放射方向に複合して配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-2細胞幅、1~20細胞高で、時に上下に連結する。

・アワブキ属(*Meliosma*)アワブキ科

散孔材で、管孔は単独または2-4個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、階段穿孔の段数は5前後で少ない。壁孔は交互状に配列する。放射組織は大型の異性、1-3細胞幅、1-50細胞高。

4.考察

樹種同定を行った木製品は、古代の掘立柱建物跡の木柱や板材などの構築材、漆器碗、曲物、櫛等があるが、用途の詳細が不明の試料もある。各器種別の種類構成を表2に示す。

古代の木柱は、全てクリであった。他にクリが確認されていないことを考慮すれば、クリ材の選択的な利用が推定される。クリ材は、強度や耐久性に優れていることから、材質を考慮した木材利用と考えられる。

一方、その他の木製品では、井戸枠、板状、曲物、下駄等にスギ材が多用されている。スギ材が利用されている製品の多くは、板状あるいは角材状等の加工を施す点で共通点がある。スギ材は、木理が通直で割裂性が高く、板材や角材等への加工が容易である。このようなスギ材の加工性が利用された背景に考えられる。また、スギは水湿に富んだ土地を好む種類であり、富山県内では現在でも入善町にスギの低地林(杉沢の沢杉)が残っている。このようなスギ林は、花粉分析の結果等から、縄文時代以降、低地に広く生育していたことが推定される(パリノ・サーヴェイ株式会社,1991)。スギ材の入手が容易な環境も、多用されている背景に考えられる。

一方、漆器碗は4点中3点が広葉樹でブナ属とケヤキが確認された。ブナ属とケヤキは、漆器木地とし

ては最も一般的な種類であり、これまでも多くの報告例が知られている(島地・伊東,1988)。これらの樹種は、現在でも漆器木地としてよく利用される種類でもある(橋本,1979)。民俗事例では、木材をいくつかに分類しており、ブナ属は散孔材のブナ・トチノキ系、ケヤキは環孔材のケヤキ系の木材に分類される。ブナ・トチノキ系の木材の特徴は、加工は容易であるが、乾燥が難しく変形しやすい。しかし、入手量が多いため、使用量も多いとされる。一方、ケヤキ系の木材は、重硬であるが韌性があり、薄手物に適するとされる。このような材質の違いは、漆器の形状に影響を与える他、製作に要する時間や漆器のランクにも関わっている可能性がある。しかし、現時点では樹種と器形やランクとの関係については不明な点が多い。漆器では、漆塗りの技法もランクによって異なることから、今後漆塗断面の観察も行い、総合的に検討したい。

櫛は、イヌノキであった。同様の事例は、これまでも多く報告されており、北陸地方でも新潟県曾根遺跡で出土例がある(川村,1983;島地・伊東,1988)。民俗事例では、ツゲに次ぐ良材とされており、硬く緻密な材質が櫛の細かい加工に適していることから利用されたと考えられる。なお、イヌノキは、暖温帯常緑広葉樹林を構成する常緑広葉樹で九州を中心に分布しており、現在の富山県には生育していない。そのため、イヌノキが生育している西日本(主に九州)から櫛あるいは木材が搬入された可能性がある。

漆の木には、漆の樹液を掻き取った痕跡が残されていた。日本に生育するウルシ属には、いくつかの種類があるが、商業的にまかなえる量の樹液を採取できるのはウルシのみである。今回の樹種もウルシであり、本遺跡でウルシ樹液の採取が行われ、採取後の木材を何らかの用途に利用したことが推定される。ウルシは、中国原産で日本には古い時期に渡来した可能性が指摘されているが、実際に渡来なのか自生していたのか、また渡来したとすればいつ頃なのか等の詳細は明らかにされていない。しかし、各地の縄文時代の遺跡から漆塗り製品が出土しており、少なくとも縄文時代にはウルシが存在しており、その樹液を塗料として利用していたことが推定される。ウルシの利用については、今後さらに調査事例を蓄積していくことにより、明らかにしたい。

櫛は、イヌノキであった。同様の事例は、これまでも多く報告されており、北陸地方でも新潟県曾根遺跡で出土例がある(川村,1983;島地・伊東,1988)。民俗事例では、ツゲに次ぐ良材とされており、硬く緻密な材質が櫛の細かい加工に適していることから利用されたと考えられる。なお、イヌノキは、暖温帯常緑広葉樹林を構成する常緑広葉樹で九州を中心に分布しており、現在の富山県には生育していない。そのため、イヌノキが生育している西日本(主に九州)から櫛あるいは木材が搬入された可能性がある。

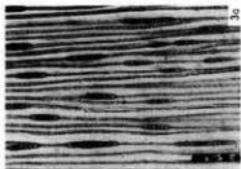
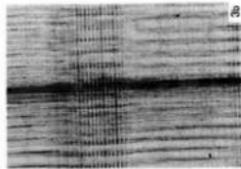
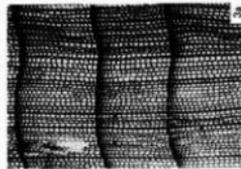
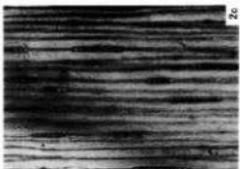
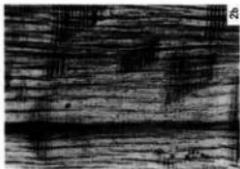
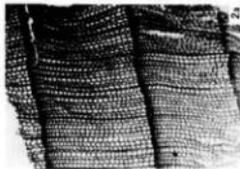
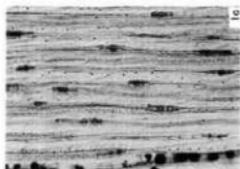
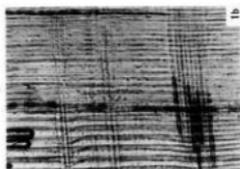
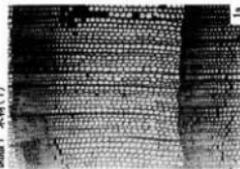
引用文献

- 橋本 鉄男,1979,ろくろ(ものと人間の文化史31),法政大学出版局,444p.
 川村 恵洋,1983,曾根遺跡出土木材の識別,新大演報,16, 75-82.
 パリノ・サーヴェイ株式会社,1991,布目沢東遺跡 自然科学分析報告,「大門町埋蔵文化財調査報告第7集 大門町企業団地内遺跡発掘調査報告(1) 布目沢東遺跡-布目沢北遺跡」,81-118,富山県埋蔵文化財センター・大門町教育委員会.
 島地 謙・伊東 隆夫(編),1988,日本の遺跡出土木製品総覧,雄山閣,296p.

表2 器種別種類構成

時期・器種	樹種										合計	
	スギ	ヒノキ	ヒノキ属	アサダ	ブナ属	クリ	ケヤキ	イヌノキ	サクラ属	ウルシ		アワブキ属
古代	柱根										9	
	井戸栓	1										1
	漆器櫛	1			1		2					4
	曲物	蓋or底		2								2
		曲物		2	1	1						4
	枳状				1							1
	櫛						1					1
	下駄(差遣?)	1										1
	木釘付板状(細)	本体		4								4
		木釘		1								1
	板状	6										6
	板状(細)	6										6
	枳状?							1				1
	柱材	1										1
	漆の木								1	1		2
	用途不明	8					1					10
	合計	33	1	1	1	1	9	3	1	1	1	53

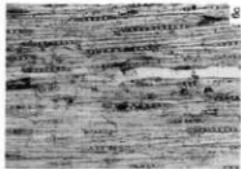
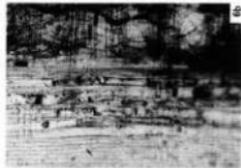
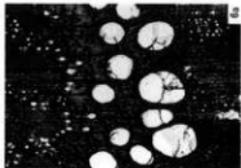
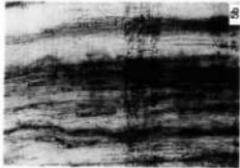
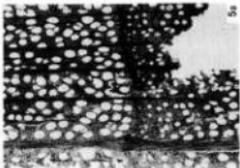
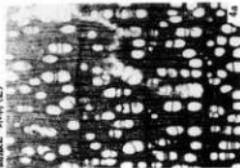
図版1 木材(1)



1. 大杉 (R581)
2. レノ (O278)
3. レノ (O270)
a. 木口, b. 年輪, c. 板目

200 μ m
200 μ mb.c

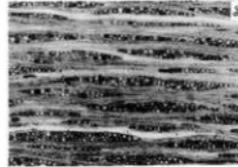
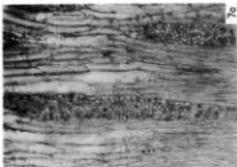
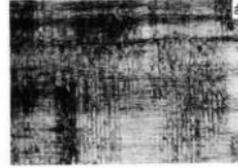
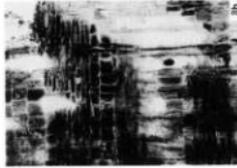
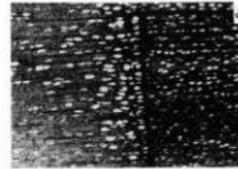
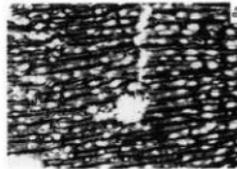
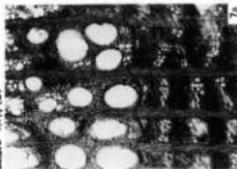
図版2 木材(2)



4. マチノ (O297)
5. マチノ (O216)
6. マチノ (O270)
a. 木口, b. 年輪, c. 板目

200 μ m
200 μ mb.c

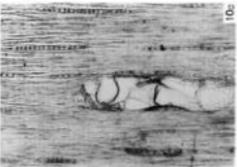
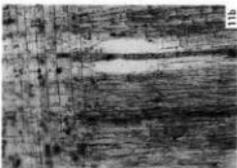
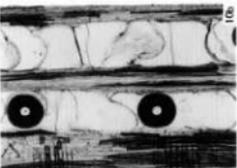
図版3 木材(3)



7. カウリキ (7090)
8. カウリキ (7090)
9. カウリキ (7090)
a: 本口, b: 縦目, c: 横目

200 μ m
200 μ m

図版4 木材(4)



10. アウラキウ (8015)
11. アウラキウ (8015)
a: 本口, b: 縦目, c: 横目

200 μ m
200 μ m

はじめに

高岡市の間込遺跡では、古代～中世の溝や掘立柱建物跡等の遺構およびそれに伴う多くの遺物が検出されている。今回の自然科学分析調査では、古代～中世と考えられる溝(SD59)などから検出された種実遺体・昆虫遺体の同定を行い、当時の古環境に関する情報を得る。

1. 試料

種実同定用試料は、SD59 R655、SD59 R656、SD59 R684、SB07 R652(No.3 柱穴内)、SR01 R417 の5点である。昆虫同定用試料は、SD59 R546、SD59 R656、SD59 R685 の3点である。1点中には数個体～数十個体の昆虫が入っている。昆虫遺体については、便宜上各個体ごとに試料番号1～100を付し、分析調査を進めた。

2. 分析方法

(1) 種実同定

種実遺体の形態的特徴を所有の現生標本および原色日本植物種子写真図鑑(石川, 1994)、日本植物種子図鑑(中山ほか, 2000)等と比較し、種類を同定・計数した。同定後の大型植物遺体等は、種類毎にビンに入れ、70%程度のエタノール溶液による液浸保存処理を施す。

(2) 昆虫同定

昆虫遺体は、泥などを洗い流したあと、1片づつ瓶にいれ、液浸処理を施す。それぞれについて、形態的特徴をもとに種類を同定する。同定に関しては、東京農業大学農学部昆虫資源学研究室の松本 浩一氏の協力を得た。

3. 結果

(1) 種実同定

種実遺体結果を表1に示す。種実遺体の遺存状態は比較的良好である。木本2種類(広葉樹のクリ、モモ)、草本10種類(カナムグラ、ナス科、メロン類)の種実が同定された。以下に同定された大型植物遺体の形態的特徴などを、木本、草本、不明植物の順に記す。

<木本>

・クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

果実破片が同定された。灰褐色。完形ならば三角状広卵形、一側面は偏平で反対面はわずかに丸みがある。大きな破片で20mm程度。果皮表面は平滑で、ごく浅く微細な縦筋がある。内面には内果皮(いわゆる渋皮)がある。着点は灰褐色で基部の全面を占め、ざらつく。基部に着点の一部が残る点を同定根拠とした。

・モモ(*Prunus persica* Batsch) バラ科サクラ属

核(内果皮)の完形、破片が同定された。茶褐色、広楕円形でやや偏平。先端部はやや尖る。基部は切形で中央部に溝入した跡がある。長さ25mm、幅20mm、厚さ15mm程度。一方の側面に縫合線が発達し、縫合線

表1. 種実同定結果

試料名	種類名	木本		草本		
		クリ	モモ	カナムグラ	メロン類	
		部位	果実	核	種子	種子
	状態	破片	完形	破片		
SD59	R655	1	-	-	1	1
SD59	R656	-	-	-	7	8
SD59	R684	-	-	-	4	-
SB07	R652	-	-	1	-	-
SR01	R417	-	2	4	-	-

に沿って半分に割れている個体もみられる(SB07 R652)。また、縫合線上に齧歯類(ネズミなど)によると考えられる食害痕が認められるものが認められる(SR01 R417)。内果皮は厚く硬く、表面は縦に流れる不規則な線状の深い窪みがあり、全体として粗いしわ状に見える。表面が磨滅した個体もみられる(SR01 R417)。

<草本>

・カナムグラ(*Humulus japonicus* Sieb. et Zucc.) クワ科カラハナソウ属

種子が同定された。果皮が付着する個体もみられる。灰~黒褐色で側面観は円形、上面観は両凸レンズ形。径4mm、厚さ1mm程度。頂部はやや尖り、縦方向に一周年する稜と、基部には淡黄褐色でハート形の臍点がある。種皮は薄く、表面はざらつく。

・ナス科(Solanaceae)

種子が同定された。淡褐色、歪な腎臓形で扁平。径2.5mm程度。種皮は薄く柔らかい。側面のくびれた部分に臍があり、表面は臍を中心として同心円状に星状網目模様が発達する。網目模様は微細で網目を構成する壁の幅は太くしっかりしている。

・メロン類(*Cucumis melo* L.) ウリ科キュウリ属

種子が同定された。淡灰褐色、狭倒皮針形で扁平。長さ6~10mm、幅3~4mm程度。基部に倒「ハ」の字形の凹みがある。表面は比較的平滑で、縦長の細胞が密に配列する。藤下(1984)の基準によると、本遺跡出土のメロン類には、マクワ・シロウリ型の中粒種子(長さ6.1~8.0mm)や、大粒のモモルディカメロン型(長さ8.1mm以上)などの混在がみられる。

(2)昆虫同定

結果を表2に示す。検出された種類のうち、種や属まで同定できたものは次の種類である。

ガムシ科ではヒメガムシ(*Stenolophus rufipes* (Fabricius))が検出される。コガネムシ科では、エンマコガネ属の一種(*Onthophagus* sp.)、クロマルエンマコガネ(*Onthophagus ater* Waterhouse)、コブマルエンマコガネ(*Onthophagus atripennis* Waterhouse)、マメコガネ(*Popillia japonica* Newmann)、ヒメコガネ(*Anomala rufocuprea* Motschulsky)、ヒメサクラコガネ(*Anomala geniculata* Motschulsky)、コアオハナムグリ(*Oxycetonia jucunda* (Faldermann))、ハナムグリ(*Eucetonia pilifera* (Motschulsky))、ハナムグリ属の一種(*Protaetia* sp.)が検出され、多くの種類、個数が得られている。ゴミムシダマシ科では、キマワリ(*Plesiophthalmus nigrocyaneus* Motschulsky)が検出される。ハムシ科ではヨモギハムシ(*Chrysolina aurichalcea*)が検出される。アリ科ではクロオオアリ(*Camponotus japonicus* Mayr)が検出されている。

表2. 昆虫同定結果

種類	主な出土部位	R546	R656	R685
ヒメガムシ <i>Stenolophus rufipes</i> (Fabricius)	上翅	-	2	-
エンマコガネ属の一種 <i>Onthophagus</i> sp.	腹部腹板 後脚	-	2	3
クロマルエンマコガネ <i>Onthophagus ater</i> Waterhouse	上翅 頭部 後脚	-	5	2
コブマルエンマコガネ <i>Onthophagus atripennis</i> Waterhouse	前胸・前脚	-	-	1
マメコガネ <i>Popillia japonica</i> Newmann	上翅	-	1	-
ヒメコガネ <i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky	上翅 後脚 小盾板	2	18	3
ヒメサクラコガネ <i>Anomala geniculata</i> Motschulsky	前胸背板 上翅	-	6	1
コアオハナムグリ <i>Oxycetonia jucunda</i> (Faldermann)	上翅	-	2	-
ハナムグリ <i>Eucetonia pilifera</i> (Motschulsky)	上翅 前翅	-	2	-
ハナムグリ属の一種 <i>Protaetia</i> sp.	上翅	-	1	-
コガネムシ科 Scarabaeidae	後翅 上翅 前胸	1	17	3
キマワリ <i>Plesiophthalmus nigrocyaneus</i> Motschulsky	上翅	-	1	-
ヨモギハムシ <i>Chrysolina aurichalcea</i>	上翅	-	1	-
クロオオアリ <i>Camponotus japonicus</i> Mayr	頭部	-	1	-
甲虫目 Coleoptera	腹部腹板 前胸腹板	-	6	-
不明		1	11	6

4.考察

検出された種実遺体には、有用植物が認められる。モモ、メロン類は、栽培のために古くから日本に持ち込まれた渡来種である(南木, 1991)。モモは、観賞用のほか、果実や核の中にある仁(種子)などが食用、薬用等に広く利用される。メロン類は果実が食用に利用可能である。クリは付近に自生していたものに由来すると考えられるが、子葉が生食・長期保存が可能で収量も多いことから、古くから里山で保護されてきた種類である。カナムグラやナス科の一部は、人里近くに開けた草地を形成する、いわゆる人里植物に属する種類で、流路周辺に生育していたものとみられる。

昆虫化石をみると、水棲昆虫のヒメガムシは沼沢地や沼地などに生育する種類である。遺跡の立地環境が低地で、本試料が溝から検出されていることから、周辺の水湿地や溝内に生育していたものに由来すると思われる。その他、木や草の葉を食べるマメコガネ・ヒメコガネ・ヨモギハムシ、動物の糞や腐敗物に集まるクロマルエンマコガネやコプマルエンマコガネ、花に集まり花粉などを食べるハナムグリやコアオハナムグリ、朽木などに集まるキマワリなどが検出される。これらは雑木林やその周辺の草地などに普通にみられる種類である。このことから、遺跡周辺には、明るい林地や草地、その境界付近に発達する低木等からなる林縁部が存在し、これらの昆虫はこういった場所に生育していたものと思われる。

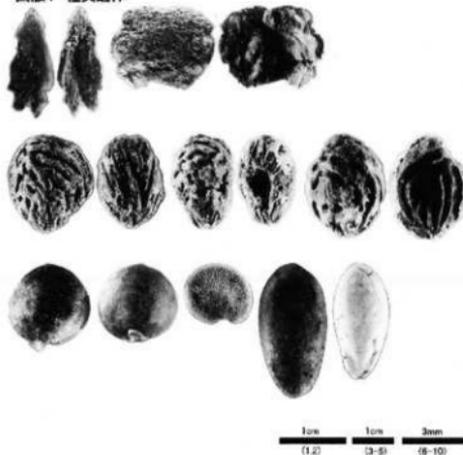
引用文献

石川茂雄(1994)原色日本植物種子写真図鑑, 328p., 石川茂雄図鑑刊行委員会.

南木陸彦(1991)栽培植物。「古墳時代の研究 4 生産と流通 I」, 石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎編, p.165-174, 雄山閣.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志(2000)日本植物種子図鑑, 642p., 東北大学出版会.

図版1 種実遺体



1. クリ 果実(S059 R886)
2. モモ 核(SR01 R417)
3. モモ 核(SR01 R417)
4. カナムグラ 種子(S059 R856)
5. ナス科 種子(S059 R856)
6. メロン類 種子(S059 R856)

7. クリ 果実(S059 R855)
8. キマワリ 核(SR01 R417)
9. カナムグラ 果実(S059 R856)
10. ナス科 種子(S059 R856)

年代測定結果報告書

- 1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用しています。
- 2) BP 年代値は、1950 年からさかのぼること何年前かを表しています。
- 3) 付記した誤差は、標準偏差 (1 σ) に相当する年代で、次のように算出しています。
複数回 (通常は 4 回) の測定値について χ^2 検定を行い、測定値のばらつきが小さい場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、ばらつきが大きい場合には不偏分散の平方根 (標準偏差) と統計誤差から求めた値を比較して大きい方を誤差としています。
- 4) $\delta^{13}\text{C}$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定しますが、AMS 測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いることもあります。
 $\delta^{13}\text{C}$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載しておきます。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差 (‰; パーミル) で表したものです。

$$\delta^{14}\text{C} = [(^{14}\text{As} - ^{14}\text{Ar}) / ^{14}\text{Ar}] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}\text{C} = [(^{13}\text{As} - ^{13}\text{APDB}) / ^{13}\text{APDB}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、
 ^{14}As : 試料炭素の ^{14}C 濃度: ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$)_S または ($^{14}\text{C}/^{13}\text{C}$)_S
 ^{14}Ar : 標準現代炭素の ^{14}C 濃度: ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$)_R または ($^{14}\text{C}/^{13}\text{C}$)_R

$\delta^{13}\text{C}$ は、質量分析計を用いて試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{As} = ^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、PDB (白亜紀のベレムナイト (矢石) 類の化石) の値を基準として、それからのずれを計算します。

但し、IAA では加速器により測定中に同時に $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ も測定していますので、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}\text{C}$ を用いることもあります。この場合には表中に (加速器) と注記します。

また、 $\Delta^{14}\text{C}$ は、試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0$ (‰) であるとしたときの ^{14}C 濃度 (^{14}AN) に換算した上で計算した値です。(1) 式の ^{14}C 濃度を、 $\delta^{13}\text{C}$ の測定値をもとに次式のように換算します。

$$^{14}\text{AN} = ^{14}\text{As} \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000))^2 \quad (^{14}\text{As} \text{ として } ^{14}\text{C}/^{12}\text{C} \text{ を使用するとき})$$

または

$$= ^{14}\text{As} \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000)) \quad (^{14}\text{As} \text{ として } ^{14}\text{C}/^{13}\text{C} \text{ を使用するとき})$$

$$\Delta^{14}\text{C} = [(^{14}\text{AN} - ^{14}\text{AR}) / ^{14}\text{AR}] \times 1000 \quad (\text{‰})$$

また、 ^{14}C 濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC (percent Modern Carbon) がよく使われており、 $\Delta^{14}\text{C}$ との関係は次のようになります。

$$\Delta^{14}\text{C} = (\text{pMC} / 100 - 1) \times 1000 \quad (\text{‰})$$

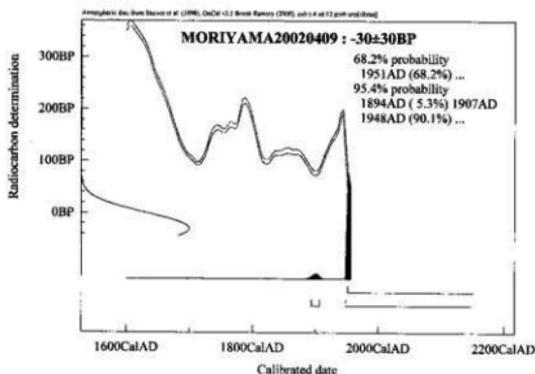
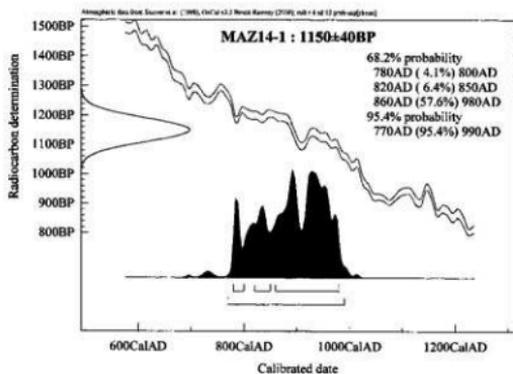
$$\text{pMC} = \Delta^{14}\text{C} / 10 + 100 \quad (\%)$$

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{14}\text{C}$ あるいは pMC により、放射性炭素年代 (Conventional Radiocarbon Age; yrBP) が次のように計算されます。

$$T = -8033 \times \ln [(\Delta^{14}\text{C} / 1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln (\text{pMC} / 100)$$

IAA Code No.	試料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA-11551	試料採取場所 : 高岡市手洗野字平田 試料形態 : 漆 試料名(番号) : MAZ14-1	Libby Age (yrBP) : 1,150 ± 40 $\delta^{13}\text{C}$ (‰) [加速器] = -31.03 ± 1.18 $\Delta^{14}\text{C}$ (‰) = -133.0 ± 4 pMC (%) = 86.70 ± 0.4
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) = -138.4 ± 3.8 pMC (%) = 86.16 ± 0.38 Age (yrBP) : 1,200 ± 40
IAAA-11552	試料採取(場所) : 高岡市二上 大字下八ヶ字千疊敷 試料形態 : 木炭 試料名(番号) : MORIYAMA20020409	LibbyAge (yrBP) : -30 ± 30 $\delta^{13}\text{C}$ (‰) [加速器] = -29.04 ± 1.09 $\Delta^{14}\text{C}$ (‰) = 3.3 ± 3.1 pMC (%) = 100.33 ± 0.31
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) = -0.9 ± 2.9 pMC (%) = 99.91 ± 0.29 Age (yrBP) : 10 ± 20

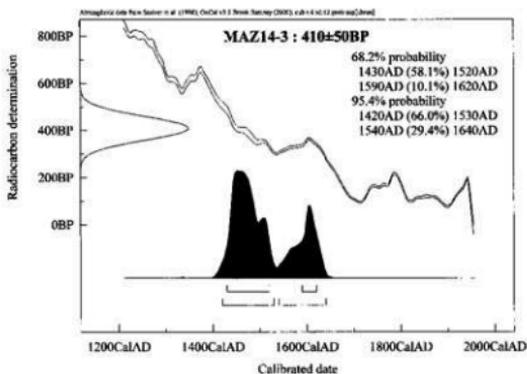
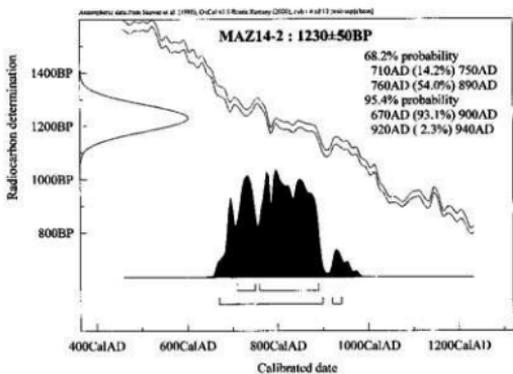


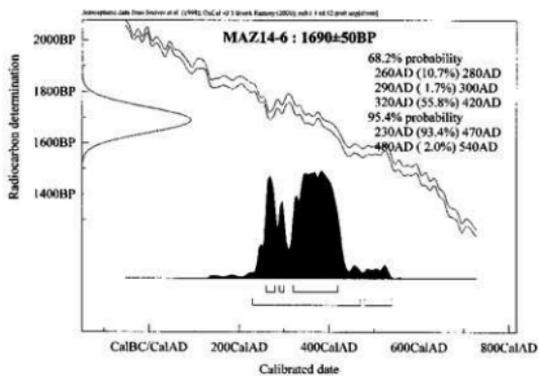
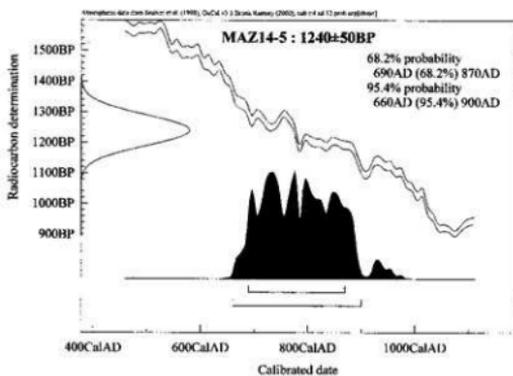
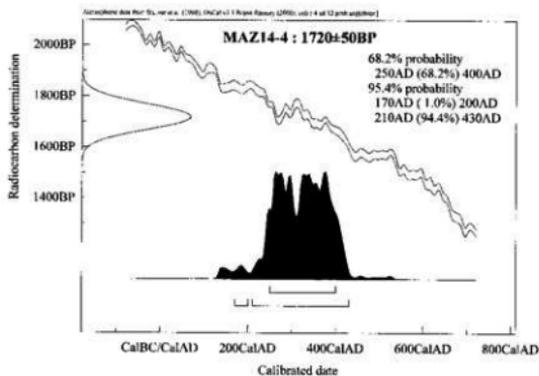
Code No.	試料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA-30311	試料採取場所：高岡市手洗野字平田 試料形態：漆 試料名(番号)：MAZ14-2	Libby Age (yrBP) : 1,230 ± 50 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -22.54 ± 1.52 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -142.0 ± 5.0 pMC(%) = 85.80 ± 0.50
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -137.7 ± 4.3 pMC(%) = 86.23 ± 0.43 Age (yrBP) : 1,190 ± 40
IAAA-30312	試料採取場所：高岡市手洗野字平田 試料形態：木炭 試料名(番号)：MAZ14-3	Libby Age (yrBP) : 410 ± 50 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -24.67 ± 1.48 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -50.0 ± 5.7 pMC(%) = 95.00 ± 0.57
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -49.4 ± 5.0 pMC(%) = 95.06 ± 0.50 Age (yrBP) : 410 ± 40
IAAA-30313	試料採取場所：高岡市手洗野字平田 試料形態：木炭 試料名(番号)：MAZ14-4	Libby Age (yrBP) : 1,720 ± 50 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -25.25 ± 1.77 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -192.8 ± 5.2 pMC(%) = 80.72 ± 0.52
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -193.2 ± 4.3 pMC(%) = 80.68 ± 0.43 Age (yrBP) : 1,720 ± 40
IAAA-30314	試料採取場所：高岡市手洗野字平田 試料形態：漆 試料名(番号)：MAZ14-5	Libby Age (yrBP) : 1,240 ± 50 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -22.79 ± 1.49 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -143.0 ± 5.2 pMC(%) = 85.70 ± 0.52
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -139.1 ± 4.5 pMC(%) = 86.09 ± 0.45 Age (yrBP) : 1,200 ± 40
IAAA-30315	試料採取場所：高岡市手洗野字平田 試料形態：木炭 試料名(番号)：MAZ14-6	Libby Age (yrBP) : 1,690 ± 50 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -13.84 ± 1.47 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -189.9 ± 4.7 pMC(%) = 81.01 ± 0.47
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -171.3 ± 4.2 pMC(%) = 82.87 ± 0.42 Age (yrBP) : 1,510 ± 40

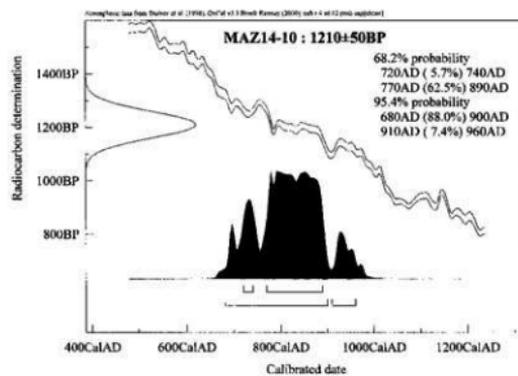
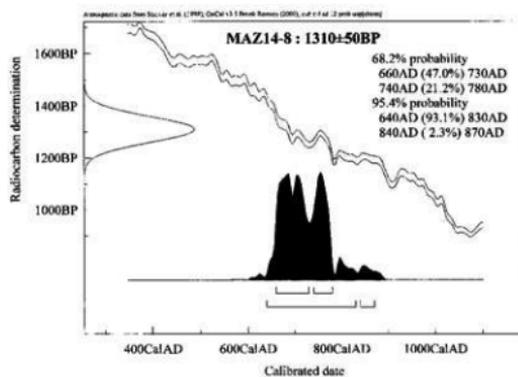
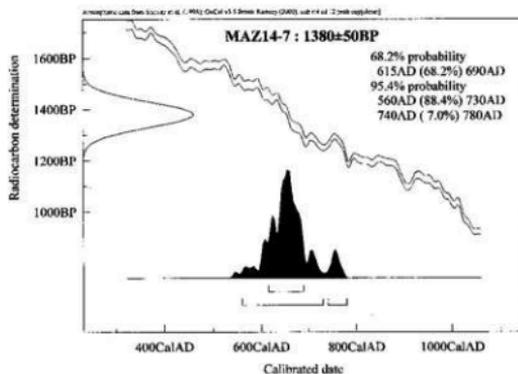
IAAA-30316	試料採取場所 : 高岡市手洗野字平田	Libby Age (yrBP) : 1,380 ± 50 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -18.80 ± 1.80 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -157.5 ± 5.6 pMC (%) = 84.25 ± 0.56
	試料形態 : 木炭 試料名(番号) : MAZ14-7	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -146.8 ± 4.8 pMC (%) = 85.32 ± 0.48 Age (yrBP) : 1,270 ± 50
IAAA-30317	試料採取場所 : 高岡市手洗野字平田	Libby Age (yrBP) : 1,310 ± 50 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -25.60 ± 1.56 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -150.3 ± 5.1 pMC (%) = 84.97 ± 0.51
	試料形態 : 木炭 試料名(番号) : MAZ14-8	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -151.3 ± 4.3 pMC (%) = 84.87 ± 0.43 Age (yrBP) : 1,320 ± 40
IAAA-30318	試料採取場所 : 高岡市手洗野字平田	Libby Age (yrBP) : 1,210 ± 50 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -31.08 ± 1.57 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -139.3 ± 5.4 pMC (%) = 86.07 ± 0.54
	試料形態 : 漆 試料名(番号) : MAZ14-10	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -150.0 ± 4.6 pMC (%) = 85.00 ± 0.46 Age (yrBP) : 1,310 ± 40
IAAA-30319	試料採取場所 : 高岡市手洗野字平田	Libby Age (yrBP) : 60 ± 50 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -28.60 ± 1.78 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -6.9 ± 6.5 pMC (%) = 99.31 ± 0.65
	試料形態 : 漆樹液 試料名(番号) : MAZ14-12	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -14.3 ± 5.3 pMC (%) = 98.57 ± 0.53 Age (yrBP) : 120 ± 40
IAAA-30320	試料採取場所 : 高岡市手洗野字平田	Libby Age (yrBP) : 160 ± 50 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -19.63 ± 1.70 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -20.1 ± 6.1 pMC (%) = 97.99 ± 0.61
	試料形態 : 漆樹液 試料名(番号) : MAZ14-13	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -9.3 ± 5.2 pMC (%) = 99.07 ± 0.52 Age (yrBP) : 70 ± 40
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	

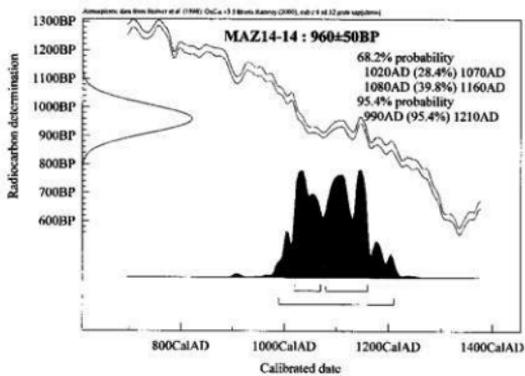
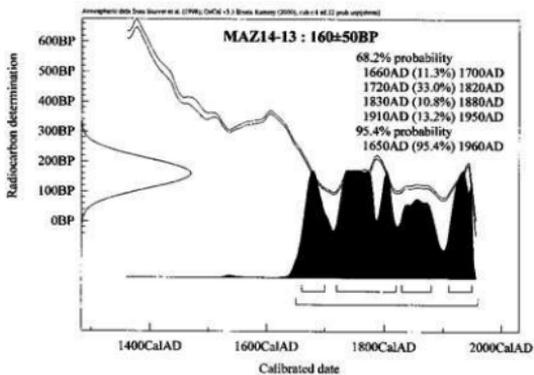
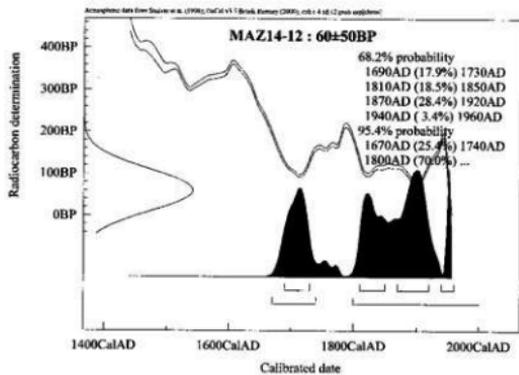
IAAA-30321	試料採取場所 : 高岡市手洗野字平田	Libby Age (yrBP) : 960 ± 50
	試料形態 : 種子 試料名(番号) : MAZ14-14	$\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -21.50 ± 1.79 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -112.4 ± 5.8 pMC(%) = 88.76 ± 0.58
(参考)	$\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -106.0 ± 4.8 pMC(%) = 89.40 ± 0.48 Age (yrBP) : 900 ± 40
IAAA-30322	試料採取場所 : 高岡市手洗野字平田	Libby Age (yrBP) : 880 ± 60
	試料形態 : 漆 試料名(番号) : MAZ14-15	$\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -27.70 ± 1.92 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -104.1 ± 6.1 pMC(%) = 89.59 ± 0.61
(参考)	$\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -109.1 ± 4.9 pMC(%) = 89.09 ± 0.49 Age (yrBP) : 930 ± 50
IAAA-30323	試料採取場所 : 高岡市手洗野字平田	Libby Age (yrBP) : 1,280 ± 50
	試料形態 : 漆 試料名(番号) : MAZ14-16	$\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -24.77 ± 1.60 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -147.5 ± 5.4 pMC(%) = 85.25 ± 0.54
(参考)	$\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -147.1 ± 4.6 pMC(%) = 85.29 ± 0.46 Age (yrBP) : 1,280 ± 40
IAAA-30324	試料採取場所 : 高岡市手洗野字平田	Libby Age (yrBP) : 1,260 ± 50
	試料形態 : 漆 試料名(番号) : MAZ14-17	$\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -26.59 ± 1.43 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -145.5 ± 5.2 pMC(%) = 85.45 ± 0.52
(参考)	$\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -148.3 ± 4.6 pMC(%) = 85.17 ± 0.46 Age (yrBP) : 1,290 ± 40
IAAA-30325	試料採取場所 : 高岡市手洗野字平田	Libby Age (yrBP) : 570 ± 50
	試料形態 : 漆 試料名(番号) : MAZ14-18	$\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -23.49 ± 1.53 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -68.4 ± 5.6 pMC(%) = 93.16 ± 0.56
(参考)	$\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -65.6 ± 4.8 pMC(%) = 93.44 ± 0.48 Age (yrBP) : 540 ± 40

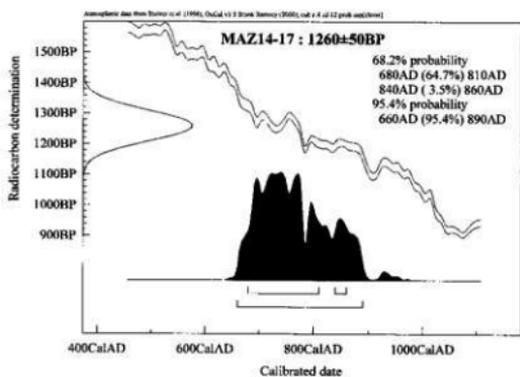
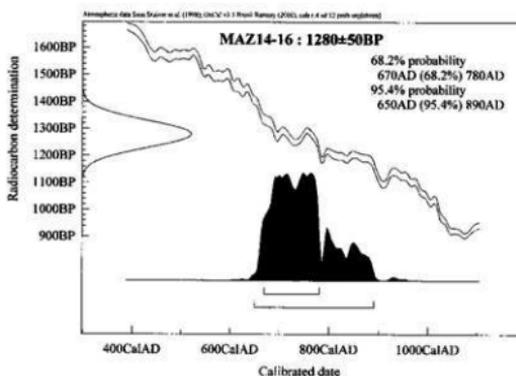
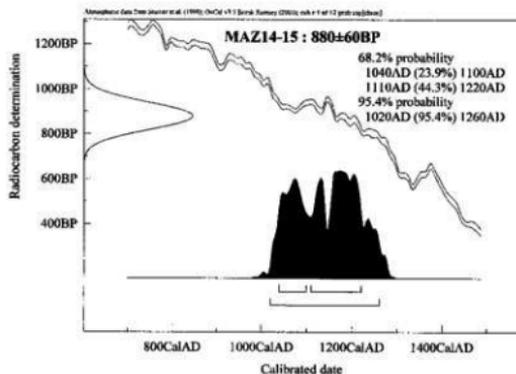
IAAA-30326	試料採取場所 : 高岡市手洗野字平田	Libby Age (yrBP) : 880 ± 50
	試料形態 : 漆	$\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -23.61 ± 1.46
	試料名(番号) : MAZ14-19	$\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -104.1 ± 5.3
		pMC (%) = 89.59 ± 0.53
(参考)	$\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -101.6 ± 4.6
		pMC (%) = 89.84 ± 0.46
		Age (yrBP) : 860 ± 40

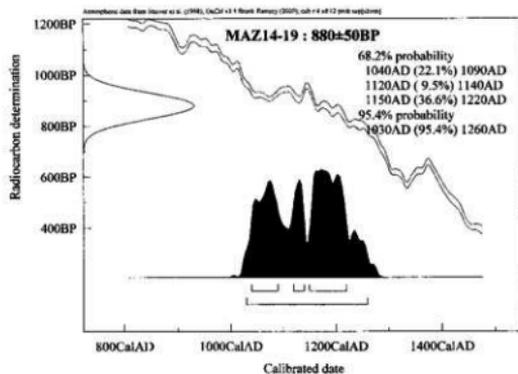
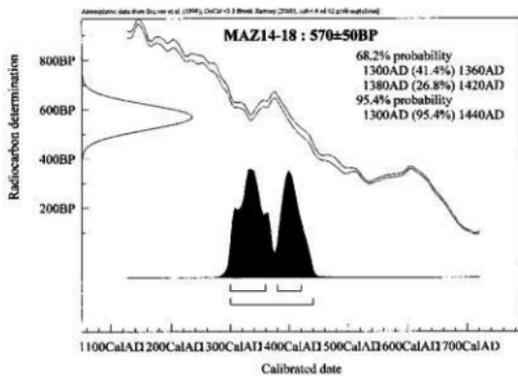












間尺遺跡出土の種実遺体

中村 亮仁

1. 試料と処理方法

間尺遺跡は富山県高岡市に所在する集落遺跡である。遺跡の主体となる時期は古代から中世で、掘立柱建物・土抗・溝などが多数検出されており、集落の様相が確認された貴重な例となっている。

今回取り扱った試料は、大きく分けて2種類ある。1つは発掘調査中に現地で直接拾い上げられた、比較的大きい試料(種実遺体)6点と、もう1つは溝SD59内の覆土から得られた堆積物1点である。堆積物については塊状で採取されており、黒褐色有機質細～中粒砂である。試料採取はいずれも高岡市教育委員会がおこない、筆者はその後の処理を行った。堆積物の試料については8000ccをオープニング1.0mmの篩で水洗選別し、そのうちの100ccについては更にオープニング0.25mmの篩を用いて水洗を行った。これら篩の上に残った堆積物を双眼実体顕微鏡下で精査し、同定可能な種実遺体を選別し、拾い上げた。選び出された種実遺体を分類・同定し、分類群ごとに個体数を数えた。同定に際しては主に現生標本との対比で行った。

2. 結果

同定の結果、検出された分類群は木本8、木本と草本を含む2、草本38の計48分類群であった。結果は表1と表2にまとめ、学名、和名、部位、個数を記した。表1には現地で直接採取された種実遺体の同定結果をまとめ、表2には水洗選別を行った溝内堆積物の同定結果についてまとめた。栽培植物を中心に主要な分類群については写真に示した。

現地で直接拾い上げられた種実遺体は木本でモモとトチノキの2分類群であった。トチノキは種子のみが得られており、遺存状態は良好であった。モモは核が検出されており、齧歯類などによる食害の痕跡は確認されなかった。モモは栽培される果樹であり、果実は食用となる。トチノキはしばしば肥沃で水辺などのやや湿っているような場所に自生し、種子は水さらしなどのアク抜きをすれば食用となる。

溝内堆積物から得られた種実遺体群は木本と草本とを比べると種数・個数ともに草本が卓越している。同定された木本はクワ属、カジノキ属、キイチゴ属、アカメガシワ、マタビ属、ガマズミ属の6分類群であった。検出量が最も多いのはクワ属で、次にキイチゴ属・マタビ属とつづく。これら検出された分類群の多くは、林縁や伐採地などの比較的日当たりの良い場所に生育し、その種類類はしばしば鳥や小動物などによって分布範囲を広げる、いわゆる鳥獣散布型の生活サイクルをもつ分類群である。また、クワ属は栽培種を含む可能性のある分類群である。草本についてはヘラオダカ、オモダカ科、イネ、イネ科、ウキヤガラ、ホタルイ属、スゲ属、カヤツリグサ科、イボクサ、コナギ、カナムグラ、ミゾソバ、タデ属A、タデ属B、タデ属C、タデ属D、カラムシ属、アカザ属、ヒユ属、ナデシコ科A、ナデシコ科B、キンボウゲ属、クサネム、カタバミ属、エノキグサ、ヤブジラミ、セリ科、チドメグサ属、ゴマ、キランソウ属、エゴマ、シソ属、ナス、ナス科A、ナス科B、ウリ類、タカサブロウ、キク科の38分類群が同定された。個数ではヘラオモダカ・ミゾソバが最も多く検出されており、カナムグラ・スゲ属がつづく。タデ属A・B・C、ナデシコ科A、イネ科、ホタルイ属もやや多く検出されている。草本の中には生育場所の環境条件によって水湿地性植物と陸性植物の大きく2つに分けることができる。検出された分類群のうち、水湿地性植物に含まれるものとしては、ヘラオモダカ、オモダカ科、イネ、ウキ

ヤガラ、ホタルイ属、イボクサ、コナギ、ミソソバ、タカサブロウの9分類群があげられ、栽培植物であるイネを除くと8分類群である。これらは沈水性や浮葉性といった池や沼などの比較的水位のある場所に生育する分類群ではなく、湿地あるいは比較的水位の低い、溝や水田といった場所に生育する抽水性の植物を含む分類群である。陸性植物にはカナムグラ、アカザ属、ヒユ属、ナデシコ科A・B、カタバミ属、エノキグサ、ヤブジラミ、ゴマ、キランソウ属、エゴマ、シソ属、ナス、ナス科A・B、ウリ類、キク科の17分類群があり、栽培植物のゴマ、エゴマ、シソ属、ナス、ウリ類の5分類群を除くと12分類群である。これらは田畑や荒地、道ばたなどのやや乾燥した環境に生育する分類群である。水湿地性植物のヘラオモダカ、ウキヤガラ、イボクサ、コナギ、ミソソバ、タカサブロウや陸性植物のカナムグラ、エノキグサ、ヤブジラミは集落の周辺や田畑などに生育する、いわゆる「人里植物」と呼ばれるもので、ホタルイ属、アカザ属、ヒユ属、ナデシコ科A・B、カタバミ属、ナス科A・B、キク科も人里植物を多く含む分類群である。こうしてみると、検出された分類群は人間が管理する環境や作物栽培がおこなわれるような環境下で生育する人里植物が優占していることが分かる。

栽培植物にはイネ、ゴマ、エゴマ、シソ属、ナス、ウリ類の6分類群があり、クワ属、アカザ属、ヒユ属についても栽培されていた可能性のある分類群である。このうち、最も多いのがウリ類で、次にシソ属、ナス、イネとつづく。イネは未炭化の穎と炭化果実（炭化米）が含まれており、ウリ類についてはしいな（未成熟の種子）が少量含まれていた。

3. 古植生と植物利用

ここでは主に溝内堆積物から得られた同定結果や観察結果などの知見から、堆積状況や当時の植生、植物利用について考えてみる。

まず、堆積状況について考えてみる。堆積状況については、最も重要なことは現地での層序や土層断面観察であるが、今回はしていないため不明な点が多い。しかし、採取された塊状の堆積物試料から推察すると、粒径や比重も比較的均質で、淘汰は良好である。有機物は未分解で、遺存状態も良い。有機物が集中する部分はレンズ状もしくはラミナ状に堆積している。これらのことから、試料である堆積物は、水成堆積物で形成されており、人為的な影響をあまり受けていない状況下で自然に堆積したと考えられる。堆積物の一部である種実遺体群も自然堆積に近い状況で堆積したと考えられる。

次に当時の植生について述べる。検出された分類群で木本と草本を比べると、種数・個体数ともに草本が卓越している。木本では林縁や伐採地などの比較的日当たりの良い場所に生育する分類群が優占していることから、遺跡内は基本的に日当たりの良いやや開けた環境であったと考えられる。つまり、溝SD59周辺には樹木を主要構成要素とする森や林などは分布せず、樹木が生育していたとしても孤立木程度であったと考えられる。草本については水湿地性植物と陸性植物とが混在している。種数は栽培植物を除くと、水湿地植物が9分類群、陸性植物が13分類群であり、個体数では水湿地植物が優占し、種数ではやや陸性植物が多い結果であった。分類群別にみると水湿地性植物のヘラオモダカ、ミソソバが著しく多量に検出されている。また、ミソソバ、ヘラオモダカの遺存状態は良好で、ヘラオモダカについては集塊で検出されている。水湿地性植物と陸性植物が混在することは一見矛盾しているように見受けられる。しかし、堆積地が遺跡内の溝であることから、溝SD59周辺ではカナムグラ、ナデシコ科A・B、ヤブジラミ、ナス科A・Bなどが生育する開けた日当たりの良い、やや乾燥した環境であり、溝内にはミソソバやヘラオモダカなどの水湿地植物が生育可能な湿地的な環境であったと考えられる。これらのことは、溝SD59の周辺に建物跡など日常生活に密着した遺構があるという発掘調査で得られた結果と矛盾し

ない。

以上のことをまとめると、木本で検出量の多いクワ属については孤立木または数本程度が、遺跡内、特に堆積地にほど近い場所に生育していた可能性がある。また、キイチゴ属、アカメガシワ、マタビ属、ガズミ属は堆積地よりやや離れた遺跡周辺に生育していたものが、鳥や小動物によってもたらされたものが、水流などで移動・運搬されて堆積したと考えられる。建物周辺の日当たりの良いやや乾燥した場所には、カナムグラ、ナデシコ科A・B、ヤブジラミなどの陸性植物が生育し、堆積地の溝SD59には水湿地性植物であるヘラオモダカやミソソバが優占的に繁茂していたと考えられる。

植物利用については、栽培されていた分類群がイネ、ゴマ、エゴマ、シソ属、ナス、ウリ類の6分類群である。これらの中でゴマについては県内で初見であるが、それ以外のものは中世遺跡から普通に検出されている分類群である。また、クワ属、アカザ属、ヒユ属の3分類群についても栽培されていた可能性がある。これらの栽培植物は、日常生活の場から逸脱したものや、不用になったものを投棄したり破壊されたものが溝SD59に流入し、堆積したと考えられる。

栽培植物の記載

イネ *Oryza sativa* Linn. 穎果・炭化果実

穎果は淡褐色～黄褐色で、平面は楕円形を呈する。表面には微細な顆粒状突起がみられる。長さ6.8～7.3mm、幅3.0～3.6mm。

炭化果実は黒色～黒褐色で、平面は楕円形を呈す。炭化果実の表面には長軸方向に数本の溝が走る。長さ4.2～4.8mm、幅2.4～3.3mm。

モモ *Prunus persica* Batsch. 核

核は茶褐色で、平面は先端がとがった卵形を呈する。側面に縫合線が巡り、表面には特有の隆起がみられる。長さ22.7～32.8mm、幅16.6～22.8mm、厚さ14.3～15.4mm。

モモ核の研究は、小清水（1963）の弥生時代以降に品種改良がおこなわれ、大型化するという指摘がある一方で、金原（1996）は時期における形態分類をおこなっている。

ゴマ *Sesamum indicum* Linn. 種子

種子は淡褐色～茶褐色で、平面は卵形を呈する。表面には筋状の網目模様がみられる。長さ2.7～3.0mm、幅1.9～2.1mm。今回、ゴマの出土は富山県下で初見となる貴重な資料である。

エゴマ *Perilla frutescens* Britt. var. *cf. japonica* Hara 果実

果実は茶褐色で、球形を呈する。下端は唇状にやや突出し、点状のヘソがある。表面には大きな網目状の構造を有する。直径2.3mm。シソ属との識別は大きさで行っており、直径1.2～1.8mmをシソ属とし、直径2.3mmと大きいものをエゴマとした。

シソ属 *Perilla* 果実

果実は茶褐色で、球形を呈す。下端は唇状にやや突出し、点状のヘソがある。表面には大きな網目状の構造を有する。径1.2～1.8mm。

ナス *Solanum melongena* Linn. 種子

種子は淡褐色～茶褐色で、平面形は円形を呈する。ヘソは大きく開きくぼんでいる。表面には畝状の網目構造が発達する。直径2.5～3.9mm。

ウリ類 *Cucumis melo* Linn. 種子

種子は黄褐色で、平面は長卵形を呈す。一端の両面には「ハ」字状にくぼむ。長さ4.6～9.4mm、幅2.3

～3.7mm。検出された種子には未成熟な種子が含まれていた。

ウリ類については藤下の研究（1982）があり、本遺跡出土で計測可能な個体は97点あり、そのうち長さ6.0mm以下の小粒種子（雑草メロン型）が12点、長さ6.1～8.0mmの中粒種子（マクワ・シロウリ型）が72点、長さ8.0mm以上の大粒種子（モモルディカメロン型）が13点であった。これら小粒種子、中粒種子、大粒種子の割合は、他の中世～近世の遺跡出土の例と大差なく、中粒種子のマクワ・シロウリ型が優占している。なお、ここでいうウリ類とは藤下のいうメロン仲間に対応する。

引用・参考文献

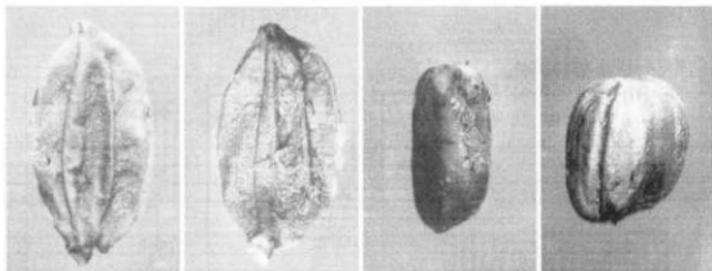
- 金原正明（1996）「古代モモの形態と品種」『考古学ジャーナルNo.409』ニュー・サイエンス社
- 小清水卓二（1963）「古代日本の住居跡から出土する桃について」『近畿古文化論巧』吉川弘文館
- 粉川昭平・吉井亮一（1984）「江上遺跡群出土の植物遺体」『北陸自動車道遺跡報告—上市町木製品・総括編—』富山県教育委員会
- 中村亮仁（1998）「石名田舟遺跡出土の種実遺体」『富山考古学研究 創刊号』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 中村亮仁（2003）「富山県における植物利用—栽培植物の導入期と変革期—」『続文化財学論集』文化財学論集刊行会
- 藤下典之（1992）「出土種子からみた古代日本のメロンの仲間—その種類、渡来、伝播、利用について—」『考古学ジャーナルNo.354』ニュー・サイエンス社

表1

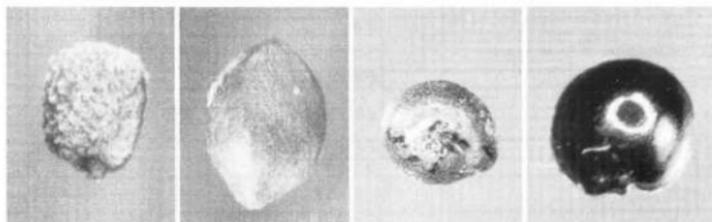
遺跡名	R番号	グリッド	層位	遺構	年月日	分類群				計測値 (mm)	
						和名	学名	部位	個数	長さ×幅×厚さ	
MAZ9	798-19	—	—	SD225-№19	011210	モモ	<i>Prunus persica</i> Batsch.	核	1	32.0 × 22.0 × 14.4	
MAZ9	872	P23-NE	下層	SD268	011218	トチノキ	<i>Aesculus turbinata</i> Blume	種子	4	直径25.7～34.6	
MAZ9	684の1/2植物と分類	—	—	SK119№2	011130	モモ	<i>Prunus persica</i> Batsch.	核	1	27.0 × 21.6 × 15.0	
MAZ9	170	—	—	SD205	011025	モモ	<i>Prunus persica</i> Batsch.	核	1	22.7 × 16.6 × 14.3	
MAZ9	197	—	—	SD205	011026	モモ	<i>Prunus persica</i> Batsch.	核	1	29.3 × 21.0 × 15.4	
MAZ9	873	P24-NW	下層	SD268	011212	モモ	<i>Prunus persica</i> Batsch.	核(半分)	1	28.6 × 22.4 × —	
						トチノキ	<i>Aesculus turbinata</i> Blume	種子(半分)	1	—	

表2 間尺遺跡井戸出土種実遺体

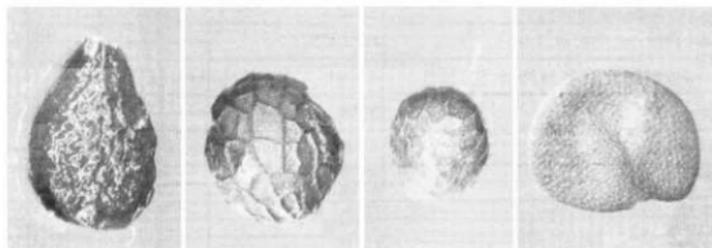
分類群		部位	8000cc	100cc
学名	和名		オープンング 1.0mm	オープンング 0.25mm
arbor	木本			
<i>Broussonetia</i>	カシノキ属	種子	1	
<i>Morus</i>	クワ属	種子	29	
<i>Rubus</i>	キイチゴ属	核	7	
<i>Mallotus japonicus</i> Muell.Arg.	アカメガシフ	種子	1	
<i>Actinidia</i>	マタビ属	種子	7	
<i>Viburnum</i>	ガマズミ属	核	1	
arbor and herb	木本と草本			
Araliaceae	ウコギ科	種子	1	
Vitaceae	ブドウ科	種子(破片)	1	
herb	草本			
<i>Alisma canaliculatum</i> A.Br. et Beauv.	ヘラオモダカ	果実	848	91
		集塊	1	
Alismataceae	オモダカ科	種子	2	
		蒴果	7	
<i>Oryza sativa</i> Linn.	イネ	穎果(破片)	6	1
		炭化果実	3	
Gramineae	イネ科	穎果	58	4
<i>Scirpus yagara</i> Ouwii	ウキヤガラ	果実	1	
<i>Scirpus</i>	ホタルイ属	果実	59	2
		破片	1	1
<i>Carex</i>	スゲ属	果実	299	10
Cyperaceae	カヤツリグサ科	果実	4	13
<i>Anelima keisak</i> Hassk.	イボクサ	種子	11	5
<i>Monochoria vaginalis</i> Presl	コナギ	種子		9
<i>Humulus japonicus</i> Sieb. et Zucc.	カナムグラ	種子	318	19
		半分	41	2
<i>Polygonum thubergii</i> Sieb. et Zucc.	ミソソバ	果実	1022	16
		半分	23	7
<i>Polygonum</i> A	タデ属 A	果実	116	8
		破片	3	
<i>Polygonum</i> B	タデ属 B	果実	177	
		破片	6	
<i>Polygonum</i> C	タデ属 C	果実	7	
<i>Polygonum</i> D	タデ属 D	果実	5	
<i>Boehmeria</i>	カラムシ属	種子	1	
<i>Chenopodium</i>	アカザ属	種子	18	3
<i>Amaranthus</i>	ヒユ属	種子	15	
Caryophyllaceae A	ナデシコ科A	種子	90	1
Caryophyllaceae B	ナデシコ科B	種子	29	10
<i>Ranunculus</i>	キンボウグ属	果実	17	2
<i>Aeschynomene indica</i> Linn.	クサネム	豆果	2	
<i>Oxalis</i>	カタバミ属	種子	1	
<i>Acalypha australis</i> Linn.	エノキダサ	種子	1	
<i>Torilis japonica</i> DC	ヤブジラミ	果実	13	
		破片	15	4
Umbelliferae	セリ科	果実	5	
<i>Hydrocotyle</i>	子ドメグサ属	果実	5	4
<i>Sesamum indicum</i> Linn.	ゴマ	種子	6	
<i>Ajuga</i>	キランソウ属	果実	1	
<i>Perilla frutescens</i> Britt. Var. Cf. japonica Hara	エゴマ	果実	1	
<i>Perilla</i>	シソ属	果実	61	2
<i>Solanum melongena</i> Linn.	ナス	種子	30	
Solanaceae A	ナス科A	種子	5	
		破片	2	
Solanaceae B	ナス科B	種子	28	
<i>Cucumis melo</i> Linn.	ウリ類	種子	102	
		破片	13	
<i>Eclipta prostrata</i> Linn.	タカサブロウ	果実	7	
Compositae	キク科	果実	1	4
tortal	合計		3534	218
Unknown	不明		19	0



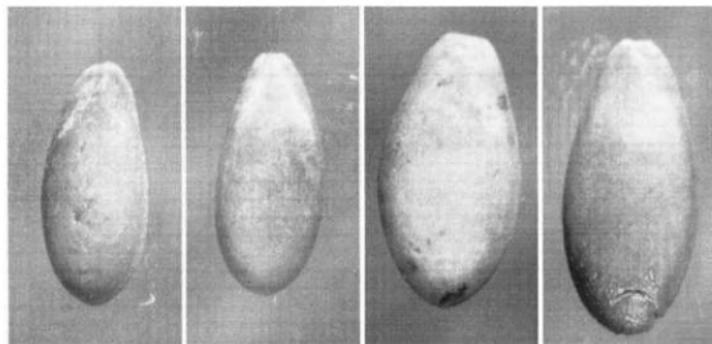
1 イネ 穎果 2 イネ 穎果 3 イネ 炭化果実 4 イネ 炭化果実



5 カジノキ属 種子 6 クワ属 種子 7 アカザ属 種子 8 ヒユ属 種子



9 ゴマ 種子 10 エゴマ 果実 11 シソ属 果実 12 ナス 種子



13 ウリ類 種子 14 ウリ類 種子 15 ウリ類 種子 16 ウリ類 種子

— 1mm 1~4, 13~16
 — 1mm 12
 — 1mm 6, 9
 — 1mm 5, 7, 8, 10, 11

別表 遺物観察表

圖 面



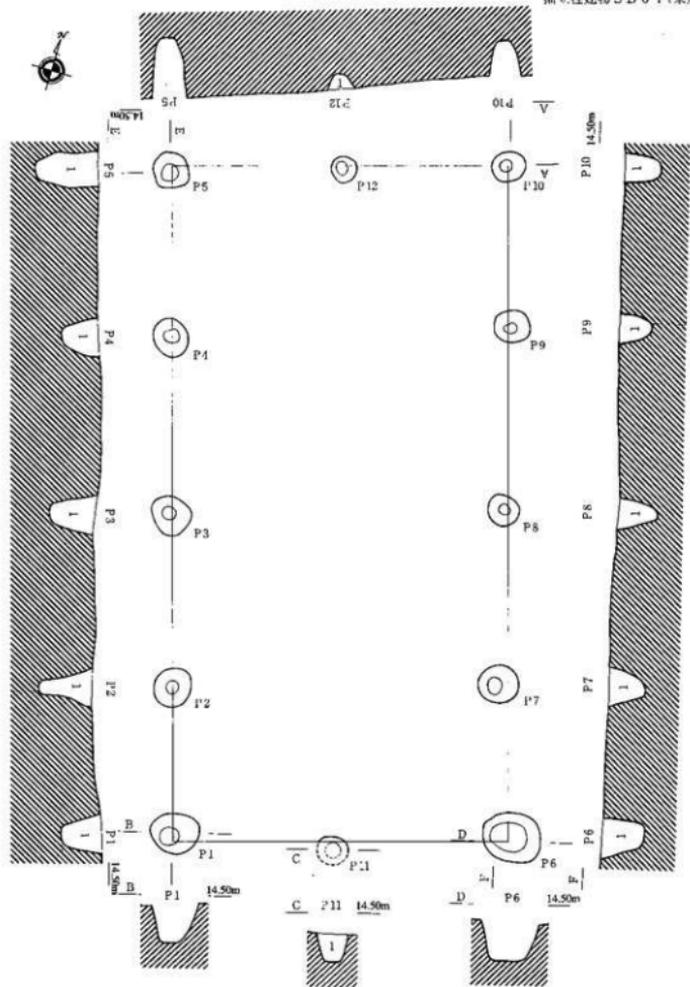
B地区第1西遺構配置図

縮尺 1/300



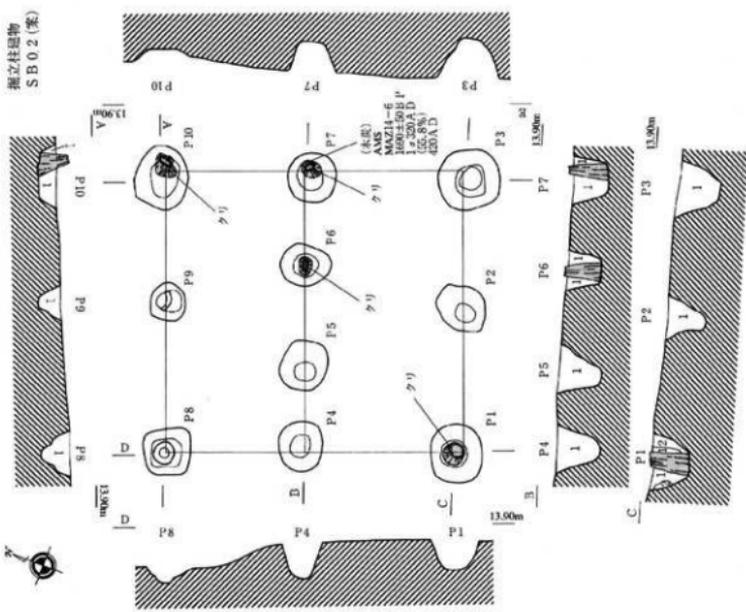
B地区第2面遺構配置図

縮尺 1/300



1. 黒褐色土：やや粘りあり。礫りあり。

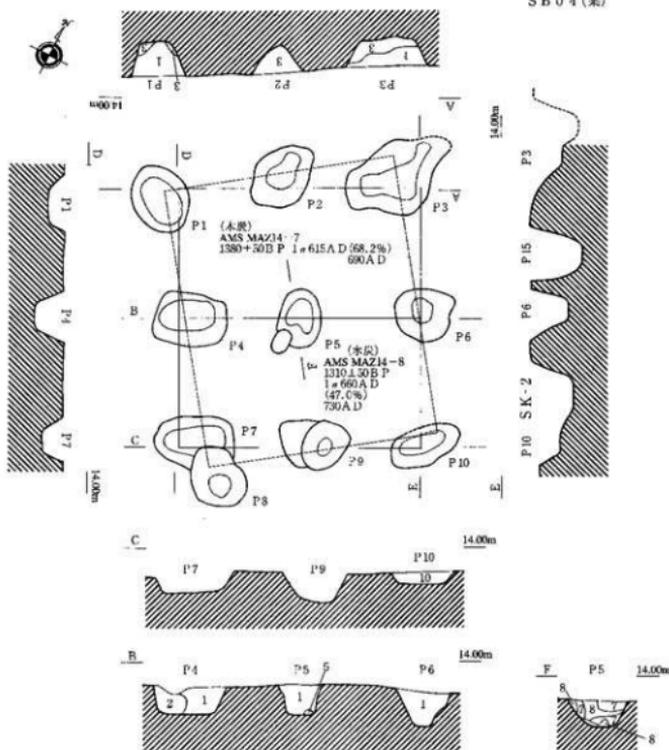
0 1.60 2m



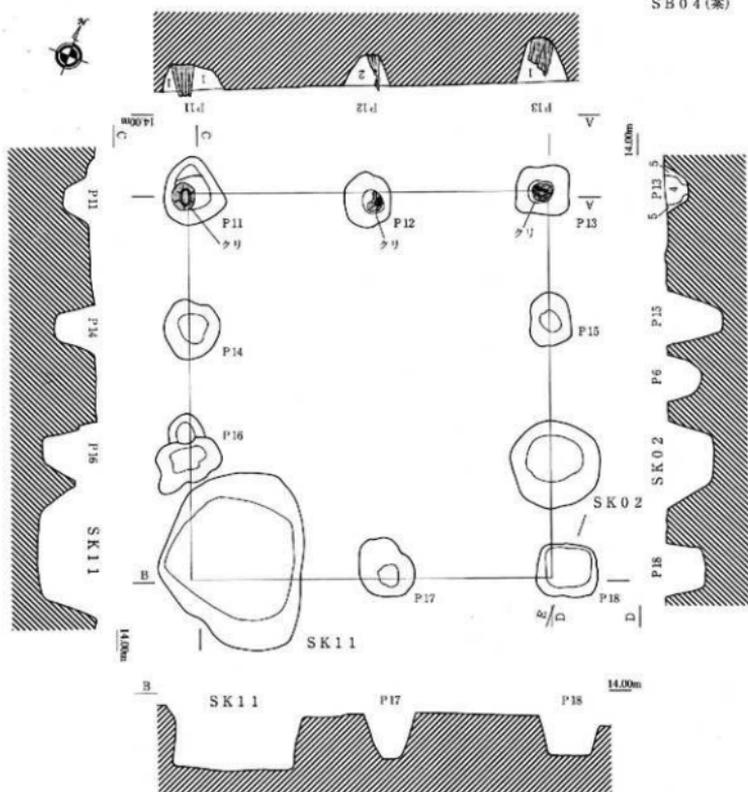
1. 黒褐色砂質土：暗褐色土アロック少量含む。やや粘り強い、締り強い。
2. 暗褐色砂質土：やや粘り、締り強い。

1. 黒褐色砂質土：灰褐色粘土アロック少量含む。やや粘り強い、締り強い。
2. 灰褐色砂質土：粘り、締り強い。

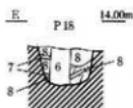
[B地区] 独立柱建物SB02 (案)・独立柱建物SB03 (案)



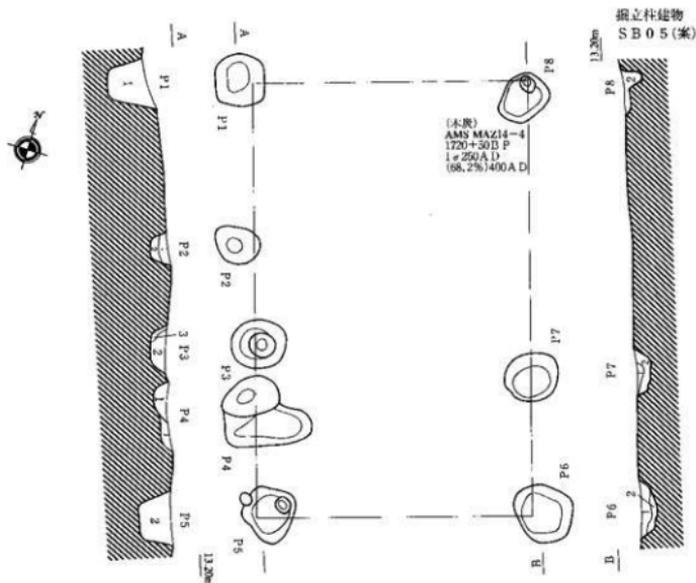
1. 黒褐色土：褐色土ブロック少量含む。やや粘り、締り強い。
2. 黒褐色土：粘り強い。やや締りあり。
3. 黒褐色土：褐色土ブロック多量含む。やや粘り、締り強い。
4. 暗褐色土：やや粘り、締り強い。
5. 暗褐色土：褐色土粒多量含む。粘り、締り強い。
6. 黒色土：ほぼ単一土。粘り、締り弱い。
7. 黒褐色土：赤褐色土ブロック（2～4cm）を含む。粘りなし。締り強い。
8. 赤褐色土：黄灰色の砂質土が縦溝状に入る。粘りなし。締り強い。
9. 稀暗赤褐色土：黄灰色の砂質土が縦溝状に入る。粘りなし。締り強い。
10. 黒褐色土：暗褐色土粒多量含む。やや粘り、締り強い。



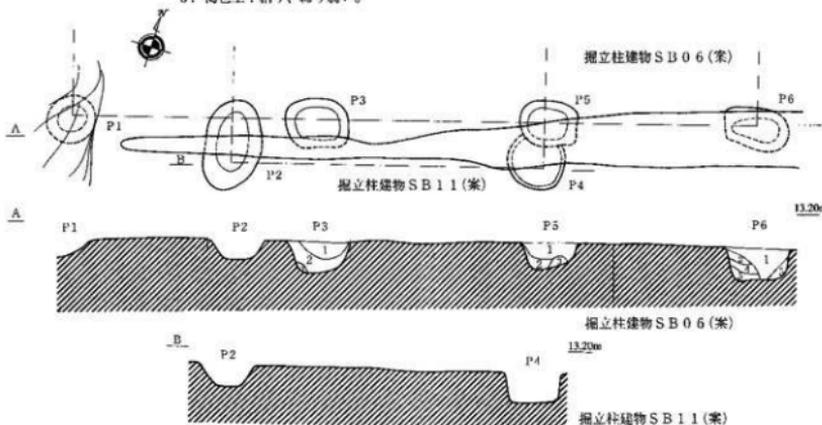
1. 黒褐色土：褐色土ブロック少量含む。やや粘り、締り強い。
2. 黒褐色土：粘り強い。やや粘りあり。
3. 黒褐色土：褐色土ブロック多量含む。やや粘り、締り強い。
4. 暗褐色土：やや粘り、締り強い。
5. 暗褐色土：褐色土粒多量含む。粘り、締り強い。
6. 黒色土：ほぼ単一土。粘り、締り弱い。
7. 黒褐色土：赤褐色土ブロック（2～4cm）を含む。粘りなし。締り強い。
8. 赤褐色土：黄灰色の砂質土が縦縞状に入る。粘りなし。締り強い。
9. 雑暗赤褐色土：黄灰色の砂質土が縦縞状に入る。粘りなし。締り強い。
10. 黒褐色土：暗褐色土粒多量含む。やや粘り、締り強い。



0 1:60 2m



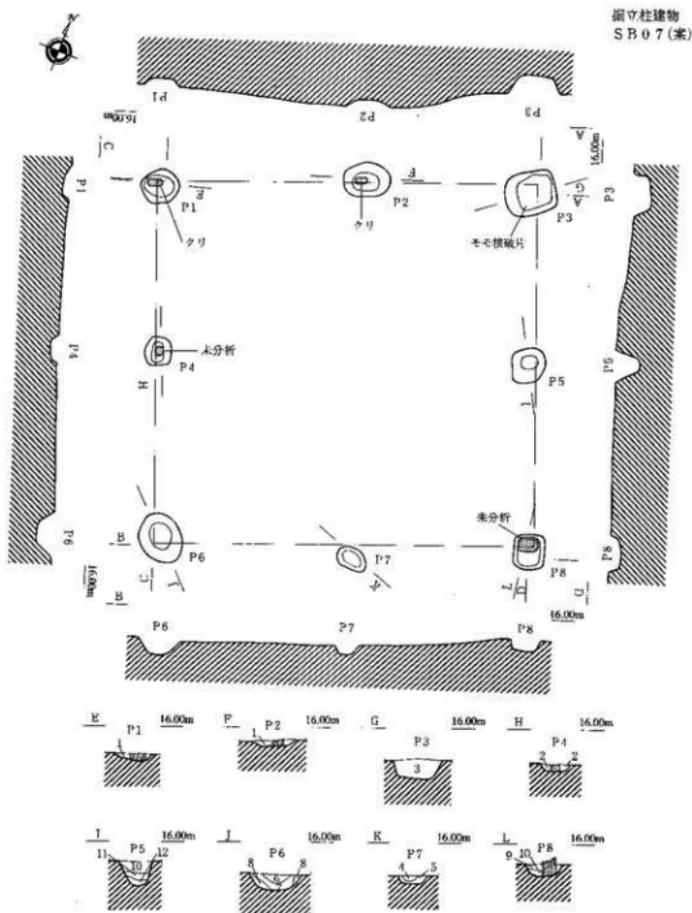
1. 黒褐色土：灰褐色土粒少量含む。粘り、締り強い。
2. 黒褐色土：褐色土粒少量含む。粘り弱い、やや締りあり。
3. 黒褐色土：粘り、締り強い。
4. 黒褐色土：粘り、締り強い。
5. 褐色土：粘り、締り強い。
6. 褐色土：粘り、締り弱い。



1. 黒褐色土：灰褐色土ブロック少量含む。粘り、締り弱い。
2. 黒褐色土：1層より締り強い。
3. 暗褐色土：やや粘り強い。締り弱い。
4. 黒褐色土：粘り強い。
5. 黒褐色土：暗褐色土粒多量含む。粘り締り

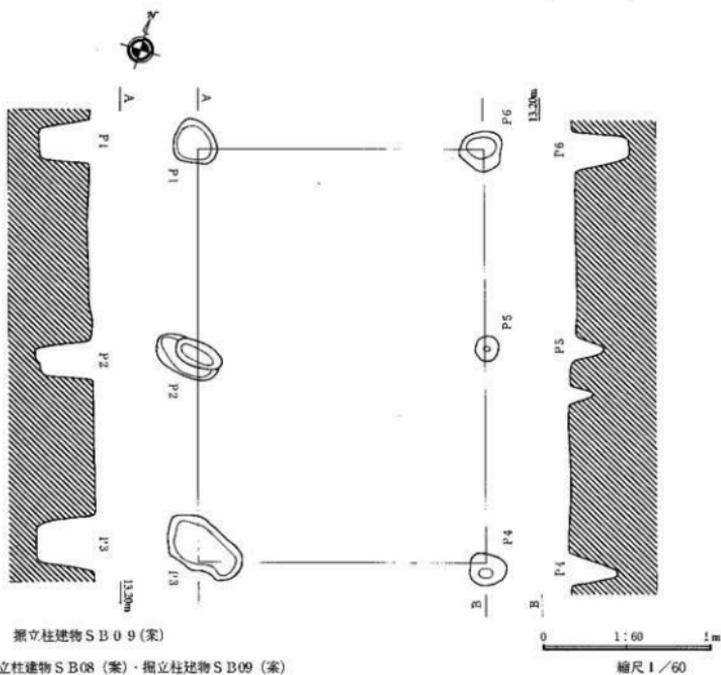
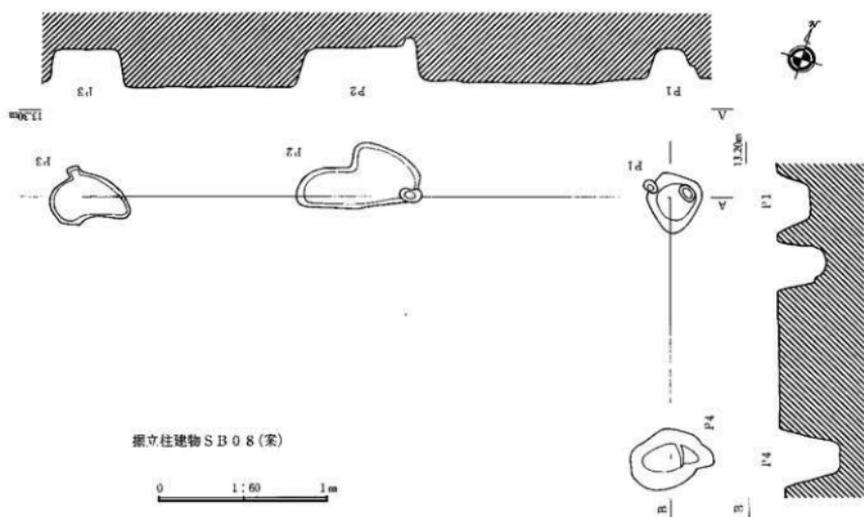
[B地区] 掘立柱建物SB05(案)・掘立柱建物SB06(案)・掘立柱建物SB11(案)

縮尺1/60



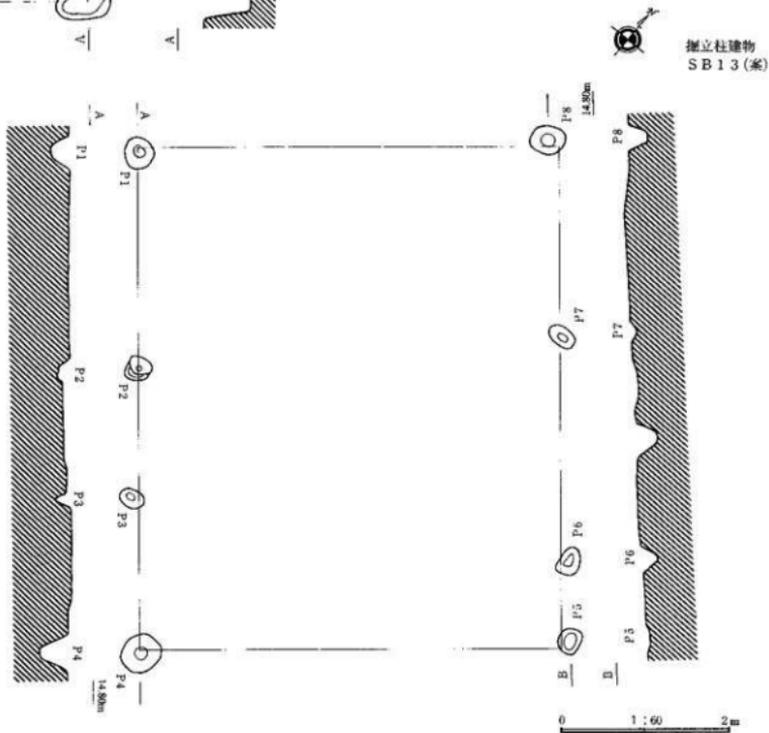
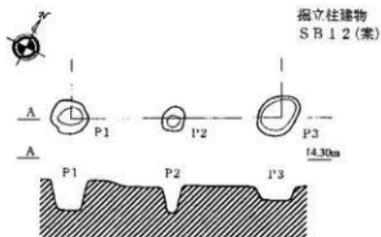
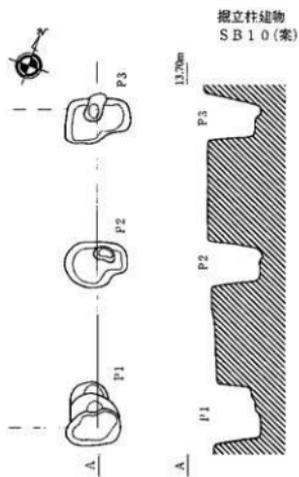
1. 灰オリーブ色土：砂質土と炭化物少々あり。やや粘りあり。やや締り弱い。
2. 灰色土：黒色十マール状（砂質土）。やや粘り弱い。締りあり。
3. 灰色土：粒子細。黒色土がマール状に混入。粘りあり。締り強い。
4. 黒色土：粒子細。砂質土と炭化物の混入少々あり。粘り強い。締りあり。
5. 黄灰色土：粒子細。砂質土。やや粘りあり。
6. 灰色土：粒子細。砂質土と炭化物の混入少々あり。粘り強い。締りあり。
7. 灰色土：粒子細。炭化物粒子少々あり。
8. 黄灰色土：粒子細。砂質土。
9. 灰色土：やや粒子細。砂質土。地山質黒色土がブロック状に混入。締りなし。
10. 黒色土：粒子細。炭化物粒了を含む。
11. 灰色土：やや粒子細。砂質土。地山質黒色土がブロック状に混入。炭化物粒子混入。締りなし。
12. 灰色土：砂質単一層。
13. 灰色土：粒子細。黒色土が若干混入。やや締りあり。

図面〇九
遺構実測図



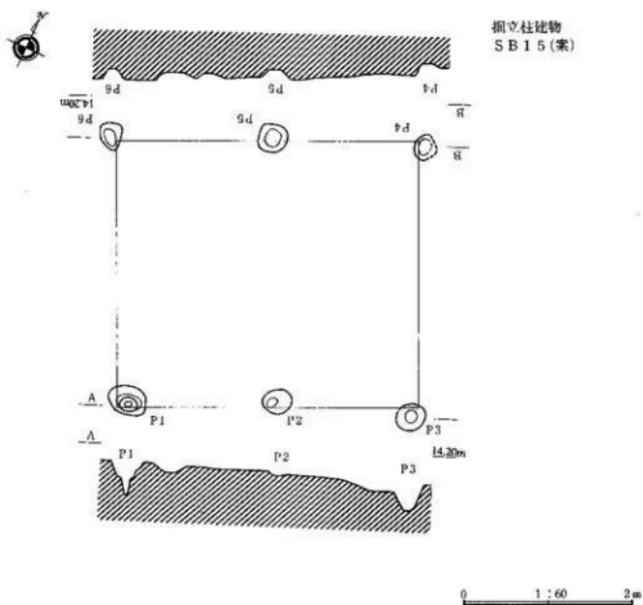
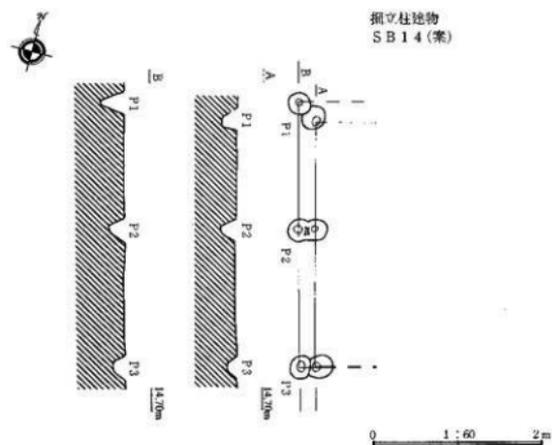
[B地区] 掘立柱建物SB08(案)・掘立柱建物SB09(案)

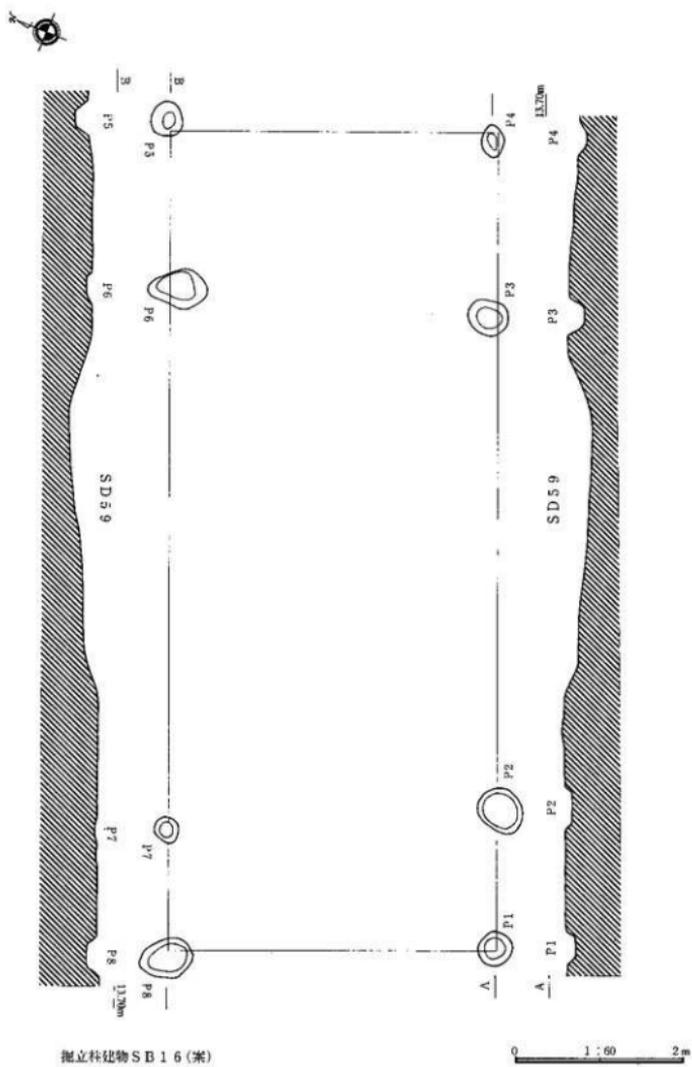
縮尺 1/60



[B地区] 掘立柱建物 SB 10 (案)・掘立柱建物 SB 12 (案)・掘立柱建物 SB 13 (案)

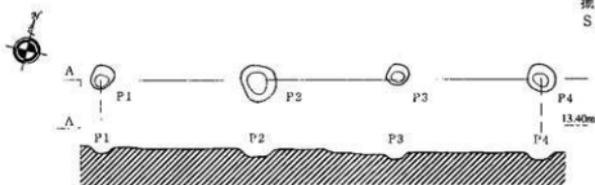
縮尺 1/60



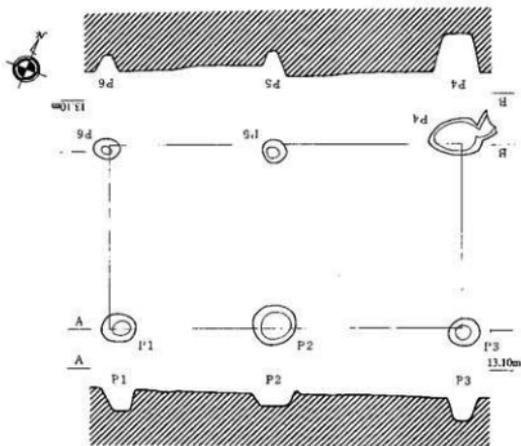


掘立柱建物SB16(案)

掘立柱建物
SB17(案)

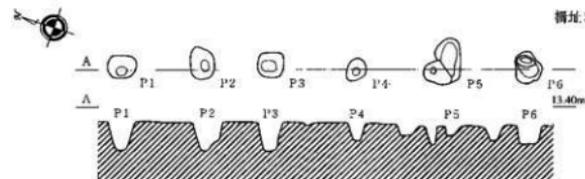


掘立柱建物
SB18(案)

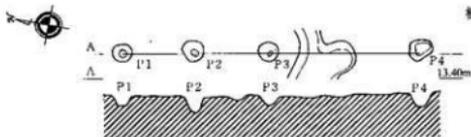


0 1:60 2m

掘址SA01



掘址SA02



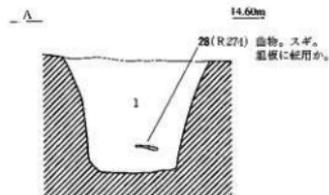
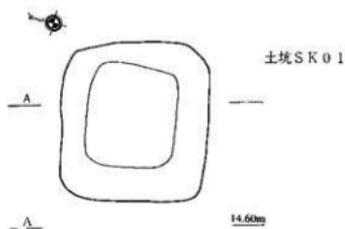
0 1:120 4m

[B地区] 掘立柱建物SB17(案)・掘立柱建物SB18(案)

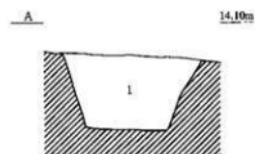
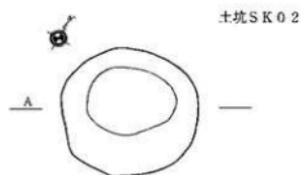
縮尺1/60

[B地区] 掘址SA01・掘址SA02

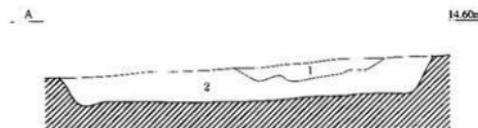
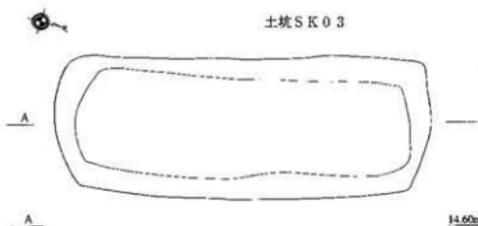
縮尺1/120



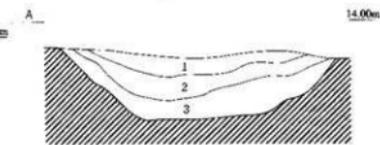
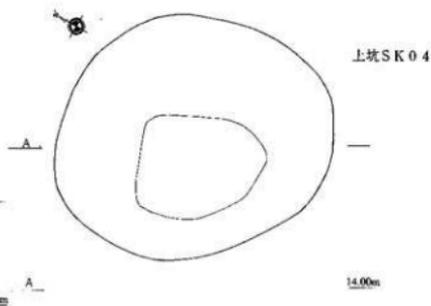
1. 黒色土：粘り、締りあり。



1. 黒色土：非常に粘りあり。締りあり。褐色を足するブロックを20%程度含む。

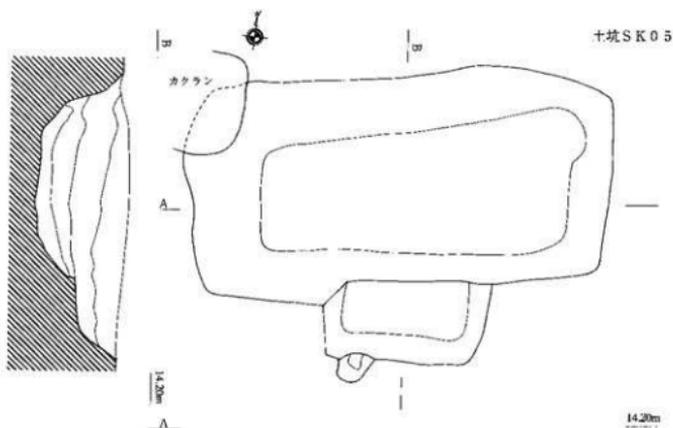


1. 黒褐色砂質土：粘りなし。締りあり。粘りなし、締りありの褐色土を20%程度含む。
2. 灰黄褐色砂質土：粘りなし。締りあり。上位には一層がブロック状となり、多量に混在する。

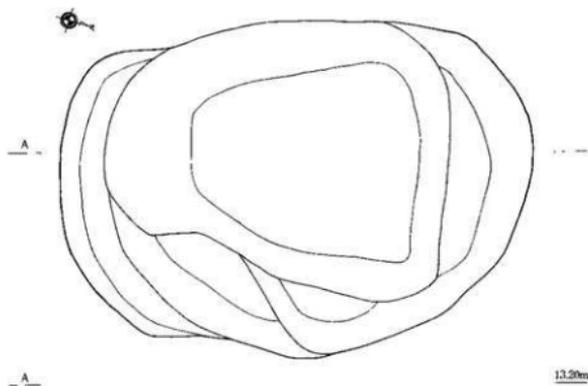


1. 褐色砂質土：粘り、締りあり。レンズ状堆積を呈する。
2. 黒色土：非常に粘り、締りあり。
3. 黒褐色砂質土：粘りなし。やや締りあり。

0 1:40 1m



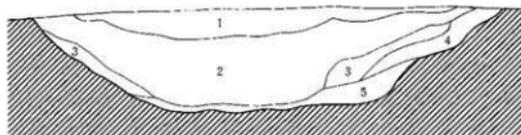
1. 黒褐色土：黄灰色ブロックを10%前後含む。粘りなし。締りあり。
2. 褐色砂質土：一層をブロック状に含む。粘りなし。やや締りあり。
3. 灰黄褐色砂質土：粘りなし。やや締りあり。
4. 黒土上：自然層を含む。粘り、締りあり。



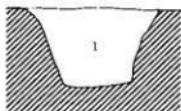
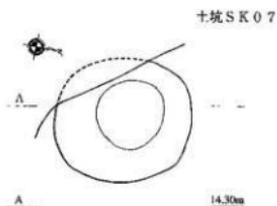
土坑SK06

(第1層検出 木炭)
AMS MAZ14-5
410±50BP
1σ1430AD (86.1%)1520AD

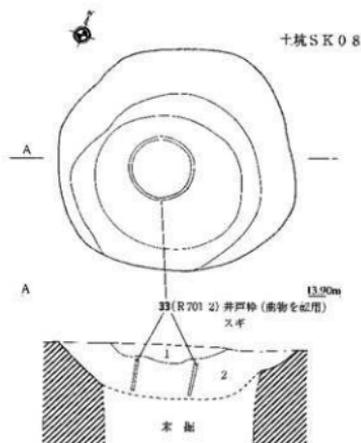
1. 黄灰色砂質土：粘り強い。やや締りあり。
2. 黒褐色土：粘り、締り強い。
3. 黒褐色土：粘り、締りやや強い。
4. 灰黄褐色砂質土
5. 灰黄褐色砂質土：粘り、締り弱い。



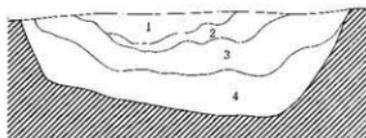
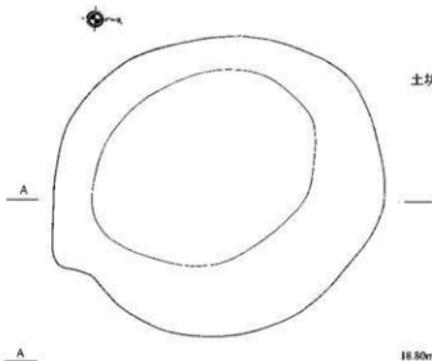
0 1:40 1m



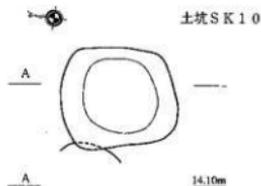
1. 黒色土：粘りあり。非常に締りあり。



1. 黒褐色土：粘りなし。やや締りあり。
2. 黒色土：粘り、締りあり。灰黄褐色砂質土を混入。

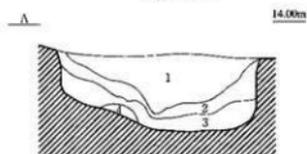
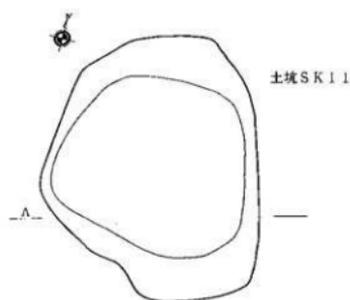


1. 黒色土：粘り、締りあり。
2. 黒褐色土：粘りなし。やや締りあり。
3. 黒褐色土：粘り、締りあり。
4. 黒色土：粘りあり。非常に締りあり。灰黄褐色砂質土を含む。

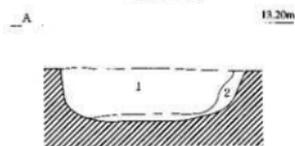
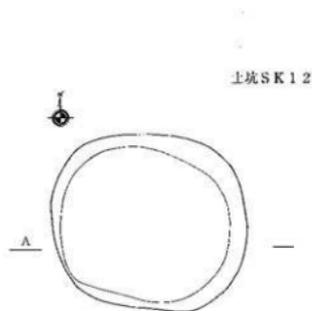


1. 黒褐色土：粘り強い。締りやや弱い。
2. 黄褐色砂質土：粘りなし。締りやや弱い。

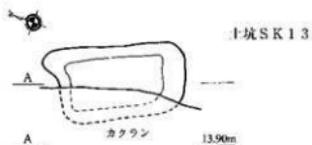
0 1:40 1m



1. 暗褐色土：灰褐色土、黒色土ブロック多量含む。粘り、締りやや弱い。
2. 黒褐色土：灰褐色土ブロック少量含む。粘り強い。締りあり。
3. 黒褐色土：2. より灰褐色土ブロック少ない。
4. 灰褐色土：粘り、締り強い。



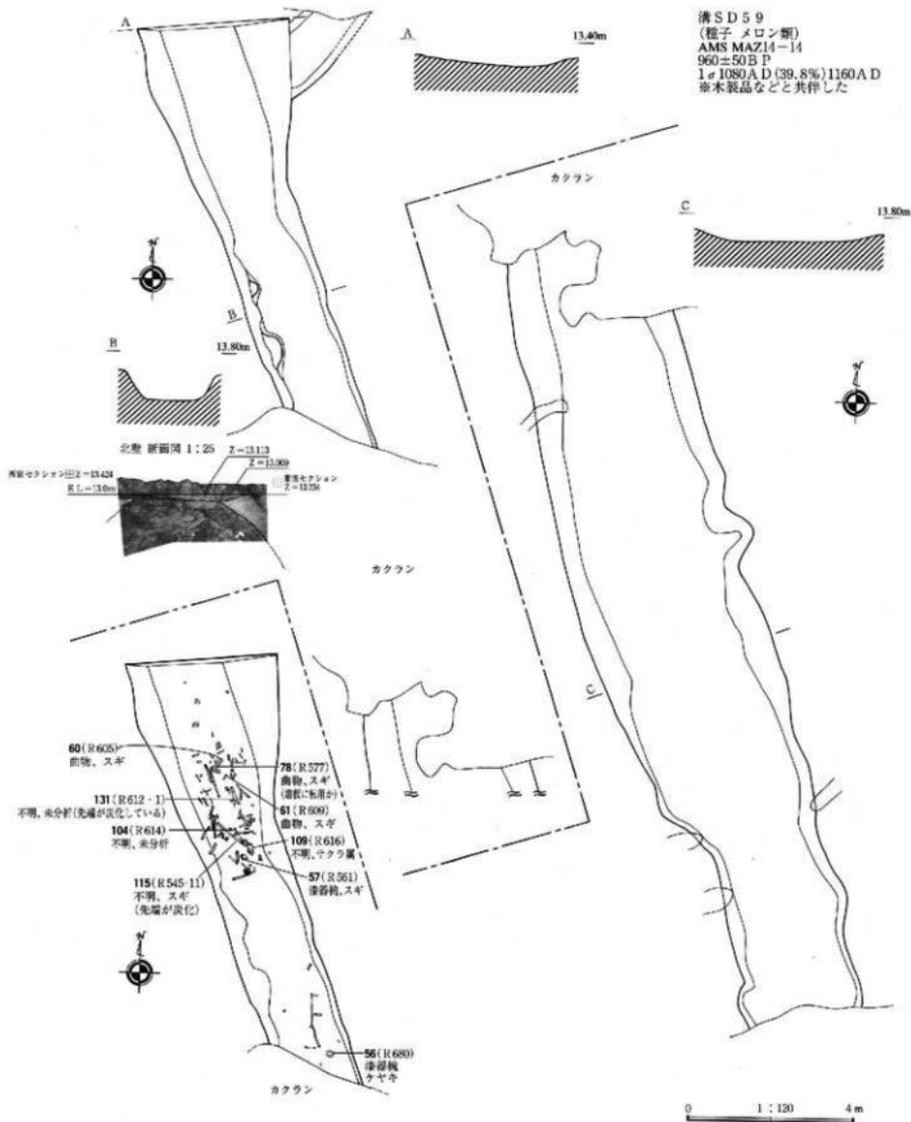
1. 黒褐色砂質土：灰褐色砂ブロック多量に含む。
2. 灰褐色砂質土：粘り、締り弱い。

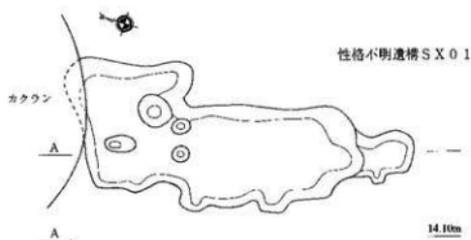


1. 灰褐色砂質土：褐色砂ブロック少量含む。粘り弱い、やや締りあり。
2. 黒褐色砂質土：灰褐色砂少量含む。粘り、締りやや強い。

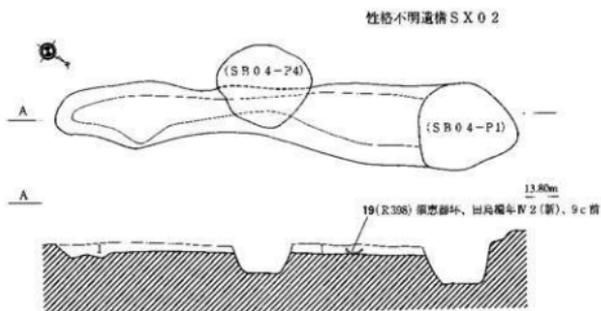
0 1:40 1m

溝SD59
 (種子メロン類)
 AMS MAZ14-14
 960±50 B P
 1σ 1080 A D (39.8%) 1160 A D
 ※本製品などと共存した



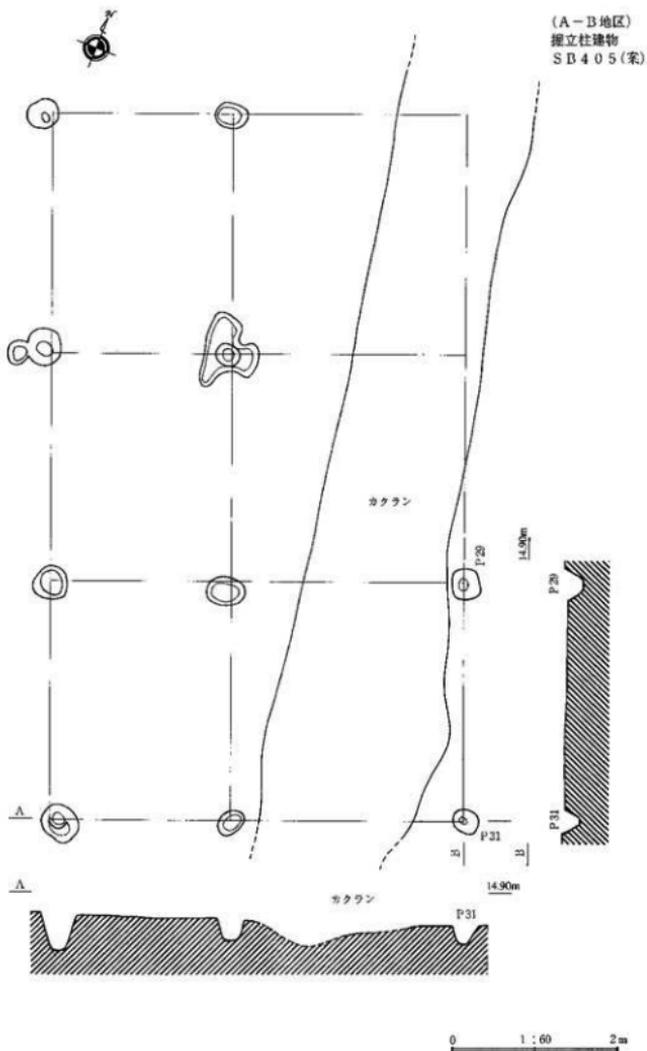


1. 黒褐色砂質土：やや粘り。締り強い。



1. 黒褐色土：やや粘り。締り強い。

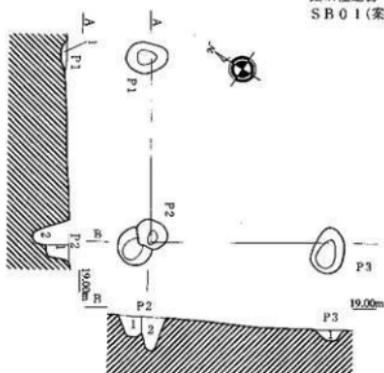
0 1 : 60 20m



[A-B地区] 掘立柱建物SB405(案)

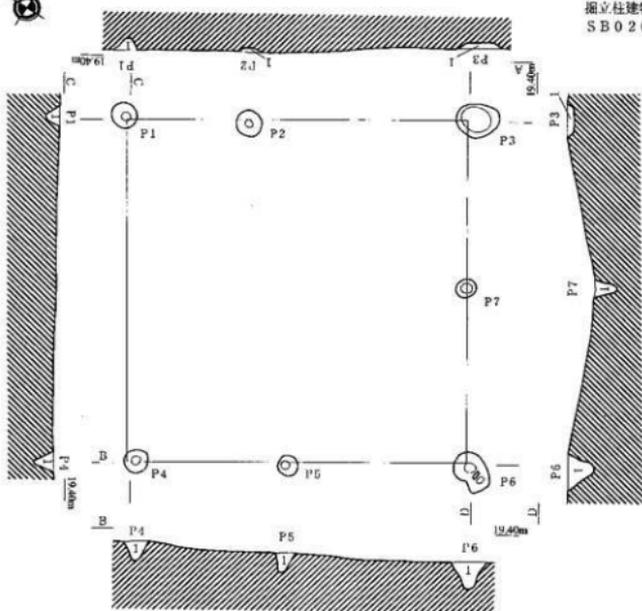
縮尺1/60

掘立柱建物
SB01(案)

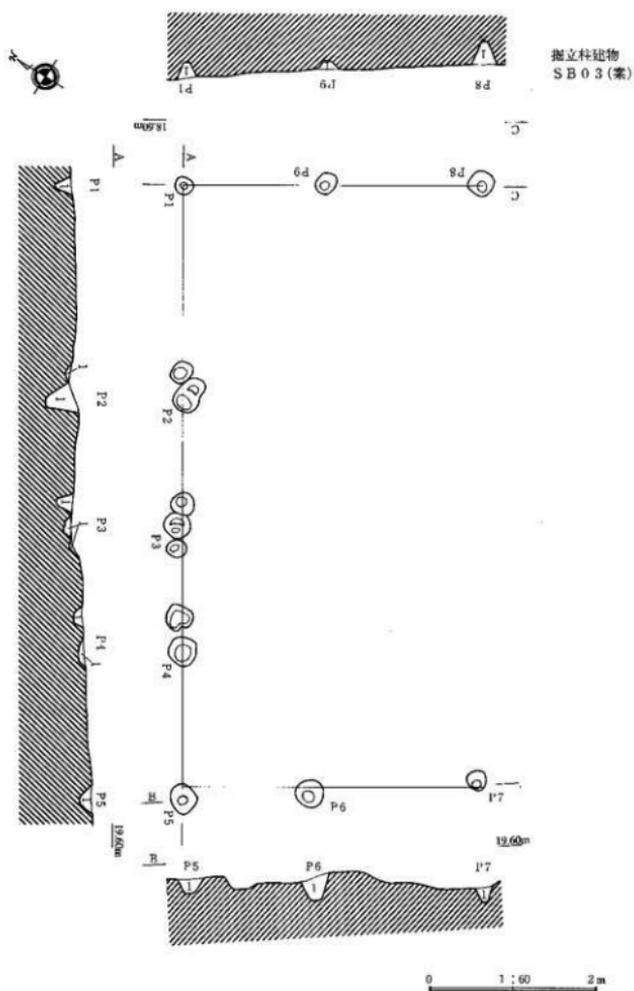


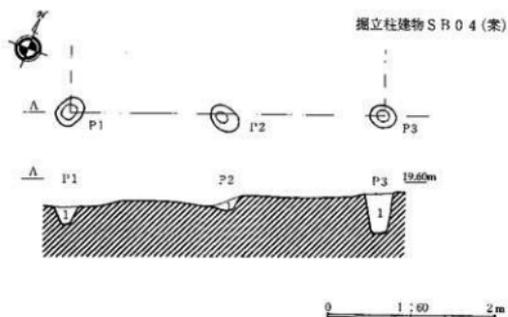
1. 暗褐色砂質土：粘性あり。締りあり。
2. 暗褐色土：粘性あり。締りあり。ロームブロック混じる。

掘立柱建物
SB02(案)

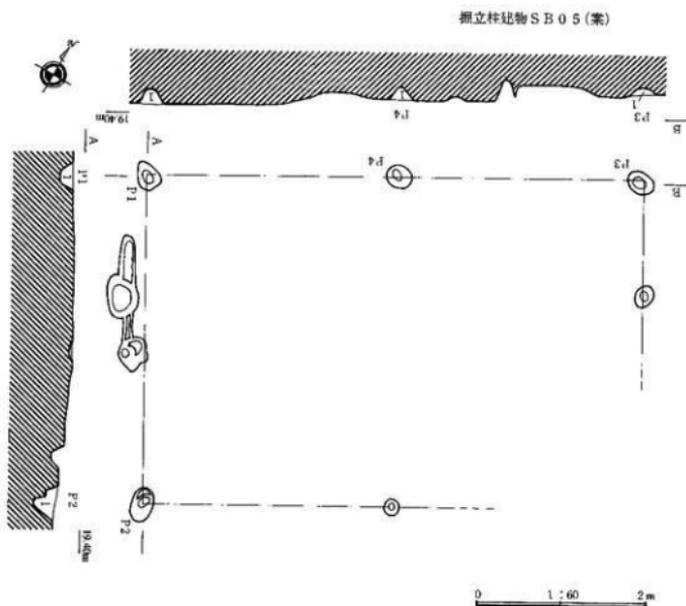


1. 暗褐色砂質土：粘性あり。締りあり。



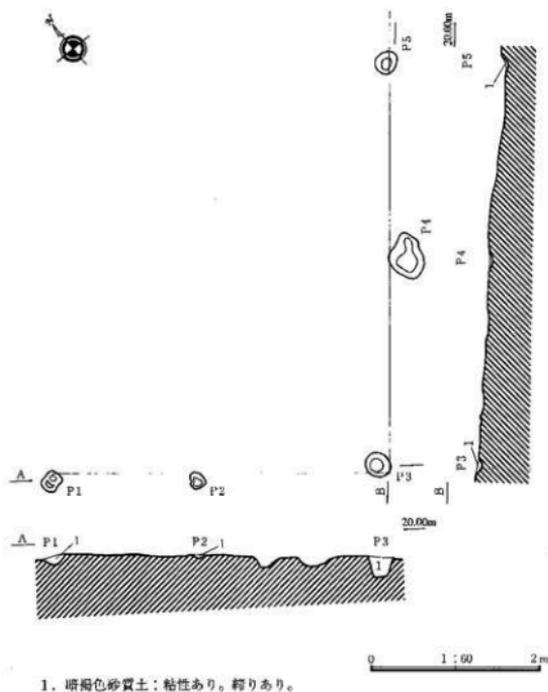


1. 暗褐色砂質土；粘性あり。締りあり。

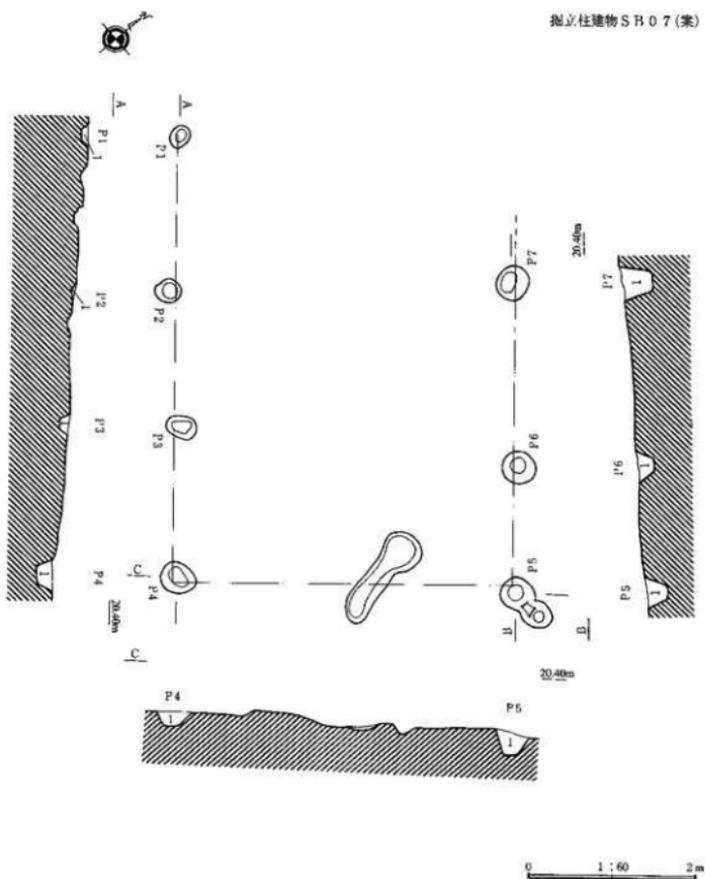


1. 暗褐色砂質土；粘性あり。締りあり。

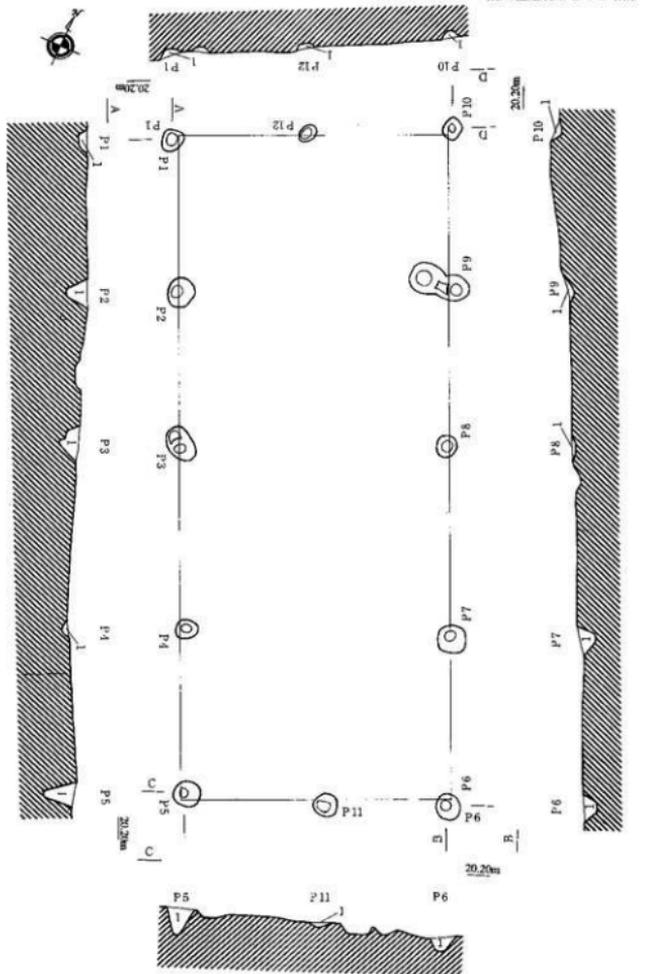
掘立柱建物SB06(案)



掘立柱建物S B 07 (案)

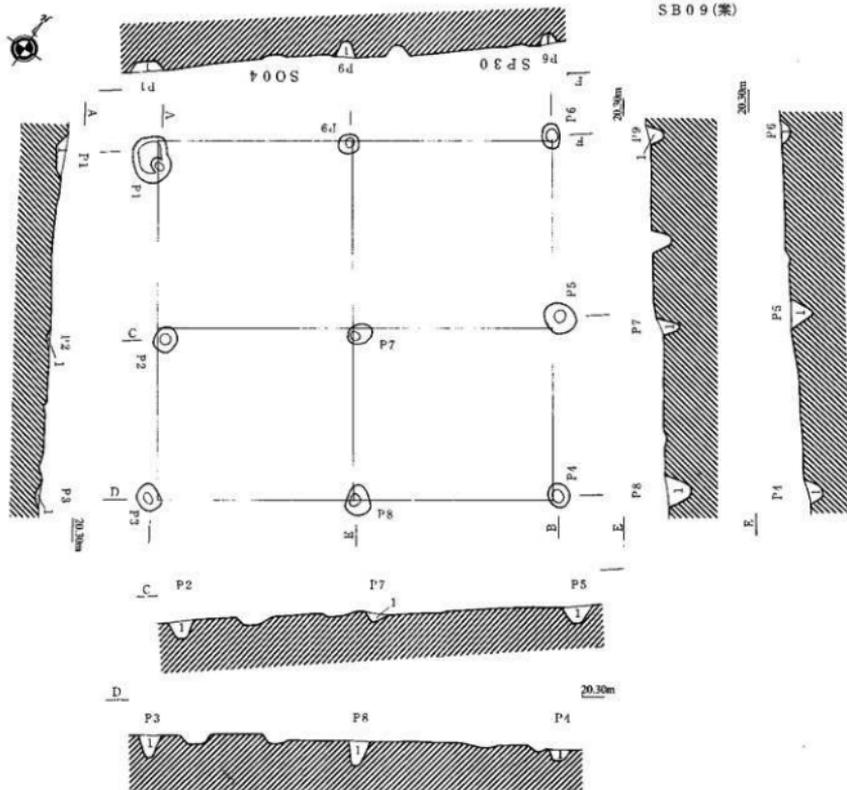


1. 暗褐色砂質土：粘性あり。締りあり。

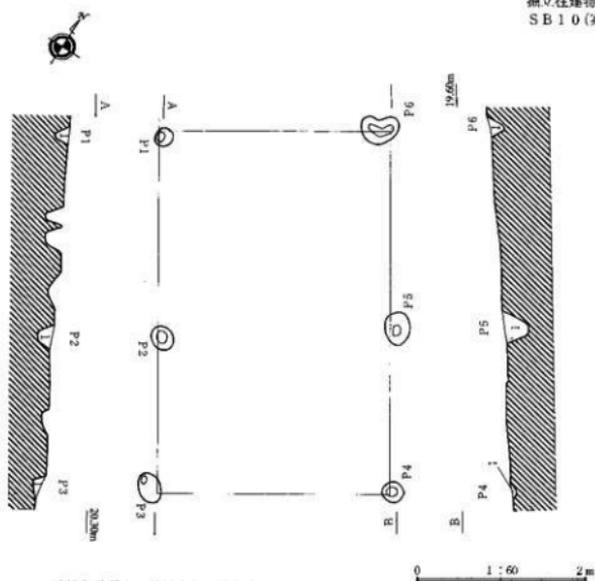


1. 暗褐色砂質土：粘性あり。締りあり。

掘立柱建物
SB09(案)

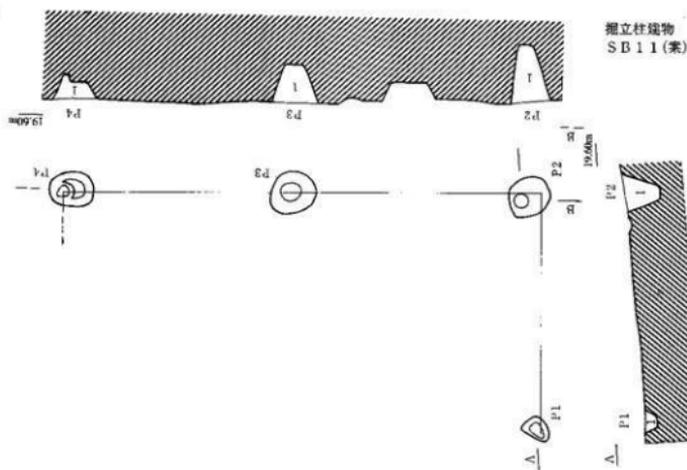


1. 暗褐色砂質土：粘性あり。締りあり。



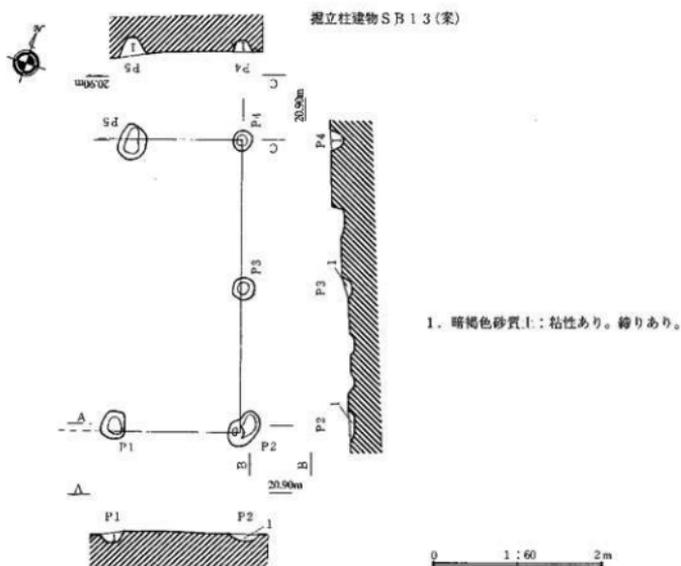
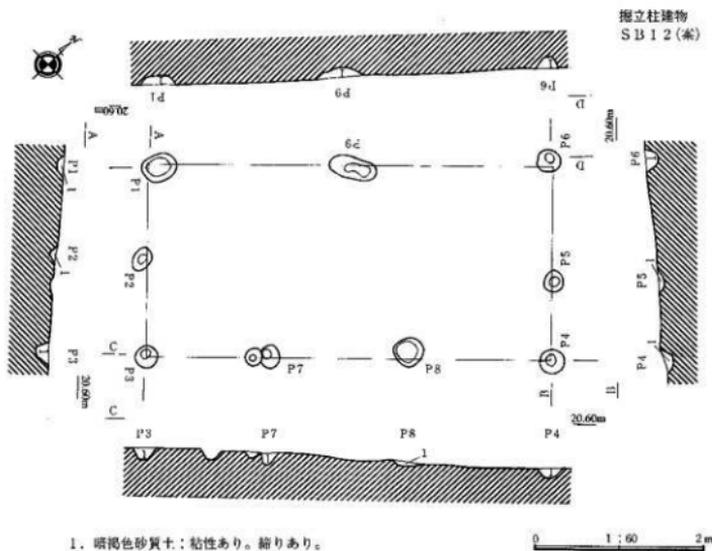
1. 暗褐色砂質土：粘性あり。締りあり。

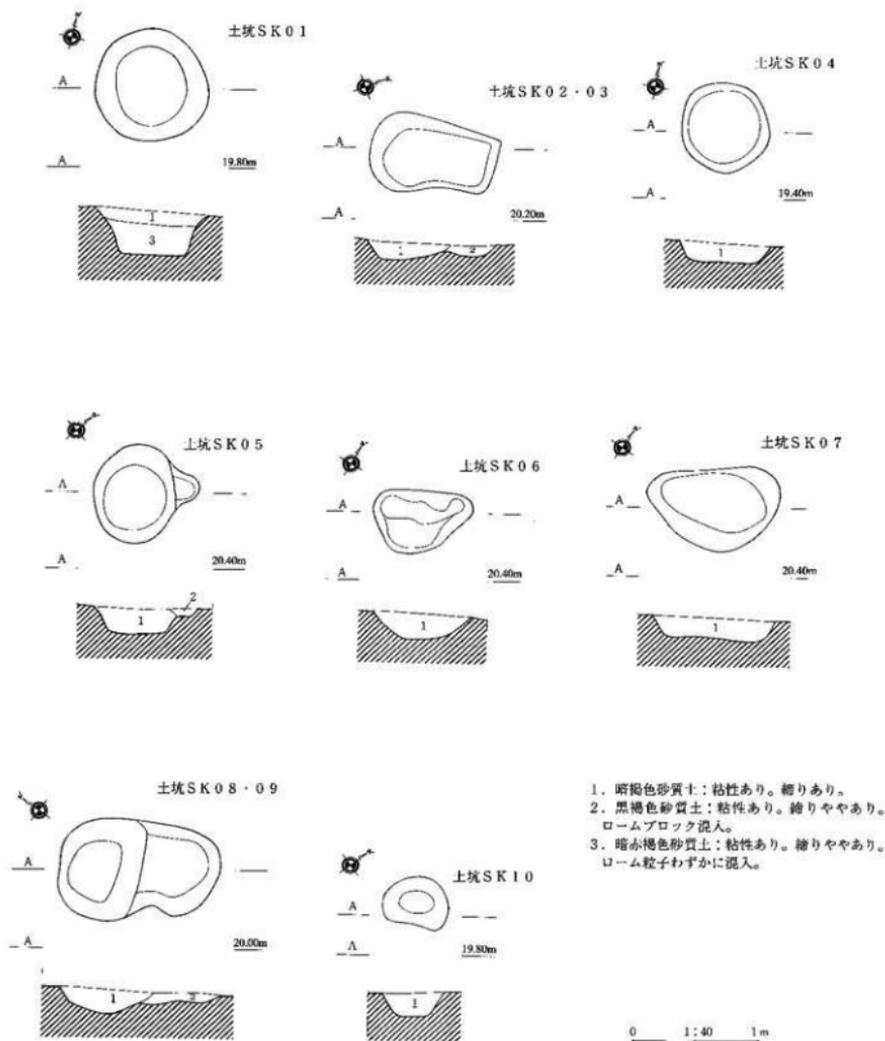
0 1:60 2m

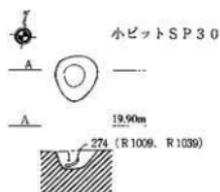
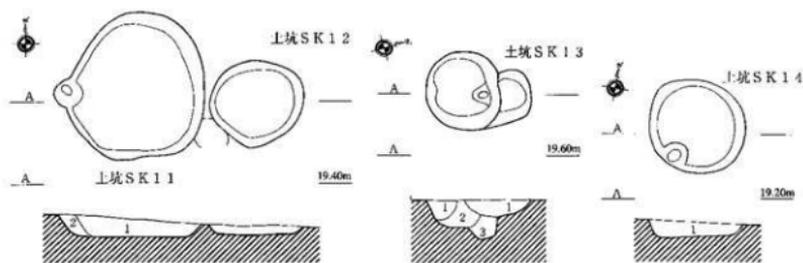


1. 暗褐色砂質土：粘性あり。締りあり。

0 1:60 2m

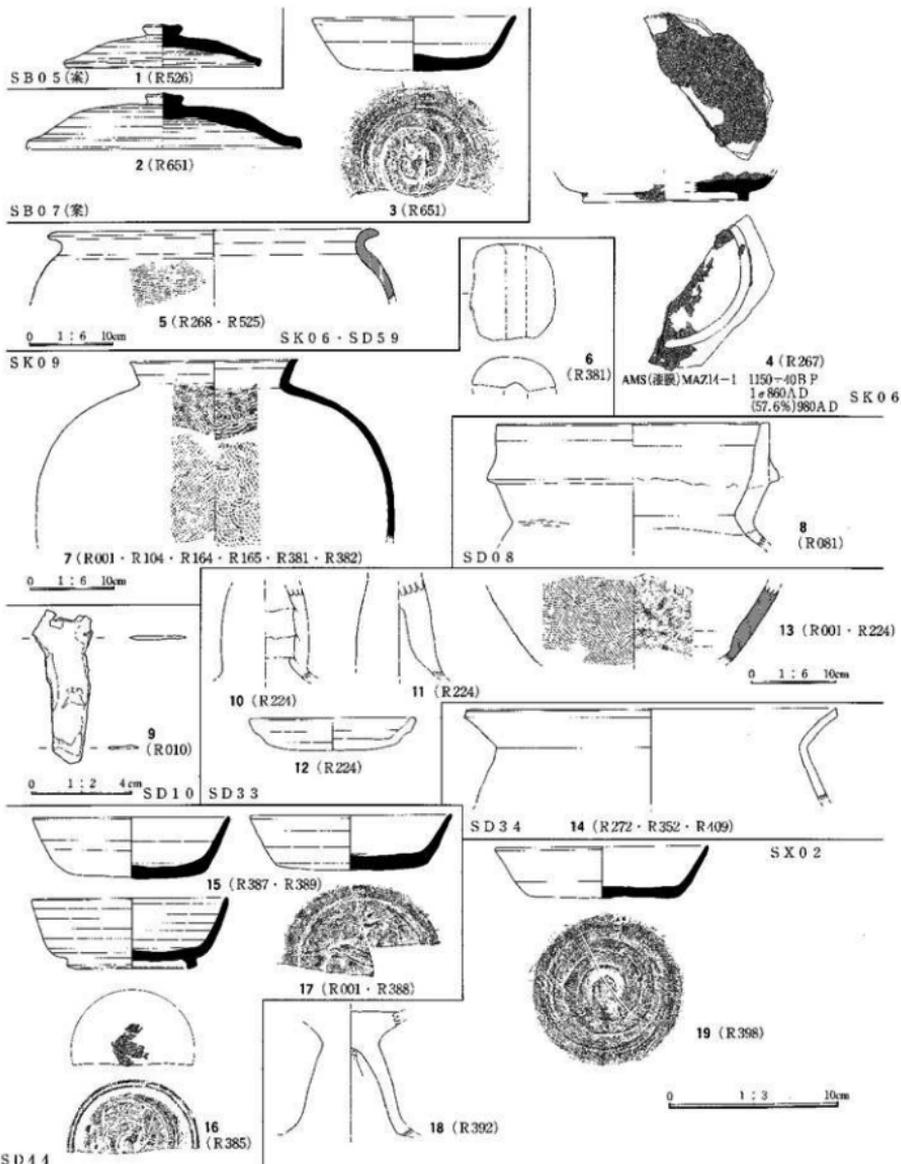






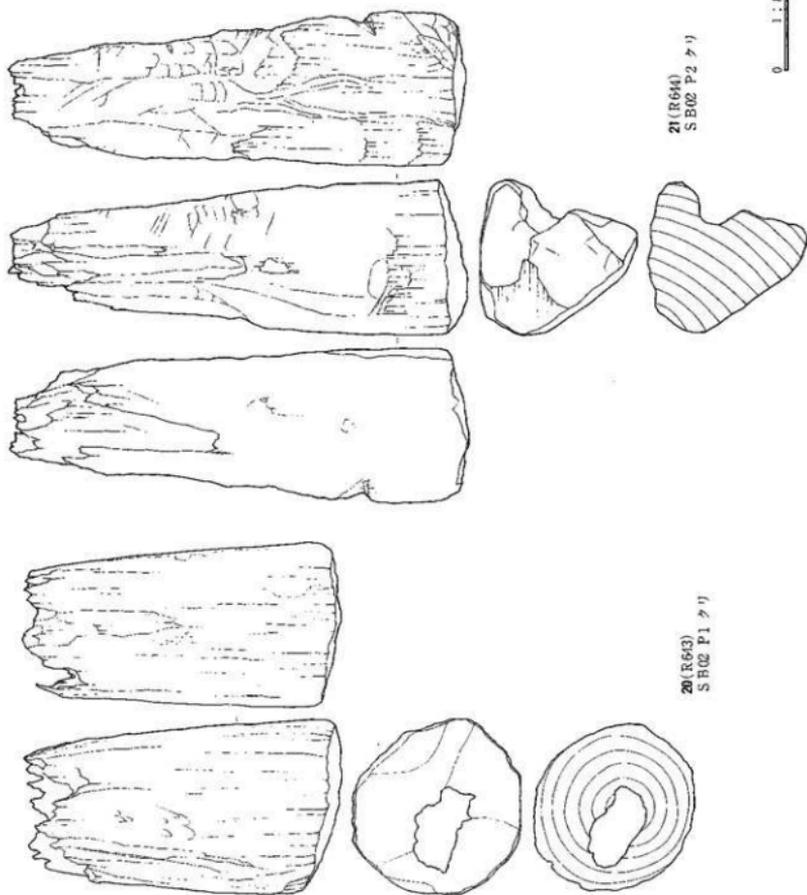
0 1:40 1m

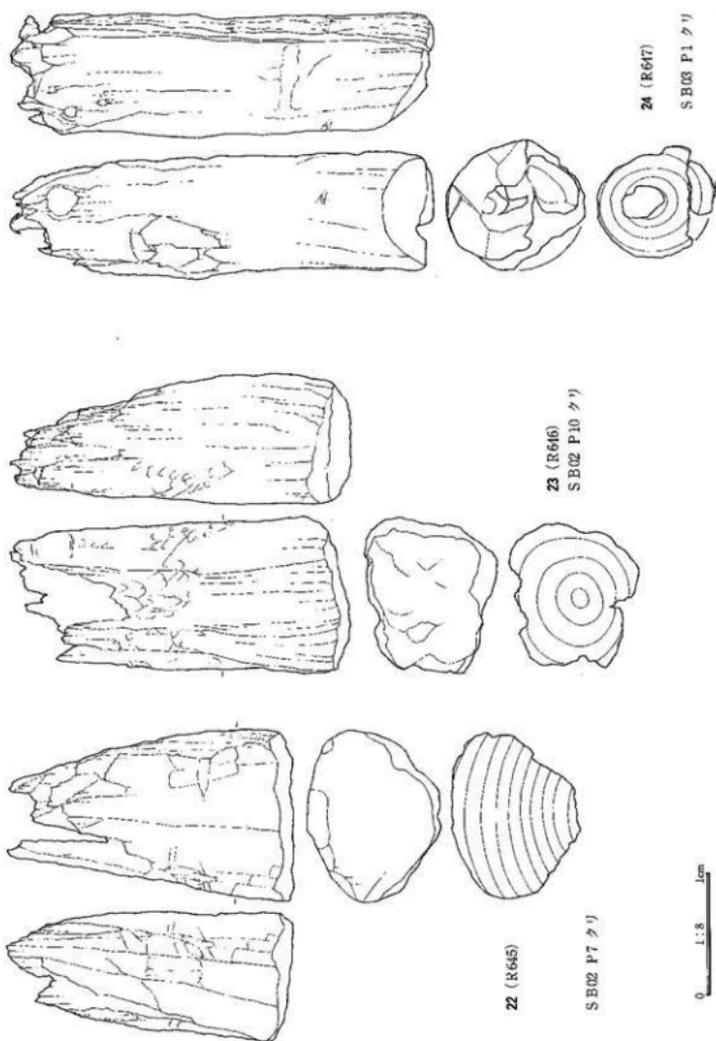
1. 暗褐色砂質土：粘りあり。締りあり。
2. 黒褐色砂質土：粘性あり。締りややあり。ロームブロック混入。
3. 暗褐色土：粘性あり。締りあり。ローム粒子混入。

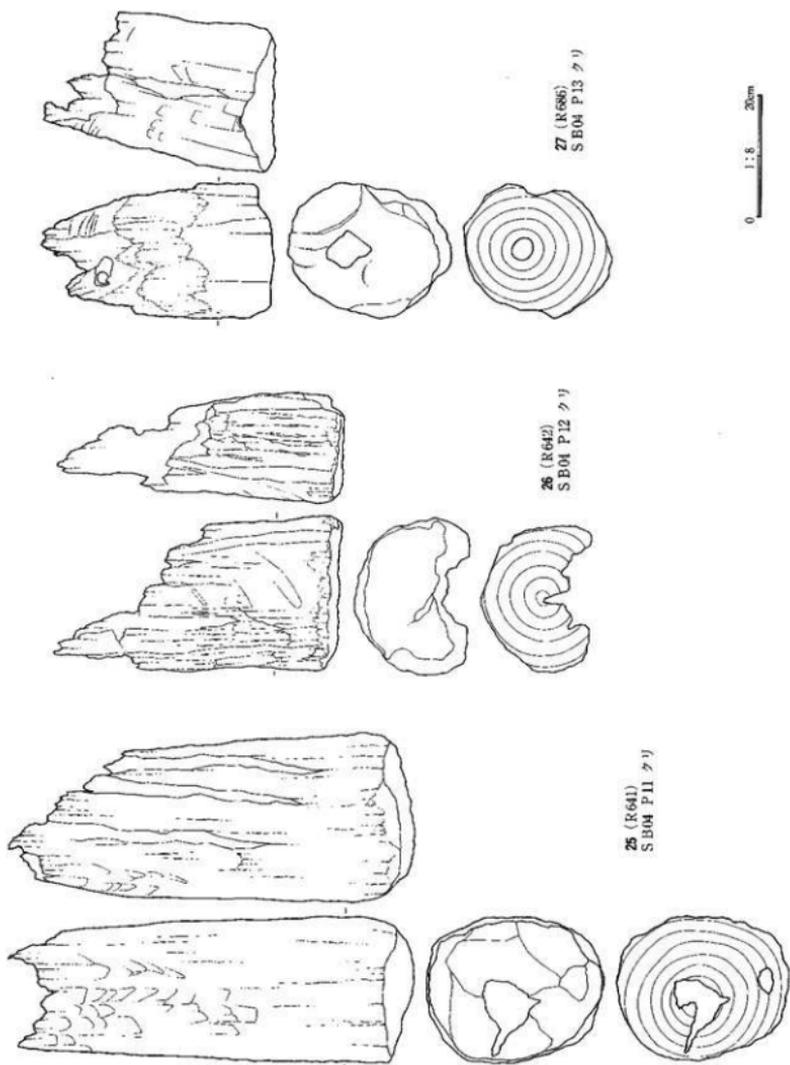


B地区遺構内出土遺物 上器類・鉄製品

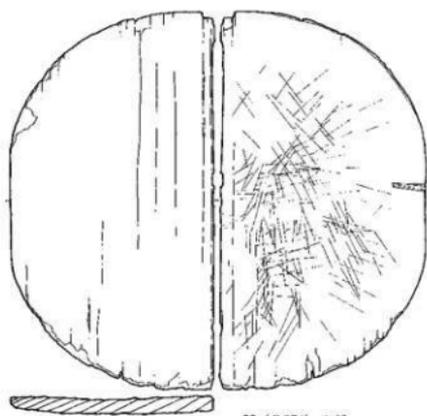
縮尺1/2、1/3、1/6



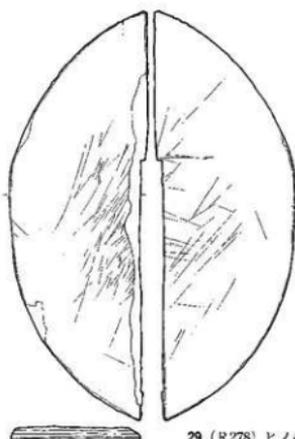




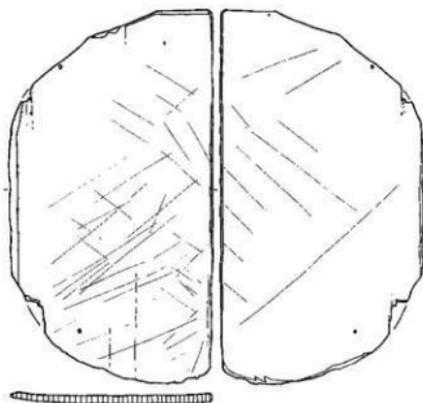
【B地区】掘立柱建物SB04（兼）出土遺物 柱根



28 (R274) スギ



29 (R278) ヒノキ板



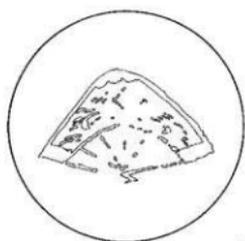
30 (R279) ヒノキ

0 1:3 10cm



31 (R280) ケヤキ

0 1:4 10cm

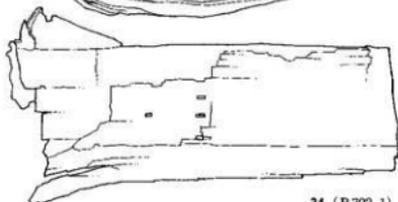
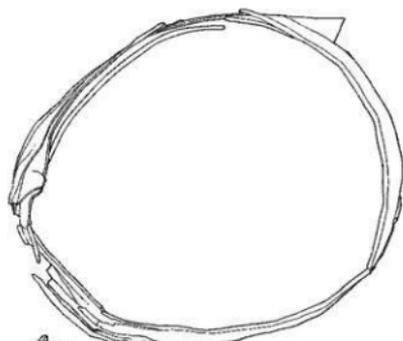


32 (R266) プナ属
AMS(漆塗膜)
MAZ14-15
880±60B P
1σ 1110A D (44.3%)
1230A D
塗膜No.3

0 1:3 10cm

SK06

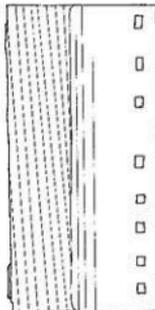
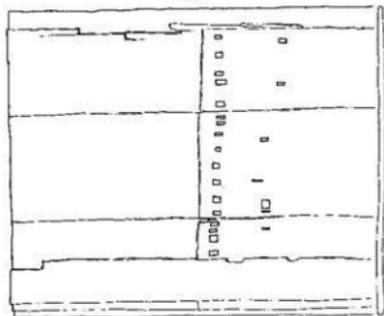
SK08



34 (R702-1)
スギ



0 1:8 40cm

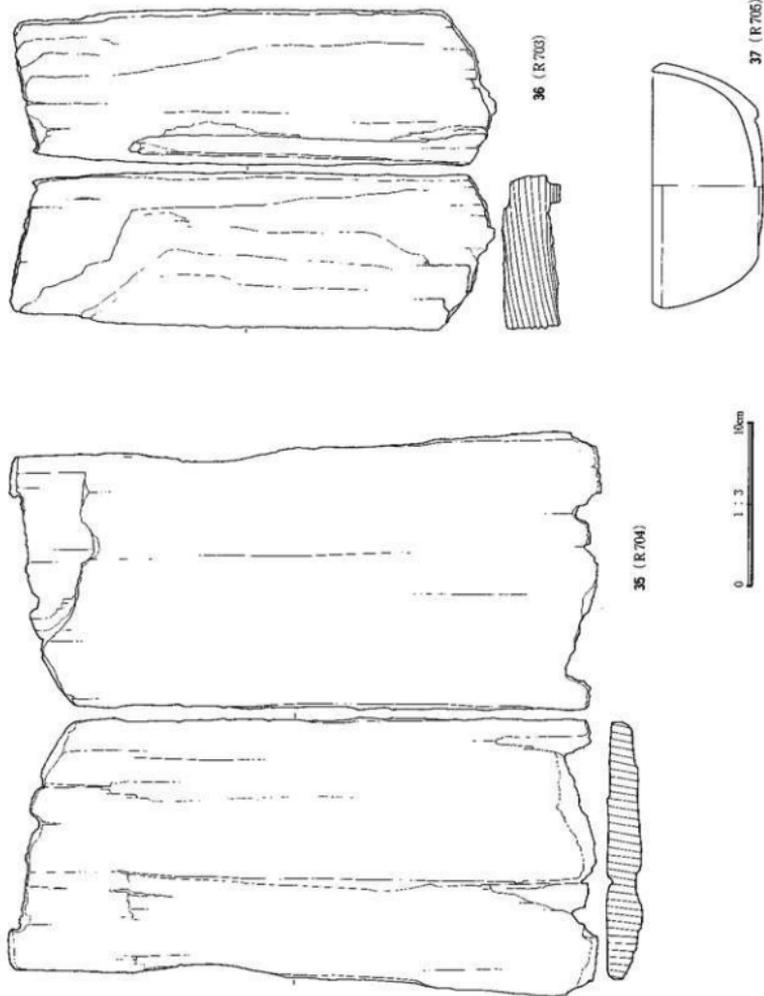


33 (R702-2)
スギ

[B地区] 土坑SK06・土坑SK08出土遺物 木製品

縮尺1/3、1/8

図面三九 遺物実測図





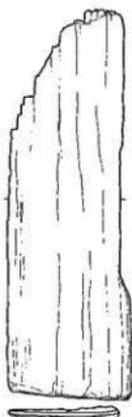
38 (R687) スギ



39 (R688) スギ



40 (R696) 未分析
漆付着 (肉眼観察)

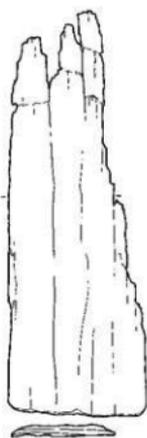


41 (R693) スギ



42 (R695) 未分析

0 1 : 4 30cm



43 (R691) スギ



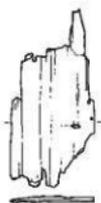
44 (R692)



45 (R694)



46 (R697-1) スギ



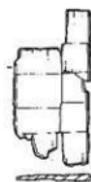
47 (R697-2) スギ



48 (R698)



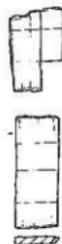
49 (R699)



50 (R700-1)



52 (R700-3)



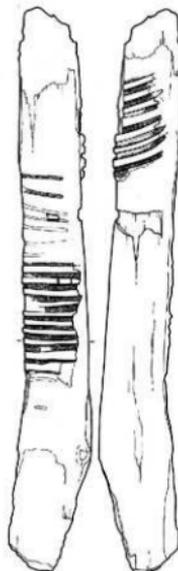
51 (R700-2)



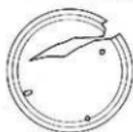
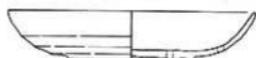
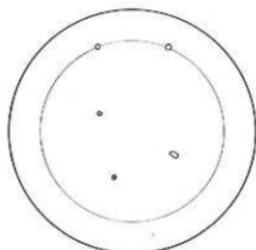
53 (R668) スギ



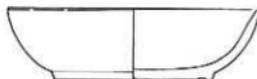
54 (R531-2) ウルシ
AMS (漆樹液)
MAZ14-13
160±50 B P
1σ 1720 A D (33.0%) 1820 A D



55 (R531-1) ウルシ
AMS (漆樹液)
MAZ14-12
60±50 B P
1σ 1870 A D (28.4%) 1920 A D



56 (R680) ケヤキ
AMS (漆塗膜)
MAZ14-18
570±50 B P
1σ 1300 A D (41.4%) 1360 A D
塗膜No 4



57 (R561) スギ
AMS (漆塗膜)
MAZ14-19
880±50 B P
1σ 1150 A D
(36.6%) 1220 A D
塗膜No 1

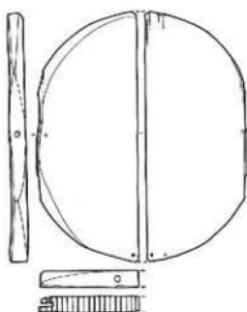


58 (R613) イスノキ

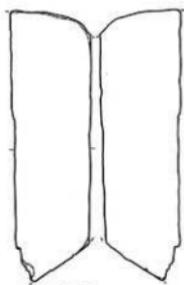




59 (R582) スギ
漆付着
(肉眼観察)



60 (R605) スギ



61 (R609) スギ

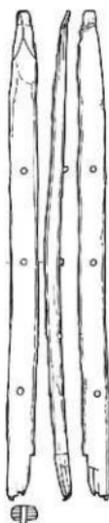
0 1 : 3 10cm



62 (R570) スギ



63 (R571) スギ

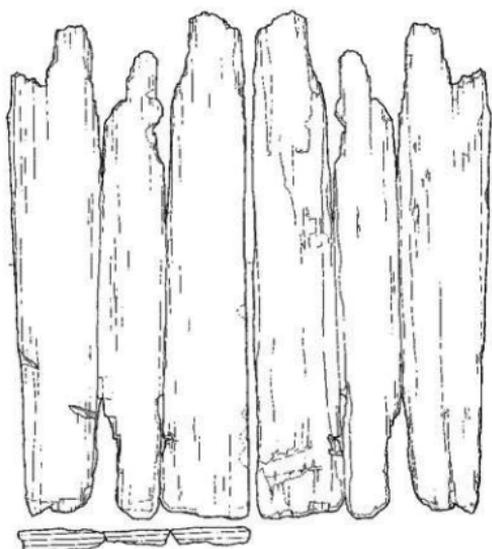


64 (R602) スギ

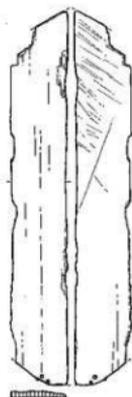


65 (R538) スギ

0 1 : 4 10cm



66 (R530)



67 (R559) スギ
曲物

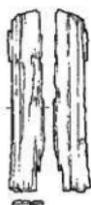
0 1:4 10cm



68 (R562)



69 (R563)



70 (R564)



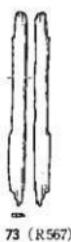
71 (R565)



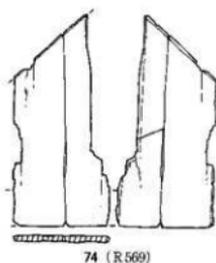
72 (R566)

0 1:3 10mm

図面四五
遺物実測図



73 (R567)



74 (R569)



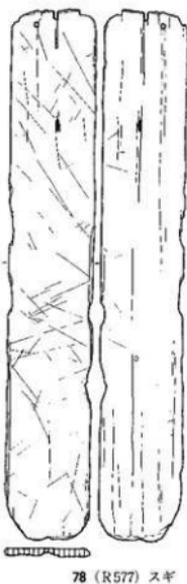
75 (R572) スギ



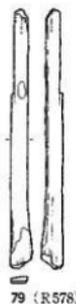
76 (R573)



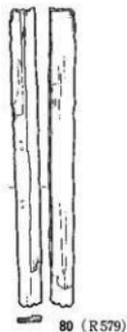
77 (R574)



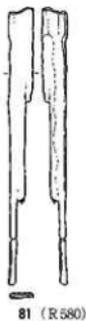
78 (R577) スギ



79 (R578)



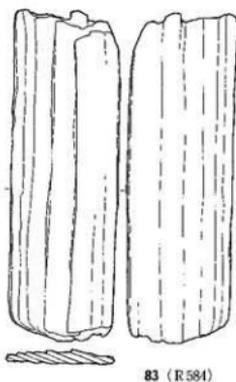
80 (R579)



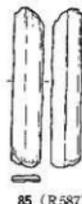
81 (R580)



84 (R586)



83 (R584)

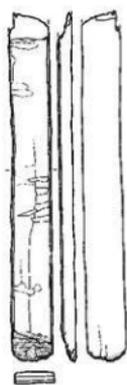


85 (R587)



82 (R582)

0 1:3 10cm



86 (R589)



87 (R590)



88 (R593)



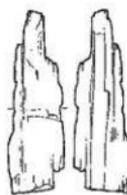
89 (R594)



90 (R595)



91 (R597)



92 (R598)



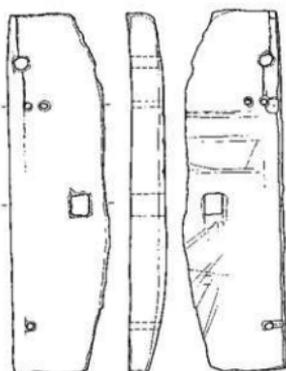
93 (R591) スギ



94 (R588) スギ

0 1:3 10cm

0 1:4 10cm



95 (R599) スギ



96 (R600) スギ



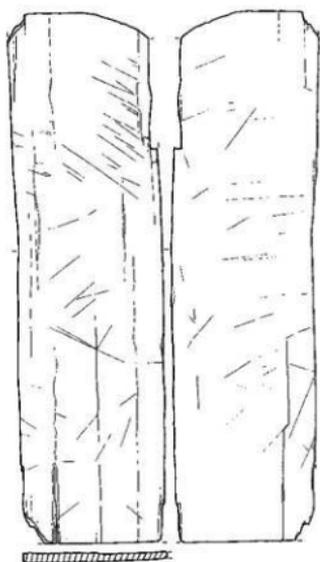
97 (R601) スギ



98 (R603)

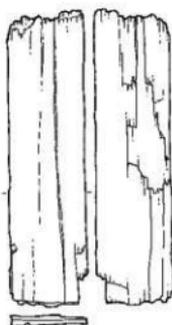


99 (R604)



100 (R606) スギ

0 1:4 10cm



101 (R607)

0 1:3 10cm



102 (R610)



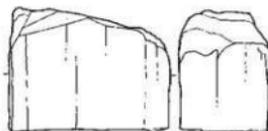
103 (R611)



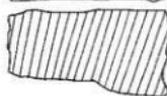
104 (R614)



108 (R664) スギ



106 (R666)



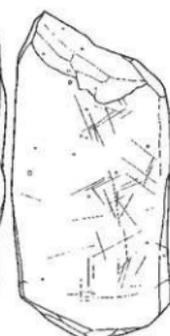
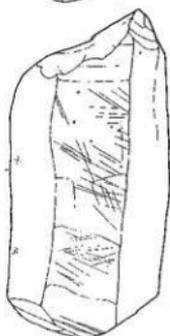
0 1:3 10cm



105 (R669) スギ



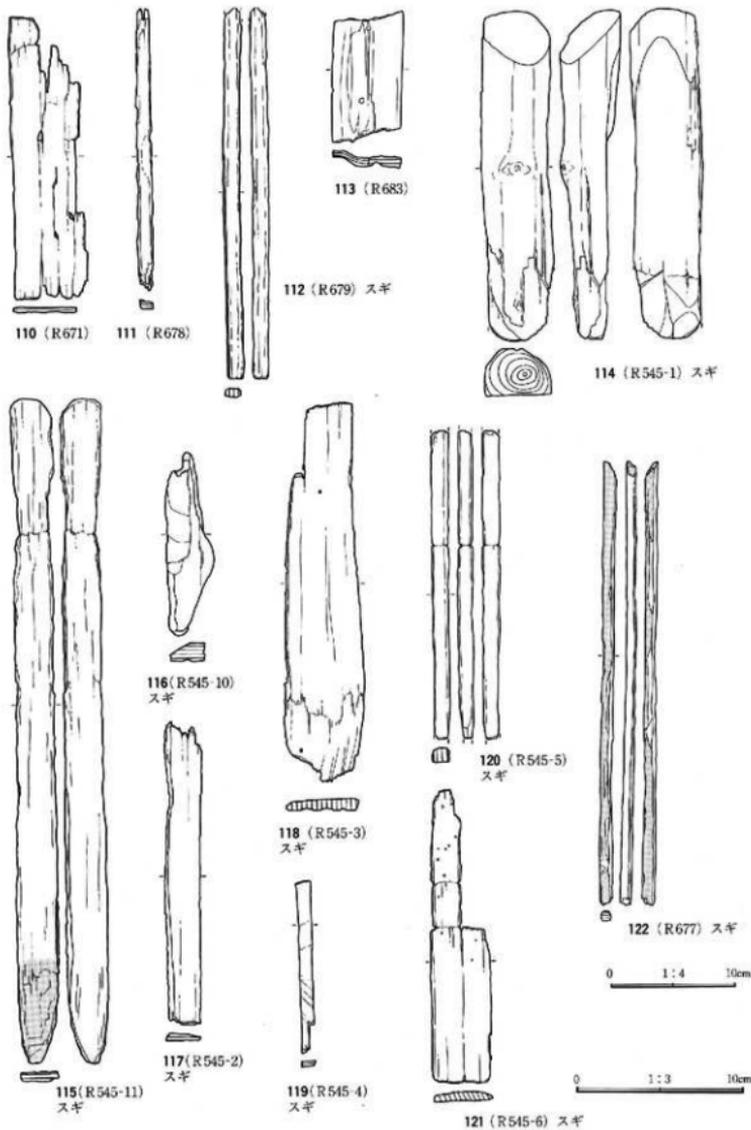
107 (R608) スギ

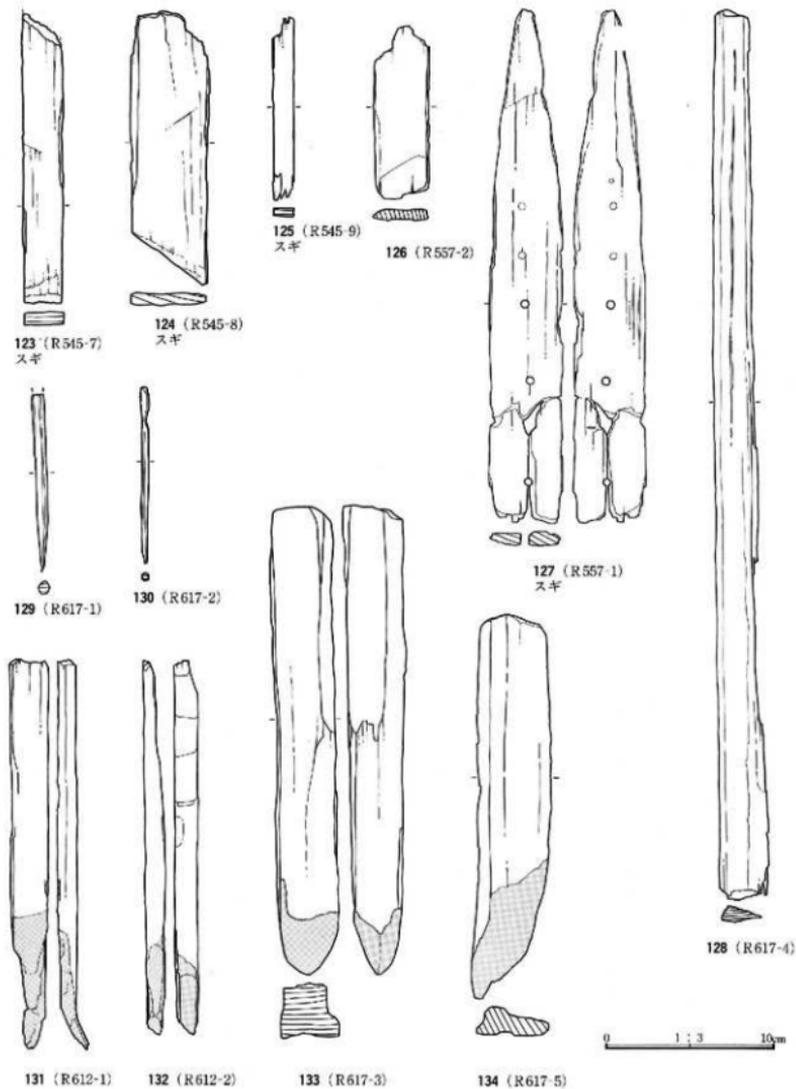


109 (R616) サクラ属



0 1:4 10cm







135 (R617-6)



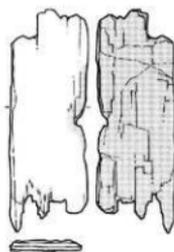
136 (R617-7)



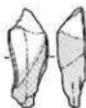
137 (R653-1) スギ



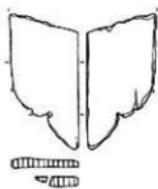
138 (R653-2) スギ



139 (R653-3) スギ



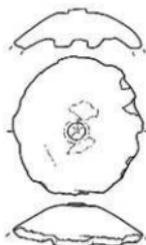
140 (R653-4) スギ



141 (R665-1)

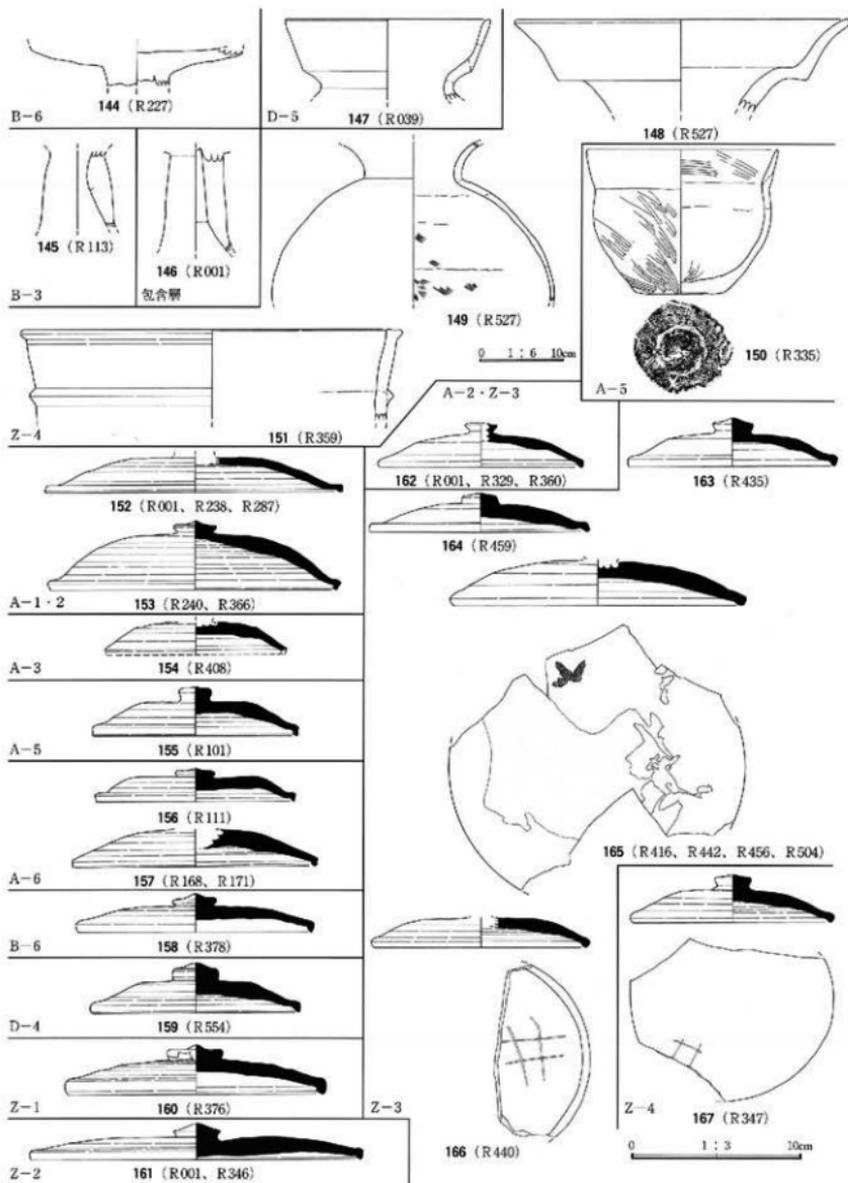


142 (R665-2)



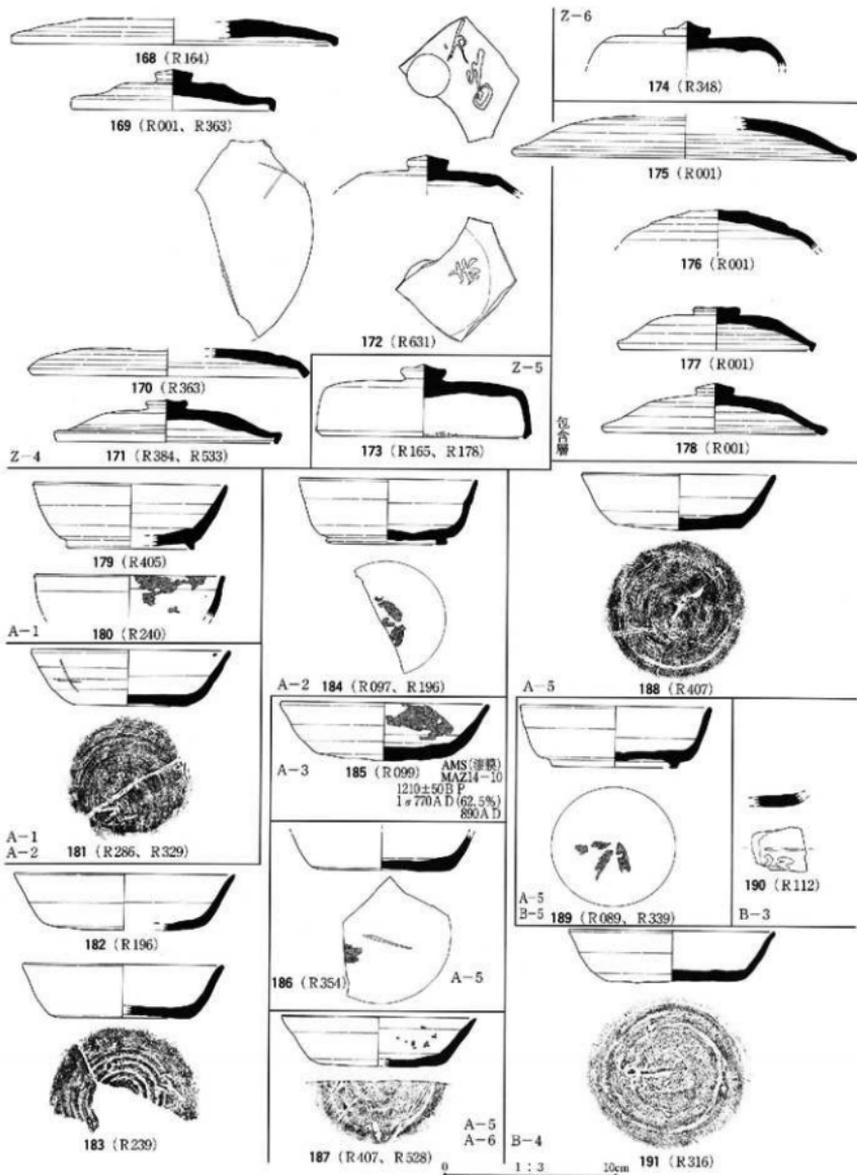
143 (R575) ヒョウタン

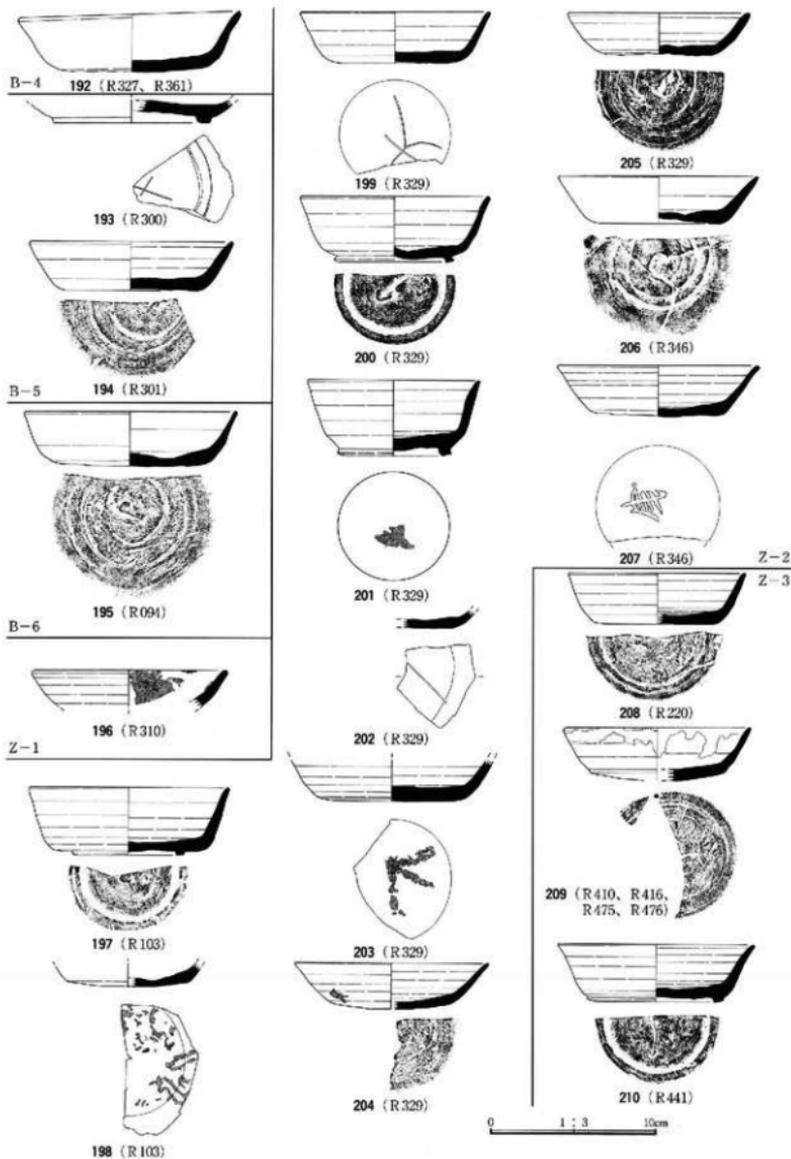
0 1:3 10cm



B地区第2西遺構外出土遺物 土器類

縮尺 1/3、1/6

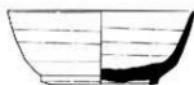




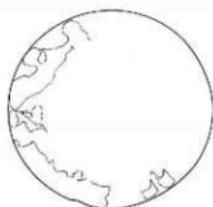
B地区第2面遺構外出土遺物 土器類

幅尺 1/3

Z-3



218 (R477)



219 (R480)



220 (R484, R515)



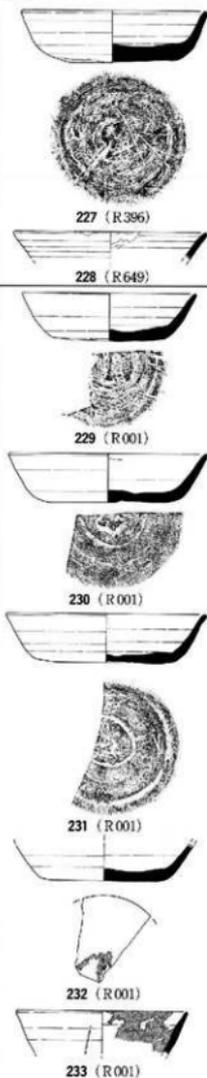
221 (R492)

0 1 : 3 10cm

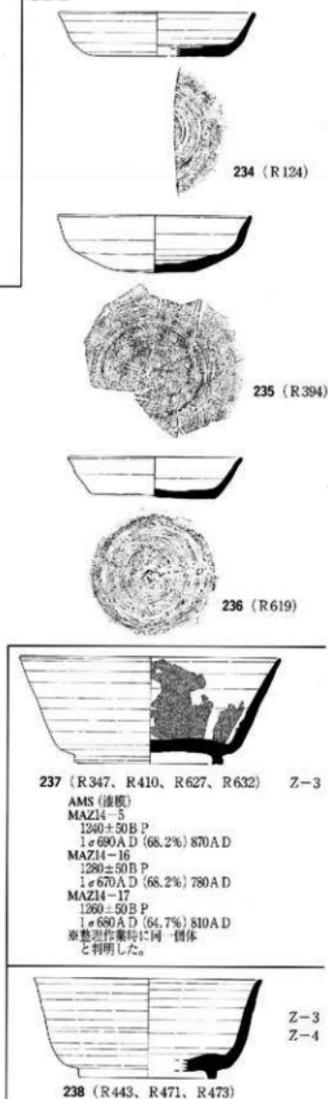
Z-3



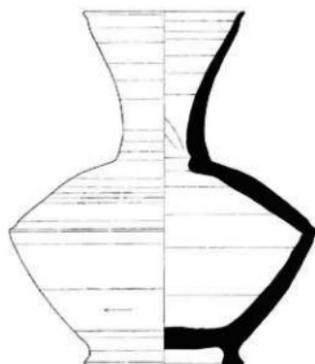
Z-4



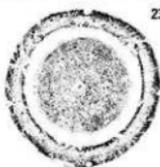
包含層



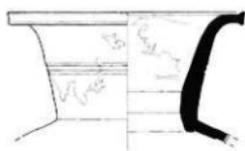
0 1 : 3 10cm



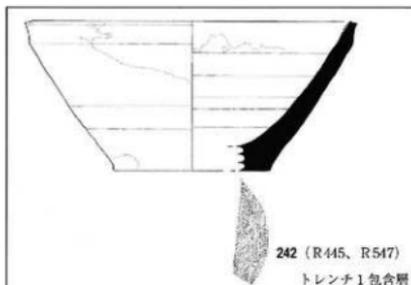
239 (R395, R474,
R493, R494)



Z-3

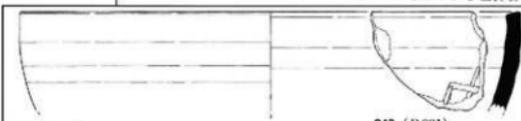


241 (R049, R105,
R166, R354,
R355, R377)

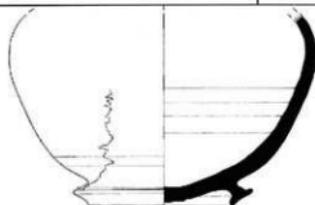


242 (R445, R547)

トレンチ1包含層

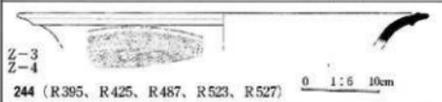


243 (R001)



240 (R445, R542,
R547)

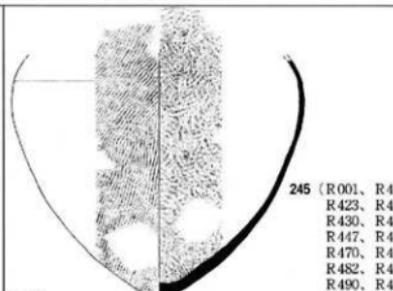
Z-5
Z-6
Z-5



244 (R395, R425, R487, R523, R527)

Z-3
Z-4

0 1:6 10cm



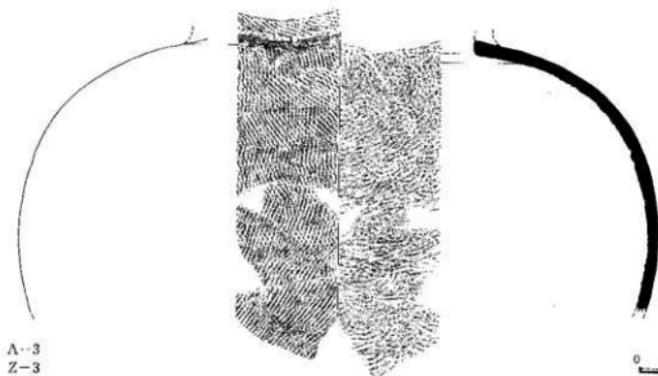
245 (R001, R421, R422,
R423, R424, R427,
R430, R431, R445,
R447, R448, R449,
R470, R479, R481,
R482, R486, R488,
R490, R496, R507,
R512, R645, R650)

Z-3

0 1:3 10cm

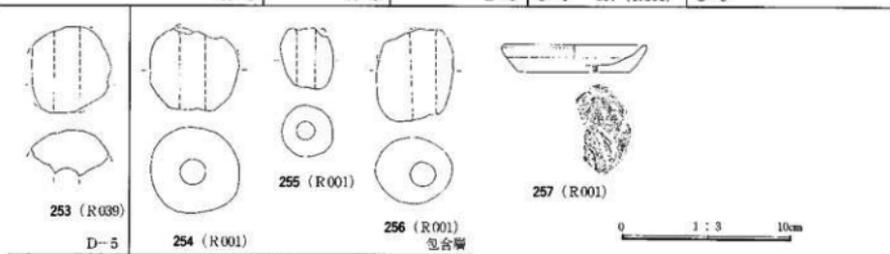
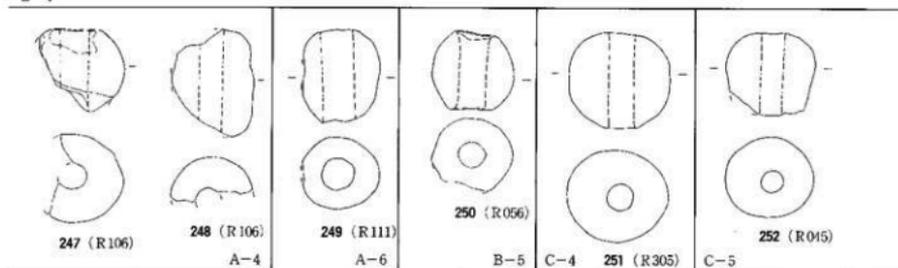
0 1:6 10cm

246 (R330・R347・R413・
R437・R457・R460・
R472・R501・R508・
K547・R550)

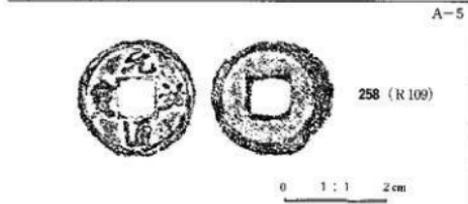


0 1 2 3 4 cm

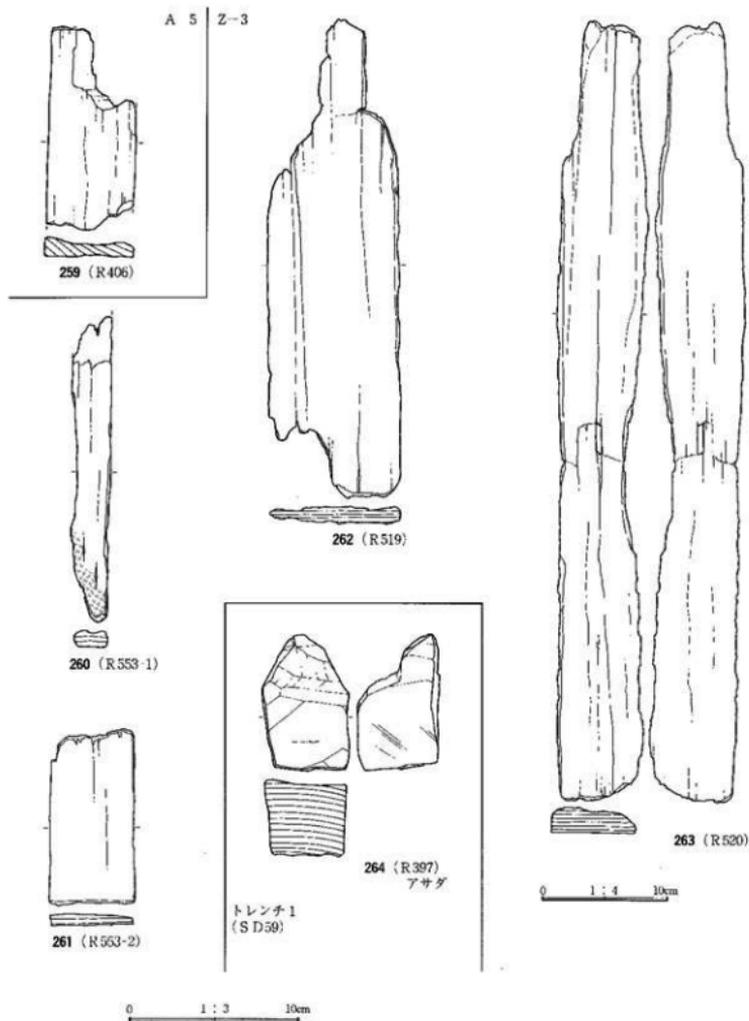
A-3
Z-3
Z 4

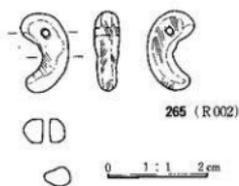


0 1 2 3 4 cm

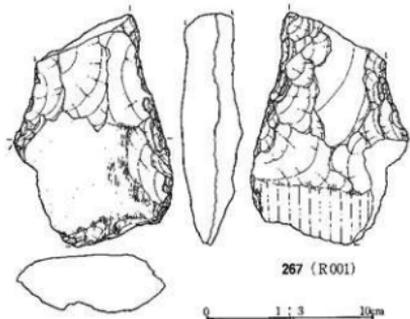


0 1 2 cm



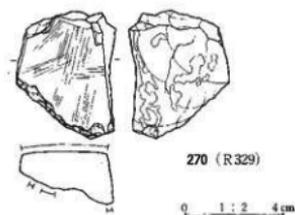


265 (R002)

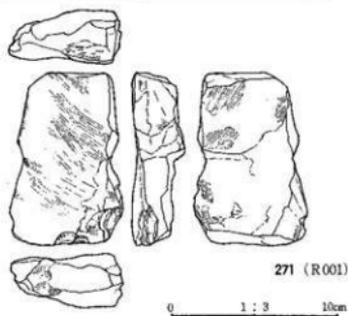


267 (R001)

包含層
Z-2

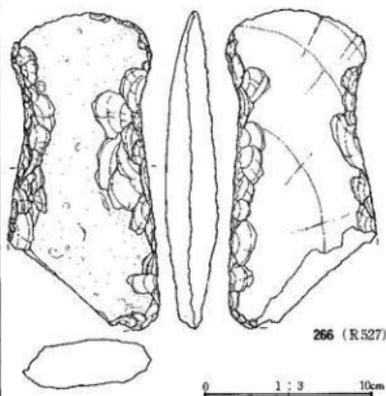


270 (R329)



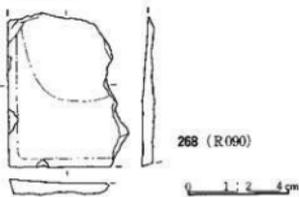
271 (R001)

B地区第2面遺構外出土遺物 石器類・石製品



266 (R527)

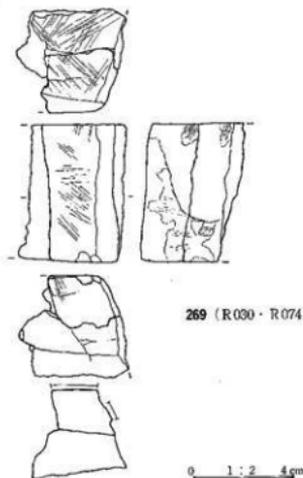
Z-4



268 (R090)

B-3

B-6



269 (R030-R074)

縮尺 1/1、1/2、1/3

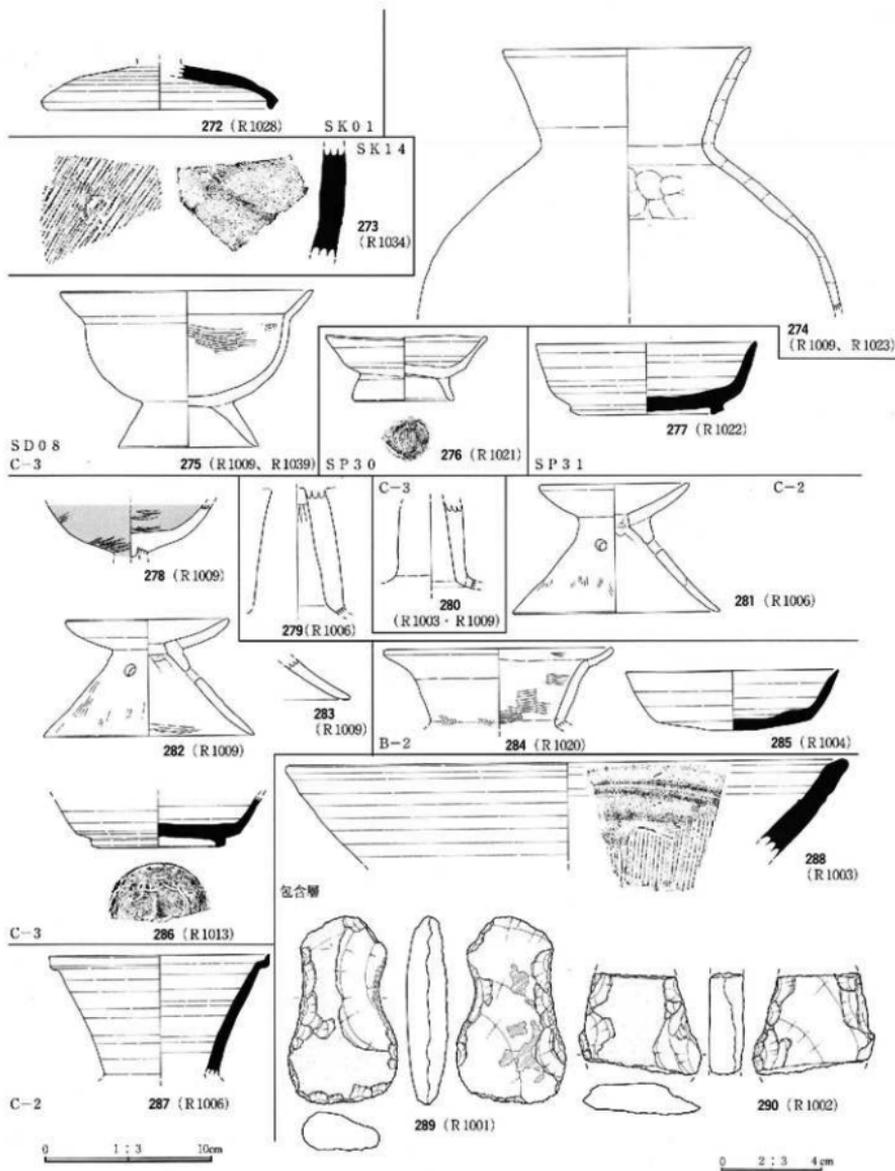
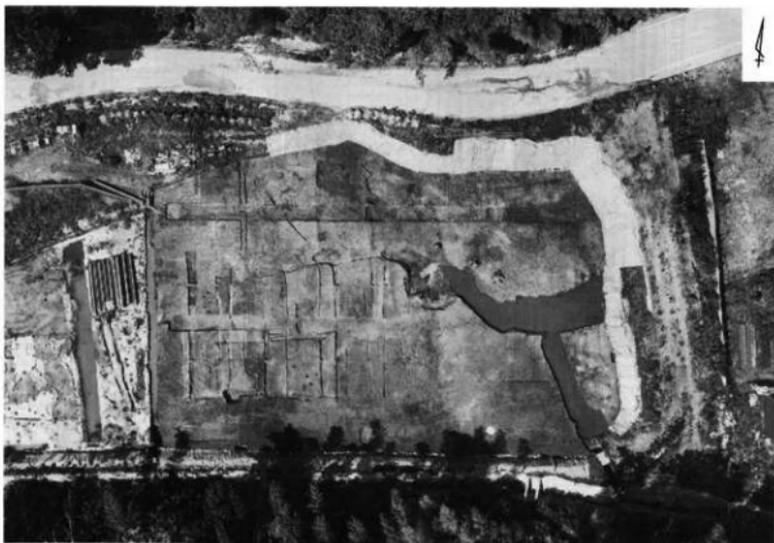


图 版



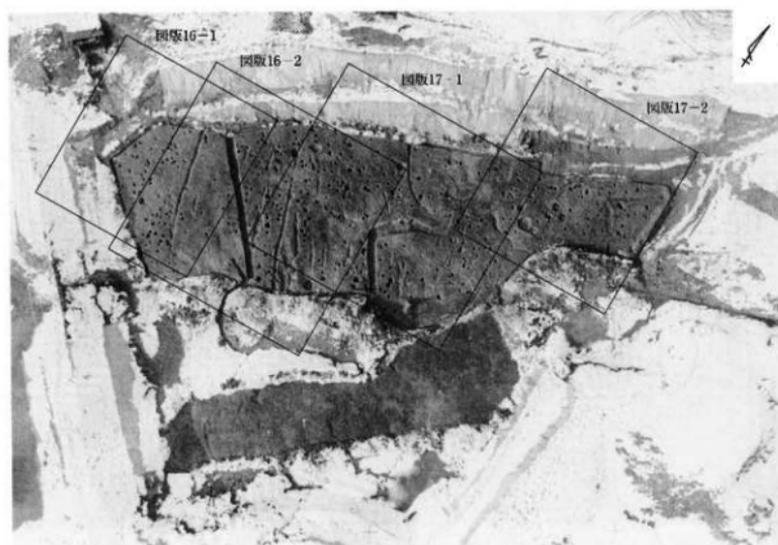
1. 遺跡遠景（南西から古代越中国府方向を窺む）



2. B地区第1面全景



1. B地区第2面全景



2. C地区第1面全景



1. B地区第2面北東部地域



2. B地区第2面西部地域



3. B地区第2面南東部地域



1. 仮設事務所等設置状況



2. 安全大会



3. B地区調査前全景（東から）



1. B地区第1面表土除去
作業風景



2. B地区第1面遺構検出
状況



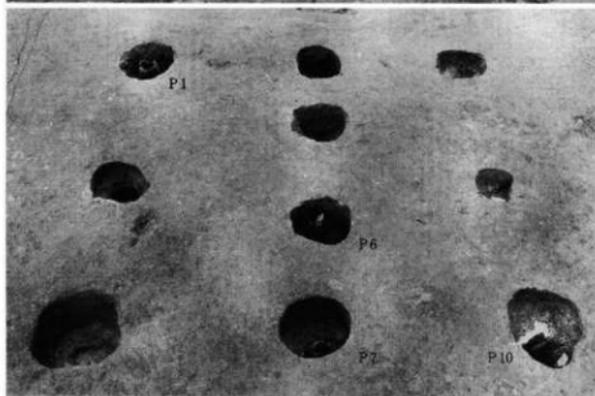
3. B地区第1面遺構覆土
除去作業風景



1. B地区第1面遺構覆土
除去完了状況(南から)



2. B地区第2面掘立柱建
物 S B01(案)完掘全景
(南から)



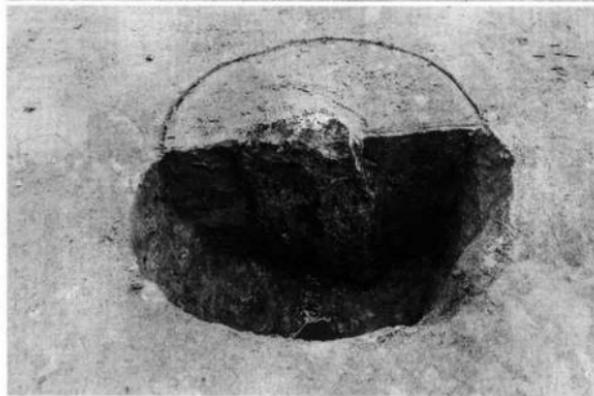
3. B地区第2面掘立柱建
物 S B02(案)完掘全景
(東から)



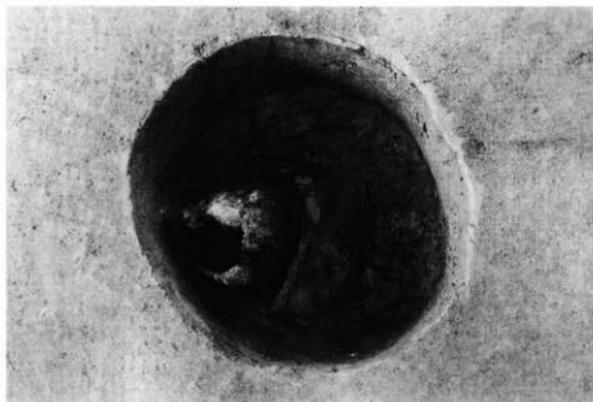
1. B地区第2面掘立柱建物SB02(案)-P1半載状況(南から)



2. B地区第2面掘立柱建物SB02(案)-P1完掘



3. B地区第2面掘立柱建物SB02(案)-P6半載状況(南から)



1. B地区第2面掘立柱建物S B02(案)-P7完掘
(北から)



2. B地区第2面掘立柱建物S B02(案)-P10半数
状況(北から)



3. B地区第2面掘立柱建物S B03(案)完掘全景
(東から)



1. B地区第2面掘立柱建物S B03(案)-P1半載状況(東から)



2. B地区第2面掘立柱建物S B04(案)完掘全景(南から)



3. B地区第2面掘立柱建物S B04(案)-P11半載状況(北から)



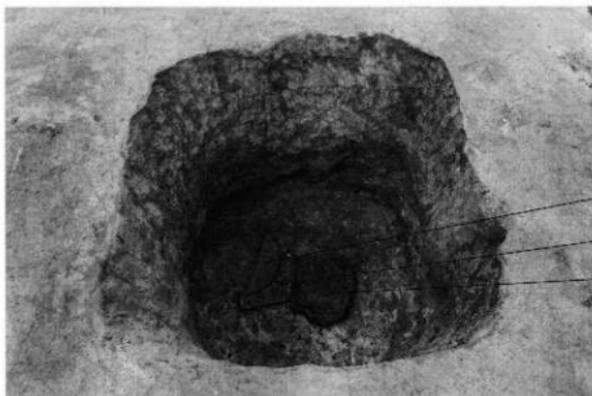
1. B地区第2面掘立柱建物
物S B04(案) - P11完掘
(東から)



2. B地区第2面掘立柱建物
物S B01(案)・02(案)・
03(案)・04(案)完掘(北
東から)



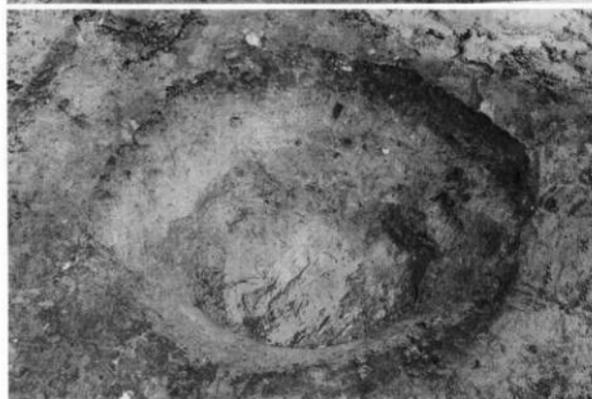
3. B地区第2面掘立柱建物
物S B02(案)・03(案)・
04(案)完掘(北から)



1. B地区第2面土坑SK
01遺物出土状況(西から)



2. B地区第2面土坑SK
03完掘(西から)



3. B地区第2面土坑SK
04完掘(西から)



1. B地区第2面土坑SK
05完掘(南から)



33 (R701-2)

38 (R687)

2. B地区第2面土坑SK
08曲物等出土状況(南か
ら)



36 (R703)

33 (R701-2)

39 (R688)

38 (R687)

3. B地区第2面土坑SK
08曲物等出土状況近景
(南から)



56 (R680)

131 (R612-1)

1. B地区第2面掘立柱建物S B10(案)及び溝S D59(北から)



57 (R561)

109 (R616)

115 (R545-11)

58 (R613)

104 (R614)

131 (R612-1)

61 (R609)

78 (R577)

60 (R605)

2. B地区第2面溝S D59遺物出土状況①(北から)



95 (R599)

96 (R600)

64 (R602)

97 (R601)

3. B地区第2面溝S D59遺物出土状況②(東から)



78 (R577)

61 (R609)

60 (R605)

1. B地区第2面溝S D59
遺物出土状況③(北から)



2. B地区第2面溝S D59
漆器椀【56 (R680)】出
土状況近景(西から)



3. B地区第2面溝S D59
櫛【58 (R613)】出土状
況近景(北から)



1. B地区第2面溝SD59
北側セクション(南から)



2. B地区第2面発掘調査
作業状況(西から)



3. B地区第2面実機ヘリ
空撮状況(西から)



1. C地区西北部地域①



2. C地区西北部地域②



1. C地区北部地域



2. C地区北东部地域



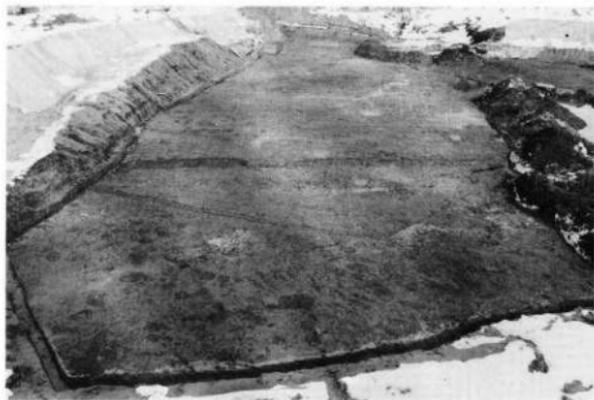
1. C地区調査前全景（東から）



2. C地区重機搬入状況（東から）



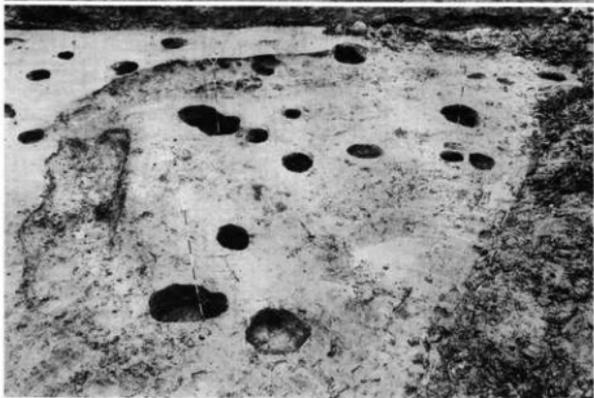
3. C地区表土除去作業状況（北から）



1. C地区遺構検出状況
(西から)



2. C地区北東部地域遺構
検出状況 (西から)



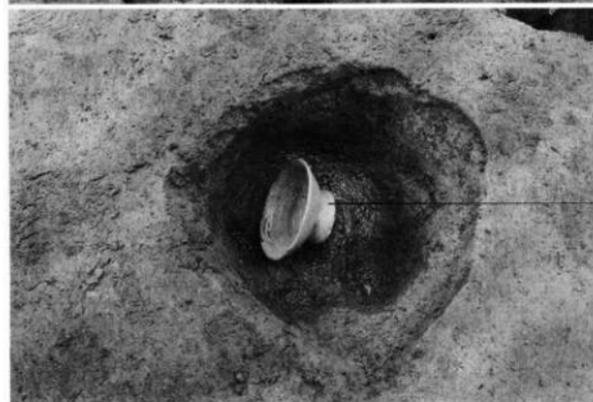
3. C地区掘立柱建物SB
01(案)完掘 (南から)



1. C地区掘立柱建物S B
02(案)完掘(南から)

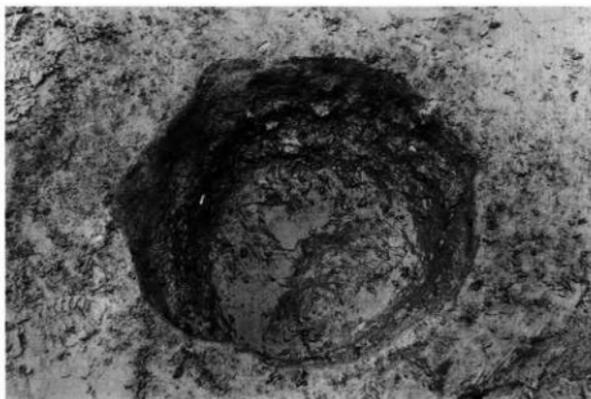


2. C地区溝S D01・03・
04、掘立柱建物S B10
(案)完掘(南東から)

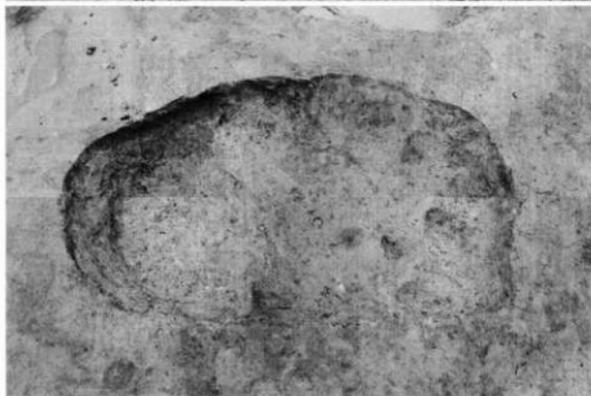


276 (R1021)

3. C地区小ピットS P30
遺物出土状況(北から)



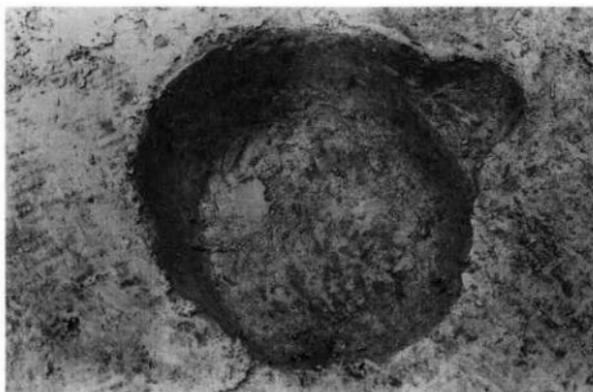
1. C地区土坑SK01完掘
(南から)



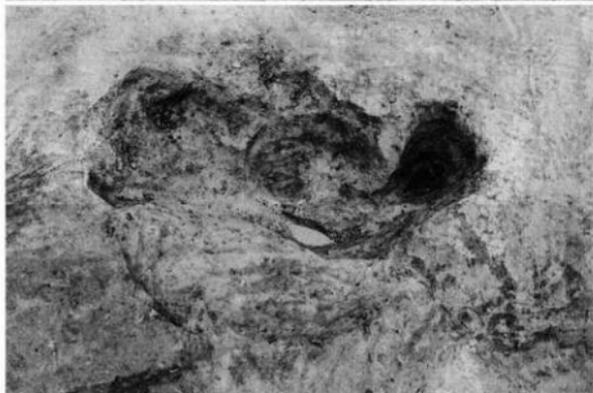
2. C地区土坑SK02・03
完掘(東から)



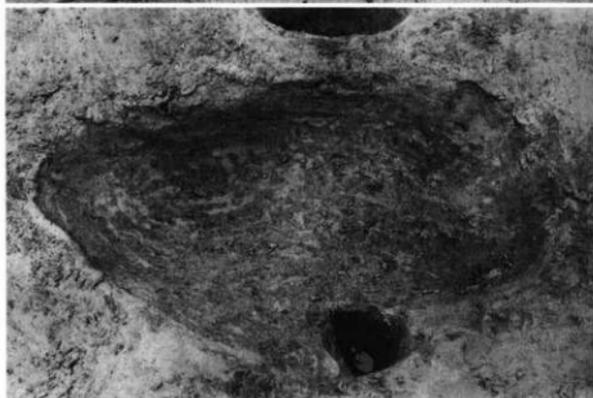
3. C地区土坑SK04完掘
(南から)



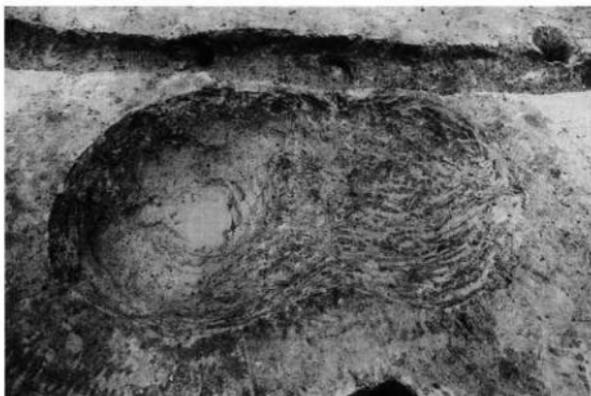
1. C地区土坑S K05完掘
(南から)



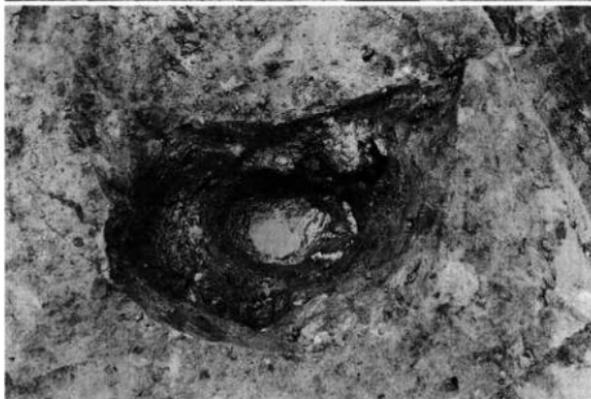
2. C地区土坑S K06完掘
(南東から)



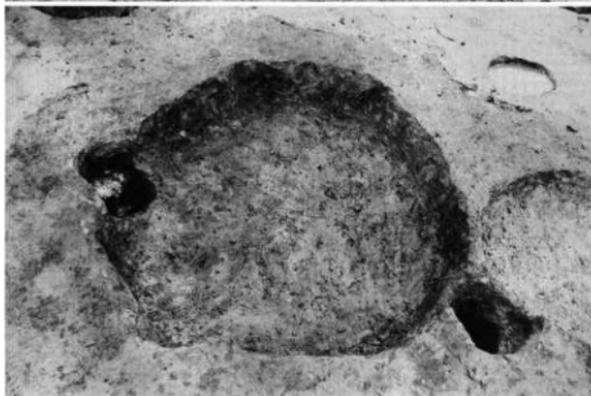
3. C地区土坑S K07完掘
(南東から)



1. C地区土坑SK08・09
完掘（南西から）



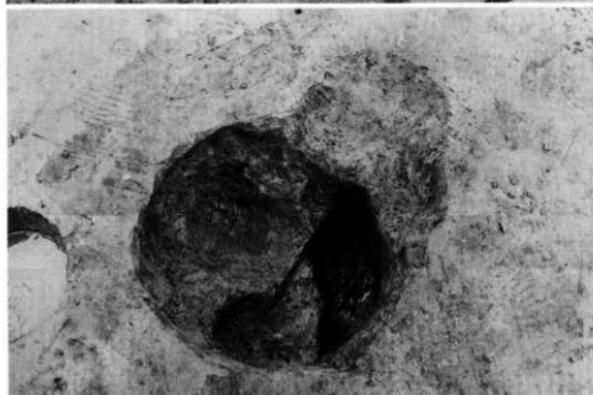
2. C地区土坑SK10完掘
（北西から）



3. C地区土坑SK11完掘
（南から）



1. C地区土坑SK12完掘
(南東から)



2. C地区土坑SK13完掘
(南東から)



3. C地区土坑SK14完掘
(南から)



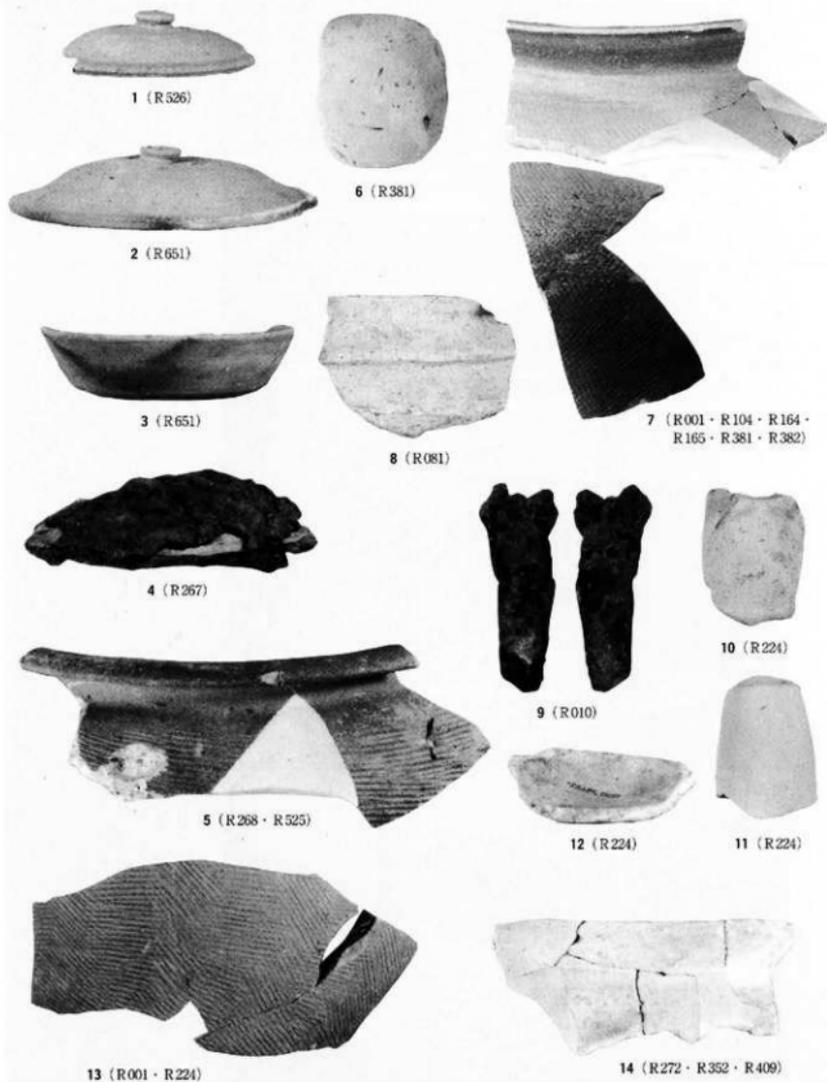
1. 遺物注記作業状況



2. 遺物接合作業状況



3. 図面整理作業状況



B地区遺構内出土遺物① 土器類・鉄製品 (遺物番号1~14)



15 (R387・R389)



17 (R001・R388)



18 (R392)



16 (R385)



19 (R398)



20 (R643)



21 (R644)





22 (R645)



23 (R646)



24 (R647)



25 (R641)

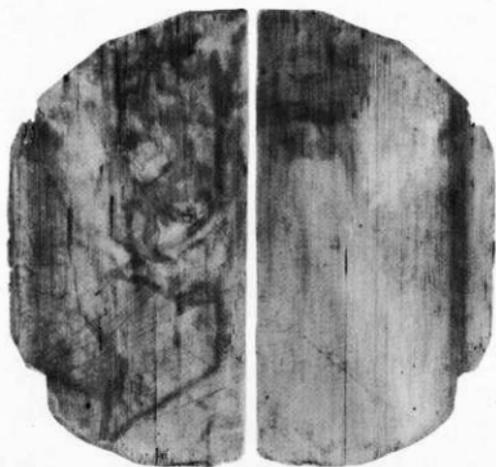


26 (R642)

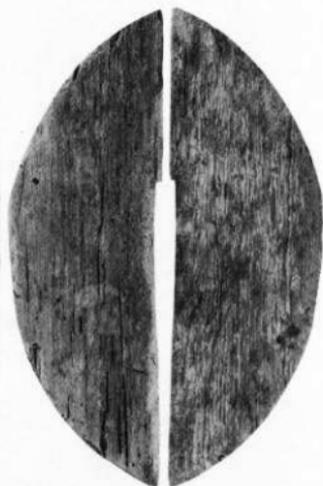
27 (R686)



28 (R274)



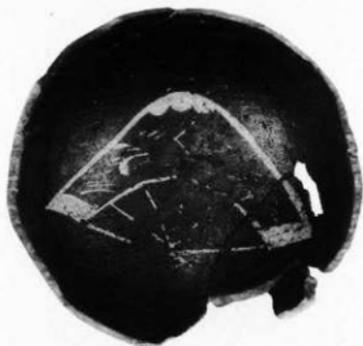
29 (R278)



30 (R279)



31 (R280)



32 (R 266)



34 (R 702-1)



33 (R 702-2)



35 (井戸枠内2)



37 (井戸枠内3)



36 (井戸枠内1)



38 (R687)



39 (R688)



40 (R696)



41 (R693)



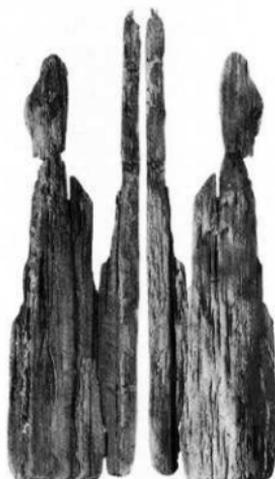
42 (R695)



43 (R691)



44 (R692)



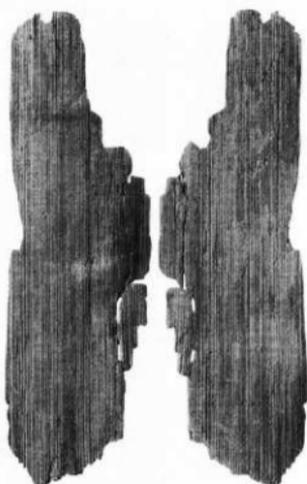
45 (R694)



46 (R697-1)



47 (R697-2)



48 (R698)



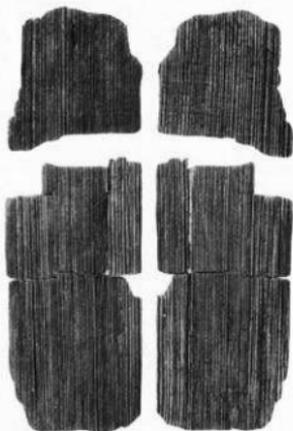
49 (R699)



50 (R700-1)



51 (R700-2)



52 (R700-3)



53 (R668)



54 (R531-2)

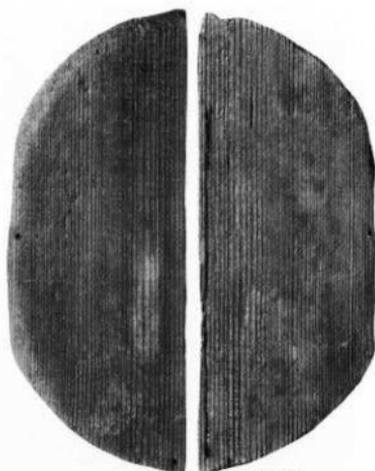
55 (R531-1)



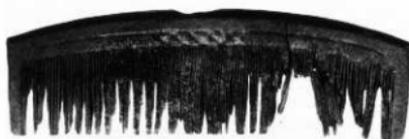
56 (R680)



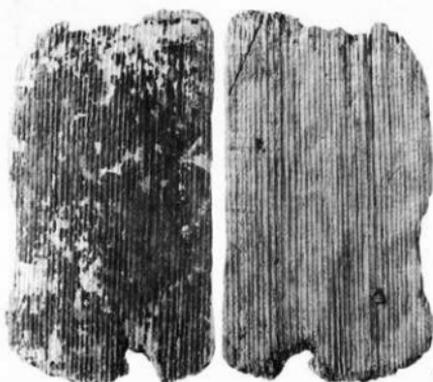
57 (R561)



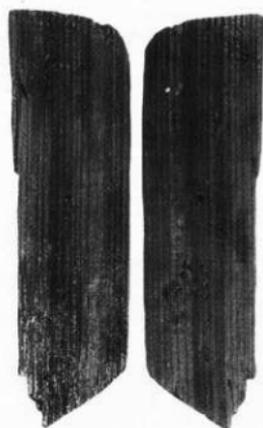
60 (R605)



58 (R613)



59 (R592)



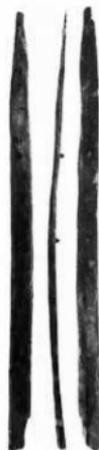
61 (R609)



62 (R570)



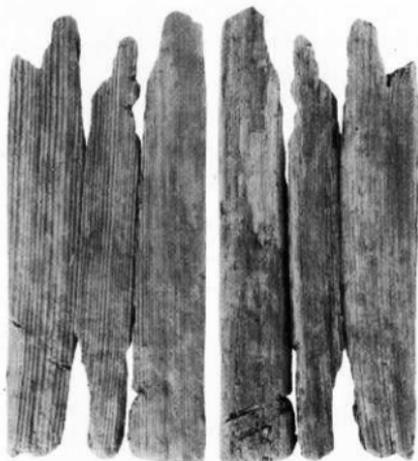
63 (R571)



64 (R602)



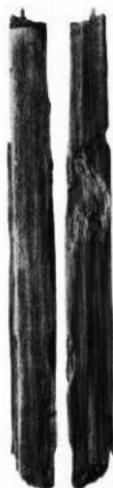
65 (R558)



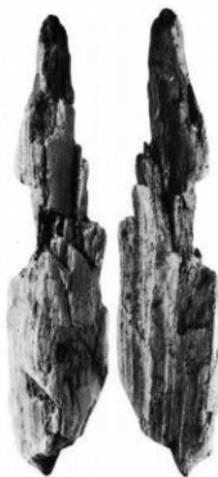
66 (R530)



67 (R559)



68 (R 562)



69 (R 563)



70 (R 564)



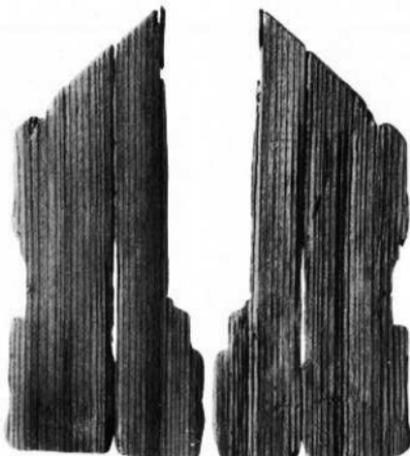
71 (R 565)



72 (R 566)



73 (R 567)



74 (R 569)



75 (R 572)



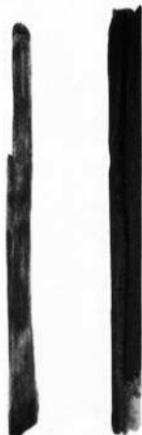
76 (R573)



77 (R574)



78 (R577)



79 (R578)

80 (R579)



81 (R580)



82 (R582)



83 (R584)



84 (R586)



85 (R.587)



86 (R.589)



87 (R.590)



88 (R.593)



89 (R.594)



90 (R.595)



91 (R.597)



92 (R.598)



93 (R.591)



94 (R.588)



95 (R599)



96 (R600)



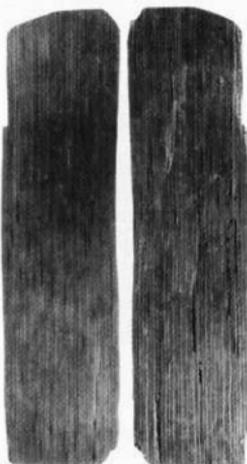
97 (R601)



98 (R603)



99 (R604)



100 (R606)



101 (R607)



102 (R610)



103 (R611)



104 (R614)



105 (R669)



107 (R608)



108 (R664)



106 (R666)



109 (R616)



110 (R671)



111 (R678)



112 (R679)



113 (R683)



114 (R545-1)



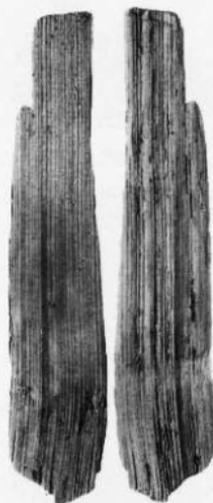
115 (R545-11)



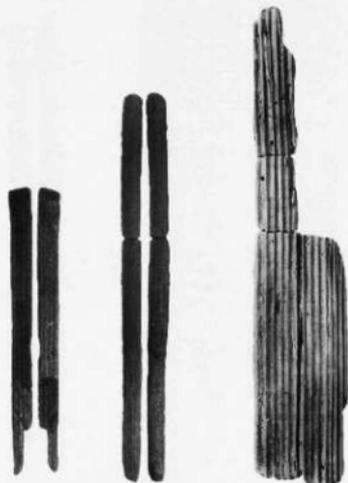
116 (R545-10)



117 (R545-2)



118 (R545-3)



119 (R545-4)

120 (R545-5)

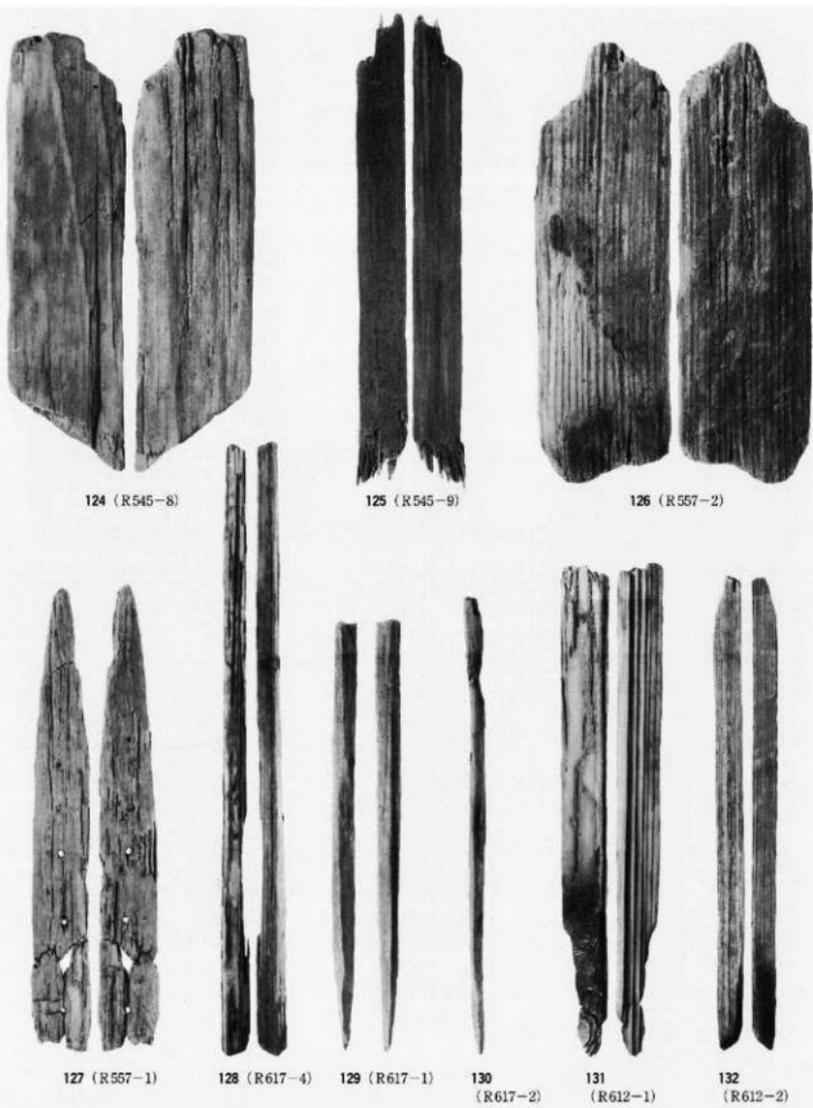
121 (R545-6)



122 (R667)



123 (R545-7)



B地区遺構内出土遺物④ 木製品 (遺物番号124～132)



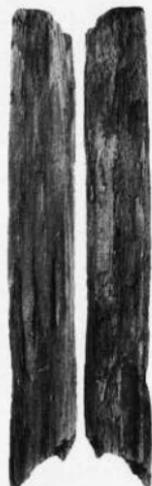
133 (R617-3)



134 (R617-5)



135 (R617-6)



136 (R617-7)



137
(R653-1)



138 (R653-2)



139 (R653-3)



140 (R653-4)



141 (R655-1)



143 (R575)



142 (R655-2)



144 (R 227)



145 (R 113)



146 (R 001)



149 (R 527)



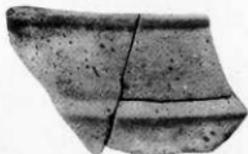
147 (R 039)



150 (R 335)



148 (R 527)



151 (R 359)



152 (R 001 - R 238 - R 287)



153 (R 240 - R 366)



154 (R 408)



155 (R 101)



156 (R 111)



157 (R 168 - R 171)



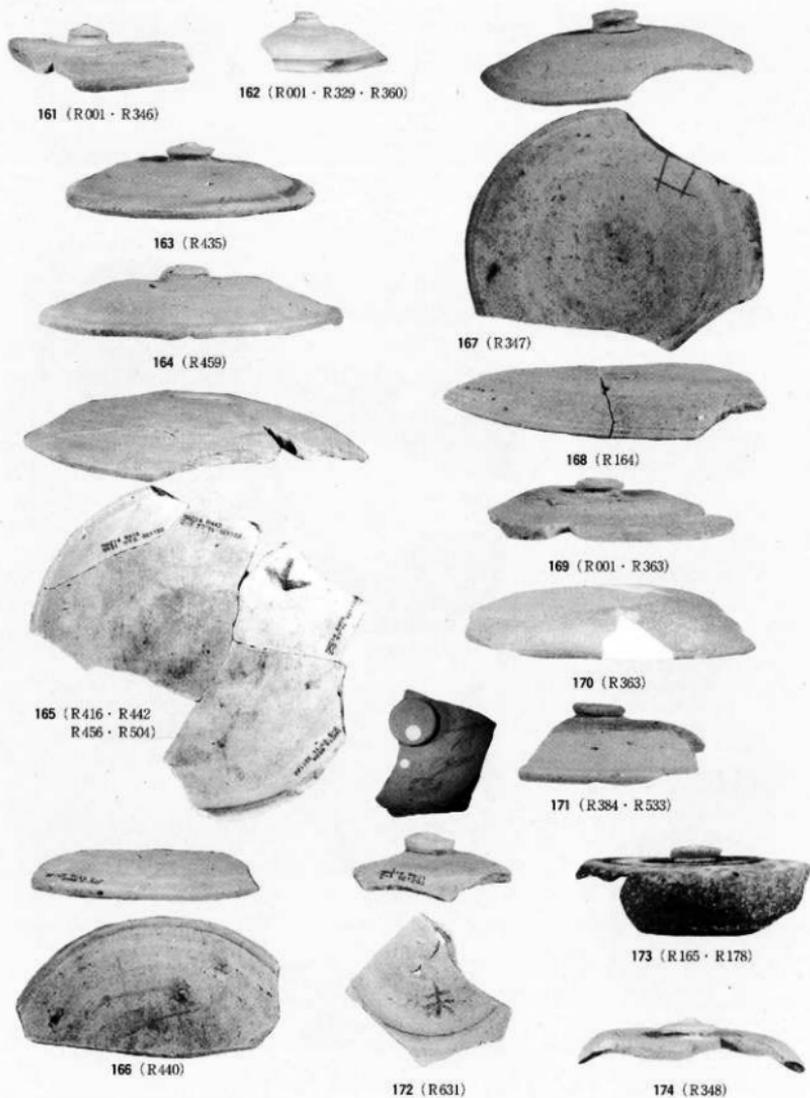
158 (R 378)



159 (R 554)



160 (R 376)



B地区第2面遺構外出土遺物② 土器類 (遺物番号161~174)



175 (R001 · R363)



176 (R001)



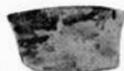
177 (R001)



178 (R001)



179 (R405)



180 (R240)



181 (R286 · R329)



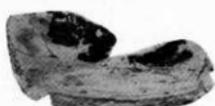
182 (R196)



183 (R239)



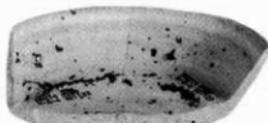
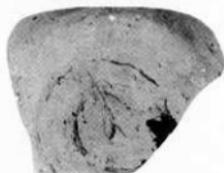
184 (R097 · R196)



185 (R099)



186 (R354)



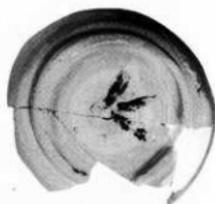
187 (R407 · R528)



188 (R407)



189 (R089 · R339)



190 (R112)



191 (R316)



192 (R327 · R361)



193 (R300)



194 (R301)



195 (R094)



196 (R310)



197 (R103)



198 (R103)



199 (R329)



200 (R329)



201 (R329)



202 (R329)



203 (R329)



204 (R329)



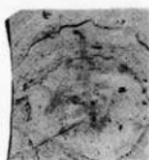
205 (R329)



206 (R346)



207 (R346)



207 (底部墨書部分)



208 (R220)



209 (R410, R416 · R475 · R476)



210 (R441)



211 (R 451 · R 453 · R 503)



212 (R 453)



213 (R 461)



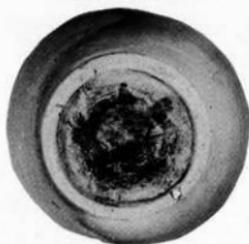
214 (R 462)



215 (R 463)



216 (R 468)



217 (R 469)



218 (R 477)



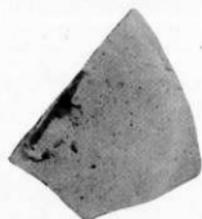
219 (R 480)



220 (R 484 · R 515)



221 (R 492)



222 (R 506)



223 (R 509 · R 522)



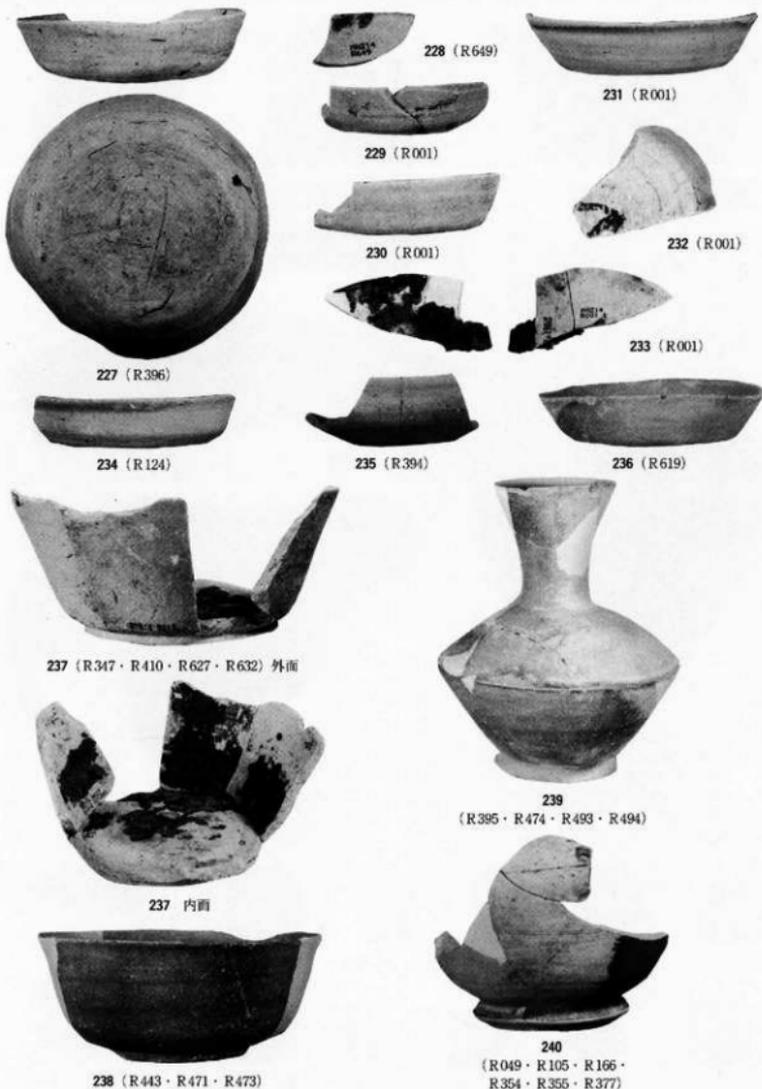
224 (R 513)



225 (R 516 · R 517)



226 (R 542)



B地区第2面遺構外出土遺物⑤ 土器類 (遺物番号227~240)



241
(R445 · R542 · R547)



242 (R394)



243 (R001)



244
(R395 · R425 · R487 · R523 · R527)



245
(R001 · R421 · R422 · R423 · R424
R427 · R430 · R431 · R446 · R447
R448 · R449 · R465 · R470 · R479
R481 · R482 · R486 · R488 · R490
R496 · R507 · R512 · R645 · R650)



246
(R330 · R347 · R413 · R437
R457 · R460 · R472 · R501
R508 · R547 · R550)



247 (R106)



248 (R106)



249 (R111)



250 (R056)



251 (R305)



257 (R001)



252 (R045)



253 (R039)



254 (R001)



255 (R001)



256 (R001)



258 (R109)



259 (R406)



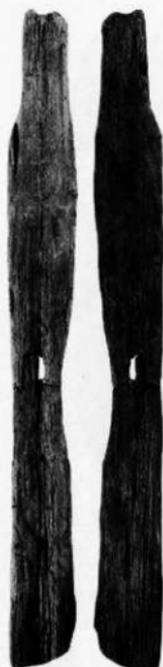
260 (R553-1)



261 (R553-2)



262 (R519)



263 (R520)



264 (R397)



265 (R002)



266 (R527)



267 (R001)



268 (R090)



269 (R030 - R074)



270 (R329)



271 (R001)



272 (R1028)



273 (R1034)



274 (R1009・R1023)



276 (R1021)



275 (R1009・R1039)



277 (R1022)



278 (R1009)



279 (R1006)



280 (R1003・R1009)



281 (R1006)



282 (R1009)



283 (R1009)



284 (R1020)



285 (R1004)



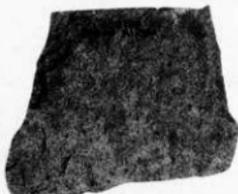
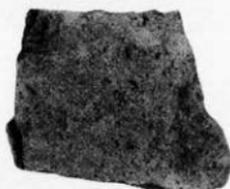
286 (R 1013)



287 (R 1006)



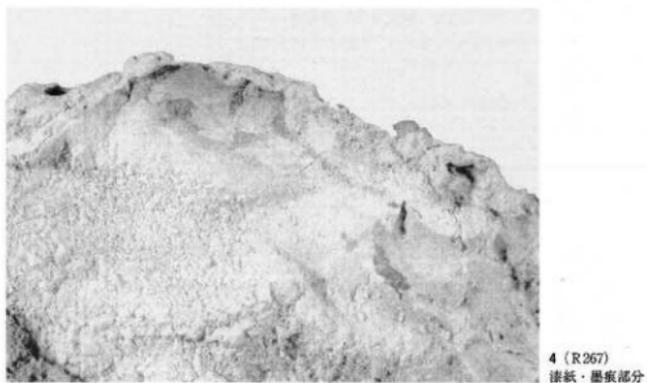
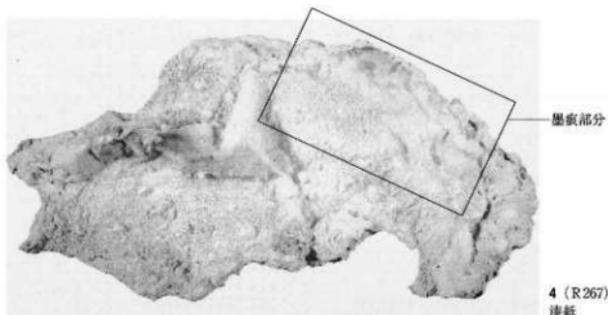
288 (R 1003)



289 (R 1001)



290 (R 1002)



172 (R631)
「万呂」



172 (R631)
「未」



190 (R112)
不明



207 (R346)
「成」

漆紙および墨書土器 赤外線写真
(遺物番号 4、172、190、207)

報告書抄録

ふりがな	まづくしいせきちょうさほうこくⅢ							
書名	間尺遺跡調査報告Ⅲ							
副書名	平成14年度、能越自動車道土砂採取関連事業に伴う調査（B・C地区）							
シリーズ名	高岡市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第12冊							
編者名	太田浩司、板野伸彦、富田静香、橋澤道博							
編集機関	大成エンジニアリング株式会社 埋蔵文化財調査部 〒162-0046 東京都新宿区馬場下町： 早稲田SIAビル8F							
発行機関	高岡市教育委員会 〒933-0057 富山県高岡市広小路7番50号							
発行年月日	西暦2004年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まづくしいせきちょうさほうこく 間尺遺跡	富山県高岡市 手洗野	016202	202073	36° 45' 43"	136° 57' 47"	020731 ～ 021226	B地区 3,160㎡ C地区 1,720㎡	能越自動車道 土砂採取関連 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
間尺遺跡 B地区	集落跡	古代 中世 近世	掘立柱建物跡18棟 土坑13基 区画溝	土師器 須恵器 珠洲 木製品		区画溝と掘立柱建物群を 検出。墨書土器や漆紙、 多くの木製品が出土した。		
間尺遺跡 C地区	集落跡	古代 中世	掘立柱建物跡13棟 土坑14基 区画溝	土師器 須恵器		区画溝と掘立柱建物群を 検出。		

高岡市埋蔵文化財調査報告第12冊

間尺遺跡調査報告Ⅲ - 平成14年度、能越自動車道土砂採取関連事業に伴う調査（B・C地区）-

発行者 高岡市教育委員会

富山県高岡市広小路7番50号

編集 大成エンジニアリング株式会社
埋蔵文化財調査部

東京都新宿区馬場下町1-1
早稲田SIAビル8F

2004年3月31日

印刷所 株式会社白峰社

東京都豊島区東池袋5-19-6

